
Musica Elaborate

七樂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u s i c a E l a b o r a t e

【Nコード】

N 7 8 9 4 P

【作者名】

七楽

【あらすじ】

【門】で繋がる6つの世界 その中心にあるマルーン学園で出会った”努力する落ちこぼれ魔女”と”社交性皆無の天才剣士” ありふれた？出会いののほろが学園きつての変わり者達や”英雄の秘密”、果ては”隠された真実” までも絡んできて・・・ 顔を合わせりゃ口喧嘩な正対コンビの織りなす成長物語・・・のほろ

恋愛模様なめくじ速度 コメディ後シリアス

著者のHP作品の再録です。（HPでの作者名は柊となっていていますが同一人物です）

登場人物【随時更新】（前書き）

随時追加していきます

登場人物【随時更新】

だいたい登場した順です

メインメンバーの下の方にサブキャラ紹介があります

++メインキャラ++

白峰^{しらみね} 六花^{りっか} 魔女科・新月レベル 2年C組（15〜16歳）

見た目：黒髪 目（赤紫）

・努力する”落ちこぼれ”で教室爆破記録ナンバー1 筆記は1位
だが実技最下位と極端な成績

・沸点が低い上に持ち前の怪力のせいかトラブル巻き込まれ率高し
非常に運が悪い

・変わり者に囲まれたせいかな常識人ぶっているがちよっと腹黒い
でも気苦労も多い

シエイド・ラ・ティエンラン 剣士科・伯爵レベル 2年S組

見た目：茶髪 目（翡翠）

・顔はいいが社交性皆無の”天才”で一言多いKY 半分自業自得
で敵が多いが気にしてない

・KY、朴念仁っぷりから友人に馬鹿にされること数知れず だが
治る兆しなし

・基本的に悪い人間ではなく、意外と押しに弱かったり 周囲に腹
黒が多いせいともいえる

桃山^{ももやま} ゆずり 獣士科 2年

見た目：金髪（人口） 目（黒）

・超メンクイの情報通 これ以外いうことはないほどのメンクイ。

そして恋愛脳

・ 感じたら即行動！思ったら即発言！恋しちゃったら即特攻！がモットー

・ 火種に油を放り込んで高みの見物するのが好き 自覚的愉快犯

灰^{かい} 獣人科 2年

見た目：灰色髪 目（青）

・ スパイスの効いた爽やか腹黒少年 主な被害者は親友であるシェイド

・ 柔和な笑顔とは裏腹にかなり大食漢 毒をふるうにはエネルギーがいるらしい

・ ゆずりと2人してシェイドと六花をからかうのが最近の日課 イイご趣味

久我^{くが} 紫^{むらさき} 魔女科・紅月レベル 7年S組（20〜21歳）

見た目：紫髪 目（紫）

・ 美人で実力もあるが”破壊神”で”女王様”な変わり者 天才となんちゃらは紙一重

久我^{くれない} 紅 剣士科 7年D組

見た目：紅髪 目（紅）

・ 今のところ”寝る”しかしてない紫の婚約者 またの名を昼寝大王

++サブキャラ++

パティ・アッシュグレー 魔女科 2年A組

・ 六花の友人で非常にめんどろくさがり 特技は呪術 なぜか髪がピンク

リアン・フィン・アズーロ 剣士科 2年
・シェイドの友達？ 色々裏がある模様（シェイドの周囲はこんな
んばっかである）

ウイスタリア・フィ・クローヴァー 魔女科 2年
・魔女科主席 六花と仲がよろしくない 剣士大嫌い

坊っちゃん（カーディナル・ロウ・ローシエンナ） 剣士科
2年

・シェイドを目の敵にしているシェイドの親戚。 にはだいたい
悪口が入ります

我儘or伯爵令嬢（リアナ・デイ・ローズマダー）

・シェイドの婚約者（仮）絵にかいたような悪役お嬢。

ウォルナット・ロウ・ローシエンナ 剣士科 7年

・カーディナルの兄 紫（+地位）を狙ってるらしいが報われてない

スマルト・G・バーガンディ 天使科 7年

・執行部会長 紫とは顔なじみ 見た目どう見ても12、3歳なお
チビさん

カナリア・ログフォード 魔女科教師

・おっとりとしたおばあちゃん先生

久我 藍^{らん} 学園長・騎士王

・着流し どっかの兄ちゃんみたいに見えるが目だが紫の父親 一応偉
い人

久我 暁 あかつき 総監・魔女

・まっとうで常識人の紫の母親 キャリアウーマン風

登場人物【随時更新】（後書き）

だんだん増えていきます。基本ここに出てこない人は覚えなくてもいいです（オイ）

あとあだ名先に書いてるやつは、多分ほぼあだ名しかできません（笑）

用語紹介【随時更新】

世界観や特殊な単語なんかの簡単な説明です

+++用語解説 世界編+++

かつてバラバラだった6つの世界が【門】により繋がり、多様な生命が混在する世界となった

といってもほとんどは元の世界で暮らしている

第一世界：マルーン学園所在地 王家 五大公爵家が納める地 すべての種族が混在するところ

第二世界：旧人類（魔女の血の混ざっていない人間）の世界 霧囲気は中世ヨーロッパ

第三世界：天使が住む世界 天界

第四世界：魔女と新人類（魔女の血の混ざった人間）の世界

第五世界：死神の世界 冥界

第六世界：獣人の世界 広大な自然が広がる世界

門：第一世界と他世界を繋ぐもの。かつて【最期の魔術師】にして

【英雄】【狂人】のルナウス・オーキッドが創った。

使用された魔術の詳細は一切不明

+++用語解説 社会編+++

騎士：剣士の最上位

剣士：剣士科に所属、もしくは卒業した者がそう呼ばれる

騎士王：五公爵の一人・第二世界の王 久我家当主が持つ称号
魔女王：五公爵の一人・第四世界の王 『アリエス』の魔女名を持つ
魔女が引き継ぐ

他・随時更新

+++用語解説 学校編+++

生徒会長：生徒の最高位 学生頭・執行部会長・生徒会役員の頂点
学生頭（略して学頭）：各科の学生達の総代表。最高学年の首席が
なることになっている

教員頭（略して教頭）：各科の教員の総代表。最年長者がなること
になっている

総監督（略して総監）：教員・生徒の最高責任者。教員内一の実力
者になることになっている

教官：教員とは別に、生徒の風紀面などの指導にあたる者 生徒間
通称：罰則係

寮官：学生寮の職員で、特に寮官長の部下を言う

学部長（略して部長）：魔女科は3年から魔科学部・魔法薬学部・
魔術学部・魔癒術部に分かれる

その各学部の学生代表のことを言う

他獣士科・獣人科も各種族に分かれており、

その学生代表もそう呼ばれている

執行部：生徒の風紀を監視・指導する委員会

門官：第一世界と他世界とをつなぐ門の開閉を司る役職

緊急の場合でも学頭以上の要請が無い限り門は開閉されない

剣士科：剣士養成のための科 大抵第二世界の人間が入る

レベル・男爵 子爵 伯爵 侯爵 公爵

制服・剣士っぽいコート 紋章ラインの入った詰襟シャツ

タイ

魔女科：魔女養成のための科 女ばかり 剣士科とは『粛清』の件で険悪

レベル・新月 三日月 半月 満月 紅月

制服・黒いローブ 黒のロングスカート シャツ・リボン

は自由

天使科：第二世界の天界人たちの科

レベル・権天使 主天使 座天使 智天使 熾天使

制服・ハイネックの白いロングコート ズボン・スカート

ともに全て白

獣士科：剣士と同じく出身問わず、誰でもなれる 自由奔放な気風

レベルはない代わりに、2年までは上級生と師弟関係を結ぶ

魔獣と契約を結び、その力を扱う レベルが高い魔生物ほ

ど契約の負担が大きい

制服・腰までの厚手のジャケット 革のブーツ あとは丈

夫なら何でも

普通科：別名貴族科。でも庶民もいる

他学科のように特殊技能育成コースではなく、普通の教育

機関

制服・普通に制服っぽいもの

他学科、
隨時更新

プロローグ

虚空に鳥が舞っていた

彼はただぼんやりとそれを見つめる

あれはまるで己のようだ

たった一羽の渡り鳥

その姿は彼自身とよく似ていた

過去人が聞けば笑うだろう

『英雄』たる自分が『迷い鳥』とは、馬鹿げたことだと

ならば己は馬鹿なのだろうか

自嘲する

しかしそれは真実だ

己が『迷い鳥』たることも、『孤独』たることも、『馬鹿』である
ことも

しかしそれを指摘する者は誰もいなかった

否

いなくなつた

彼を諫める者は消え、彼を笑う者は消え、彼を正す者は消え

残ったのは賞賛、恐怖、名声、畏怖、殺意

『孤独』のみ

彼は1人だった

かつては友と並び立ったこの地で、彼は1人だった

虚空を迷い鳥が飛んでいる

誰を捜しているのだろうか

何を求めているのだろうか

赤紫の瞳を巡らし 何を欲しているのだろうか

地に、黒い染みが1つ

彼は、

鳥は、

ただ声を上げて啼く

とめどなく流れ落ちる雫を忘れよう

虚ろな心を埋めよう

美しく忌まわしい瞳を、ただ、ただ濡らした

E
l
a
b
o
r
a
t
e

M
u
s
i
c
a

落ちこぼれと天才 1

大丈夫、大丈夫と六花^{りっか}は自分に言い聞かせた

あんなに練習したんだから、大丈夫！

1つ、深呼吸

そして言葉を紡いだ

ドゴンッ

……途端に小爆発
肩までの黒髪が風に巻き上げられ、紅い瞳は淡い期待を砕かれ、歪んだ

「……またか」

呟いたのは1人や2人ではない
そして思っているのは多分、その場にいる全員

絶望的な呻きを漏らす六花に、半ば呆れ、半ば諦めたように、しかし容赦なく繰り出された言葉は

「白峰さん、毎回のことですが課題です」

それに山積みになされた冊子の山

10パーセントの哀れみと、20パーセントの同情と、70パーセントの侮蔑を込めて誰かが呟いたことには

「まあた新記録ね、教室爆破の」

「ほっといてよっ！！！」

私立マリーン学園

魔女科C組

白峰六花しらみねりつか

教室破壊記録数2年にして67件 魔女レベル、最低クラスの新月

立派な落ちこぼれである

同時刻 剣士科演習場にて

金属音と共に片方の剣が宙を舞った

隙に、剣を手にした方は相手ののど元にその切っ先を突きつける

「勝者 シェイド!!!!」

教官の声と同時に、驚きと感嘆、そして納得の声が至る所で上げられた。

・・・もちろん嫉妬の視線も

シェイドは汗で張り付いた茶髪を掻き上げ、対戦相手に手をさしおいた。

相手も苦笑混じりでそれを取る

「流石、つーかお前強すぎ」

「別に、これくらい当然」

自信過剰とも取られる発言に相手は苦笑を深めた。

「それはわかってるけどさ・・・んなこと言ってるからまた睨んでるぜ、カーデイ坊ちゃん」

シェイドは視線も向けず、ただ淡泊に言い放つ

「俺には関係ない」

そのままさっさとその場を離れ、今度は見学席に移動する。しかし次の演習には目もくれなかった
彼にとって、同学年との演習など最早なんの意味もないのだ

私立マルーン学園 剣士科2年A組 シェイド・ラ・ティエンラン

剣士科きつての秀才で、演習成績全戦無敗 騎士レベル、2年最高記録の伯爵 人は彼を天才と呼ぶ 騎士レベル、2年最

相反する2人

未だ面識のない彼らの『歴史的邂逅』はすぐ、そこに

しかし誰も、その意味を知るものはいなかった 今は

落ちこぼれと天才 2

「聞いたよ〜ん六花vまーた爆発起こしたんだって？」

図書館で課題に埋もれていた六花は、聞き慣れた声に顔を上げた目に鮮やかな金髪は、たしかついこの間まで茶髪だったはず

「・・・お聞き及びのとりですよっ！わざわざ確かめに来なくてもいいじゃん、ゆずりっ！」

「六花、声」

窘められたときには、もう既に刺さるような視線が二桁ほどばつが悪そうに再び課題に埋もれた六花に構わず、平然としたままゆずりは隣に腰掛けた。

「にしても、あんた実技はほんと駄目ねえ

今までテストで成功したのって、二桁もいかないんじゃない？」

「・・・11回は成功した」

「200回以上あつたけどね」

サラリと付け足された言葉に、今度こそぐうの音も出ない。

沈黙した六花に、ゆずりはニヤリと笑ってみせる

「そんな六花ちゃんに、友達想いのゆずりさんから大変良いお知らせ

せがありまーすゝ」

取り出したのは『マル秘メモ』とわざとらしく書かれた手帳
ちなみに中身は8割方男子のデータだ

自他共に認めるメンクイ桃山ゆずりは生徒数総勢数千人
下は5歳から上は20までが揃うこの学園の『いい男』達のデータ
を全てここに記載している

もちろん、ごく普通の 一般生徒は手に入れられない 情
報までもどこかから入手しているが

「男の子の話なら聞かないよ

この間聞いたばかりだし、剣士科のティエンラン君、獣士科の黄
海先輩や天使科のローシエン先輩とか・・・だっけ？ゆずり自分
でいったじゃん、競争率高いって
それ以前に興味ないし」

「六花冷めすぎ、あんたそれでも15なの？
彼氏とか欲しいと思わないわけ？」

「彼氏より魔法の腕が欲しい」

即答ですか

仕方なく手帳を胸ポケットにしまい込む

「にしてもまー相変わらず暗いわねえ、その格好。それで鬼気迫る顔されたらマジで呪われそ〜」

けたけた笑いながらローブをいじくるゆずりを睨みつけながら、六花は自分とゆずりの姿をちらりと見比べる
ゆずりは獣士科なので六花と少し制服が違う

六花は見た目からして魔女『らしい』制服だ

黒いつば付きとんがり帽子は外出時しかつけないが、足首まである黒いローブの下は同じく黒いワンピースタイプのロングスカート
一応胸元からシャツやりボン（指定なし）は見えるがほぼ全身真っ黒・・・と、確かに暗い

おまけに六花の場合リボンも目と同じ赤紫色と暗色系なので余計に暗くみえるのだろう

一方ゆずりは腰までの短い、厚手のジャケットに、下はハイネックのシャツと膝上スカートの下にスパッツをはいているが、全体的に活動的な格好の上、色も明るい

動くことをあまり考慮していない魔女科の制服とは全然違う

「・・・六花」

「何？」

「あんまり根詰めると若白髪になるよ？」

「ゆずりっ！…！」

本日二度目、さっきより視線が鋭くなったのは気のせいではないだろう。

それはさておき同時刻。同じ図書館の中にシェイドはいた。

・・・残念ながら六花と違って、側にいるのはあまり友好的な人物達ではなかったが

「邪魔だ、どけ」

全くついてない

心の中で盛大に嘆息するが、その程度で遠慮するような連中なら公共の場で絡んできたりはしない

今日はもう授業もないし、友人を待つ間読書でもしようと思ったらこのざまだ

こんなことなら演習室で型の稽古でもしていた方が良かった

「なんだとっ!?!」

沸点の低い一人を隣の奴が押しとどめた

「ティエンラン、お前何で合同演習に出ないんだ」

図書館と言つことを配慮してか声は控えめだが、端々に嫌悪が垣間見えている

「必要ないからだ、演習は互いに競い合うものだろう？
なら参加する必要はない」

「なっ!?!」

これには、全員が眉をしかめた

お前達では俺の相手にならないと、暗に言ったようなものだからだ

シェイドの口が悪いのは今に始まったことではない

幼なじみのK君曰く

『シェイドも、もう少し話術覚えたら面倒に巻き込まれなくて済むのね』

しかし無いモノのことをいくら言っても仕方がない

「1」のっ！！」

押さえが緩んだ瞬間、先ほどの沸点の低い奴がシェイドにつかみかかった
黙って殴られる趣味はないのでシェイドも伸びてくる腕を掴み応戦する

否、しようとした

「ぶざけんじゃないわよっ！……！」

「ギョあっ！……！」

床を揺るがすほどの振動の原因は本棚だった。

最高級オーク材でつくられた、学園創立当初から一ミリも動いたことがないと言われる超重量のそれは、掴みかかるうとした男の上に分厚い書簡をぶちまけながらゆっくりと覆い被さった

更にその上に、悲鳴を上げたとおぼしき普通科の少女数名が倒れ込んでいる

本棚の下から、わずかに伸びた手がびくびくと痙攣している

哀れな

と、思ってもないことを呟きながらシェイドはふっと視線を上げた

鋭い怒声の原因は少女

くしくもシェイドはその原因と目があった

自分よりも頭一つ小さいだろうか

片手を突き出したまま - おそらく本棚をついたのだろう - ぽっかり口を開けてこちらを見ている

肩までの黒髪と顔立ちから、第四世界の者だと思われる

ただ、目だけは紫がかった紅だった

「なっ何するのよ白峰さん！！！！」

白峰と呼ばれた奴は、我に返って急に慌てだした。おそらく故意ではなかったんだろう

・・・にしたって偶然でこの本棚を倒せるか？俺でも無理だぞ、これは

「口では勝てないからって今度は腕力！？あいかわらず乱暴なのね！この落ちこぼれ！！！」

「なっ！？それは今関係ないでしょ！！！倒しちゃったのは謝るけど、ていうかこれもわざとじゃなくてっ！」

「言い訳は見苦しいわよっ！落ちこぼれのくせに！」

大体魔女なんてこの学園に入れたのが間違いなのよ！

こっちの好意で『肅正』を止めてやったっていうのに調子に乗って同じ土台に上がるうとして！

図々しい！」

みるみるうちに白峰の顔が朱に染まった

それでも拳を握りしめて押さえたのは、立派だと思う

『肅正』のことは魔女にとってある意味禁句だからな

冷静に、しかしあくまで関わらない方向で観察に徹するシェイドを尻目に、先ほどまでシェイドにつっかかっていた連中は六花が魔女

だたようやく気づいたようだ。

制服ですぐわかりそうなものだが、本棚の一件で脳が飛んでいたの
だろう

「おいっ魔女こいつどうしてくれるんだよ!」

「剣士相手に・・・今さら肅正の仕返しか?」

「え、あ!ごめんなさい、今片づけるから」

やっと人が下敷きになっていることに気づいたようだ。
本棚に手をかけ 持ち上げようとしているらしい

・・・無理だろ、この本棚100キロ以上はあるぞ?

手を貸すべきか否か 何せ下敷きになっている奴は殴りかかる
うとしてきた奴だから シェイドが迷っていると、相手が下手
に出たのを良いことに、誰かが余計なことを呟いた。

「後で触ったところ拭いておけよ、腐るから」

人の心というのはコップのようなモノだ
そう祖父が言っていた

だから辛いことは積み重なって、いずれ溢れそうになってしまふ
そして最後、ほんのわずかな　例えば一滴の雫のようなものさ
えも　　ことで止めどもなく溢れ出してしまふのだ

そしてそれは残念なことに六花にはうちり当てはまった

「・・・人が下手にでてりゃあいい気になりやがって」

地を這うような声に、愚かにも少女と少年達は気づかなかった。

あまつさえ

「何だよ、落ちこぼれ」

地雷を踏んだ

「調子のってんじゃないわよっ！集団じゃなきゃなーんにも出来ないくせにっ！！！」

次の瞬間、シェイドは目を見開いた

前述したように、本棚は本を含めて100キロを超える代物だ
とてもではないがごく普通の、15歳の少女が一人で持ち上げるな
ど出来るはずがない

・・・しかし白峰六花は腕力だけは普通でなかった

頭上に掲げるのは間違いなく、本棚

「一人じゃ魔女にさえ向かって来れないくせになーにが剣士よ！！！」

集団じゃないとか弱い女の子一人相手に出来ないような腰ぬけ連中しか剣士科にはいないわけ!？」

か弱いはないだろ、か弱いは

図書館は最早、異様な空間と化していた

超重量の本棚を持ち上げる少女の顔のすさまじいこと

悪鬼か修羅か 夜叉か悪魔か

先ほどまで威勢良く少女を侮辱していた集団は縮み上がってしりもちをついている

逃げ出したいが、足がすくんで逃げ出せないのだ

そして少女の頭上で揺れる本棚

あれに押しつぶされたらひとたまりもないことは、身をもって不幸な少年が体験したばかり
故に動けない、言葉を発することすら出来ない。

全てが均衡したまま時間は刻一刻と経っていく

そして、

「おい」

命知らずが、否空気の読めない奴が、否マイペースな奴が
・・・もといシェイド・ラ・ティエンランはことあるごとに、本棚
を持ち上げる六花の肩に手を置いた。

瞬間・全てが壊れた

「ぎゃ

っ！！！」

すさまじい地響きと、耳を劈く断末魔の悲鳴
埃が舞わなかったのは、掃除をきちんとしているからだ

全てが終わった瞬間、誰もが何も言えなかった
……たった一人を除いては

「おい………魔女」

「………何よ」

未だ臨戦態勢が抜けない六花は半ば睨みつけるようにシェイドに視線を向けた

おまけに魔女と呼ばれたことにも腹が立っていた

剣士科の連中は、六花達を『人』として扱いはしないのだ

「剣士科はあんなふぬけばかりじゃない。勝手に誤解するな、バカ」

最後の『余計なひと言』は本人曰く、口が滑ってしまったとのこと友人相手によく言っているために口癖になってしまったのだ

しかし当然のことながら、そんなこと初対面の六花は知らない

「……どーだかね！大体あんただって、さっきからずーっとダマリで見てるだけってどういうこと！？」

普通人が絡まれてたら助けるくらいするでしょ！」

「俺には関係ない」

「関係ないじゃないわよ！！！」

そう言う考え方の奴ばっかりだから魔女科が苦勞してるんじゃない！あんた達剣士科って自分たちがやったこと棚に上げて人のことバカにして！」

「バカにされる様子がお前にあるのも事実だろ？俺に文句言う前にそこを直せよ

大体三下のいうことにはぶっかり反応して剣士科を判断するのやめろよな！！！被害妄想だぞ、それ」

「被害妄想じゃなくて現実に起きてることなの！！！」

やーねなんでも人のせいにして！反省する気なんか全然ないんだから！！！！」

「それはお前だろ。さっき人押しつぶしたくせに、また本棚なんか振り上げて

剣士は体が資本なんだよ！あんな馬鹿共でも一応剣士科なんだから争うにしたらって、ちよっとは気を遣え」

「何よ偉そうに！大体、体が大事なら喧嘩なんかぶっかけなきゃいいじゃない！」

それとも何？女の子で魔女なら反抗しないとも思っただの！？

冗談じゃないわよ！これが図書館じゃないなら、あんた達なんか攻

撃魔法的にされてるところだわ！」

・・・その後、この不毛な争いは、騒ぎを聞きつけた教師陣が到着するまで続いた

落ちこぼれと天才 2 (後書き)

メイン二人ご対面。さっそく喧嘩ですがそのうちきつと仲良くなる、
はず・・・！

落ちこぼれと天才 3

「白峰六花さん。本日の合同授業、貴方の参加は認められません」

「なんですか!？」

ドン

と、叩いたテーブルの脚は、鈍い音を立ててへし折れた

「……直します」

「はい、お願いします」

折れた足に、手をかざす。数秒も立たないうちに、テーブルは元の高さに戻った

「……そう、こーいだけのだけは上手くいくのよ。こーいだけのだけは!」

「……直りました」

「流石に、修復魔法は上手くいくのよねえ
まあもちろん、壊したものを直すために出来なきゃいけないかったっていうのもあるんでしょうけれど」

そうなのよ、貴方全然出来ないワケじゃないのよねえ。こー修復魔法みたいなの日常的な奴は出来るのよねえ」

「……それ以上は言わないでくださいカナリア先生」

しかし初老にさしかかった、おしゃべりで有名なカナリア・ログフ
オード先生（趣味：家庭菜園）は止まらない

「でも応用になると爆発しちゃうのよねえ

攻撃魔法に至っては基礎・基本でも駄目なのよねえ。知識がないわ
けじゃないのにな

あ、そうそう。この間提出して貰った歴史のレポート良くかけてた
わあ

文句なしで、今回も貴方が一番ねえ」

「・・・ありがとうございます

ってそれより何で参加しちゃいけないんですか!？」

駄目だ駄目だ、もう少して流されるところだった!

カナリア先生、悪い人じゃない、むしろ良い先生なだけどなあ・・・

「ああ、そうそう。

教官のトープ先生がね、六花さんは学力では首席だし、総合でも4
0番以内には入ってるんだけど、あんなに爆発ばかりおこされたん
じゃあ剣士科に何を言われるか分かったもんじゃないから、参加し
ちゃ駄目っていつてきたの」

「うっ・・・」

「それからね、昨日図書館で剣士科と、普通科のこともめたでしょ
?それでまた面倒なことになると嫌だから来ちゃ駄目って」

「でもっあれはあっちも悪いんです!」

昨日だって怒られたの私ばかり、私ばかり、私ばかり（以下
略）

だけど元々喧嘩売ってきたのだって、魔女科を馬鹿にしたのだってあっちじゃない！

・・・以下回想・・・

ゆずりが帰った後、必要な本探すのに奥まったところに入った

「あ、落ちこぼれ」

・・・いきなり喧嘩うつてきたのよ！あっちが！

あのグループは普通科の中でも、特にいやーな連中で・・・リーダー格が伯爵家の令嬢だから余計に厄介

「・・・落ちこぼれじゃなくて、ちゃんと白峰六花っていう名前があるんですけど」

「落ちこぼれを落ちこぼれてっていつて何が悪いのよ」

「だいたい、魔女科が何でこの図書館にいるのよ？あんた達には別に図書館あるでしょ？陰気くさーいやつが」

うん、もうこの時点で結構キタ

自分で言うのはアレだけど、短気だから私
ルーックキューブとか最後までやれた試しがないから

「いいじゃない、歴史関係だったらこっちの方が揃ってるんだから！」

「当然ですわよ、私の家が出資したんですから」

オホホホと文字通りの高笑い付けて言ったのが、例の伯爵令嬢

「ローズマダー家ともなると、貴重な書籍なんて有り余ってますので、ですから久^く我家の方がどうしてもというので寄付させていただいたんですわ

おかげで縁もできましたし」

あー駄目だ駄目だ

私こういふ話し方の人間の、半径3メートル以内によると頭痛がするんだよね

大体久我家がそんなこというわけなのに・・・あそこの書齋一度見てみるってーの

秘蔵中の秘蔵のブツばかりなのに！

ワンポイント解説・・・久我家

マールン学園創設者の一族 5大公爵家の一つで現『騎士王』の生家でもある

「貴方のような貧乏人の魔女が、喉から手が出るほど欲しがるのも

当然ですわね」

失礼な！

確かにうちは金持ちじゃないけど、貧乏ってほどでもありません！

・・・いや、家のローンとかまだ残ってるけど

ってそうじゃなくてっ！

あーもうほんとになんなのコイツラ！

それから図書館の本棚にもたれるなってーの！その棚には貴重な本
いっぱい入ってるんだから！

服ですれるじゃない！背表紙が！

「まあ・・・その安っぽい頭の一つでも下げたら心よく貸して差
し上げますけど？」

この瞬間、色々ぶち切れました

「ふざけんじやないわよ！！！」

あーあの後は大変だった

気がついたら本棚倒しちゃってて（古本は無事だったからよかったけど）

そのあと剣士科の連中にも絡まれちゃって・・・またぶち切れて本棚もちあげちゃったんだよね

んーあれちよつと重かったな（本棚は100キロ以上あります）

だって剣士科の連中、よつてたかって魔女科を馬鹿にして！

半月クラス以上の人がいる前じゃ絶対言わないのに（やりかえされるからね）

それで気づいたら持ち上げちゃったんだよね

で、言うこと言っちゃって、どうしよっかなあーって思ってたら

・・・そうよアイツ！

上手くバランスとってたのにいきなり肩なんか掴むから、落としちゃったじゃない！

それに近くで見てたくせに、何も言わないで！

武士（違）なら多勢に無勢で女の子が絡まれてたら助けるくらいしなさいってーの！

あーっもう腹立つ！

・・・回想終了・・・

「そうねえ・・・先生も六花さんは悪くないと思うわよ？ちょっと短慮だったけどね？でもローズマダー家の方から苦情が来ちゃったらしくてねえ

ほら、あそこは伯爵家でしょ？」

「その上バツクにローシェンナ侯爵がついてるから。権力に弱いトープ先生はあっという間に陥落してしまったわけ」

「そうなのよお・・・ってあらら紫さんいつの間に」「紫ちゃん!？」

いつのまにやら私と先生の他にもう一人
名前は久我紫くがむらさき（私は紫ちゃんって呼んでる）

名字で分かるように、公爵家の一つ、久我家のお嬢さん・・・しかも久我本家 現騎士王で学園理事長のたった一人の愛娘

私とは・・・うーんちょっとした繋がりがあって、小さいときからかまって貰っている

しかも紫ちゃんは魔女科では最高の紅月レベルの魔女！

魔女レベルは新月・三日月・半月・満月・紅月とあるんだけど、普

通の魔女は最高でも満月レベルまで

紅月レベルっていうのは、魔女のまとめ役『魔女長』の候補者レベルで、いるのはほんの数人だけ
もちろん紫ちゃんも最年少の紅月レベル！・・・確かなったのは2年前だから18歳の時かな？

1年の時からずっと学年トップ10人しか入れないSクラスで、しかも首席！

しかも今はマールン学園生徒会の生徒会長もやっていて、知識も魔法の腕も最高で、小さいときからの私の憧れ・・・で目標かな

頭脳明晰で魔術の腕は最高・・・なのにおまけにもものつすごい美人さん

天から二物も三物も貰ってるような人だけ・・・まあ天才となんてらは紙一重と言うか

『破壊神』っていう別の顔も持つてるわけですが

「カナリア先生、このお茶新しいハーブいれました？」

「あらわかる？昨日仕入れたばかりなのよお、美味しいでしょ？」

「へー流石先生、植物のことなら学園一早いですね・・・じゃなくてっ！紫ちゃんなぜここに!？」

「ああ、今回の件でね

カナリア先生、確かに問題を起こしたのはまずかったですけど、学年首席に不参加っていうのはちょっと酷すぎると思いませんか？」

「まあ・・・確かにねえ。六花さんは勉強面では優秀なものねえ」

「そうでしょうか？魔法に問題があるのは確かだけど、せめて見学く

「らいは許されるべきですよね？」

「そうよねえ・・・見学なら魔法はいらないし」

「・・・って私が許可しなくても、紫さんのことだからトープ先生は先におとしてきてるんじゃない？」

「流石先生、ご明察」

「・・・というわけで六花ちゃん、合同授業と一緒に活動できないけど、見学だけは許可されました」

「ほんと！？ありがとうございます！！！」

紫ちゃんの笑みがふかーくなる・・・あーこれは相当怒ってたな

「気にしないで六花ちゃん・・・勘違い馬鹿は早めにたたき落とさないといけないし」

「・・・ちなみに数十分前・・・」

「トープ先生？」

「誰だねこの忙しいときにつ・・・っ！久我会長、何か？」

「2年の合同授業の件で」

「今回代理で監督を任されたんですが、白峰さんは不参加で？」

「ええ・・・よりもよってローズマダー家のお嬢さんと問題を起こしたので」

「けれど私が聞いたところ、相手は我が魔女科を大変馬鹿にしてらしたとか？」

「い、いえそれは」

途端にトープ教頭の光る額に汗が滲んできた。
この教頭、緊張が高まるとデコが光るのだ

「なんなら証拠もお見せ・・・いえお聞かせしましょうか？偶然に
我が魔女科の魔科学部が通信実験中に音を拾いまして
こちらに録音した記録石もあるんです」

「え、はぁ・・・それは存じ「優秀な教官なら、こんなこと知って
らしたでしょうね？」

ああでもそれなら何で白峰さんだけ罰せられたのかしら？それに私
も魔女科の一員として、このように侮辱されるのは大変不愉快です」

ここで更に紫は笑みを深めた

ただでさえ美人なのに、それに地位という付加価値がついて、見え
ない圧力はさらに増していく

ただの生徒会長というなかれ。なにせこの学園では、生徒会長と教
員頭は同地位

しかも教師陣さえ気圧される実力派ぞろいの学園を束ねる生徒会長
のほづが実質権力が強い

・・・しかも相手は理事長の愛娘！

理事長がこの一人娘をたいそう可愛がっているのは周知の事実

「特に母に・・・総監にお聞かせしたら大変ご立腹で」 わざと

「あ、暁様もこのことはご存じで!？」

「ええもちろん・・・このままでは遅かれ早かれ父の、理事長のお耳にも入るでしょうね
魔女科と普通科のいざこざならともかく、ローズマダーのお嬢さんは勝手に我が家のことを笠に着て、たいそうなおおボラを広げてらしたようだから」

教頭の精神は最早限界に近かった

伯爵家にいわれるがまま白峰六花に罰を与えたら、今度は反対から更に大物が・よりもよって公爵家、それも理事長の家がでてくるなんて！

あの我が儘お嬢様も大変なことをいつてくれたもんだ！

「これからも今回のように、無関係なお宅にうちの家名が使われては困りますもの
喧嘩両成敗ということ、くれぐれもよろしくお願いしますね？」

・・・この間、わずか五分・・・

「ふふ・・・ヤッパリ権力よね」
「紫ちゃん、発言が黒いよ」

まあ私も権力好きだけどね！学頭以上になつたら特別図書の貸し出し許可ももらえるし！

今は紫に頼んで借りてもらっている人

「六花ちゃん、顔がにやけてる」

「えっ!？」

だって学園で権力あったら、貴重な本も読み放題かと思うと・・・」

これには紫もカナリアも、好意的な苦笑を返した

「本当に白峰さんは本が好きねえ

先生、この仕事初めてもう50年くらいになるけど、本に埋もれて死にかけて子なんて貴方が初めてだったわ」

「確かに、アレは流石の私でも驚いたわ

地響きがしたから、何かと思えば山積みにもされた本が崩れたって？

あれはある意味、我が寮の伝説ね」

「一夜にして寮を全壊させた紫ちゃんもね」

「あら、切り返しが上手くなったじゃない

ただ私の場合は故意にやったことだから・・・六花ちゃんのは偶然だから面白いのよ」

紫がククツと笑みを漏らす

口の端を上げたそれは、見る者によれば挑戦的にも見えるだろう

しかし彼女を知るもの達に言わせれば、それは『お気に入り』の合図

そもそも嫌いな人物に、紫は関わらない

ただし相手が関わってくるのがあれば、権力と魔法と口をもって、そのことを後悔させるが

「でもほんとに、白峰さんの知識はすごいもの

本の伝説を作ってるだけのことはあるわ、この間の魔薬のレポート
だって、赤里先生絶賛してたわよお」

「だって、知らないこと知るので面白くないじゃないですか
なんかこう、見えなかったモノが見えるようになって・・・」

「世界が広がるかんじ？」

「そう！だから本を読んだり、いろいろ教えて貰ったりするのは好き
それにわたしどーしてもやりたいことあるし」

小さい頃からの憧れ

ずっと側で見てきた故に、強烈に惹かれた

同じ場所にいつてみたい

そこから何が見えるのか知りたい

だから

あの子もいい加減、学科変えればいいのに

なまじ頭が良いから、大丈夫だと思ってるんじゃない？

いくら筆記は首席でも、実技があんな・・・無様じゃあねえ？

よく入れたわよね・・・ああ我家と仲が良いから

でもよく耐えられるわよね？私だったら恥ずかしくって

ぼ
れ

落
ち
こ

その夢を叶えるために、絶対に今日の授業は参加したかった
本当は実技もしたかったけど、今のままじゃあ駄目だって

自分が一番良くわかってる

こんな自分じゃ、『パートナー』だって見つからない

だからせめて

「……みつかるといいわね。運命のお相手が」

「運命……はちょっとくさいけど、いつか絶対見つけるよ

今回は見学だけだけど、次はぜーったい参加してみせる！」

「ふふふ〜六花さんのそう言うところ先生好きよ〜」

「甘いですよ先生、私は大好きですから……いじくりやすくて」

「紫ちゃーん、いまちよつと聞き逃せない単語を発しなかった？」

「ふふふ、気のせいじゃないかしら六花ちゃん？」

「……ま、私も奴が見つかれば見本でやるから、しっかり見学しなさい」

「……すつごくみたいけど無理でしょ。今絶対お昼寝タイムだし、それに目立つの嫌いだし」

「というより奴はただ単にものぐさなのよ」

カチャリとカップを置いた

それが終わりの合図だった

午後の授業まで、もうあと少し

「あれ、ご機嫌斜めだねえシェイド（笑）」
「ほっとけ」

おもしろそうに、顔をのぞき込んできたのは灰かい物心つく前からずつと一緒で、まあ俗に言う幼なじみという奴だ

名前の通り、髪も目も灰色で本人はあまり気に入っていないらしいが俺はあっていると思う
性格的に

何せこいつと来たら、そこらの女子がみたら腰砕けそうな笑みで、豪胆な精神の持ち主でも苦悶するほどの毒舌家なのだから

「あんまり僕の悪いとこばかり言わないでくれる？
それよりさ、聞いたよ。魔女科の子と喧嘩したんだって？剣士科の男ならいざしらず、女の子なんて珍しいね」

女の子苦手でしょ？うるさいって言って

「女嫌いに言われたくない」
「僕は相手を選んでるだけで、女嫌いじゃないよ」
「お前が女といるところなんて見たことないぞ？」
「それは邪魔じゃない女の子がいらないだけ。邪魔な奴と一緒にいたって僕になんの得もないし」

笑顔で言う科白じゃないだろ

それに、別に俺は苦手なわけじゃない

奴らは面倒なんだ、一人が嫌というと全員が嫌というし

没個性の塊だろ？特に普通科は

「貴族科って言ったほうが正確」

「たまには嫌味と皮肉なしで喋れないのかお前は」

「僕は正直なだけ、建前がない人・・・いや人でもない半端ものだからね」

灰色の髪に、手刀がうずまる

「自虐発言、ペナルティ1」

「・・・まいったなあ、治ったと思ったのに」

自嘲

誰よりも冷笑主義な親友は、自分すらも

「治ったと思えただけでした・・・俺はまだまだ」

茶髪に手刀がうずもれた

柔和な笑みが戻る

「シェイドもペナルティ1、急ぎすぎ
まだ僕ら15歳なんだからゆっくり行こう・・・っていったよね？」
「・・・・・・・・」

不服そうな顔

その理由を灰は知っている、理解している、しょうがないと思っ
ている

けれど急いで欲しくないのもまた本音

彼は我慢しすぎている。そしてそれを我慢とすら気づいていない。
今しかない大事なものを、そこから転がっている・・・はずなのに
彼は一つも持っていない。それをつらいとも思っていない。

それが灰には一番悲しい

気づかせてあげられない自分は、嫌い

「いい天気だね」
「ん」

空を見上げる

並んで歩く

その退屈が、幸福と思えるまでに

彼はあと何年かかるのだろうか？

落ちこぼれと天才 3 (後書き)

ちょっとシリアス。次からセカンドコンタクトです(笑)

合同授業 1

「……あの禿げ狐、残り毛むしりとってやるつか」
『諦めなさい、六花』

恨みがましく唸る六花の耳に流れるのは、冷静すぎる

魔

女科唯一の友の声

その冷静すぎる

ただ単にめんどくさがりなだけなのだが

声が今は恨めしい

「だってパティ、あんたも知ってるでしょ？中庭の草がどんなに酷いか！それを全部抜かなきゃ授業でられないって……あつちは厳重注意だけで終わったのに！」

『正確には厳重注意という名のお目こぼし。久我会長に言われたから仕方なく、ってところでしょうね

まああんたの場合本棚倒したって”証拠”押さえられてるからしょうがないでしょう

……でもまあいいじゃない、拝み倒して盗聴魔法かけてもらったんだから』

「盗聴じゃなくて通信魔法だって」

まあそう変わらないけど

溜息一つ

目の前に広がるのは茶色い地面の見えない草原、もとい中庭
隣には六花の腰の高さまである草の山 昼休みから必死にやっ
て、二時間でやっと半分

その間は契約の歴史やら解説やらの講義がありました

・・・そりゃあ、本棚倒したのは私が悪かったけどね
それにしたって不公平じゃない！？

あっちが伯爵のお嬢様で、こっちが無名の一般生徒、しかも・・・
・・・駄目駄目、自分で言い出したら終わりだ
誰に言われても、自分はぜーったい言っちゃだめなんだ

『思考がだだもれよ六花』

それに世の中、認めることも大切だと思うわ

パティ・アッシュグレーは六花が沈黙したのを確かめて、説明に耳
を傾ける・・・ふりをする
成績は悪くない、むしろいい方だと自負している

が、どうにもやる気が起きない
もちろん原因はこの授業は自分にとって意味がないからだ

魔女科と剣士科の合同授業はほぼイコール【契約】の練習だ
普段は魔女科を毛嫌いしている剣士科も、魔剣 鋼ではなく、
風、炎、水、その他元素を刃とする剣 を使うためには魔女と
契約する他仕方がない

魔女科も最大の弱点 発動に時間がかかること 克服のためには、
めには、確実に時間稼ぎをしてくれる強い剣士と契約を結ぶ必要が
ある

【粛清】の因縁を流してでも

今から約二世紀前 最期の魔術師 が殺された

ルナウス・オーキッド

世界の中心・第一世界と他五世界を繋ぐ【門】の創設

当時世界に蔓延っていた【黒人】の封印

そして魔術の基盤を作った ”英雄”

しかし【黒人】との戦いで闇にあたりすぎた彼はやがて心を狂わせ
自らが整えた六大世界 それを繋ぐ【門】の破壊を企てたと
いわれている

【門】は世界の要。交わりあつた世界を繋ぎ補うために必要不可欠
な存在

その破壊は世界の崩壊をも意味する
さらにその奇行は止まらず、人間と獣の人工融合、死者蘇生、時間
移動・・・禁忌と呼ばれるすべてのことに手を出した

あまつさえ、門を創設した際協力した各世界の要人・己の家族をも
殺した

そしてついに、討たれた

しかし彼の犠牲となったものの怒りは止まらず、矛先は彼の同類・
魔女・魔術師に向けられた

それが【粛清】

老若男女問わず、魔術を使う兆しがあるというだけで拷問の未殺された
ルナウスの死後、なぜか男に魔術は受け継がれなかったため被害者のほとんどは女だった

100年以上にわたり続けられた【粛清】の犠牲者は数千万人とも
いわれている

そして皮肉にも・・・狂った殺戮を止めたのは元凶、ルナウスの実
の姉だった

アリエス・オーキッド

そして彼女と共に戦ったのが、粛清の中心となった剣士の名門

久我家の嫡子 ” 騎士・久我 紫苑 ”

アリエスは門創設時の、ルナウスの凶行を逃れた仲間を集めた

天使の住まう第三世界の王妃 サルビア・デルフト

死神の住まう第五世界の冥君 瑠璃・蘇芳

彼らの助力により粛清、後に続く”正戦”せいせんは終結し、世界の”再生”
が始まった

各世界と連携を取り、現代の礎を築いたアリエスを世間は称賛をこ
めて一 黎明の魔女 と呼んだ

現在の六王政を成立させたのも彼女

第一世界	神王	世界の創設神を王に据える	すべての種族が共存する世界
第二世界	騎士王	初代王に久我紫苑をすえた肅清以前から在る旧人類の世界	
第三世界	天界王	サルビア・デルフトを王とする天使の治める世界	
第四世界	魔女王	初代王・アリエスの望んだ魔女とその血をひく新人類の世界	
第五世界	死神王	冥君 瑠璃・蘇芳が治める死神と亡者の世界	
第六世界	獣人王	門創設者の一人・青磁 <small>せいじ</small> の一族が納める獣の世界	

厳密に言えば神王は存在しない

第一世界はすべての種族が共存する世界として形ある王は立てられず、その代りに【公爵】として二三四五六世界の王が共同で治めている

故にマールーン学園も第一世界に建てられた

しがらみなく、すべての種族がともに学び、育つために

・・・まあ上手くいつているとは言い難いけれど

その証拠に、一世紀たった今でも因縁は終わらない

今だって、契約を望む魔女と剣士以外は雰囲気最悪だ。他の人種差別だってある

そしてパーティは契約を望まない。彼女は呪術の進路を取る予定なので必要ないのだ

契約を望むのは大抵魔術を極めたい魔女だけだから

そんなわけで、けだる気に あくびを噛み殺しながら、中庭で必死に草をむしっている友人のために
とりあえず説明だけは聞くことにした

『さて、まず初めに【契約】の仕組みについて復習しておきましょうか』

あ、紫ちゃんだ

耳に 厳密には頭に流れてくるのは、聞きなれた声

そついうえば先生の代理やるとか言つてたっけ？

『魔術発動のための基本手順は覚えているわね？』

開 形 連 詠 発 滅

心の中で復唱した 復習は昨日ちゃんとしておいたのだ

開 普段は内に収められた魔力を開放する

形 発動する魔術の形を形成する

連 創った形を媒介となる声に繋げる

詠 内の魔術を外に出すための媒介【声】を放つ

発 【声】によって外に出された魔術を発動させる

滅 発動させた魔術を消す

この六つの動作を繋げることで、やっと魔術が使える
どれか一つでも欠ければ失敗、見るのは簡単そうだけど難しいんだ
よねえこれが

『それじゃあ、普通の魔術と契約ではどこが違う？』

えーつと・・・確か

結

『 結 です』

あ……この声はクローヴァーさん
たしか総合で学年主席の……ああ、わたしあの人に睨まれてるん
だよねえ

何かと教室破壊するから

『正解。契約の時は形と連の間に結が入るの
結は血を媒介にして魔力を魔剣に繋げる力。それ以外は皆同じね』

『それでは今から久我さんに実演してもらおうから』

え！？うそ、くう兄来たの！？あれだけ人前に入るの嫌いなのに

『7年期生のウォルナット・ロウ・ローシェンナ君、来てくれるか
い』

ガクリッ

誰もいない中庭で、一人ずつこけた

「残念ですが先生、実演は出来ませんよ？」

「何故だね？」

しかし紫が答える前に、相方　　に勝手に任命された　　ウォル
ナットが答える

「はぁ・・・紫さんは僕以外の人と正規契約しているので
先生もご存じでしょう？正規契約をした人は仮契約は結べないんで
すよ」

・・・なんなのかしらこの教師。いかにも驚きました〜って顔して
それからローシエンナ、いかにも私が悪い、みたいな顔して

いったい何様のつもりなのかしらね？

しかし顔には一切不満は浮かべない。ただ、万人を魅了する笑みだ
けを浮かべる

後にパティ曰く、目は笑っていなかったとのことだが

「・・・久我君、君が実演するから監督を変ったのではなかった
のかね？」

「それが、相方が急な不調を訴えまして」

ある意味では嘘じゃない

調子が悪いのは本当だ、ただ日常茶飯事だというだけだ

まあ嘘っぽかろうと関係ない。相手は一教師、こちらは生徒会長
力関係上、嘘ではないのか？なんて口にすることは出きないしね？

権力万歳よ

「私はてつきり・・・君はローシェンナ君と契約していると思った
よ」

「嬉しい誤解ですよ、先生
僕としては否定しなければならぬのは悔やまれますが」

すこぶる腹立たしい誤解ね。事実にならなくて、本当に嬉しいわ

またもや笑みを崩さず

「あの・・・それでは実演は？」

つと・・・ああの子はさつき答えた

んー学年首席とかいってたかしら？カナリア先生が

2年なのに結構上級魔術も使えるからって、生徒会か執行部にいれ
てやってくれて言われてた・・・かしら？

まあいいわ

私が覚えてないってことは、普通の首席なんでしょうし

「心配なく」

六花が見たらうさんくさい、と断言する笑みを浮かべ

「彼の相手は貴女にやってもらうから」

もちろん、横で私が指導するけどね？

困惑と羨望のざわめきが広がっても、六花には聞こえない
いや、聞こえていたとしても聞いていなかっただろう

な、なんてうらやましい・・・！

いいなあ、いいなあ 紫ちゃん直接指導で仮契約実演！？今日は相

性みるだけだつて言つてたのに！

ほんと羨ましい

………それに悔しい

ウイスタリア・フィ・クローヴァー

筆記二位、実技一位で文句なしの学年首席

……そりゃあ、筆記はなんとか勝てるけどね

実技は相手にもならない

月とすつぽん、ピンとキリ

半月レベル昇格が内定してるウイスタリアと違って、六花は未だ魔女としては最低の新月レベル
同じように入學して、同じように勉強したのに

歓声 そして 称賛の声

それが欲しいわけじゃない

でも思わずにはいられない

何で私は・・・

「って！羨ましがってる場合じゃないっての！」

早く草刈っちゃわないと
あと一時間半くらいで授業終わるし・・・頑張れば最後、ちょっと
くらい参加できるはず！

バシッと頬を叩いて再び草をひつつかみ、鎌をかけた

君くらいの家の子なら、魔女科と協力するのは嫌だろっけ
どね？

粘着質な教頭の声が蘇る

魔女と契約を結べば魔剣が使えるし、今よりずっと強くなれるよ？

それに魔女剣士の方が、卒業しても就職口にこまらないし

それがどうした

くだらない

まあここは抑えてね？出てくれないかなあ

主席がいないと格好もつかないし

イライラする

世間体ばかり気にして、ここが噂の『歴史ある一流』学園か

調子に乗るなよ！お前の家” ”なくせに！

クソッ！

俺は早く、強くなりたいのに !

ポトッ

「あ」

「いいやあ

あっ！け、毛虫 っ！」

「わ、悪い！」

下に人がいるとは思わなくて………」

あ

「ふざけないでよアンタ！だいたい授業中なのになんでそんなとこ………」

完璧に合った視線の先には、紫がかった赤い目
見覚えがありすぎるそれは、いっばいに開かれて

「またアンタか

っ!!」

それはこっちのセリフだ

最悪の邂逅は二度続く

合同授業 1 (後書き)

セカンドコンタクト

印象は悪化の一途をたどっております

ザック ザック

ジー・・・

ザック ザック

ジー・・・

ザック ザック

ジー・・・

ブチッ

「あんたねえ・・・っ」

刈ったばかりの草を力いっぱい握りしめたせいで、手の上を緑色の汁が滴り落ちる

が、六花は全く意に介さず

「いい加減、物言いたげな目で見てくるのやめてくれない！？言いたいことあるならさっさといえば!？」

「この間の続きなら受けて立つわよ!？」

「って、意気込んで叫んだはいいけど、相手の男・・・誰だっけ？
まあいいや、とりあえず剣士科Aは面食らったような顔をして

それから少し言いよどみ、けれどはっきりした声で

「何やってるのかと思ったただけだ」

と

・・・ってあんたちよつと

この状況みたら普通、わかるでしょ？

「いや、草むしりに決まってるでしょ？というかさっきまでの行動
で草むしり以外に何か思いつく？」

至極、当たり前前のことをいったんだと思ってたのよ
なのに、目の前の奴と来たら

「草むしりってなんだ？」

うん、ベタだけど本気で滑った
だつてさ、草むしりつて何？・・・なんて聞かれるとか思わないじ
ゃない、普通

「何つて・・・あんたやったことない？家に庭とかなかった？手入れとかするでしょ？」

庭・・・と呟いて、ちよつとだけ眉が寄せられた

もしかして庭ないのかな？いやでも一般常識で草むしりくらいは・・・

「庭はあるが、手入れは庭師がする」

ブルジョアかこいつ

あれか、お坊ちゃんとか言う奴か！庭師がいる、なんて科白初めて聞いたわ！

ああなるほど、これがいわゆるカルチャーショック

「あー・・・つかぬこと聞くけど、お宅にメイドさんは何人ほど？」

「正確な数は知らない。俺の棟だけなら18、7人くらいいるな」

ちよつとちよつとちよつと

俺の棟つてなに、棟つて。部屋じゃないの？普通部屋でしょ、いや部屋でもメイドさんはおかしいけども

っーか一人に付きメイドさん二桁！？

なんて贅沢な……

「……………あんだ、マジお坊ちゃんなのね」

言つと眉をこれでもかというほど顰められた

あんたまさか、お坊ちゃんって何？なんて聞かないわよね？

「それが何だよ」

ひつくうい声

……私、何か人様の癩に障ることいつたっけ？

「別に、なんだってほどのことじゃないけど……」

「じゃあ言うなよ。お前って思ったこと何でも口に出してるのか？
バカ」

キレた

今確実に私の中で何かがキレた

ただでさえこいつには ついつつかり忘れてたけど 図書館での恨
みがあるんだ

それに加えて、立て続けのバカ発言

許し難し

「会って二回目のくせに決め付けなくてくれる!？」

「そこまで考えなしでも、馬鹿正直でもないわよ!ただちょっと感嘆こめていっただけじゃない!」

「じゃあおおげさだ。別に一々驚くことでもないだろ」

え、何この世間知らず

どこも似たようなもんだとか思ってるわけ?それともこれが普通で当たり前とか思ってるの?

だろうね、このいかにもこっちがおかしいと言わんばかりの顔
あーそうですか、当たり前ですか

ありえない!

「驚くことよ!あなたの方がよっぽど馬鹿じゃない!常識なさすぎ

!」

「はあっ!?誰が常識ないんだよ!」

「この場にあなた以外の誰がいるっていうのよ!」

「そういうこといってるんじゃないだろ!」

だいたいなあ!

「常識ないのはお前だろ!?!授業サボって、こんなところで草むしり
なんかやって!

落ちこぼれていわれたくないんだつたら真面目にやれよ!それともやる気ないのか!？」

だったらやめろよ！やる気がない奴がいると邪魔なんだよ！」

「っ！？」

何こいつ

何なのこいつ

さほり？するわけないじゃない

私授業は無遅刻無欠席よ。熱でたって体ひきずって出てるんだから

真面目にやれ？

やってるわよ、一日のほとんど練習と勉強に費やしてるんだから

そうじゃなきゃ、皆と同じ所になんか立てないってわかってるから
だから毎日いろんな本読んで、実践やって

それでも立てない

それでも全然、同じ所に立てない

何か足りないの？

まだまだ私は努力出来てないの？

そんなことばかり考えて、動けなくなる時だってある
全部放り出して、忘れて、楽になりたいときだってある

それでも絶対、諦めないでやってきた

夢があるから。絶対に、諦めきれない夢があるから
だから何を言われたって、平気な顔してやってきた

でもホントに平気なわけじゃないじゃない
落ちこぼれていわれるたびに、どんな思いしてるのか

何にも、知らないくせに

「ぶざけんじゃないわよ!?!?!」

腹が立った

ものつすごく腹が立った

「好きでこんなことやっているとってるの！？そんなわけないじゃない！

私だって、授業でたいわよ！契約のこと、ちゃんと勉強できるこの授業だけなんだから！でもしょうがないじゃない！わ、私が実技、下手くそだからっ」

あーっもう震えるな！声！

でも思うだけじゃ止まらなくて

腹が立つてるはずなのに、なんでか零れるものに、相手はぎょっと目を見開いた

「剣士科に、知られたらっ、恥ずかしいって！バカにされるからって、出させ、てもらえないし！

だいたい昨日っ！あんた達が酷いこと言ったくせに、お、お咎めなしでっ！

そりゃあ私も本棚倒したのは、悪かったと思うけど！でも、あんな、魔女科を馬鹿にして！

それなのに、ローシエンナ侯爵だかなんだか知らないけど、親の権力かさに着て、仕返しの仕方が卑怯なのよ！

武士なら、紳士淑女だっていうんだったら、正面から挑んできなさいよ！

そうしたらこっちだって容赦なくやれるんだから！」

「は、ちょっとまで、ローシェンナって」

焦ったようなシェイドの声も、六花の耳には届いていなかった。

「剣士だかお貴族様だかなんだか知らないけどねえっ！」

赤紫の目が眇められる

柳眉は跳ね上がり、涙声は完全に怒声へ変わった

「調子のおってんじゃないわよこんの馬鹿野郎

っ……!!」

大地を揺るがす声、とはまさにこのこと

そして同時に

冗談抜きで大地が揺れた

怒りにまかせた魔力の暴走
それがもはや六花には慣れ親しんだ、しかし常人にはなれているはずもない

大爆発を引き起こした

はっと目覚めて見たのは私室の天井
それから・・・

「あら、やっと起きた？」

妖艶に笑う、美女

「・・・紫ちゃん」

だるい

こんなにだるいの、風邪ひいたらいだなあ

・・・って最後に風邪ひいたの、もう五年も前だけど

「無理しなくていいわよ、もう丸一日は寝たままだったんだから」
「・・・いちにち」

一日、一日か。あーじゃあ今日お休みの日？

よかったー私の無遅刻無欠席記録はついてな・・・

がばり

「って一日!？」

「そう一日」

紅茶を嗜む紫ちゃん、さらりといってくれたけど私にとっては大問題だ

「一日って・・・何で!？」

「熱中症、炎天下に何時間も草むしりしてたからね。最近勉強ばかりで外にでてないでしょ？だから倒れたんじゃない」

疑うわけじゃないけど、かぎりなく違和感
と思っただら

「ていうのが表向き理由」

そこではあ、と息の塊を吐き出し、眉尻をよせて向き直った。
真剣なその眼差しは、小さいころから何も変わらず
『あの時』と同じように

そこで己が倒れた原因を、六花は悟った

「六花ちゃん、気をつけなさいっていったでしょう?」

真剣なそれが、弧を描く

背筋が寒くなっただのはきつと気のせいじゃない

「………わかってるよ」

「わかっててもできなきゃ意味ないの」

口をとがらせる六花に帰ってくるのは、満面の笑み
華やかなはずのそれが、今は恐ろしくて仕方がない

「そりゃあね、理性を押さえるなんてなかなか出来ないのはわかってるけど」

いつも上手く誤魔化せるわけじゃないから
「………うん」

ぽつりと呟かれた謝罪の言葉に、紫は
「今度は間違いなく」
「笑み」
を浮かべて頷いた

「でもごまかしたって、どうやって?」

確か・・・あーそうそう、誰かしらないけどム力つく剣士の奴がいたのに

それに対しては、紫はさらに笑みを深めた

「一緒にいた子は簡単、何が起こったかわからなくて混乱してる所にそれらしい話を植え付けただけ
爆発は、ちょーどアイツが通りかかったから被ってもらったの」

自宅謹慎だけど、外に出たがらないアイツには渡りに船でしょう？

いや、たしかにそうだけど

「・・・明日くう兄に謝ってくるわ」

「そうしなさいな、あっちも貴方に会いたがってるし」

ただ、久々に会ってみたら爆発起こしてぶっ倒れてたっていうんだからお小言はもらうでしようけど

至極愉快そうに笑う紫、対して六花はうっと思を詰まらせた

紫ちゃんとは違う意味でくう兄も怖いんだよね・・・

「でもくう兄がどうやって爆発なんてごまかしたの？」

「喧嘩売られて暴れたら相手が危険物持ち出して来てドカン相手はさっさと逃げちゃって顔は全然覚えてない。あ、ついでに六花ちゃんも巻き込まれたことになってるからヨロシク」

「・・・やってもらってこんなのいうのあれだけど、すっごい無理

矢理だね」

というか信じたのか、教師たちは

「アイツが自分でそう言えば違うんじゃないのか？とはいえないで
しよ

それに剣士科の理事は、ローシエンナの息がかかってる連中だから・
・

アイツに泥を塗りたくってしょうがないから、わざわざ蒸し返しやし
ないわ」

それもそれでどうかとは思っけど

・・・というかそれって、私もしかしてくう兄をヤバイ立場に追い
込んだじゃったってこと？

「心配しなくても、ただか爆発程度でどうこうならないわよ」

察して紫がつけ足す

「それをいうなら、私だって校舎半壊させたこともあるし・・・そ
れに父がアイツを気に入ってる限り、誰も手だし出来ないわ」

「あー藍さん最高権力者だもんね」

思い浮かべるのは どう見ても二十歳の子持ちには見えない、紫の父
この学園の理事長にして、騎士王たる青年 いや年齢的には中年な
のだが

見た目、どう見たってそこらの兄ちゃん

下手したら学生でも通ってしまうのではないかという男。かなりの愛妻家で、それを上回るほどの子煩悩だというのは有名な話

ついでに紫の父親だけあって、見目はたいそう麗しく、その癖性格はかなり曲がある

そこらへんも、かなり色濃い血筋を感じさせる久我親子揃って自分を、その力をいかに有効に使うかをわきまえている

「そういうこと、だからもう寝なさい。明日はお小言ちょうだいするんだから」

「忘れてたこといわないでよ」

「忘れて行かなくて、お小言増えるよりいいでしょう?」

まあ、いやでもそれも・・・

うんうん唸り始めた六花を、文字通り無理やり寝かしつけて紫はその場を後にした

六花は気付いていなかったが、実はもう深夜を回っている頃合いだったのだ

「あら」

自室に戻り、そこにいた先役に思わず目を丸くする
妙齡の女の部屋に勝手に、やら人のベッドを占領するな、やら

そんな当たり前の苦情など、彼らの間には存在しない

端正な貌を綻ばせ、彼の傍に腰を落ち着ける。古めかしい　かつ
ては祖母が使っていたベッドがわずかに軋んだ

「六花ちゃんの爆発といい、今日は厄介事が多いわね」
「……………厄介で悪かったな」

不機嫌そうな声に、再び目を見開く
まさか起きているとは思わなかった

「なに？シヨックだったの？」

冗談交じりの発言

だが相手は至極真面目な声で

「何かおかしいか？」

眇められた紅い相貌に息をのんだ

その隙に手をひかれ、抱き枕よろしく抱き込まれる

柔らかい布団と堅い腕の感触に深々とため息をついて

「あなたね・・・」

まだ着替えてもないのに

抱き込まれたまま睨みつけるが相手は全く意に介さず、どころか満足そうに笑って

次の瞬間、寝息を立てていた

紫はにっこり笑って相手の鳩尾に拳を叩きこんだ

合同授業 2 (後書き)

後半唐突にアレですが(笑)

とりあえずファーストコンタクト・口げんか セカンド・爆発 と
段々被害度レベルアップしております

「んで、どーだ六花の様子は」

理事長室 古いアンティークの家具で揃えられた部屋に、不釣り合いな男が一人

派手な柄の着物を着崩して、それでもだらしない雰囲気にならないのは育ちの良さゆえか

それとも軟弱さを感じさせない、鍛えられた体躯故か

ともあれそんな和風な男、名前はその髪色と同じ藍

学園創設者の一族にして、第二世界の王、ついでに第一世界では公爵位にあるとつてもえらい人物

フルネームを久我藍らんという

見た目どう上に見たって三十代前半だが、二十歳の一人娘がいる

その一人娘こと紫は、またもや不釣り合いな湯呑を持ち、口を開く

「問題ないわ。疲れただけみたい、少し寝たらぴんぴんしてる。隠してるつもりだろうけど、こっそり勉強できてくるくらいよ」

「なるほどな。つってもまあ表向き病気と爆発に巻き込まれた、てことになってっから

そつだなあ・・・ま、念のためあと一日は閉じ込めとけ」

「恨まれるでしょうけど？」

「うちの蔵書5冊くらい届けりゃ平気だろ？どうせ俺もお前も全部覚えてんだ、うちにあっても無駄だしな」

流星は抜け目ない、と紫は心の中で呟いた

まぎれもなく彼は自分の父親である、と

思えば母親に似ていると言われたことは、あまりなかった

「んで、だ・・・またローシエンナがうるせえ」

その言葉に、紫がピクリと反応した

「無理を通して理事になったと思えば、今度はお前を寄せただよ」

「あら、やっと堂々と言ってくるようになったの？」

「まさか、それならこつちだつて苦労はしねえよ

遠まわしに紅はくれないふさわしくないだあ、魔女騎士契約を破棄しろだあ
言ってるだけだ

奴はよつぽど、【騎士王】の座がお望みみたいだな」

実力もねえくせに、阿呆が

言っつて口角を上げる　凶悪な、笑みだ

「紫、今年は『アレ』をやる」

「・・・めんどくさがりの父が、よく決めたわね」

「俺あ面倒なことは嫌いだ、お祭り騒ぎは好きなんだよ。お前と一緒にでな

開催日は、まあ気分で決める。とりあえず色々目えつけとけ」

コトりと、空になった湯呑を置いて紫は席を立った

「それじゃあ、せいぜい父を楽しませるパーティーでも揃えろとしましようか」

「期待してるぜ、じゃあまた夕飯でな。今日は和食だ」

ひらりと軽く手を振って、娘を見送ると入れ替わりに違う扉から一人の女性が入ってきた

髪は薄茶のショート、端正な顔は苦々しく歪んでいる

いや、もとより彼女 あかつき 暁 は不機嫌そうな顔ではあるが

「情報漏洩です」

「父親が可愛い愛娘にちょっとアドバイスしたただけ、問題あるか？」

「つか仮にも夫婦で敬語はないんじゃないかねえの

「癖です」

スッパリと彼女は 久我暁はいつてのけ、上司であり夫である藍に、さらに厳しい視線を向けた

「大ありだと思えますが？」

「権力使って貶めるのはありなのに、か」

沈黙

それを破ったのは、低い 藍の声

「まあ、それも終りだけだな」

「……学校行事を利用するのは、あまり気が進みませんけど」

「使えるもんは使え、それが俺が母親から学んだことだよ」

「教えられた、ではなく？」

「ガキにモノ教えるような親じゃねえだろ。放任主義上等、知りたきゃ自分で知れ、つてのがうちの方針だ」

それで俺も真朱も紫も、立派に育ってんだから間違っではねえだろ

「立派、を曲者で勝手に人智を超える人間、に代えた方が適切かと」
「同じことだろ、うちではそれが立派な奴だ」

テメエの大事なモンを、テメエで守るためには人の予想くらい軽く超えることやんなきゃいけねえんだよ」

ふっと、凶悪な顔を崩し口角を上げる

ひょいっと伸ばした手が、立ちあがっていた暁の顔を捉える

ぐいっと寄せられた頬に、軽く唇を寄せる……と

ドゴーン

「……………職場です！」

「…職場で魔術は使っていないのかよ!？」

「必要悪を否定するほど、堅いわけではありません」

お、堅いっつー自覚はあんだな

もう一発、衝撃音

「……………どうした、楽しそうだな」

「あら、わかる？」

部屋で しかも自分の褥の上でくつろぐ男に、妖艶な笑みを浮かべる

寝転がる彼の横に座ると、すすつと膝の上に頭がのってきた

彼曰く、自分の膝は『俺専用枕』らしい

「父が害虫退治にのりだしたのよ」

「ああ……………面倒だな、回りくどい」

「邪魔だからって、まさか家を全壊させるわけにもいかないでしょう?仕方ないわよ。貴方も手伝ってね?」

「……………」

彼にとって、沈黙は否定

どうせめんどくさいとか、勝手にしてくれとか思っているのだろう
一番の当事者といっても過言ではないのに、他人事この上ない

「……………そういえば」

この間ローシェンナのところの長男にあっただけど

まどろみ始めていた紅色の目が、一瞬揺らいだ

「本当に、馴れ馴れしくて嫌になるわ

手を取って挨拶したかと思えば、たかだか話すのに腰を抱きよせる
んだから」

手を取って挨拶 手の甲にキス

ゆらりと、真紅の髪から怒気が立ち上る

「……………何故その場で殺さない」

「物騒ね」

「奴らにはこのくらいで丁度いい」

次にやられたらすぐに言え、俺がその場で殺してやる

「あら、私にも残しておいてよ。八分殺しでいいから」

「二分では俺の気が収まらない。俺は俺の『領域』に入ってかられるのが大嫌いなんだ」

「……」冗談よ、殺すのはマズイわ。やるなら完璧に証拠を消してしまわないと」

とてもじゃないが冗談に聞こえない物騒な笑みを浮かべながら、すつと指を伸ばして髪を梳く

柔らかな髪は紫の指をするりと抜けていった

ふつと笑うその顔は、最上の喜びで

不貞腐れたように黙り込む彼の頭をそつと撫でた

わざと言ったんだけど、ここまで怒ってくれるとは思わなかった

「大丈夫、次はそんな隙見せないわ」

「隙など見せさせるか。何ならずと俺が抱いていればいいだろ」

……本当に、時々大胆なこというわよね
普段は呆れるほどのんびりしているくせに

でも

「それもいいかもしれないわね」

「だろう……」

語尾が掻き消えた。睡眠に入ったのだ。

「……………普通このタイミングで寝るかしら」

呆れた、というかありえない

ため息をついて、それでも気持ちよさそうに寝る彼が微笑ましくて

仕方がないので、そのままゆっくり寝かせてあげることにした

……………そのせいで彼が夕飯を食いつぱくれたのは、故意からか好意からか

「……………は？」

今なんて

灰は信じられないものを見る目つきでシェイドを見る

シチューを食む彼は、だから、と繰り返す

「女を泣かせたら、どうすればいいんだ？」

「とりあえず何で僕に聞くわけ？」

「お前、そういう経験多いだろ」

シエイドの右耳をナイフが掠めた

灰が肉を切っていたそれだ

「僕が泣かせたんじゃないよ、あいつらが勝手に泣いただけ」

僕は断つただけなのに

どうせ辛辣な言葉でも吐いたんだろ、と言いたかったがやめた
それを云ったが最後、今度はフォークが飛んでくるに違いない

「で、誰泣かせたの？」

「ん？」

「そんなこと聞くくらいだから、そうなんですよ」

まさかシエイドがそんなことする日が来るなんてね
信じられない、というよりありえない

この朴念仁が

「ああ、言っただろ。この間魔女とやりあったって」

「その子？また会ったの？」

「ああ、それで口喧嘩になって気がついたら泣いてた」

「・・・何言つたの、シエイド」

眉を寄せて沈黙・・・おそらく思いたそうとしているのだろう
そしてその言葉をそのまま灰に告げると

「土下座でもすれば？」

「何で」

何でだとこのボケ野郎が

・・・とは言わなかったが、確かに灰の目はそう言っていた

「あのさあシエイド、草抜きっていうのはね、一般的な罰則の一つ
なんだよ

特に授業中に、なんていうのはね」

で、君と彼女の会話から推察すると

「彼女は剣士科とのごたごたのせいで、罰を受けて授業に出られな
かったってこと

それも自分が出たかった授業に、お貴族様達に圧力掛けられて

そんな彼女に真面目にやれ、なんて言ったら怒るに決まってるでし

よ

「・・・」

「はい、そんな顔しない。とにかく泣かせたんなら謝ればいいんだよ
悪いことしたなら謝る、これ常識」

「・・・お前に常識を説かれる日が来るなんてな」

やっぱりフォークが飛んできた

「とにかく謝ればいいんだよ。その子名前は」
「知らん」

.....

「シエイド、三本目もナイフでいいかな？」

ぶんぶん首を振ると、笑顔で構えていたナイフが下げられる

「.....まあ、そんな問題起こしたんなら剣士科で噂でも流れてるだろうし。調べようと思えばすぐ調べられるよ」

「.....」

「変な顔しない、夕飯がまずくなる

シエイドの取り柄なんて顔と剣の腕くらいなんだからちゃんとしてくれる？」

「.....お前、俺の味方じゃなかったか？」

「だから何でも言ってるんだよ、遠慮する必要がある？」

「ないな、俺もお前には遠慮してない」

「でしょ」

とりあえずは、この話は終わり

言い置いて、その後は雑談やらなんやらに費やす
といってもお互いあまりしゃべる方ではないので、食卓は静かなものだったが

耳をつく食堂の喧噪

その中で灰は、何となくシェイドとその子がまた会うような気がしてならなかった

いや、もちろん探すのだろうが、そうではなく

もっと、人為的なものではなくて

嫌いな言葉を借りるなら『運命的』に

何故？と言われても返答できないが
強いて言うなら、『野生の勘』で

そしてそれが当たっていることを知るのは、わずか二日後である

合同授業 3 (後書き)

色々舞台が整ってまいりました。サードコンタクトまであと3話

茶柱で開催宣言 1

突然の開催宣言

それに理事会はざわめいた

緊急招集された会議室、長たる理事長の座はまだ空いたままだ

「どういづつもりだ騎士王は」

誰かがにがにがしく呟くと、焦ったような声で誰かが言う

「ローシエンナ侯爵はなにか聞いていらっしやいませんか？」

ローシエンナ侯爵の妻が、騎士王・久我藍の従姉だというのは皆知る所だ

対してプラム・ロウ・ローシエンナは渋面を見せた

ただでさえ迫力のある四角い顔が、さらに険しくなっって近くにいた若い理事が思わず身を引いた

「あの公爵、独断で開催を決めたようだ

誰にも相談せずにな。この私にさえ話は届いていない」

冷静にかえしつつ、内心は穏やかではなかった

その証拠に、今まで表面上はとりつくりついていた騎士王への敬意を忘れている

そのせいで騎士王に忠誠を誓っている者達が眉をひそめたが、己の思考に浸っていた侯爵は気付かない

侯爵はここ十数年で、急激に勢力を伸ばし始めている

久我家に繋がる女を妻にとり、『慈善的な』寄付により理事達を説き伏せて、理事の一人になった

理事長たる久我藍は気に入らなかったようだが、それでもあくまで『民主的な学校』のマルーン学園

否とは言えない

後は、久我の本家と繋がりさえ出来れば、第二世界で逆らう者はいないだろう

そして幸運なことに、公爵には娘が一人しかおらず、彼には息子が二人

しかもうち一人は娘と同年だ

上手くいくと思った

二人が結婚すれば、自分の孫が騎士王だ。その上、久我紫は魔女王を約束されている女

第二・四世界の覇権を一気にローシエンナ家が握るチャンスだと思っていた、が

先手を打たれた

まだ久我紫が齡8だったころ、従兄の 久我藍の弟の息子だ
久我紅と婚約したのだ

取り計らったのが騎士王たる久我藍と、その母であり魔王である
久我瑪瑙

さらに各世界の王達が口添えしたともなれば、自分が口を出せるは
ずもなかった

それを見越して、久我藍が手をまわしたのだ

だが ツメが甘い

侯爵は心の中でほくそ笑んだ

よりもよってあんな 落ちこぼれを婚約者にするとは
自分の息子に対抗できる人材がいなかったのだろうが、愚かどしか
言いようがない

自ら付け入る隙を残したのだから

久我^{くが}紅^{くれない}

剣士科の七年だが、クラスは最下層のD
レベルは機密事項なので判明していないが、Dなので大したことは
ないだろう

おまけに剣士科きつての問題児で、授業にはろくに出ていない。が、
なぜか進級は出来ている

侯爵は資産家である彼の父が手でも回したのではないかと思ってるが、証拠はない

証拠でもあれば、すぐに追い出してやるものを
そう歯噛みしたこともあったが、そうでなくともこれほど問題があれば

ただでさえ、久我藍の弟は『あの事』で風当たりが強いのだ
その息子というならば、これだけでも落とすには事欠かない

後は周囲を味方につけて、第二世界の当主には不資格だと示せばいい
そして自分の息子 ウォルナット・ロウ・ローシエンナが騎士王
には相応しいと

それを大々的に知らしめるにも、この『開催』のチャンスを逃すわけにはいかない

学科混合対抗試合 1チーム8人、6人の代表以外は全て『運』
で決められる

全校生徒 ただし一年生は除くが の名前を記憶させた鳥が、
ランダムに名前を読み上げるのだ

そして6チームによる総当たり戦で、勝ち数、点差などにより一位
を決める

当然、その一位チームの代表ともなれば、それなりの榮譽が与えられることは明白

そうなれば婚約者に推す時に箔ができるというもの

だから侯爵は、この試合にかけている。絶対にここで負けるわけにはいかない

息子を代表にするのはそう難しくはない
いつもどおり仕組めばいいのだ

そう考えていた時、部屋の主の来訪を告げる声があった

久我藍は相変わらず、いつもどおりの着流しだった
おまけに呑みかけの湯呑をもったのご登場

その後ろに控えていた妻であり、総監督も務める久我暁はきつちりと正装していたが

「突然招集してすまなかつたな」

まずは型通りの謝罪。しかしそれもそこそこに、久我藍は理事達に告げた

「聞きたいことをじらす趣味はねえからな。さっさと引っちまうぜ？
学科混合対抗試合、チームの発表は」

静寂の中、一瞬視線を落とす

そして

「今日だ」

幾人もが息をのんだ

ローシエンナ侯爵は意見しようと言葉が出る前に久我藍が続ける

「各チーム代表には既に連絡済み。代表は各学科の首席だから文句はねえだろ？」

全校生徒にももう通達した。今日の夕方、夕食が終わったら講堂に全員集合

何か質問は？」

一気に言っただけ、片ひじをつき、掌を頬にあてて、見まわす

無礼な、と思いつつも侯爵は口をつぐんだ

学年首席、ということは息子は入っている。ならそれ以上の文句はない

「文句ねえなら俺からの通達は終わりだ。他に誰か、ついでに議題のある奴はいるか？」

「……………議題ではありませんが、甥御さんは大丈夫ですか？」

何やらトラブルに巻き込まれたと聞いているのですが」

今はまだ、婚約のことはいうべきではないが、匂わせておく必要がある

言つと久我藍は視線を向け、口角をあげた

侯爵はこの笑みが苦手だった

まるで全てを見透かしているような

それでいて 愚かな、と嗤われているような

そんな気がするから

「御心配ありがとう侯爵。しかし腐っても俺の甥、弟の息子だ些細なトラブルくらいでどうにもならない」

それ以上何も出なかつたので、会議はそこでお開きとなった

侯爵が取り巻きとともに出て行くと、忠義のある者達と一言一言言葉を交わし、全員が会議室を出た

瞬間、藍は余裕の笑みを崩して眉を寄せた

「つまらん。早速喧嘩売る場を整えてやったつてのに」

慎重な奴だ

悪態をつくくと、今度は暁が渋面を示す

「・・・厄介な人間に逆らって欲しいと望むのは、あなたくらいですよ」

「逆らってさえくれりゃあさつさとケリがつくんだ。俺だってせつかくの生徒の祭事を使われたくねえからな
つけられるならさつさとつけてえ」

ただでさえローシエンナんこのガキ、俺の可愛い娘に手え出してんだ

「紅は学校に行く気がねえからなあ

吹っ飛ばしてやれ、とでもいいてえがそれをするに『息子に傷をつけた責任』を盾に、婿にとれといいかねえ」

でなけりゃあ俺直々に手を下してやるものを

「・・・まさかそんな愚かな真似までは」

というか本来それは女性に適応される脅し文句では？

いたって冷静なツッコミだったが、藍は甘い、と言い張る

「あのローシエンナはなあ、昔っからそういう奴なんだよ。どんな無理だろうが、金と権力にもの言わせて押し通す

つたく、誰だよあの馬鹿に侯爵位なんてやりやがったのは」

「貴方から見て先々代の騎士王です」

「真面目に返さねえでいいんだぞ暁

……でもまあプラム侯爵の前の奴はまともだったってことだからな

しょうがねえんだらうけど」

いつそ世襲制やめてやるか？

いやそれはそれで面倒だしなあ……

「そんなくだらないことはどうでもいいので、さっさと開催の準備を整えてください」

これ以上は長くなると踏んで、話を切ると、下からは不思議そうな視線が

「あ？通達も何も全部終わってるだらうが」

「ええもちろん、生徒への連絡、代表への通達、準備は完璧です」

「他になんかあったか？」

ジトリと、鋭い視線が下りる

全く意に介さない、と顔に書いている藍に対して、暁の眉間のしわが、これでもかというほどよった

「そのだらしがない上に、騎士王、ひいては理事長にふさわしくない服装を変えることです」

「俺は見かけで判断するような生徒はいらねえ」

「ふざけた冗談ぬかしてる暇があったら脱いでください。礼服は用意してますから」

「朝っぱらから脱げとはだいたんだなあ暁

でもそういうことは出来れば夜に、寝室で言ってもらいた「殴られたいんですか？」

「俺はマゾじゃねえが・・・マゾの奴に言っならこの場合蹴る方が効果で」訂正です、八分殺しにされたいのですか？」

降参、とばかりに両手を上げて、やっと藍は重い腰を上げた

長い長い廊下を歩きながら、ふと尋ねる

「にしても何で八分殺しなんだ？」

「殺してしまつてはまずいでしょう？」

どんなにだらしがなくて面倒くさがりでも貴方は紫の父親なんですから」

母親が父親を殺して、娘を悲しませるのは忍びないでしょう

淡々としているようだが、もちろん曉だつて一人娘は可愛い

ただほんの少しだけ、もうちょっと自分に似てくれてもよかったのではないか？

と思っているだけだ

あの絶対的に遺伝したとしか思えない、久我家の性格はいかんともしがたい

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何ですか、その物言いたげな目は」

「いや（父親っちゃー父親だけど、その前に一応俺達夫婦だよな？）

「

最後のセリフは呑み込んだ
もとよりベタベタの夫婦ではないのだ。今さらだろう

と、今度は暁が口を開く

「そういえば開催日はどうして今日に？起きた時はまだ決まってい
いと言っていたでしょう？」

「ん、これ」

すつと差し出されたものを覗き込んで

「……貴方が突拍子もないのはいつものことですが」

これはどうだろう、と暗に目が告げていた

それをキス一つで封じて　ただし一発張り手ももらったが

「いいじゃねえか、縁起がいいだろ？」

「……そうですね」

もはや投げやり気味に、着替えに行く夫から暁は湯呑を受け取った
僅かに残るお茶に浮かぶのは　茶柱

『思い立ったら吉日』

とほやく言ひけねど

いくらなんでもこれはないだろう

再度溜息が零れた

茶柱で開催宣言 1 (後書き)

おっさんばっかで絵的に麗しくない舞台裏(笑)次は学生組の話です

同学年では『落ちこぼれ』とそしられ、はみだし者な六花だが・・・もちろん魔女科全員から冷たい視線を向けられているわけではない。なぜならどの学年にも最低一人は、はみ出し者がいるからだ。

そして久我親子の悪だくみの結晶ともいえるそれが宣言された時、六花はそのはみ出し者先輩の所にいた。

魔女科魔科学部研究室第13番

不吉すぎるその部屋からは、不釣り合いに明るい鼻歌が響いていた。

「ふふふふーん、ふふふふーん、ふふふふーふふふふーふふふふー
ふふふふー」

何故に結婚式お決まりソング？

とは思っても口には出さなかった。この先輩は機嫌がいいに越したことがない。

といっても、機嫌が悪くなったら紫よろしく周囲に毒光線を撒き散

らすわけではない。むしろ真逆のベクトルを突き進んで・・・

まあそのことは、今はいい
まだ学部専攻すらしていない六花が、何故こんなところにいるかというところ・・・

例によって例のごとく罰則である

昨日またもや教室を爆破させた六花は、丁度いいとばかりに担任教諭によって彼女

叶桜かのう さくら

の一日助手をおうせつかったのだ

本来なら5年生は下に一人以上、下級生から助手がつく。しかし桜の下に助手は一人もいない

それは決して彼女に実績がないからでも、実験が簡単だからでもなく・・・

全員が半日と立たないうちに逃走してしまうからだ

そんな危険人物の一日助手、本来なら泣いてご免被りたいところが・・・六花は久我家・・・のうち特にトップ父娘二人やらで変人怪奇現象の類には耐性がついている

ので今だって、何だか足元に蛇っぽいけどスライムちっくな感触のする何か 変な生物が通ったって全く気にならない

いや、まったくってことはないけどさ。桜さん作・奇怪生物にももう慣れた、というか名前まで覚えた

何せ先生達と来たら、何かにつけて桜さんの手伝い押しつけてくるんだから

おかげでわたしを桜さんの助手にしようって動きまであるらしい
いや、桜さんは嫌いじゃない。むしろ好きだけどね？わたしあくま
で魔術部希望ですから

たとえ進路指導で、確率1%っていわれてもね！……あ、やば、
ちよつと泣けてきた

「又？」

「あー、ありがとミミちゃん……というか君はどこからハンカ
チを出したのデスカ？」

紳士的に……あれ、でも名前にメス？ま、いいや

紳士的にハンカチを差し出してくれたのはミミちゃん。桜さんが生
みの親な魔法生物の一つ

見た目桜色で丸っこく、つぶらな瞳が可愛いらしい。それに触ると
ちよつと負に府にして気持ちがいい
ソフトボール大くらいしかなくて、たいてい桜さんの肩の上に乗っ
てる

桜さん曰く、チビちゃん達（桜さんは自作魔法生物たちのことをこ
う呼んでる）の中では一番頭がいいらしい
まだ見せてもらったことはないけど、色々能力があるらしい

「あらら〜どうしたの六花ちゃん？ゴミ入っちゃいました？ごめん
なさいねえ、最近お掃除する暇なかったんですよ〜」

「ああ大丈夫ですよ、ちよつと思ひ出したくないことを思ひ出した

だけで」

ので危険物入った試験管を振り回さないでください！って何か飛んだし！

「あ、大丈夫だったってこのコは・・・」

いう間に飛んだブツはプルプルと震え（ギャー！）

飛来し（ちょ、こっち来ないで！）

元の試験管の中におさまった（マジですか？）

「形状記憶できるもの」

「確かに・・・ってホント桜さん何作ってるんですか？」

「んーそうねえ・・・リツちゃん！」

「いやお名前じゃなくて、ってまた可愛い名前ですね」

うふふ、と笑うさまはとても愛らしい

魔女科制服のマントと、その下の矢がすり袴が滅茶苦茶ミスマッチ
だけど

基本マントの下は結構自由だ。でも桜さんほど古風というか変わった、というか・・・な服装してる人はいない

たいてい皆、形は違えど黒ロングスカートに、シャツを変えるくらいだし

私は面倒だから、シャツとリボンしか変えてないけどね

「それで六花ちゃんを泣かせた嫌な話〜っていうのは、剣士科のシ
 Eid・ラ・ティエンラン君と喧嘩したことですか〜？」

「……………誰ですかそれ？」

ん？でもティエンランってどっかで聞いたような…………

「六花ちゃんが爆発起こした時に、巻き込まれちゃった運の悪い少
年のお名前ですよ〜」

「……………何で桜さんがアイツの名前なんて」

「有名ですよ？剣士科期待の2年生、最年少で伯爵レベルに上がつ
た天才

それに顔が格好いいらしいですからねー、ゆずりちゃんがチェック
してませんでした？」

ゆずりも先輩とは面識がある

っていうかわたしの…………狭い交友関係の中でゆずりが知らないの
はくう兄くらいだろう

「……………じゃなくて、何で相手がそのティエンラン？だなんてわ
かったんです？それに爆発のことだって」

「みてたんですよ、ミミちゃんがお散歩中に、ね〜？それに爆発は
紫さんから聞いてますから」

「あ、桜さんも生徒会でしたね」

生徒会長というか紫ちゃんが派手だから、他の人は結構忘れられが
ちだ

それにうちの生徒会っていうのはそんなに活動ないからね・・・イベント事は藍さん、理事長が率先してやるからなあ

「事務仕事ばかりですからあ、みなさん忘れてるでしょうね・・・」
「・・・あ、グラシユニウムの瓶取って下さい」

瓶をさつと手渡すと、ふつと桜さんは真面目な顔で

「六花ちゃん、本気でこつちに来る気はありません？私の助手とかじゃなくても、他の優秀な人達のところでも十分やっていけると思えますよ?」

半日もしないうちに、薬品や試料の名前全部覚えたの、六花ちゃんくらいなもの

さじで中身を取り出し、さっきのリツちゃんに加えるブルブルとした動きが激しくなった

「それに先生方だって褒めてましたよ？白峰さんは魔科学全般優秀だから、ぜひ来てほしいって」

「・・・それは、進路相談の時に言われました」
「でもその様子じゃあ、来る気はなさそうですねえ」

ふわりと微笑んで、桜さんは試験管の上に手をかざした流れるように、歌うように言葉が紡がれる

桜さんの作っているのは、厳密には生物じゃないただ魔法で意志のようなものを移しているだけで
大昔に桜さん

の一族が使っていた『式神』というものを応用したらしい

詠唱が終わると、試験管からそれが飛び出した

薄い緑色のそれは、始めはミミちゃんみたいに丸くて、だんだんと形を整えていく

やがて小さな、小鳥のような形で落ち着いた。桜さんがその子を掌にのせ、何事かを吹き込む

と

『大器晩成、成せば成る』 趣味に走るも人生の一興なりですよ』

その小さな口から、目の前の女性と全く同じ声で、同じ口調で声が生まれた

内容的に、背中を押してくれているんだろう。それは嬉しい、とても嬉しい……のだけれど

「成功です〜伝書鳳凰のリツちゃん!」

「なんで鳳凰……(どうみたって小学生の書いた小鳥なのに)」

「え、なんだかっこよさそうじゃないですか」

このセンスだけはいかなものか

叶桜、魔科学部の中でも異端な彼女は、美術の才能もある意味異端だった

実験が終わってきて一息、とついたころ
用途不明なピーカー（微妙に何か付いてる）で沸かした紅茶に、実
は意外と料理上手な紫ちゃん作のホットサンドで早めのお昼ご飯、
にありついていた

その時

ブオオ

ブオオオ

冗談抜きで滑った。紅茶は死守したけどね！
いやいやそれより、このホラ貝の合図は……

『おー皆の衆！せこせこ勉強頑張ってるかー』

藍さん……仮にも理事長がせこせこつて

ちなみにホラ貝合図も藍さんのチョイスらしい。和風好きもここま
でくると……いや、まだ学園を和風建築にしなかつただけまし？

実はそういう計画を立てたはいいものの、暁の反対によって没にな
ったのだが……それは当人たち以外知らない

『そんな娯楽の少ないお前らにいいお知らせだ』

「あらゝまた何かお祭りでもあるのかしら」

理事長のいいこと＝お祭り、というのが学園生徒たち共通の認識だ。この間は鬼ごっこ大会で、賞品の苦手科目単位免除につられて血で血を洗う騒ぎになったのは記憶に新しい

しかし、今回はいつもと少し勝手が違う

『学科混合リアルサバイバルゲーム、略して学ゲーを開催する！』

藍さん、その略し方微妙・・・はともかく、その発言に学園全体がざわめいた
地下でもそれがわかるくらいなのだから、地上の騒ぎはどれほどのものだろうか

『おおー、騒ぎがこつちまで聞こえてくるぜ。ま、これに勝ち残ったチームなら最高の荣誉に賞金まで手にはいんだからなあ』

騒ぐのも無理ねえか。だが詳細は今日の夕方、夕飯が終わってから選手の発表と同時に講堂でやる
遅れんじゃねえぞー、遅れたバカは講堂いれねえからな』

「じらしプレイですね」

「桜さん、ヤマトナデシコな顔してそんなこと言わないでください」
ミミちゃんが顔を赤らめ（たような風で）て首、というより体全体
を上下に振る
どつやら親つてこつちのまやいより子の方が常識的らしい

「でも六花ちゃんはえらく他人事ねえ。2年生もメンバーに選ばれることはあるのよ？」

「いや、ないですって。私くじ運わるいから、こついでで当たったことないし」

というより、この手のことに関わりたくないだけなんだけどね。見るのは好きだけどやるのは面倒だし

「ほら先輩、午後からも他の実験入ってるんですから。早くお昼ごはん食べちゃいましょうよ」

「そうねえ、せつかくの紫さんの差し入れですしねー」

「冷めたら台無しですから・・・あ、紅茶入れ直して来ます」

そういつてさつと立ちあがった六花を見送って・・・ミミに向けてぼそりと呟く

「私は運が悪いからこそあたるんだと思いますけどねー？」

はたして六花と桜、どちらが正しかったのか

それは夕方には判明した

茶柱で開催宣言 2 (後書き)

お約束(笑)

「隣いいかな？」

座ってから聞くのは非礼じゃないかしら？

思わずそういいかけて、やめた。これ以上会話を続けたくなかったからだ

「自由」

そっけなく言い置いて、紫は逆隣に座っているスマルトにカップを差し出した

隣に座った少年 いや、紫と同じ年なので青年と言っべきだが、見た目どう見ても13くらい ことスマルト・G・バーガンディはのほほんとした・・・いいかえれば間の抜けた笑みを浮かべて、茶を注いだ

女性にしては長身の紫の隣なので、そのチビさが余計に際立つ

「冷たいねえ、紫くん。ウォルくんが拗ねちゃうよ。とぼっちり喰うの僕たちなんだからさあ」

「そんなもの上司権限で黙らせなさい」

隣にいるにもかかわらず、二人とも完全にウォルナット・ロウ・ロ

ーシェンナの存在を無視している

不愉快気にウォルナットは眉をひそめたが、相手が何様女王様生徒会長様の紫と立場上上司、というか執行部会長でスルースキルが高いことで有名はスマルトでは、何も言えない

言えば最後、無視か100倍で返ってくるのがわかりきっていた

「無理むり、僕君みたいに王様ではいられないから

というか面倒だしね、だからウォルくんが勝手にやってくれてて助かってるの。だから執行部員じゃさあ、僕が会長って知らない子もいるんだよ」

それじゃあ何故執行部会長などに納まったかといえば、もちろん家柄と成績だ

一応上位で、おまけに第三世界 天界では高位の天使一族なのだ そうは見えなくとも

ちなみに天使とはいっても、他の世界にいる時は邪魔らしく羽根は閉まっている

ので見た目、普通の人や魔女と区別はつかない

唯一区別がつけられるとしたら名前くらいで天使は全員、ミドルネームにアルファベットが入っている

「それでも最高権力者はあなたでしよう？

だったら一言の下で黙らせなさい。ああいう家柄気にする連中は、所詮身分には勝てないのよ」

「だったら紫くんがやってよ、騎士王の娘で魔女王の孫じゃないか。

それで生徒会長に、総監の娘、僕より二つも称号が多いしさあ」

「あんなのに関わりあっていたら無駄なストレスがたまるから嫌よ。自分の部下くらい自分で処理なさいな」

「えー面倒だよー、そう言うのはルーに頼んで

お金はかかるだろうけど、君にとつたらはしたがねだろうしさあ」

ルーとはスマルトの部下の愛称である。このポケポケ会長に相当苦労させられているらしい

ちなみに後半の会話、今までにましてあげすけないのは、ウォルナットが席を外したからだ

6人の代表しかいないはずの部屋で、堂々と取り巻きを連れてたむろっている神経は流石というべきか

それとも軽蔑するべきか

紫は後者を、スマルトは気にしないという第三の道をとった

「そういえばスマルト、どうしてあなたがここに？確かチーム代表はその学科の首席よね」

「んー代理ー、神経が糸のように細い子だからさあ

海千山千な学科代表達と顔合わせ、っていったら緊張しちゃって、急性盲腸炎」

大丈夫なのかしら天使科代表は

という良心的な考えが紫に浮かんだのは、その代表が彼女の機嫌を

損ねる人物でなかったからである
面白い人間以外は特に気にかけても、真面目な人間は嫌いではないのだ

「まあ大丈夫だよ、天使は体が丈夫だし。治癒は僕らの専門だからねー」

でもなあ、なんで代理が僕なんだろ。めんどろだよー、今日はサボって寝ちゃおうvと思ってたのにさー」

「相変わらずやる気のないこと」

笑みの混じった声に、のほほーんとした調子で頷く

「だってめんどろだもーん」

代表に選ばれなくて仕方のない輩達が聞けば、腹立たしくてしょうがないようなことでも平然と言う

色んな意味で正直なのだ、彼は。本人曰く

『んー僕タテマエって苦手だしね。社交性がないっていうのかなー』

とのことだが

これが第三次歴史的邂逅の、ほんの三十分前のことである

六花は桜の研究室を後にして、食堂で二人の友人と合流した

これから始まるイベントに目を輝かせているゆずりと、いかにも面倒だといわんばかりにやる気0なパティ

それに見るのは楽しいけど参加はしたくない、というある意味中間点な自分が入るのだから、自分達は上手くバラけたものだと何となく思う

統一性がないとも言うが

「お待たせ、じゃあいこっか？」

「待つてましたーっ！いやぁ楽しみねえ！何せ学園中の綺麗どころが集まるんだからv」

「……綺麗どころとは決まってないんじゃないの？」

もっともなパティの意見だが、ゆずりはちっちち、と指を振る

「リサーチが甘いわよパティ」

「別に興味ないもの」

「あたしが調べたところによると」

全く聞いてないのもいつものことで

ゆずりは都合の悪いことは右から左へ抜けていくという、本人には便利な耳の持ち主だ

「過去選ばれた代表は、ほとんどがトップ実力者で、そのうち半分近くが美形なの」

つまり学園内で実力のある将来有望イケメンがそろい踏みってことよ！」

「……いつもながら、どこから調べて来てるんだろ」

「上級生か教師に張り付いてたんでしょ、ねばっこく、糸引き納豆みたいに」

当然、六花とパティのこの発言も耳に入らない

そのまま講堂に向かう途中も、着いてからもゆずりのイケメントークはとまらなかった

全校生徒が集まっているためか、普段は広い講堂も少し狭く感じるその中で人目もはばからず大きな声で語るゆずりのおかげで、六花とパティは無駄に注目を浴びる羽目になった

まあパティは全く関係ない、という顔をしていたが

と、そこで六花は違和感を覚える

「あれ、でもチームって代表以外抽選でしょ。そんなにうまい具合

に実力者ばかり集まらないんじゃない？」

「ああ、いかさま」

えらくあっさりした調子で言われた。パーティも頷いている所を見ると、公然の、という奴らしい

「学科混合とは言ってるけど、その実学科代表同士の意地のぶつかりあいみたいなもんよ

まあ流石に一チーム全員同じ学科まではいかないけどさ、剣士科代表のチームには絶対魔女科と死神科は入らないし」

「魔女科も、契約を結んでいる剣士以外は入らないでしょうね。あと獣人科に剣士が入るっていうのも聞いたことがないわ」

なんかそれって、もう抽選の意味ないんじゃない？

最初から選抜チームにすればいいのに

「それじゃあ色々まずいんでしょ、大人の事情ってやつ？

だーから、いかさまでも公に平等に選びましたーってことでこうやって抽選会やるの

まあ六花みたいに、そういう事情知らない子もいるからそれでいいんじゃない？」

「なるほどね」

・・・あれ、でもそれなら余計に藍さんやりたくなさそうなのに
そういうの嫌いなのに、暗くて陰険だから面倒だしー関わりたくねーっていつて

・・・まさかまたなーんか企んでたりするのかな、あそこの親子は

藍が企めば、まず間違いなく紫が気付く。その上で自分も意気揚揚計画に乗っては騒ぎを大きくするのが常だ

そのことを、六花はよく知っていた

なにせ幼いころから、その犠牲になっていく人々を間近で見っていたのだから

「な〜に難しい顔してんの、六花？」

「聞こえてないわよ、気が済むまで放っておいたら？」

そんな会話が展開された直後、周囲のざわめきが大きくなった生徒たちより一段上、壇上に理事長の姿が現れたのだ

ドーム状の天井には、いくつもの球形の光が浮かんで講堂全体を照らしている

その光の強さに目を細め、シェイドは櫛の長椅子に座り直したが、いつもは余裕のある長椅子も、今日は全員が詰めて座っているために思うような姿勢がとれない

知らずに眉間のしわが寄った

・・・くそ、面倒だな

人が集まっているところは好きじゃない。ついでにいえば、学園の行事なんか興味が無い

だから正直今日だってさぼりたかった、のに

「ちょっとシェイド、君のために来たんだからちゃんと探しなよ」

隣の灰につつかれて、仕方なく頭を巡らせる・・・ふりをする

『今日は全校生徒が集まるんだし、その例の女の子探してみたら？』

なんて、いかにもお前のためみたいなことってたけど、その実灰は単に、俺の嫌がる顔が見たいだけだ

昔、嫌いだったっていった果物を誕生日に箱（メートル四方はあった）いっぱい詰めて贈られた時

『僕、シェイドの嫌がる顔って大好物なんだよね』

とサドっ気全開の発言がまされた時は、本気でこいつと友達やめたくなった

などと考えていれば、隣から真面目にやれという冷凍光線…………

オマエ、何で心が読めるんだ

て、いってもな……この学校何人いると思ってるんだよ
しかも目立つ奴ならともかく、見た目は普通だったし……行動は
面白かったが

……でも図書館であんな奴らと一緒にされた時は腹が立ったな
腰ぬけとか卑怯者とか、好き勝手いいやがって

だいたい人が絡まれてたら助けるのが普通っていわれたって、俺は
助けられたことはないぞ
別に助けなんかいらないだろ、なのにあんなに怒って

やっぱり女は意味が分からない

………あー会いたくなくなってきた
いや、泣かせたからには謝るのが筋なんだろうけどな。会ってまた
口論になったら意味ないしな

だったらお互い犬にかまれたと思って忘れるのが賢明

「はあ!？」

突如起こった大声に、シェイドの意識は現実へと戻された。いつの間にか抽選が始まっている
そして彼から見て斜め前

生徒の波から一人突出した 立ち上がっているのだろう

少女が一人
肩をこす程度の黒髪に、魔女科の証しである黒いローブ

それにわずかに見える横顔と、その声には見覚え、聞き覚えがあった

「.....あ」

「ああ、あの子なんだ」

思った矢先に、これ 運は悪くないはずなんだが

「剣士科 シェイド・ラ・ティエンラン……！」

無駄に甲高い声が、自分の名前を呼んでいた

「は？」

間をおいて、歓声と驚嘆の混じった叫び声が講堂を揺らした

「……………うそ、シェイド選ばれたよ」

何に、と言いきりそうになって自分がその場にいる意味を思い出す

そして訂正しておこう、シェイド・ラ・ティエンランは自分で思っているよりずっと

運は悪いのだ

藍が無理やり整えられたんだろう、礼服で軽く挨拶をし、抽選は始まった

舞台中央に据えられた、背丈ほどある鳥がこの中に、見目鮮やかな鳥が一羽

それが記憶する、一年生を除く全校生徒の名前からランダムにメンバーを選んでいくのだ

ゆずりのいった通り、名前を呼ばれて行くのは各科の実力者達ばかりで……ゆずりの反応を見る限りは、顔もいいことで有名ならしい

「やっぱり5年生以上の実力者がそろい踏みみたいね」

いいつも、半分夢の中のパティ。いかにも面倒、早く帰りたいて顔して……

まあでも流石に次は魔女科だから起きとくみたいだけど

「獣人・獣士科は4年生もいたけどね。まあウチのところかは学年あんまり関係ないから当然か」

「ああそつえばレベルもないんだっけ？……と、紫ちゃん出てきた」

途端会場がざわめく

まあなんて言っても紫ちゃんは理事長の愛娘で、生徒会長で、将来の魔女王

となると公然のいかさまで選ばれる＝実力を認められる

まあつまり、実力者の太鼓判を押されるってわけで

いつもにまして、威圧感？というか何だか空気が重い

平然としているのは当の本人だけって……まあ紫ちゃんの神経は竹の束みたいなのだからなあ

と、行ってるわりに至極落ち着いて考察している六花

そしてゆずりが目を爛々と輝かせている中、一人目が読み上げられた

「死神科 篁・蘇芳」
たかむら すおう

一発目から、反応が真つ二つに別れた
半分は驚愕、半分は啞然

そして静寂の後には、全員一致で疑問が飛び交った

「え、なんなのこの反応？」

「………ゆずり」

パーティが目くばせすると、意気揚々とゆずりがメモを取り出し

「死神科 篁・蘇芳（名前・苗字） 5年生ね。よく言えば神秘的、悪く言えば意味不明の死神科の中でも特筆して変

まずほとんどしゃべらないし、前髪が顔の半分以上を隠してるのに、
なぜか前が見えてる

だけじゃなくて、50メートル先の小さい文字までばっちりだった
んだからすごい視力よね

実力は死神科の中でもトップクラスらしいけど、淡々淡々と全てそ
つなくこなして、どんな酷い作業だって顔色一つ変えない、鉄仮面
おまけに魂狩りの時は鬼神の如く冷酷無比、血に塗れて興奮してた
だの、チームメイトすら狩るためには平気で犠牲にする、なんて話
まであるの

つてことで死神科はもちろん、他学科からも恐れられてる危険人物で、一応生徒会所属らしいわ 会計ね

2年の時に当時4年生で生徒会長だった紫さんが推薦したんだって・
・・・つてことは身内中心で選ぶってこと？」

長々と説明ありがとう。だからこそあの反応なわけね
チームプレイなんて考えられない人間を、チームプレイ重視のこれ
に参入させるわけだから

そしてざわめきも収まらぬ中、さらなる名前が読み上がる

「剣士科 久我紅」

今度こそ、疑問の声が爆発した

久我紅といえば剣士科きつての問題児。素行不良で授業何かほとんど出ない、家柄と金だけで進級できたとか何とか・・・とにかく、

こんなところで選ばれるわけがない人間ナンバーワンといっても過言ではない

酷い言われようだけど、前半はホントのことだからなあ
くう兄……いや、何も言つまい

二人目にして、すでに啞然騷然な抽選会
は、いよいよ三人目

「魔女科 叶桜」

「うそ!？」

思わずさけんじゃったけど、仕方ないと思う。パーティも難しそうな顔してるし

「……………何を考えてるのかしら、会長は」

「うーん……生徒会関係者が身内?で選ぶ人かねえ。にしたって桜さんってどう考えても実践向きじゃないでしょ?

あの人研究職じゃない!」

「それどころか。攻撃系は苦手って聞いたわ……。会長ははなから勝負を捨ててるの？そうとしか思えないメンツよ」

という会話を繰り広げる隣で、苦笑する、というより引き攣った笑みを浮かべる者が一人

いや、あれはもうむしろ……。心なしか頭痛がしてきた

紫ちゃん……。絶対基準『面白い』で選んでるよ

間違いないって、だって生徒会役員Ⅱ変人を基準に選んだ人なんだから

となると、残り5人だってどんなビクリドッキリが仕込まれてるかわからない

いったいどんな奇人変人パレードを繰り広げてくれるんでしょうかお姉さん

いつきに混沌と化した講堂

次はどんな爆弾発言が繰り広げられるのかと、身がまえた瞬間

……あつれー同姓同名？

すっごい偶然だね、あはは、親近感わくわー

「……六花？」

「マジ？」

なわけないですよね、はい

自分で言うのもなんだけど珍しい名字だし、同姓同名なんていたらすぐわかるし

つまり紛れもなく、わたし本人ってことで

「はあ!?!」

叫んで、思いつきり立ちあがっちゃったって不可抗力だと思う
っっていうかありえない、アリエナイ、意味わからないよホント

ていうかわたし奇人変人の類じゃないのになんで選ばれてるの!?

周囲の視線をもともせず、というか気にする余裕もなく、立ち尽
くす六花

その耳に飛び込んできたのは次なる選抜者

「剣士科 シェイド・ラ・ティエンラン」

最近メチャクチャよく聞くその名前

嫌な予感を告げる警報が、頭の中でガンガンなっている

そして第3次歴史的邂逅の舞台は整った

事態は急速に展開す 1 (後書き)

いよいよサードコンタクト (笑)

事態は急速に展開す 2

話題騒然阿鼻叫喚 カオスなチーム発表の後、大混乱のまま場はお開きになった

ちなみに逃亡を図った六花はあえなく紫に確保され……

そのまま第一回ミーティングという名の戦場に放り込まれたのだった

その場は、大変空気が悪かった。いや、訂正しよう
その場の中の約二名が大変悪かった

もう言わなくてもわかるだろうが、悪い空気発生源は白峰六花とシ
エイド・ラ・ティエンラン

年の順ということでは並べられたため席は隣、だがお互い目も合わせなければ挨拶することもなく

ただそっぽを向いて互いに黙り込んでいるだけ

とは言っても、実際は怒っているのは六花だけで、シエイドは気ま

ずいが何かする気はないため無視しているだけだ

しかし腐ってもあの久我紫に選ばれた猛者達

ただか下級生の空気が悪かったくらいで、気にする奴は一人もいない

現に今この場にいない紫を除くメンバー達は、全く意に介した様子もなく……どころかマイペースにやりたい放題好き放題

紅……らしき人物はソファに寝転がって爆睡

桜はミミを連れ込んで二人遊び中

篁はただ黙々と鎌を研石でといっている 本人曰く趣味とのこと

と、

「ああ、そういえば自己紹介がまだでしたな〜

私は叶桜、でこの子がミミちゃんです〜、5年生で先輩なんで何でも聞いてくださいな〜」

突然の自己紹介は、別に悪い雰囲気を変えようとかそう思った考えから至ったのではなく、桜の場合、本当に今この時偶然に思いついただけなのだ

それでも結果的に、場の空気が変わったのは事実で

「あ、はい、初めまして。剣士科2年のシェイド・ラ・ティエンランです……叶さん」

またまた訂正しよう。場の空気は一部だけ変わった

当たり前前に丁寧なその態度は、会う度とにかく腹の立つことばかりいわれている六花の機嫌を急下降させた

ちよつと・・・あんだ私の時と態度違いすぎない！？所詮あれか、顔と物腰か！桜さん美人だし

・・・というかわたしの周りは美人度高すぎじゃない？一緒に並ぶとちよつと、いやちよつと+ いたたまれないんですけど

筆頭は当然紫ちゃん。でももうあの人は別格過ぎて劣等感すら起きないわ

といつのまにやら思考が別ベクトルに向いている一人百面相中の六花にかまわず、自己紹介タイムは続く

「よろしくおねがいしますね、名前呼びでいいですよ

ああそれからこっちは篁・蘇芳、あまりしゃべらない人ですけど、優しいんです」

篁さんは一度だけ顔をあげ、少し、ほんの少しだけ頭を下げて再び作業に戻る

・・・生徒会の人には紫ちゃんつながりで面識あるけど、この人だけは滅多にいないからあんまり知らないんだよねえ

たまに見るけど、それはちよつと常軌を逸しているというか・・・とにかく普通じゃない時だし。普段はこんな人なんだ

・・・ホントに面白さだけで選んだんだね紫ちゃん

「それで、シエイドくんのお隣さんが白峰六花ちゃん。は、面識はありましたよね？」

「……なんでそんなこと」

当然の疑問を口にするシェイドに、桜はにこりと笑って

「魔女科魔科学部はいつも実験にいそしんでいるのです

その中で音声・映像録音編集の実験中に偶発的に何か録音されてしまつのはよくあることなんですよ〜」

「いや、それただの盗聴盗撮でしょう」

「というか何やってるんですか魔科学部」

一瞬の間

視線をスライドさせれば、碧と目が合った

光の当たり具合によって青にも緑にも見えるそれは、昔よく行った海の色に似ていて……すごく綺麗な

うらやましい、私の目ってなんか血の色みたいだからあんまり好きじゃないし

くう兄とかはかなり綺麗な紅色なのに、私のはなんかちょっと黒っぽいというか……あ

碧の目がわずかに歪む

ティエンランの口が開く前に、思いつき反対側に顔をそむけた

……ってあからさま過ぎたよねこれ！？ああでもあんなムカつく奴に一瞬でも魅入っちゃったんだ！白峰六花一生の不覚

結局そのまま首を戻すに戻せず、不自然にそっぽを向いたままで・

痛くなった首を戻せたのは、紫ちゃんがやってきてからだった

大騒ぎで行動から出て行く奴らにまぎれて、さっさと逃げるつもりだった

本当は直接棄権するのがいいんだろうが……それはヤバイと俺の本能が言っていた

灰に鍛えられた俺の『ムカウナ危険信号』がさっきから反応しまくっている

だからさっさと戦略的撤退をしようとした

そう、した

『困うは鉄鎖

散らすは翼

望み欲すは籠の鳥』

「っ!？」

な!？体が動かない!

「ふふふ、どこにいくつもりなの？シエイド・ラ・ティエンラン君」

ああ今まさに『ムカウナ危険信号』がメーターぶっちぎって振りきれた

それでも、もうどうあがいても逃走など出来るはずがなく

「……………逃げようなんて思わないことよ、貴方の将来のためにも、ね？」

後ろに鬼がいた、後に彼はそう語る

そのまま部屋に連れて行かれ、年功序列だとか言われ、あの魔女の隣に座らされた

……………会いたくないと願う相手に限って何で会うんだ、

俺は

そもそも人間関係でろくな目にあつたことがない

筆頭は灰だ、アイツは昔から笑顔で、嬉々として、人の嫌がることをやる奴だ。忘れもしない5歳の夏

落とし穴に落とされたかと思えば、なんか黒くてギギギって鳴く・

・謎の生命体をぶち込んできやがった

しかも泣き叫ぶ幼い俺を、奴は穴の上からほくそ笑んで見下ろしていたのだ

というか今から思えばどうやって掘ったんだあの穴。軽く高さ5メートルはあつたぞ？

・・・駄目だ、思い出してきた。奴らの甲高い鳴き声が耳によみがえり、背筋に寒気が走る

あれは本当に恐怖だった

・・・兄さんが泣き叫ぶ俺に気づいて助けってくれなかったら、奴らと一夜を明かすところだったんだからな

そして今だそのことで、灰に謝られたことはない。というか絶対アイツ忘れてるな

俺の借りは全部覚えてるくせに、あのエセ爽やかめ

そして親類だ

コイツらは灰よりタチが悪い。ある意味正々堂々仕掛けてくる灰と違って、コイツらは陰で色々してくるから面倒だ

一々言い返すのも面倒だ、でも言われっぱなしは腹が立つ

ああでもそれに並ぶくらい面倒なのが・・・隣の魔女だ

謝った方がいいんだろう、でも声をかけたが最後面倒なことになる気がする。面倒事は灰を親類だけで十分だ

と

「ああ、そういえば自己紹介がまだでしたね」

私は叶桜、でこの子がミニちゃんです、5年生で先輩なんで何でも聞いてくださいね」

脈絡ないな

とは思ったが、初対面である以上挨拶するのは礼儀だろう

そう思つて俺も名乗ると、その叶さん……じゃない桜さんは黙りこんでいるもう一人の男の紹介もしてくれた

……とてもじゃないが優しそうには見えないが。むしろ禍々しいオーラが出ている

でも兄さんも『人は見た目じゃないよ』っていったしなあ……

まあその後

『でも大抵の奴は外面に騙される。せつかくシェイドは元がいいんだから、それを最大限に活用するんだよ

というか仮にも俺の弟が騙される側に回るなんてありえないよな？』

と付け足していたが

兄さん、普段は多分優しかったのに社交だけは厳しかったな

にしても今から思えば4歳児（当時のシェイド）に何を教えていた

んだあの人は

まあそれはともかく

代表は今席をはずして、後は魔女とソファに剣士科の上級生が一人……誰だったかな、発表聞いてなかったからわからない

おまけに頭から上着かぶって寝てるから、顔すらも不明
そして8人のはずの対抗戦のチーム、残り2人はいない

後から聞いた話だが、何でもチーム代表は試合2試合を欠席する代わりに、メンバーを一人自由に選べるらしい
そして代表 久我会長は4回の欠席と引き換えに2名を指名する権利を得た。しかし発表の場では誰も指名しなかった

6人でも他より不利なのに、さらに主戦力の会長が抜けるとマズイんじゃないのか？

やる気のなかったわりに、おそらくこの中の誰よりも現実的に対抗戦のことを考えているシェイド
実はやる前までは面倒がるが、いざやるとなると誰よりこだわるタイプだったりする

「それで、シェイドくんのお隣さんが白峰六花ちゃん。は、面識はありましたよね？」

思考に浸っていたため一瞬何を言われていたのか理解できず、固まる
そしてまた内容を理解してからも、

「……なんでそんなこと」

別段騒いだつもりはないのに、そんなに伝わってるのか？だとした
ら相当話題がないんだな、この学園は

「魔女科魔科学部はいつも実験にいそしんでいるのです

その中で音声・映像編集の実験中に偶発的に何か録音されてしま
うのはよくあることなんですよ〜」

なるほど、別に灰が言うように噂が出回っていたわけじゃないみ
たいだな

「………つて、ちょっと待て

「いや、それただの盗聴盗撮でしょう」

「というか何やってるんですか魔科学部」

まったくだな、というか普通に犯罪だろうそれ？

こんなことばかりだなこの学園！この間なんか誰にも知られてな
いはずの、俺の語学の点数が灰にばれてたし
「………全世界共通語があるのに、今さら昔の言葉なんて出
来なくても問題ない」

ん？

視線を感じる、しかもほぼ正面から
意識が現実に戻ると、じつとこちらを見てくる魔女・・・白峰だっ
たか？と目が合う

しかもだ、だんだん眉間に皺が寄っていく・・・俺は何もしてないぞ

はつきりいって、人に見られるのは好きじゃない
しかも黙って、こんな風にじつと見られるのは余計に

「な」

何か用か

の、一言目を発した瞬間に勢いよくあいつの顔が反対に向いた

・・・・・・何なんだ？

やっぱり女はよくわからない、灰が面倒だっけってた気持ちがよく
わかる

じつと睨んできたくせに、声をかけた途端に拒否って何だよ

というか用事がないのに、なんで女は人の顔をよく見るんだ？廊下
を歩きたびにこっちを見てはこそこそ何か言ってくるし

本当に、よくわからない

シェイド・ラ・ティエンラン
剣士としてこそ優秀だが、男としては相方（灰）がいない限り超朴
念仁である

「・・・・・・・・・・・・・・・・本気ですか、紫さん」

ウォルナット・ロウ・ローシエンナは引き攣りそうな顔を必死で抑
え、隣で優雅に腰掛ける美女に視線を移した
しかし紫は何のことだか、とそしらぬ顔だ

「本気とは何のこと？」

「・・・・・・・・あのメンバーですよ、勝つ気がないと思えない」
「あら、メンバーはランダムで選ばれるんでしょう？ 私になんの関
係があるというの」

そう言われると、何も言えない

確かにこのイカサマは公然の、だが歓迎されることでもないのだ
もしまさにイカサマしていないのか？とも思ったが、謀ったとし
か思えないあのメンバーはやはりイカサマなのだろう
偶然でアレがそろったとなれば、それこそ奇跡だ

そして何より、奴が彼女の下にいることが

「……………久我紅は、敗北の嫌いな貴方が勝利を捨ててまでそ
ばに置く必要のある男なのですか？」

一瞬の間

そして返ってきたのは冷ややかな眼差しと

不敵な笑み

「あら私、勝つ気だけれど？」

あのメンバーなら勝てるわ

目を見開く

どう聞いても、強がり以外の何ものでもない。おそらくその場に
いた誰にも聞いてもそういつただろう
……………スマルトを除いては、だが

つまり彼女をよく知る人物なら誰もが紫の言葉を信じたということだ

何故なら紫は、負け戦すら勝ち戦に変えてしまう女だから
そして同時に、無理だとわかっていてあえて出来るなどとはいわな
いから

沈黙したウォルナットを一瞥し、席を立つ
まさに逃走しようとしている2年生2人組を見つけたからだ

「ああ、それから」

刹那 空気が凍った

それほどまでに、純粹に、冷たい視線が落ちてくる

「 貴方の言う人の『価値』とやらがあるのなら、紅のそ
れを貴方に語られたくはないわね」

唇が、弧を描き 冷笑した

「私が愛して、伴侶と決めた男なのよ
・・・それ以上侮辱の言葉を吐くのなら、その声帯、潰して
あげるわよ?」

今度こそ完全に、彼は沈黙した

「あはは、なんだか雲行き怪しいねえ」
全くもって、その通りで

事態は急速に展開す 3

「いいか六花！人生は山あり谷あり！だからどんなに最悪の状況でも投げださずに足掻いて見せろ！そうすりゃあたいてい自然に山に向かつてくもんだ！」

つて、昔おじいちゃんが言っていた
ガーツハツハツハって高笑い付きで・・・うん、お約束な人間ば
つかなね、ウチの親戚つて

でも、それじゃあ今絶好調で谷な私はいつか山になるのだろうか
はい、なったためしななかないですね。人生そう甘くないで
すね

やってられっか！

私にとつてもみんなにとつても核爆弾を落とした紫ちゃん・・・
・・・が、第二弾を落下しました
しかもあれです、絶対拒否不可な笑顔とセットで

「は？」
「今なんて？」

テイエンランと被っちゃったけど、もうそんなこと気にしてられない二人揃ってテーブルから身を乗り出し、上座で優雅に紅茶なんか飲んでる紫ちゃんに詰め寄る

「あら、聞こえなかった？それより二人とも、お茶の最中に机をたたくななんて何事？行儀が悪いわよ、座りなさい」

「え、あ、ごめんなさい」

「あ、失礼しました……………じゃなくて！」

そうそう！流されるところだった！

「紫ちゃん！どういうこと！？よりもよって、コイツと！」

「なっ、コイツってなんだよコイツって！オレだって…・魔女と」

「魔女じゃない！私にはちゃんんと、白峰六花って名前があるの！さっき自己紹介したでしょ！？」

「そうじゃな……………あぁっとかくっ！俺はコイツと組む気なんかありません！」

「それはこっちのセリフよ！こんなヤツとコンビなんて冗談じゃない！」

互いに指さし、謀ったかのように交互に言葉を発する二人

その背後で桜と篁（というか桜が一方的に）が「仲良いですねえ」

「……………」などと言ったものだから

「仲良くない……………」

と今度は見事なハモリ

「あらまあ、もう息がピッタリ。きつと言いコンビになりますよ」
「……………」

「（――）。」
……………くう兄、いつまで寝てるんだろ。というか服で顔覆ってて、息苦しくないのかな？

「やっぱり私の見立て通りでしょう？合うと思ったのよ、貴方達」

他の人なら、そんな邪気なし美麗笑顔に騙されてたんだろうけど！
なんていったって紫ちゃんとは付き合い15年、心臓の対美形耐性は十分ついてる

それにこの笑顔の裏に隠れた『面白くて面白くて仕方ない』って気持ち
持ちがわかる今じゃあ、とてもじゃないけど見惚れてなんかいられない

「何を根拠に……………」

「そうだよ！それに今のこの状況みてどこが合ってるっていうの！」
「その通りです、だいたいコイツの力なんか借りなくたって俺は大丈夫です。むしろお荷物になるだけだ」

「!?!」

荷物、今荷物ついていいやがったのコイツ！

確かに魔法は上手くないし、はつきりいつてこんな選ばれたって、場違いだっってわかつてる

「邪魔になるだけで、俺にはなんのメリットもない」

でもねえ……
お荷物なんて言われて、黙ってられるわけない。前にも云ったけど、私かなり短気だし

「それに対抗戦なら、下手すれば命に……」
「さつきから聞いてればなーによ偉そうに！！あんたが何様なのか知らないけどねえっそこまで言われる筋合いはないわよ！」

久々にやりました、テーブル持ち上げ（別に特技じゃないけどね）
ちなみに間合いをとくにつかんでる先輩方は、しっかりお茶とお菓子を確保済みである

「ちょ、おい！危ないだ！だいたいねえ！あんた一人で平気みたいなこと言ってたけど、ホントにそんな実力あるわけ！？」

「なにっ！？」
「口ではなんとでもいえるからね！女の子一人守れないっていうんだから、大したことないんじゃないの？」

無駄に嫌味口調なのは、紫の教育の賜物だ。いや、教育というより汚染、もしくは悪影響というべきか
ちなみに当の本人は素知らぬ顔で、ニヤリとしながら高みの見物に洒落こんでいる

「俺は思ったとおりのことをいったただけだ！それにお荷物一人守るくらいいけない！ただ足枷があると邪魔なんだよ！」

「足枷になんかならないわよ！ホントは出来ないくせに、人のせいにして逃げるつもり！？やっぱり剣士科は腰ぬけばっかりね！なっ

さけない！」

「なんだと！？そこまでいうなら証拠を見せてやる！矢だろーが魔術だろーが何だろーが完璧に守ってやれば文句ないだろ！？」

お前の方こそ足枷にならないって言ったなら、俺の足ひっぱんなよ！」

「あーっもう！なんであんたはそう一々偉そうなわけ！？言われなかつたって、アンタの足なんか頼まれたって引つ張るもんですか！

仮だろーが本だろーが契約してあんたをきっちりサポートしてやるうじゃないの！」

「しっかりと聞いたわよ、今のお言葉」

はっとしたときには時すでに遅し

「桜、言質は？」

「うふふ〜昨日魔科学部技術科が開発した高性能音声集積石でブレスのタイミングまではーっちりです〜」

そしてそのままそれは、奪い返す暇も破壊する暇もなく、紫の懐にしまわれた

たかが2年生2人がかりでは、盗り返せるはずもなく

「じゃあ後は桜と篁、紅と私でペアね対抗戦、その他諸々でもこの

組み合わせでやるから

当然、文句はないわね、二人とも？」

集積石をつまみあげ、口角を上げる

う、だの、あ、だの・・・とにかく何か反撃をしようと試みていた二人だが

「いいわよ、ね？」

天上天下唯我独尊 絶対無敵生徒会長様の前では、首を縦に振るほ
かなかった

「・・・・・・・・・・・・・・・・おい」

「あら、いつから起きてたの？」

最悪、やられた、悪夢だあつ！と叫ぶ六花と、灰より夕チが悪い人
間がいたなんて・・・わはは、世の中広いな・・・と呟くシエ

イド、それに桜と篁が部屋を後にすると紅はむくりと起き上がる

「六花がテーブルを持ち上げた時からだ。それよりも……本気か？」

「六花ちゃんとシエイドくんのコンビ？当然よ。冗談で六花ちゃんにここまですると思う？」

「思わない」

お前、六花は特別扱いだからな

「しかし……厄介なモノを抱えているぞ、アイツは」

「それって六花ちゃん？それとも」

「両方だ、篁が始終アイツを気にしていた」

「ええ、まあ確かにちよつと厄介なモノを持っているわね、彼も」

当然調べはついている

彼の家族構成、生い立ち、成績の数々は全て紫の脳に記録されているのだ

「でも素材は最上、磨けばどう化けるのか……気にならない？」

「……」

「沈黙は肯定と受け取るわよ？」

「しかし」

「それに、あんたがそこまで渋るのはそれが理由じゃないでしょ？」

ギクリツ、なんてリアクションはしないが、微細なモノでも付き合
い20年の紫には十分だ

ニコリと笑って、口角をあげ

「シェイドくんが男だから気に入らないんですよ、このシスコン」
「お前にだけは言われたくない。メンバーを決める時に唸っていたのを忘れたわけじゃないだろう」
「・・・・・・・・」

反撃されるとは予想外だった
ならば、と

「それじゃあ妥協案、貴方が六花ちゃんと組んで、私が彼と」どこ
が妥協だ、悪化した」

眉をひそめ、あからさまに機嫌が急降下している紅に、微笑をこぼす

「冗談よ」
「当たり前だ」

最悪だ、何で俺がああ魔女と組まなきゃいけない……
しかし、一度言ったことを取り消すのは……

おそらく灰がいれば、ヘタレと一声の下に切り捨てるだろう状態の
シェイドは、未だ部屋の近くで唸っていた

と

「……………シェイド・ラ・ティエンラン」

背筋が凍る、とはこういう時につかうんだろう

ビクリと視線を上げると、しだれ柳のように前髪をたらしした男が一

人 篁・蘇芳だ

「つと……蘇芳さん、なんですか」

「……………」

だらりと垂れる黒髪の間から、恐ろしく冷たい青い目が覗く

おまけに黒装束にデカイ鎌……………完全に、ホラーだ

そしてそのまま沈黙

しかし篁が前から動かないので、シェイドもその場から動けない。

仮にも上級生、このまま無視してさようなら、というわけにはいか
ないのだ

「あの」

何か、そう問う前に篋が口を開く
なんか……今日は邪魔されてばかりだな

「死神の仕事は、魂、それに闇を狩ること」
「は？」

何を、しかし有無を言わせぬアイスブルーの瞳が、シェイドを射抜く
口ごもると、彼はきにせず続けた

「闇は魂の鎖、鎖は重石、これを断ち切らなければ天界には運べない。新たに輪廻を巡ることも叶わない
故に我らはこの鎌で鎖を立ち、断てぬ者は冥界へと連れ帰り、その業を削ぐ」

沈黙

黒のマントがズルリと滑る、その下から覗くのは、さらに濃い黒の制服

他の色など一切ない、ただ黒一色で

しかしそこから、確かに血の匂いがした

鮮明に記憶に刻まれている、あの

何よりも、紅い

「そして鎖は、我らが切らぬ限り断ち切れず
故に闇も業もまた、生けるうちは断ち切れぬ」

碧の目を、見開いた

この人は、知っているのか？

瞬間 視覚聴覚触覚味覚嗅覚感覚 全てが

世界から 絶たれた

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・レイヴィス」

それを聞いた瞬間、全てが還った

その代わりに未だ自分を見下ろす男から、目が離せなかった

何故

「古語において、その意味は『空』」

そしてシェイドは『太陽』か・・・・・・・・・・太陽と、空、上手いことを考える」

わずかだが、その口角が上がったのを、視認した

「しかしお前のそれは、空にとっては望まぬ闇。囚われていては、本当に堕ちるぞ？」

「っ！何が！」

あんたに、何が！

咄嗟に　もはや鼻が触れるかのところまで近づいていた　体を突く

遅れてしまった、と思っただが筆は気にした様子もない

「忠告はした」

そのまま踵を返し、振り向くことなく廊下に消えた

「・・・・・・・・つくそ！」

残されたのは、『太陽』ただ一人

「・・・・・・・・待たせたな桜」

「あら、かまいませんよ・・・・・・・・ってあらあら？ 簗、何だか元気がないですねえ」

駄目ですよ、何事もポジティブシンキング、です

のほほん、と笑う桜に、簗は声音も、鉄仮面といわれるその表情さえ変えず

ただ

「大したことではない、ただ・・・・・・・・そうだな『太陽』が『月』を見つけれれば、と思ったただけだ」

「月ですか？ 空に出る？」

「肯定だ、月は夜、太陽は昼を司る。それは対
太陽は月に光を与え、月は太陽に代わり、太陽が生んだ闇を照らす
もの。対は対なればこそ、輝く、その闇を被う

故に孤独の太陽には月が必要、そう思っただけだ」

聞き終わって一瞬キョトンとし、それからふわりと笑む
桜のそれが、同意と知る筈は何も言わず

静寂が満ちた
しかしそれは決して思いものではなく

ただ穏やかな、

事態は急速に展開す 3 (後書き)

次回のキーワード。無茶ぶり。

師は弟子を千尋の谷に叩き落とす 1

友人たちと談笑していた女生徒が振り返る

重い荷物を抱えた教師が、立ち止まって凝視する

未だ新鮮一年生が何事かと目を点にする

そんな彼らの視線の先は

「……………六花、それ何のプレイ？」

「誤解を招くような言い方はやめろ！」

「好きでこんなことやってるんじゃないわよっ！……！」

始まりは、さかのぼること一時間前

「おいつお前わざとやってるんじゃないだろうな!？」

「勝手ないいがかりつけないでくれる!??どこをどう見たらわざと

に見えるのよ！」

「……もういい加減説明するのも面倒だけど
ティエンランとはほんとはーにウマが合わない、むしろ最悪。相嫌相
悪、きつと私が右つていえばコイツは左を、コイツが上といえれば私
は下を選ぶだろう
きつと性格とか人間形成のなんだかんだとかの根本部分から合つて
いない

でもそんな私の言い分が通じるわけがなく

「はあ、本当に貴方達の意固地さには脱帽するわ」

「一応褒め言葉を織り交ぜてはいるが、褒められていないのは明らかだ
わざとらしくため息と笑顔までつけて、紫ちゃんは呆れたと言わ
んばかりに頭をふる

「二人はほんつとくに仲がいいんですねえ」

「……は？」

「いやいや桜さん、その発言流れるにかなりおかしいから
とつかどこをどう見れば私とティエンランが、仲が良いなどほざ
け……言えるんだろう

「だって喧嘩する人は仲がいいんでしょう？ね〜ミニちゃん」

「……喧嘩するほど仲がいい、っていいたいんですか？」

「そうですよ〜シェイド君、それ以外に何かありますか？」

「……」

いや、そりゃああるでしょう犬猿の仲とか
むしろこっちの方がピツタリ、というかこいつと仲が良いなんてと
んでもない誤解
恐ろしいことに会ってまだ数日だけど、お互いにそれから周りにも
私達の『仲の悪さ』は知れ渡っている

対抗試合は、本番開始前に何度か模擬試合……という名の腹
の探り合いが出来る（イロイロ特典も絡んできてるけど）
それで二回ほど試合はしたんだけど　　当然、うまくいくはず
がない
ただでさえ人数少ないのに、くう兄はサボりだし、紫ちゃんは四試
合出場停止、実質四人で人数的にも不利

その上、他が5年生以上で固められてるのに、ウチは2年が2人
自分で言ってる悲しいけど……いや事実は事実、それに半ば予
想したことだ

はつきりいつて足手まとい

技術とかうんぬんに限らず、経験値に絶対的な差がありすぎる
その上あれだ、こともあるうに私とティエンランは……言っの
もおぞましいって言うか言いたくもないけど『コンビ』という奴で
コンビというからには試合とかでは協力関係、というかサポートし
たりされたり、お互い足りない部分を補い合っでがんばろ……
……な関係になるはずなんだけど

私達は片方が右を向けば左を、上を向けば下を向くような間柄
協力はもちろん、連携プレーなんてできたはずがない

流石の紫ちゃんもあきれ返って……さっきのセリフになる
というわけです

「まあ桜の見解はいいわ

しかしまあ、ここまで二人が頑固だっというのは予想外だったわね」

「……それはどうも」

「まったく、全然、褒めてないわよ六花ちゃん？」

そ、そんな怖　い笑顔でニッコリされるまでもなく、わかってます
から！

気圧されて一歩後ろに引く2年生コンビ

が、すでにここから紫の『計画』は始まっていたのだ

「と、そういうわけで私大変切羽詰ってもうどうしようもないくらい焦っているの

そういう人間がどんな手段を使っても、仕方のないことだと思わな
い？」

「「は？」」

見事なハモリ　当人たちにとっては喜ばしくもない、むしろ嫌悪
すべき事象と同時に

史上最悪の三日間。その開始を告げる錠が下ろされた

「ははあ、それでその様ってわけねえ」

ゆずりの視線の先で、注目を集める問題のブツがチャリと音を立てた
六花の左手、シェイドの右手にはめられたのは鎖で繋がれた二対の
輪　　いわゆる手錠だ

ちなみに仕掛け人である紫がいうことには

『桜と篁、紅と私と違って二人は会ってすぐなものね
お互いのことをよく知らないのに協力しろっていうのはちょっと無
茶だったようだから』

『……………この状態ですーっと一緒にいれば知れるだろ
しつて』

そう聞くと、それはもう艶やかな笑顔で頷いて下さいましたとも

『横暴！』

『あら、いわなかった？焦っている人間は手段を問わないって』

『全然そうはみえませんが、会長』

『切羽つまるわけないでしょ、紫ちゃんが！コレなんの冗談！？絶対遊ぶつもりでしょ！？』

『こんな面白い事態で、遊ばなくて何をしろっていつの？』

「に、しつてもまあ紫さんもやるわねえ。いや、とんでもない大物だ、とは思ってたけどさあ」

まさか六花達の（紫ちゃんだけの！by六花）ために、授業まで変更させるとは思わなかった

そう、今日になって突然剣士科と魔女科は三日間合同授業

といつてもまあ、前のように契約の勉強ではなく、単に一般教養を合同でやるというだけなのだが・・・

十中八九・・・どころか100%確実に、裏で何かやったよ紫ちゃん

『ここ最近剣士科との争いが絶えないから、相互理解を図るべく交流を増やすべき』

なんてもつともらしい理由が付いているとはいえ、昨日今日で急と
いうのはおかしすぎる

だいたいそれなら情報通のゆずりが何事も察知しないはずがない

つまりここ数日で、突然に、緊急に、きまったということ・・・

「はめられた、完全にやられたっ何が切羽詰って、よ完全な計画犯じゃないの！」

「いーじゃない、おかげでアンタじゃどうやったって無縁の男前vしかも成績優秀将来有望株とこーやって繋がりができたんだからさあ」

「それギャグなら寒いし、本気なら最悪！っていうかこんな性根の曲がった奴無縁で結構！」

知り合いになんかレベル上げてもらったってなりたくないわよ！」

「えー、そりゃあたしかにシェイド・ラ・ティエンランといえば身分と成績はいいけど

自信家で口の悪い、図太い神経の持ち主だっって聞くけどさあ、顔はAランクよ？」

おまけにこれから成長するにつれてさらに磨きがかかること間違いないし

そんな男と三日間も四六時中食事勉強、果てはお風呂にベッドまで一緒だっっていうんだから、この際そこには目をつぶってさあ」

「本人を目の前にそういうお前らの方が、よっほど図太いと思うぞ」

憎々しげにつぶやいたシェイドだが、そんなこと気にするようなら初めから言わない

六花とゆずりはそういう人間だ

案の定気にすることもなく

「事実でしょ！」

「あーらこつちは褒めてんじゃないの、顔はいいって」

と、片やパンに、片やパスタにがつつきながらのたまった

ちなみにこの三人組、さつきから食堂の注目を集めていることには気づいていない

次の授業は空いているため、人目を憚って少し遅めの昼食。とはいえそれでも食堂にはそれなりに人が集まる

そんな中で大声でののしり合う男女（しかも手錠付き）+1がいて目立たないわけがない

ただでさえそのうちの一人 シェイドは顔が知れているのだ

そして人間、目立つときにはとことん目立つもので

「シェイド様あつ!?!」

………あー、なんたる

なんかこう、とてつもなーく嫌な、というか会いたくないというか
それでいてすつごく聞き慣れた感じの声でしたんですが

しかもあれだ、金切り声

おそるおそーる六花が振り返ると、そこにいたのは見覚えのある普
通科数名

忘れるはずもない、合同授業に出られなくなった原因 伯爵令

嬢リアナ・デイ・ローズマダー

家名と同じく薔薇色の髪と目、白い肌とどこことなーく金持ちそうな
雰囲気……絵にかいたような我がまま金持ちお嬢様

が、悲鳴を上げて青ざめて、取り巻きに支えられている

あーホントついてないわ

ティエンランと組まれたときが最悪かと思ったけど、上には上……
・じゃない下には下があるんだね

ん？ていうかちよっと待って。今ものすごい……く聞
き逃せない単語が……

「………シェイド、様？」

くると顔を左隣りに向けると、ゲツと形容するにふさわしい顔を
したティエンラン。そしてその視線の先には、当然伯爵令嬢

………っていうかちよっと、中途半端なところで手えとめな

いってくれる？左手吊るされて痛いんだけど

「えーっと、あのさティエンラン。ホントはすっごく聞きたくないんだけど……お知り合い？」

聞くとうつと一瞬つまり、そのまま明後日の方向に視線が飛んであーだのうーだの呻いた後に、本当に、本当に嫌そうに奴が言ったことには

「……………婚約者（仮）」

へー、ああ婚約者

まあ第二世界とかじゃあよくある話らしいしね。そういえばコイツもいいところの坊ちゃんらしいし、身近にそういう例もいるし

なるほどなるほど

……………じゃない

シェイド・ラ・ティエンランとリアナ・デイ・ローズマダーが婚約者？

私の天敵と仇敵が婚約者、つまり未来の夫婦、ツガイ、言い方は色々あるけど、まあ言わせてもらえば

最悪の組み合わせじゃん、それ

別に私に関係ないなら、敵同士がくつつこーがなにしようが関係ない。むしろ問題同士固まってくれてありがとう、関わるなよで済むけど

この展開的に、私になんら被害が及ばないはずがない

どころかむしろ、私にだけ無駄に被害がかかりそうな気がする
……いや、かかる、間違いなく

となればさっさと逃走したいところなんだけど、手錠が邪魔で動けない

なんとかティエンランを動かそうとガシツと肩をつかんだ瞬間

ものすごく思い固まりに激突された

……ちょっとコラ、お腹打ったんだけど

「あ、オイ魔「シェイド様に気安くさわるんじゃないわよこの泥棒猫……!」

あーっと、なんだかお約束なセリフが聞こえましたよ?

しかもなに、泥棒猫? 私がティエンランに手え出すって?

笑わせんじゃないわよ、っていうか冗談じゃない!

んがしかし、思い切り打ちつけた腹部の痛みで、六花はまともに悪態もつけない

普段より口が悪いのはそのせいだ

「ごほっ……っんのアマっ……げほっ」

「ちょよ、六花あんた大丈夫!? (……あーヤバイこれは相当きてるわ)」

がしかし、そんな勘違い満載な現状は、我がままお嬢の誤解だけで進行していく

「こんな小道具まで使って、私からシェイド様を奪おうというの！
？なんて浅ましい女でしょう！これだから魔女は！」

そういうと手錠をはめていないシェイドの左腕にひしりとしがみつくその時はもーなんともいえない感じでひきつってたわ（ゆずり後日談より）

「っいきなり人突き飛ばしておいて勝手なこといわないでくれる！？
だいたい浅ましいとは何よ！私はコイツなんか好きじゃな」しらば
つくれる気！？それじゃあなんで私のシェイド様が貴方なんかと手
錠でっ・・・言うのもおぞましいけれど繋がれるのよ！？」

「んなもんこつちが聞きたいわーっ！不可抗力よ不可抗力！
でなけりや誰がこんな奴と一分一秒でも多くいたいもんですか！！

「！」
「なっ！？それはこつちのセリフだ！！！」

この後シェイドは、この時つい頭に血が上ってしまったことを悔いていた

それはもう光すらささぬ深海の如く、深く

「不可抗力でなかったら、誰がお前なんかと三日も寝食共にするか
！！！！」

「ちよつ、何言つてんのよこの馬鹿！」

六花の叫びは、阿鼻叫喚の周囲の声にかき消されてしまった

「し、寝食つて　　っ！最悪ですわねこの売女！！既成事実を作ってしまったおうだなんてっ不潔ですわよっ」

「え、実は会長命令つていいわけですつちが本命！？やっだーシエイド君てば意外と手え早い？」

「ふざけたこといわないでよゆずり！今のはこの馬鹿の言い間違いで」

「馬鹿とはなんだ馬鹿とは！本当のことだろうが！」

「ちよ、あんたもう頼むから黙つて「許せませんわ白峰六花！どんな凶悪な呪いでシエイド様をかどわかつたんですの！？」

「かど！？違うわよ、単にこれは紫ちゃんが！」

「あーあ、まさか六花に先こされるなんてねえ。にしたっていきなり一線越えようなんて、アンタ意外と大胆だったんだ」

「あんたらしい加減私の話聞きなさいよ！！！！」

師は弟子を千尋の谷に叩き落とす 1 (後書き)

主人公受難の巻(笑) この世界、第一第二とかの世界によって色々時代雰囲気は違いますが、その辺はおいおい出せていけたらと

師は弟子を千尋の谷に叩き落とす 2

食堂の一件から一時間もたたないうちに六花とシェイド、そしてロ
ーズマダー伯爵嬢の三角関係は学園中の人間の知るところとなった
そしてそんな渦中の二人組は、現在真面目？に授業中・・・だが

「・・・・・・・・・・・・・・・・うざいうざいうざいうざいうざいうざい
うざい（以下エンドレス）」

「六花、うるさい」

「だってホントにうざいんだからしょうがないでしょ、パティ。さ
つきからそろいもそろってチラチラチラチラ盗み見してきて！云い
たいことあるんだっいたらはっきり言えつてのよ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・お前らうるさい、静かにしろ」

現在第一回魔女科剣士科合同講義中

三人掛けの長テーブルに陣取った六花、パティ、それにシェイドは
さつきから似たような会話を繰り返していた

「あんたが悪いんでしょうがっ！あの状況で、何で、ああいう、誤
解を招く発言するのよ！」

ほんとに！コイツといると最悪！初対面の時は（まあ私も少しは
悪かったけど）合同授業に出られないし、次会った時は人の気も知
らないで勝手なこと言って、おまけに魔力暴走しちゃうし

その次は対抗戦なんか選ばれて・・・おかげでいつも周りの
目が痛いんですけど

おまけに手錠で繋がれたかと思えば何？泥棒猫？だれがこんな不幸

を呼ぶ空気の全く読めない性悪最悪男好きになるか！
私にだって選ぶ権利ぐらいあるわよ！

しかもなに？あんなところで馬鹿お嬢が騒いでくれたおかげで、さつきから

『将来諦めて玉の輿でも狙ったの？』とか

『何もティエンランもあんな女えらばなくてもなあ？』とか

『前から図々しいとは思ってたけど、まさか人の男寝取るとわねえ』
とか

『一緒に対抗戦選ばれたからってさっそくかよ、頭軽い女』とか

『魔女科の恥が汚点に進化したわね』とか

その他色々色々々々………しかも正面切ってじゃなくて、聞こえるように、でもこっそりと

あることないこと、どころかないことないこと好き勝手いって！しかも何で私が悪い、みたいな流れなの全部

私は全然全く無関係、むしろ被害者なのに！！

っていうかだーれが将来諦めて、よ！こんな奴選ぶ方がよっぽど将来捨ててるわ

あんな女で悪かったわね、どうせ見た目は良くないですよ。でもあんな達にそんなこと言われる筋合いない、むしろ鏡見る

図々しい？魔法駄目でも魔女科にいるのって図々しいの？駄目だから勉強してるんでしょうが、大丈夫だったらいる必要ないじゃん！

頭軽い？すぐにそういう発想に行きつくあなた達の頭の方がよっぽど軽くて下品よ！だいたいそういうセリフは一教科でも私に勝って

から言え！　ほぼ全教科満点

それから最後、なーにが汚点よ！無実の人間を貶す方がよっぽど夕
子わるいじゃない！

ほんとにつ……………全員無実証明した時覚えてなさいよ？

「……………目が据わってるわよ六花」

「……………おい」

珍しく話しかけて？きたシェイドに、何よと言いつ返そうと視線を向
けた瞬間

おっほんとわざとらしい咳ばらい

音の方に視線を向けると、額に青筋を浮かべている教授が一名。詳
しく言えば現在『歴史学』を講義していた剣士科の教授

初老のその教授は学園の古株で、反魔女科主義でも有名だ。現在総
監が魔女にして理事長の愛妻である暁になってから、多少は大人し
くしていたようだが……

これ幸いと言わんばかりに、厭味つたらしい口調で近づいてきた
六花は内心で舌打ちし、パティは興味なさげに視線を教科書……
の上に置いている呪術書に落とした

「仲がいいのは結構だがねえ白峰君、授業中までそういうことをす
るのは流石にいきすぎではないかね？

プライベートならある程度は構わないが授業中は関心しないな・・・
まあ君はプライベートもいささかいきすぎのようだがね」

他二人には目もくれず、まっすぐ六花を見ていった瞬間、六花は彼を『敵』だと認識した

シェイドは当然剣士科の優等生だから無罪、パティは魔女でも優秀で、しかも名門呪術者一族出身

一方六花は学問は優秀でも実技は駄目な落ちこぼれ、その上家柄も普通

・・・逆らわれても痛くない、って生徒だけいびるなんてタチ悪すぎ

しかもこの発言、どう考えたってあの噂真に受けてるよねえ

ひっそりと苛々を募らせている六花に構わず、教授は続ける

「成績優秀な君は私の授業など聞くに及ばず、なのかもしれないが他の2人にはいい迷惑だと考えたことはあるのかね？」

まあその優秀な成績も、本当のところはどうなのかわかったものじゃないが」

揶揄するような言葉に、忍び笑いが上がる

意味を計りかねて隣でシェイドが眉をしかめたが、もはや言われ慣れてしまった六花は飄々としたものだ

反魔女派の教師には絶対に言われるし、魔女科内でも誰が言い出したのか一時期『そういう噂』が広がった

初めこそ一々反発していたが、正しい対処法を覚えた今ではたいて

い聞き流している

が

現在度重なるトラブルと、中傷とで六花はかなりイラついていた
それはもう爆発一歩手前というところまで

そこでこの勘違い発言満載な嫌味だ
柔な堪忍袋はとつくのむかしにブチ切れている

ので

「それはともかく私語の罰だ、今さっき私が説明した『異種族間の
抗争』に関する事件を知る限り説明してもらおうか
とはいえまあ、最低ラインは出させてもらうが………そう
だな、20ではどうだ？」

くっくと口角が上がる

と同時に周りではざわめきが上がった
今までこの授業で出来た事件は10程度、つまり授業の知識だけで
はどうあがいても20には届かない

つまり、普通は絶対解けないのだ

が

「………上等」

堪忍袋の切れた六花は、いろんな意味で普通ではなかった
ガタリと立ち上がり、そりゃあもう満面の笑みを浮かべ、混乱する
シェイドを持ち前の馬鹿力で引きずりながら、教授から立派な表紙
のノートを受け取った

このノートには魔術がかけられており、ノートに記入するのに連動
して各机に設置されている映像投影板に書いたものが表示される仕
組みになっている
これでどこに座っても板書が見えるというわけだ

「知る限り、でいいんですね」

「知る限りの20以上だ、他の諸君は事件をみてそれが正しいかど
うか判断してくれ

間違えていたら容赦なく言ってくれて構わないぞ、間違いを発見し
た者には授業点をやるぞ」

やった、間違えろー、などの歓声とヤジが飛ぶ………ただ
し剣士科からのみ

魔女科がノーリアクションな理由は、このあとすぐに判明した

「……………黙ってる三下共が」

という発言は、手錠のため隣にいぎるをえなかったシェイドにしか
聞こえなかった

そして次の瞬間、六花のペンがものすごい速さで動き出した

どれくらいの早さかというところ……早すぎて手が分裂して見えた
くらいに

□ 12年2月27日 第四世界東部サルザーンにおいて、魔獣研究を目的とした魔女組織 グリーンテッド とケンタウルスの一族による紛争勃発 発端はケンタウルスの生態系を解明するためにグリーンテッドが無差別なケンタウロス捕獲、人体実験を行ったこと。また死骸を野にさらし、彼らに辱めを与えたこと。 円卓の騎士団 及び、魔女長の介入により勃発後3年にして終結。 グリーンテッドメンバーはケンタウロス一族による制裁の儀を受けた上で、常闇の独房での終身刑を言い渡された。 17年8月13日 第一世界南部都市セルヴィアにおいて、騎士・グラナディア子爵率いる剣士団と魔女達による大規模抗争勃発 抗争自体は10日のうちに終息したがセルヴィアは壊滅状態、一般人含め死傷者は173人 発端は騎士団による魔女への暴行 子爵は騎士団を永久追放し、グラナディア家はとり潰された。 また暴行を加えた剣士は第四世界の監獄へ30年投獄、他抗争に参加した者達は20年。 加えて第一世界永久追放とされた。 214年5月30日 第一世界首都軍基地において、魔獣・獣士一団によるクーデター勃発。 各世界の王の介入にまで発展した。 原因は軍内部における天使・剣士との悪質な優遇差。これを基に【階級に基づいての処遇差】が確立。 種族に関わらず階級によって、その処遇は平等とされた。 24年12月23日 同首都軍基地において、再びクーデター勃発。 原因は各種族に対する昇進制度の格差。 昇進制度を明確に定義するとともに、審判会を設置。 各種族代表が一名ずつ審判員の任につく 25年・

わざと数を強調すると、うげえと悲鳴が上がった

すでに6割が初めの13件で諦め、ちよつと根性のある3割が21件で確認作業を放棄し、負けず嫌いの1割が34件目で白旗を上げていた

「い、いやもう結構だ。ここまで調べているとは流石首席だけのことはあるな、うん」

冷汗をダラダラかいて、うって変った愛想笑い……引き攣つてはいるが

これが、魔女科がノーリアクションだった理由だ。六花はある噂により、似たような事態に何度も同遇したことがある

その度に相手が生徒だろうが教師だろうが容赦なく、このように完膚なきまでに打ち負かしているのだ

……まあそのおかげでプライドをズタボロにされた者達が、ここぞとばかりに技能がないことを強調してくるので完全に打ち負かした、というわけにはいかなかったが

ともかく、教授がひとしきり褒め言葉のようなものを口にして、席に戻っていいといった時点で授業終了の鐘が鳴った

「授業中断ありがとう六花。おかげで無駄な時間を過ごさなくてすんだわ」

「いえいえどーいたしましてっ！……あーすっきりした、これもあのタヌキ教授のおかげね」

清々しそうな笑顔と、刺々しい口調にシェイドの顔がひきつった

「お前ら・・・・・・・・・・性悪だな」

二方向から鋭い視線が飛んできたのは言うまでもない

授業も終わって放課後

口論とじゃんけんの末に、図書館に行くことになって長い回廊を渡っていた・・・・・・・・・・んだけど

「やあシェイド、中々面白いことになってるね」

無駄に爽やかな笑顔の人が目の前に立っている

・・・・・・・・・・ティエンランの知り合い？かな

「・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・会えば顔面蒼白で固まる知り合いっているのかは別として

っていうか私コイツがこんな顔してるの初めて見たわ。あのお嬢の時もかなり引き攣ってたけど、今回はその比じゃない

なんか、もう、よくある世界の終りとかいう表現じゃ生ぬるい
地獄で閻魔大王に死刑宣告されたみたいな・・・

「あ、初めまして白峰さん。僕は灰。獣人科の二年でシェイドの大親友だよ」

ニコリと笑って手を差し出す様は、キザったらしいけど全然そんな気がしない
むしろ上品・・・いや、紳士？・・・だとは思っただけど、なーんか引つ掛かるって言うか

「・・・・・・・・・・・・・・・・猫かぶり」

「何か言った？」

あ、了解 腹黒くんね

心の中でうんうん頷きつつ、とりあえず自己紹介するのが筋だよな

「初めまして、もう名前は知ってるみたいだけど、白峰六花

魔女科の2年でティエンランとは偶然同じチームになったというだけの赤の他人です」

「あはは、君なかなか面白いこというよね。赤の他人は手錠で繋がれたりしないと思うんだけど」

含みのある視線だったけど、青い眼には他の連中みたいないな蔑みの色は映っていない

・・・・・・・・たぶん、単純にからかいたいただけなんだろうな、うん

何でわかるかって？

「・・・・・・・・・・・・・・・・不本意ながら親友に1人いるからね！こういうのが！」

「共通の知り合いの陰謀というか策略というか娯楽？で」

「へえ、娯楽ねえ・・・・・・・・なかなか愉快なことを考える人もいるんだね。今度ぜひ会ってみたいな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・逃げようたってそうはいかないよシェイド」

視線の先には、さつきからそくさとこの場を離れようとしていたテイエンラン

「・・・・・・・・・・いや、コイツ私と繋がってんの忘れたの？」

指摘すると一瞬『あ』って顔になって、そのあとまたいつもの仏頂面に戻った

「ただやっぱりバツが悪かったからか、そっぽを向いてるけど・・・・・・・・・・あー、なんたるコイツって」

「あんたって、天才とかいわれてるけどさあ・・・・・・・・・・案外馬鹿よね」

「なっ！？誰が「そうなんだよ、バカもバカ、大バカ」

「っ灰！おま「往生際も悪すぎるし」」

言葉に詰まるテイエンランをみて、ちよつとすつきりした

「・・・・・・・・・・そもそもコイツが紛らわしいこと言うから、あんなことになっただし」

そのくせんみんなコイツにはなーんにもいわないのよね
私にばかりうだうだ言うて！……所詮世の中身分ですか、
そうですか

ふざけんな！

あー、思い出したらまた腹が立ってきた

「白峰さんも大変だね、こんな朴念仁と三日も一緒なんて。もしシ
 Eidが何かやらかしたら遠慮しないでいつでもも言ってるね」

「あ、うん、その時はよろしく」

まあその前に多分私が拳出してるだろうけど」

「オイ」

「あ、大丈夫、大丈夫、コイツ体だけは頑丈だから。遠慮しないで
 やっていいよ？」

「灰！！！！！！」

「なに、別に変なことしなきゃいいんでしょ？それとも何かする予
 定なの？」

またもや言葉につまるティエンラン

なんか、こつ、普段偉そうな奴が追い詰められてると気分いいな

うん、私ティエンランは嫌いだけど灰くんとはそれなりに上手くや
 れそうだよ

「なっ！？別に」

「ムツツリ」

「おい！！！！！！」

「あ、それじゃあ僕はこれで。またね白峰さん」

おー、怒った怒った

でも灰くんは気にした様子もなく、あくまでにごやかに手を振った

「うん、またね」

「お前ら人の話を聞け！」

「その言葉、そっくりそのまま昼のあんたに返すわ」

因果は巡るって本当だったんだ……あれ、ちょっと違う？

に、しても

思い出すのは、別れを告げて一瞬

すれ違う瞬間に囁かれた言葉

『剣士科には気を付けて』

……どういことだろ

まあ確かに、こうなってから剣士科にも絡まれるようになったけど

魔女科とかローズマダーほどじゃないし

「っおい！なにぼさっとしてるんだ！行くんだろ、図書館！」

「言われなくても行くわよっそんな風にいわなくなっただっていいですよ！？」

あ！ちよっとな引っ張らないですよ！」

「お前がぼーっと突っ立ってるのが悪いんだろ！」

「あんたがせつかちすぎるのよ！このムツツリ！」

「なっ！？そ、それは全然関係ないだろ！」

「あ、ムツツリなのは認めるんだ」

「・・・っ！やっぱり性悪だなお前」

「なにをっ！？」

たちまちいつもの口論を再開しながら歩く二人

一見いつもの日常に戻ったようだが・・・

・・・・・・トラブルの神は、まだまだ2人を見はなさない

もし本当に神様というものがいるのなら、よっぽど私をストレス過多で殺したいらしい

……いや、そうとしか思えないでしょこの状況!!!

手錠で繋がれたのは午前だ、それが昼には誇大妄想という名の誤解と一緒に学園中を駆け巡って……

嫌がらせを受け続け、やっと来た放課後。図書館と書いて癒し空間と読む場所で、やっと充電できると思ったら……

現在地：図書館奥の本棚の間

目の前には目に悪い、っていうか腐るからどっか行って、な笑みを浮かべる剣士科が7、8人

うん、いやほんとそんなに集まられると目障りだし邪魔だからどっか行って欲しいな!

でも当然そんな私の気持ちなんて、ミトコンドリアサイズも相手に伝わるわけがなくて

「良い眺めだなあシェイド、まさかお前にそんな趣味があるなんて思わなかったぜ」

なあ、と先頭きっていた紺色の髪の男が振り返ると、下卑た笑みが広がった

.....

またティエンラン関連か！！！！

伯爵令嬢と言い目の前の剣士科といい、ろくな知り合いいないわね
辟易してティエンランに視線をやり.....目を見開いた

今までは絡まれても、あんた当事者でしょ！といたくなるくらい
興味なさそうに、面倒そうに、嫌そうに、他人事みたいな顔してた
のに

「.....カーディナル」

目の前の男だけは違った。ただ嫌い、じゃすまない
そのくらいで、こんな目は出来ない

鋭い視線に一瞬あつちはたじろいだけど、手錠で繋がれた 不自
由な手を見てまた嫌な笑みに戻る

「なんだよ、本当のこといわれたからってダンマリすることないだ
ろ？」

別に責めてるわけじゃないんだぜえオレだって、むしろ喜んでる「
そうでしょうとも、さっきからニヤニヤニヤいやらし笑いが止
まっけないし

正直なところ悪態の一つでもついてやりたい

.....容赦？なにそれおいしいの？な親戚たちのおかげで、

嫌味のレパートリには自信がある

でもなあ なーんか私、蚊帳の外なんだよね 今

とても、とても、とても珍しいことに

そして六花は面倒事に首を突っ込むほど奇特でもなければ、正義感に溢れているわけでもない

正直に言えば……今すぐこの場を立ち去って、本に埋もれたかった

でも

『剣士科には気を付けて』

さっきの灰の言葉が気になる

それに ティエンランが、あそこまで反応したことも

ティエンランは最悪に空気が読めなくて、性格悪くて、それで……いつもどっかで淡泊なやつだった

たとえば誰かと話す時、何かを成す時

上手くはいえないけど……『やってる』だけでそこに感情が付け加してないというか

いつつも会えば喧嘩ばかりだったから気づかなかったけど

だから、そんな淡泊なコイツをここまで反応させるものって何なのか……ちよつと気になった

しかしたとえそうでなくとも、手錠に繋がれていなくても六花はここを離れなかつただろう

確かに六花は正義感に溢れているわけではない
が天敵だろうが一応『コンビ』というものを組んでいる人間が絡ま
れているのを見なかったことにするほど

冷血漢でもないのだ

「っ！お前！自分の立場わかってるのか！！！！？」

ぐいっと引つ張られ、思考に浸っていた六花は我に返って視線を上
げる

逆上した剣士科の一人　リーダー格らしい男　がシェイドに掴
みかかり、その体を容赦なく本棚に叩きつけた

「！？」

口を挟む間もなく、他の連中がシェイドを抑えつける。六花自身も
後ろから羽交い絞めにされた

そのまま掴みかかった男　カーディナルが重厚な本を適当に抜き
出し、ふり上げる

視界にうつつたそれはケースに入っていて、いかな本とはいえそれ
で殴られれば　無傷では済まない

瞬間

反射としかいえない速度で体は動いていた

「良い眺めだなあシェイド、まさかお前にそんな趣味があるなんて思わなかったぜ」

振り返るまでもない、それくらい・・・嫌になるほど、聞き飽きた声だ

俺よりも少し低い背丈、紺青の髪と目
カーディナル・ロ
ウ・ローシェーナ

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・カーディナル」

白峰六花との関係を『馬が合わない』というなら、こいつとは『水と油』

・・・・・・・・それ以上か

嫌い、ではおさまらない

こいつは いや、『こいつら』は

あふれる感情を隠しもせず、目を向けると、一瞬ひるんで・・・
邪魔な手錠を見てまた嗤う
ちっ、来るだろうとは思ってたがまさかこころはな

人目は気にしない、ってことか？

「なんだよ、本当のこといわれたからってダンマリすることないだろ？」

別に責めてるわけじゃないんだぜえオレだって、むしろ喜んでる」

下卑た笑み

目が腐るな、これならまだ灰のエセくさい笑顔の方がマシだ・・・

・・・比べたら怒るだろうが

「顔が良いからなあお前、いいよってくる女なんてたくさんいるだろ？なのに浮いた話、どこるか婚約者だってまともに相手してないそのくせ男とはいつでもどこでも一緒だ。変な趣味でも出来たんじやないかって心配してたんだぜ？」

いかにも芝居くさい（いや、芝居にしたって大根か）仕草で言うと周りの連中がそろってニヤニヤ笑いだす

血の繋がりを疑うくらい 全員そろいも揃って似たような、気色の悪い顔だ

しかもなんだ、変な趣味って

・・・冗談じゃない、冗談だったってこんなもの灰の耳に入ってみる

まず間違いなく、やられる

しかも一瞬で済むとかそんな生易しいものじゃなく、じっくりじわじわネチネチいたぶって、だ

アイツ・・・サディストだしな

しかもアレだ、言いだしたこいつらだけじゃなく俺まで間違いなくとばっちりが来る

それで何でだって聞いたら、笑顔で、すっぱり、こういうんだ

『八つ当たり』

「っおい、何とか言えよ！……それとも、実はホントにそういう趣味か？」

一人が嗤うと他の連中も口々に騒ぎだす

「剣士科の優等生、天才サマがねえ！」

「まっさか男色家とはなあ」

「しかも相手はあの 出来そこない だろ？報われねえなあシエイド！」

「……黙れ、馬鹿共」

シエイドが睨みつけると、一気に場の空気が変わった。顔からは笑みが消え、凶悪な光が目の奥に宿る
しかしそれはシエイドも同じことだった

灰は、性格は破綻してるし、性悪で腹黒で、ドがつくサディストで……趣味も最悪だ

それでも

アイツは俺をすくいあげてくれた

絶望も希望も理想も恐怖も夢も現実も全部を亡くして

無になったあの日

それに俺は知っている

他人を皮肉って貶めるその口で、それ以上に自分を侮蔑し嗤っているのを知っている

サディストのくせに自虐に走る、その原因も

アイツにそうさせている連中も

だから気に入らない

ソイツらを思い出させるこいつらは気に入らない

それに俺にとつても鬱陶しく、煩わしく、邪魔で殴っても良心など微塵だつて痛まない相手
もつといえれば目障りだ

考えれば考えるほどムカついてきた
もし手錠付きでなければ・・・いや、付いていたって遅かれ早かれ手が出ただろう

シェイド・ラ・ティエンランは短気だ

ついでに良くも悪くも正直だ、彼の親友に言わせれば頭にバカを付けてもいい正直っぷりだ

だから件の親友に増やされた悪態の知識を遺憾なく発揮し

その上で

「出来そこないはお前だろ。侯爵家の名が泣くぞ」

空気が最大級に読めない男は、遠慮もなにもなく相手が最も厭う言葉
を口にした

嫌いでは済まない相手だ 皮肉を口にするのに迷いもない

一瞬 すべてが凍った

そしてそれはすぐさま融解する

「っ！お前！自分の立場わかってるのか！！！」

激昂したカーディナルに本棚に押し付け、いや叩きつけられてもシ
エイドは顔色一つ変えなかった

それが余計にカーディナルの神経を波立たせ 彼は悪辣な笑み
を浮かべた

続く言葉は容易に想像できる

何度も何度も言われてきたことだ

シエイドは 本人も無意識のうちに その瞳を無機質に変えた

荒波は刹那の間に静かな湖面へ

全てを無に還して、静かに、ただ流して
そうしなければ

しかしその言葉が出る前に、両手を抑えつけられる
全てを無に還したために起こったタイムラグ

加えて不自由な片腕が反応を遅らせた

無駄に恰幅の良い取り巻き連中は、いかなシェイドといえどそう簡
単には引き？せない

視界の端を重厚な書物

あるいは凶器の方が正しいか

が

掠める

とにかく流して最悪の事態だけは避けようと身構える

が

「何やってんのよこの馬鹿！！！！！！」

聞き慣れた

それはそれでどうかと思うが

怒声

同時に嬉々とした笑みを浮かべていたカーディナルがのけぞった

しかもものすごい音と共に

ゴン、とかガン、では収まらない……下手したら頭蓋骨変形
したんじゃないか？

状況が掴めず呆然とする取り巻きたちと違って、動体視力も良いシ

エイドはほぼ全てを捉えていた
すっかり存在を忘れていた白峰六花は、まず下方からものすごいス
ピードで脚を突き上げた

魔女は肉弾戦が苦手と聞いたが・・・嘘だったのか

と思わずシェイドが零してしまったほど、あっぱれなクリーンヒット
そしてそのまま・・・シェイドが抗えないほど強い力で抑えつけて
いた連中を引き？がすほどの勢いで前に出た

冗談抜きで腕が抜けるかと思った。とは後日シェイドが漏らした言葉

そのまま数歩前に出て、ほっとしたように息をつく
状況は理解できても感情が追いついていないシェイドは、半ば呆然
と六花を見据えた

ので、振り向いた赤紫の目とバッチリ視線が合う

「・・・・・・・・・・なによ」

剣のこもった声に、自分の眉が顰まったのがわかる

「お前、どういうつもりだよ」

「何が」

なにが『何が』、だ

確かに俺は灰に鈍いだの朴念仁だの言われてるが・・・こんな簡
単な構図が分からないほど鈍くない
危害を加えようとしていた奴をぶっ飛ばして、拘束も全部とっぱら
って

助けられた

「何がじゃないだろ・・・なんで助けたんだよ」

至極当然のことを聞いたつもりだった

もうこの際、普通まずはお礼だろ、なんてツツコミは入れないでください

シエイド・ラ・ティエンラン

間が悪いのと同じくらい、一般

感覚ありません

が、対して六花の反応は

「は？誰がアンタを助けたって？」

そりゃあもう『何勘違いしてんの、ふざけんじゃないわよ』

と、鈍いシエイドにも分かるくらいあからさまに顔に出して、彼女は

「私が助けたのはこの本！」

重厚なそれを大切に、大切に抱えこみ、のたまった

剣士科の男、いや剣士科のバカ野郎何考えてんの!?

振りあげた本を目にした瞬間　　羽交い絞めにする男に全力（肋

骨が数本逝った）で肘鉄を叩きこみ

本を振り上げた男の下顎めがけて蹴りを突き上げた

そのまま片腕に重しが付けられていることも忘れて、飛びだす

ちなみにこの間、脳裏にシェイドのことはミジンコほど残っておらず

ついでに手頸にかかった負担も、ちょっと重い？程度のものだった。

あくまで六花にとっては、だが

そのまま蹴りあげた拍子に手を離れた本をナイスキャッチ

中が折れていないことを確かめて、ほっと息をつき……

やっと繋がれた男のことを思い出し、振りかえった

碧の目と合う　　ティエンランは気に入らないけど、この目だけ

は何か好きだな

と思ったのは一瞬で、不快そうに

　　実際はそうではなかったのだが、そうだと判断できるほど六花とシェイドは付き合いが長くない

加えて普段から喧嘩しっぱなしなため、どうしても負の方向に思考が向いてしまったのだ

歪められた目に、心がささくれだった

有り体に言えば、なんかむかついた

「……………なによ」

自分でもちよつとあれだったかな、と思ってしまつた
そのくらい零れた言葉は刺々しかった

まあそんなささやかな後悔など、シェイドの次の言葉で吹き飛んで
しまつたが

「お前、どういつつもりだよ」

「何が」

いや、ホントに

どういつつもりもこういつつもりも、ねえ？

でもティエンランはそりゃあもう訝しげで、不愉快そうな顔で

「何がじゃないだろ……………なんで助けたんだよ」

……………は？

いやいやいやいや、あんたなにそんな理解できない、みたいな顔し
てんの

理解できないのは私の方だって、みてたでしょ全部

しかも仮にあんたを助けたんだとしたって、その言い方何よ

理解できないのはアンタの方だわ

「は？誰がアンタを助けたって？」

助けたところでこんな横柄な態度とられるんなら、助ける気も失せるわ

まあなんにせよ、こんな不本意な誤解は解いておくに限るよね、うん

「私が助けたのはこの本！」

いって思わず、腕の中の本を抱きしめる

ああもうほんとに、損傷なくてよかった！

本はデリケートなものなんだから、ティエンランの石頭（多分だけど）なんか殴ったらへこんじゃうじゃない

「……本？」

「そうよ！この本！」

いってキツと鋭い視線を向けたのは 未だ痛みでもがくカーディナル

取り巻きたちは恐ろしいほどの力で自分達を引きはがした六花を、化け物でも見るような眼で見ている

しかしそんなことには構わず、続けた

「これがどれだけ貴重な本か分かってるの！？」

治癒系魔術の申し子、天使の右腕とまで言われたレギナス・ライアネアの著書よ！

怒涛の戦線期50年代に、それまでは攻撃魔術重視で進展が遅かった治癒魔術を、飛躍的に発達させたあのレギナス・ライアネス！！！！あまり表に出なかつた彼女が、唯一後世のために残したと言われる治癒魔術の指南書！

今使われてる教科書はぜーんぶこの本が基礎になってる、ってくらい重要な文献！

それを馬鹿達の喧嘩の道具にするですって!？何考えてんのあんた達!頭おかしいんじゃないの!?!?!?

傷がついたり、血で汚れたりしたらどう責任取るつもり!？謝罪や弁償ぐらいじゃあすまないわよ!?!?!」

一息にいきつて、肩で息をする

その様に一同啞然　なにせまさかそんな理由とは思わなかったか

そして、一番最初にその空気を破ったのは

「……………変人だなお前」

ちなみに、その後シェイドが言ったことには

彼的には変人⇨変わっている⇨褒め言葉の方の意味で、のつもりだったとか

がしかしそんなもの、何度も言うが付き合いの浅い六花が悟れるはずもなく

呻くカーディナル、呆然とする取り巻き連中を放っておいて

もう少し続けば『日常茶飯事』、現段階では『よく見る光景』でとどまっている

毎度おなじみ口喧嘩が勃発した

師は弟子を千尋の谷に叩き落とす 3 (後書き)

六花はわりと出来る子です。シエイドは馬鹿と普通の切り替えが極端です

六花とシェイドの口論を止めたのは、近づいてくる足音だった
初めに気づいたのはシェイドで、様子をうかがう様を見て六花も口
を閉じた

そして二人揃って もちろん合わせたのではなく、偶然の一致だ
振り返る

そこには六花が肘鉄、蹴りe t cをかまし、力技で引きずり倒して
転倒した剣士科の山々が

結論は0 , 0001秒で出た

逃げよう

もう面倒事は起こしたくない！

というわけで、意図せずして息ピッタリのタイミングで抜き足差し
足、微妙に早足

未だ呻く山々を放っておいて2人は逃走した

その小さな足音が遠ざかったすぐ後に、本棚からひよこりと顔をの
ぞかせたのは桃山ゆずり

人工的に染めた金髪を揺らして、背後に控えている美女を振り仰いだ

「よかつたんですかー助太刀しなくて。紫さんが出てくればもっと
穩便におさまったのに
わざわざ人払いの結界まではっというて、なぜに傍観？」

しかも六花には超過保護な貴方が

暗にそう言った

ゆずりは六花との付き合いも長い。紫と知り合っただのはこの学園に
入ってからだが、『紫ちゃん』の話は昔から聞いていた

六花にいわせれば『曲者だけど優しいお姉さん』だが、ゆずりが聞
いた限りでは『策略家で超過保護なお姉さん』としか思えない

そんな紫が、六花が絡まれていて助けないのは不自然すぎる

「あの程度なら、六花ちゃんだけでもなんとか出来るわ」

「まああの子は腕力だけならそこの男より強いですから……
で、ホントのところは？」

「わからない？」

少し考えて、首を振った

「愚問ってやつでしたねー、そりゃそうだわ

ここで貴女が出て言ったらまたやり玉に挙げられたでしょうね、六
花が」

ただでさえ親戚っただけで、あの扱いだし

「……でも、そこまで考えて何でわざわざ選んだんで

すか？

そこそこ不出来なゆずりさんにも教えてもらえると嬉しいんですけど」

一瞬よりも短い、刹那の間

紫が 止まった

けれどゆずりはそれに気づかず

刹那の間にそれは艶やかな笑みに塗り変えられる

「そんなにサービスしてあげるつもりはないわ、自分で調べなさいな情報屋なんでしょう？」

「結界ん中入るのがサービスう？ただ単に使える手が欲しかっただけじゃないですかあー」

「あら、心外ね。私面白い後輩なら可愛がるわよ？」

「容赦なくこき使いますけどねー、ってことでコイツらどうやってかたします？」

一発抜きますかー、記憶

さらりと恐ろしいことを口にする、しかもいい笑顔付きで

「記憶操作は面倒よ、こんな連中に使うことないわ……まあ

一度全員気絶させて、その間に怪我でも治して後は

「適当にごまかす、と。怪我してなかったら言いつけたってそんなに効果ないですしねー

……ってだからアタシ呼んだんですかあ？ほんつと策士ですよねえ紫さんって」

「ちやーんと悟ってくれる貴方もなかなかのものだと思うけど？」

交わし合うのは笑みだが、内容はかなり黒い
ともあれいつまでもこうしているわけにもいかず、やれやれと頭を
振って

「んーじゃまさつさと お呼び出し しちゃいますかー」

口角をあげた

とにかくあそこから脱出した後、大急ぎで本借りて（図書館来た意味なくなるし）逃走した
で、これからどうするか

いつもなら寮に帰るんだけど・・・まー男は入っちゃダメだしね
ってちょっと待って、そういえば今日どうなるのよ夜・・・
・いや、うん、それは後で考えよう

中庭のベンチ？・・・いやいや人が多いところは避けたい
どーせまたグチグチいつてくるしね！剣士科とか魔女科とか剣士科
とか魔女科とか魔女科とか

というわけで、駆け込みました
カナリア先生のところへ

「あらまあどうしたの六花さん、新しい遊び？」

うん、なんだろう

今まで悉く、何のプレイだ、とかそういう趣味？、とか一步引かれるような眼で見られてきたから

こういう天然ボケボケ反応されると、すっごく和む

……やば、目から塩辛いものが

ともかく事情を話すと笑って 多分話さなくても 部屋に入れたくれた

部屋というか教員宿舎は社宅に似てる

二階建ての小さな建物（庭付き）がずらーっと並んでいるのだ

その中で、多分見た感じ一番綺麗なのがカナリア先生のところ。綺麗って言うのは建物が新しいとかじゃなくて、庭が整っているってこと

こじんまりとした庭にはハーブや香りの良い花がたくさん植わっていて、どことなく華やかだ

そんな庭が見えるリビングでお茶をいただくと、思わずほっとため息が出た

たとえ隣に天敵ティエンランが並んでいるとしても、それを差し引いてもこの雰囲気は、本当に

「……癒される」

「何で俺まで」

「なによ、じゃああんた他にどこに逃げ込めたっていうの」

言つとアイツは一瞬考えて・・・

「訓練場が「剣士科の群れの真つただ中に魔女放り込む気なのアンタは」

「何か問題あるのか？」

・・・

え、ちよつと誰かコイツに剣士と魔女の歴史一から教えてあげてくれませんか？

いやいやいやいや、いくらお坊ちゃんだからってどうなのこの発言！
いや、むしろお坊ちゃんだからこそおかしい

第二世界の金持ちっていえば十中八九貴族階級

貴族なんて反魔女の代表格じゃない・・・いや、そう考えれば
テイエンラソってなんか妙だよな？

確かに喧嘩はする、喧嘩はするしバカにもしてくるけど・・・
普通の剣士科みたいな、こつ、嫌味ったらしいというか見下してる
感はない、よね

相変わらず私のことは魔女、魔女いつてくるけど

初めは・・・人と分けられてるみたいで嫌だと思つてたけど、そ
ういうのでもないみたいだし

「なんだ？」

「え、いや・・・問題あるに決まってるでしょ、剣士と魔女よ？」

「だからなんだよ？」

「だからって……仲悪いのはあんだって知ってるでしょ？」
「知ってる。でも何もしなければ何もしてこないだろ

しかけてくるにしても、それは自分が愚かなことをしていると気づかない、バカくらいだ

何もしていない人間に絡むなんて、自分の愚かさを大衆にさらして
るみたいなもんだからな

そんな奴まともに相手にしたって仕方がない………って、
なんだよその顔」

「え、いや……ちよつとビックリしちゃって

あーあれよ、目から鱗？」

まさに、ほんとに、そんな感じ

そう言われればそうだが

別にそんな連中、気にすること無かったんだ

……いや、自分ではずっと気にしない、もう慣れたって、思ってた

そう思わないと、やってやれなかったし

それに……まさかコイツがそういう風にいうとは思わなかった

また言われても当然だろ、とか何で言われるかわからない、とかボ
ケかますかと……

「………なあ、魔女。お前なんか失礼なこと考えてないか？」

「え、いやいや別に、考えてない、考えてないよ

にしてもおいしいでしょ、この紅茶！カナリア先生ってば流石！」

うん、自分でもふざけてたと思うわ

まさかこれで誤魔化せるとは

「ああ、確かに」

思わなかったけど誤魔化されちゃうのねアンタは！

いや、別にいいんだけど・・・うん、天敵ながらちよつと行く末が
気になったわ

でもまあそんなの一瞬のこと

その後のことはあんまり覚えていない

日が暮れる前の、温かな西日に誘われた眠気のせいで

無言で、久し振りに美味しい紅茶を楽しんでいると、肩に重みがかか
った

視線を落とすと、魔女が俺の肩を枕にして寝ているのが目に入る

「・・・・・・・・おい」

あんな一瞬で寝るか、普通？というか俺の肩を勝手に使うな
だが呆れる前に、そのワケは知れた

「しーっ・・・悪いけれど肩貸してあげてもらえないかしら？」

人差指を唇にあてて、微笑を浮かべるのは紅茶を用意したカナリアその人

貴婦人・・・というよりは「おばあちゃん」という感じの笑みに、シェイドは六花を揺さぶるのをやめる

顔は不服そうだったが

手にした盆をテーブルに置き、カナリアはシェイドと六花の正面の椅子に腰かけた

「ごめんなさいねえ、六花さんはちょっと一服盛られて寝てるだけだから」

「・・・は？」

ちょっと待て、それはちょっとじゃないだろ！？

しかも盛ったとすれば明らかに、目の前でゆったりと腰かけているカナリア意外におらず

けれどシェイドが何かを口にする前に、カナリア自身からそのワケは知らされた

「六花さん、疲れてたみたいだから・・・ちょっとお休みした方がいいでしょ？」

でも頑張り屋さんで頑固で意固地だから、言っても休まないらしいしねえ

だからちょっと、実力行使しちゃったの」

「はあ」

「……だからって一服盛るか、普通
魔女はよくわからない人間が多いな……そういえば会長もそう
だった」

目の前の教師も、嫌いなタイプじゃない……が、こっぴつ空気は
少し苦手だ

のんびりしすぎている

そうすればするほど、急がなければならぬという思いが強くなって
それでも、時間は早く進むこともなく、ただもどかしいだけの時が
過ぎていく

「落ち着かないみたいねえ、貴方は」

「……そうですか」

「そうですね、今だって早く六花さんを起こして帰りたいって顔
してるわ」

そこまでわかっていて、どうして
わずかに苛立ちが掠めた

けれどそれを見透かしたように、穏やかに、けれど強く

「でもそれじゃあ一服盛った意味がないの」

微笑をたたえたまま、シェイドが次の言葉を紡ぐ前に
それに一瞬気圧されて、しかしそのまま口を噤むことなく

「俺からすれば、過保護に見えますよ。本当に疲れているなら自分から休むでしょう、無理強いしなくても」

それに教師が一人の生徒に入れ込むのもどうかと思いますが」

確かに多少のひいきはなくそうとしても無くせないだろう

でもここまで干渉するのはおかしくないか？肉親でもないのに

しかし応えた教師には悪びれたところは少しもなかった

「あら、過保護はちょっとおおげさねえ。紫さん言うならともかくそれに、そうねえ・・・たしかに教師として一人の生徒に入れ込むのは良くないわ。でもわたしは入れ込んでるつもりはないのよ？」

ただ、経験者から挑戦者への忠告」

「忠告？」

訝しげなシェイドを見て、そっと双眸を細め

「速く走り過ぎると、途中で力尽きてしまうものよ」

僅かにシェイドが反応したのに気がつかなかったのか、それとも気づいていて無視したのか

ただ微笑だけは変えることなく、ゆらぐことなく、たたえたままで

「でも六花さんは速く走らないといけない、速くしないと追いつけない
そう思ってるから絶対立ち止まったり、ゆっくりしたりしない」

「・・・どういう、ことですか」

困惑するシェイドに、それから視線を落して積み上がった本の山に視線を移す

「今日ずっと一緒にいたのよねえ、彼女がなんて言われてるかも知ってる?」

落ちこぼれ

それは魔女達から、あるいは婚約者候補から、幾度も聞いた言葉、自身も口にしたことがある言葉だ

そして今日、違和感を覚えた言葉

「そこから抜け出したくても、なかなか抜け出せなくて、頑張ることをやめられなくて

……頑張るのはとても大事なことで、とても素敵なことだけど頑張り過ぎるとつぶれてしまうから」

でもね

「それでも頑張らずにはいられないのよねえ」

魔女のことを言っているのだとは、わかってるでもそれが

やめろ！そんなに無茶苦茶にやったら

君の方が先に壊れ

る！……！

重なって

「……………それは」

どういうことだ

問う前に、またも微笑みに制された

「それはわたしが言うことじゃないから」

それは……………確かにその通りだ

……………それに、別に俺には関係ない、か

分かっているが、なぜか気になった

……………なんでだ？

訝しげに眉をひそめた

が、どうでもいいと結論付けて疑問は霧散する

「……………でもこのままじゃあ貴方はとても暇よねえ」

「はあ」

いきなり話が飛んだ

……………なんかこのペースは、あれだ。灰に似ている気もする

アイツの方が百倍黒いけどな

「よかつたら少し付き合ってみない？」

微笑みの中に、わずかに子供のような無邪気な笑みを混ぜて
取り出したのは チェスボード

「いや……わかりました、付き合います」

「嬉しいわあ、じゃあ始めましょうか」

断ろうとした瞬間、捨てられた子犬的な目で見られれば断れるわけ
がない

実は確信犯か？

そんなことを考えつつ、結局駒を手にとったシェイドに、あ、と力
ナリアがいったことには

「そういえば、貴方のお名前は何かしら？」

なんか色々、準備が違う気がするぞ
そしてとても珍しいことに、シェイドの考えは的確に的を得ていた
のだった

師は弟子を千尋の谷に叩き落とす 4 (後書き)

六花とシェイドのバツクボーン。まあ諸々あります
次回。色々爆発します。

「……………六花、生気が抜けてるわ」
「……………パティ」

あんたそれは抜けない方がおかしいってもんよ？

昨日はカナリア先生のとこでなんでか知らないうちに寝ちゃってて、起きたら夜でなんか流れて夕飯もごちそうになって

うん、ここまではよかった

さて帰ってお風呂でもいこうかー……………と思ったけど

わたし、女 ティエンラン、男

うん、入れるわけないね

トイレは……………恥を忍んでどうにかしたけど、流石にお風呂は無理、というかお互いに絶対拒否

おまけに女子寮は男子禁制、男子寮も同じく……………いきたいどこで寝ると？

で

「三日間はうちの部屋つかっていいわよ？もちろん二人で」

と笑顔にのたまった紫ちゃん

うん、この状況に追い込んだのは紫ちゃんだけど、一応ありがとう

で、お風呂は？

「一緒に入れば？」

当然これには二人して大ブーイング

珍しいことだけど、当然の反応だと思います、はい

「仲良くなるには裸の付き合いが一番なんだけど」

「笑えない冗談はお願いだからやめて紫ちゃん」

わかってる、冗談よ

とは付け足してくれたけど・・・絶対本気だったよ、あれ

まあそういうわけでお風呂はなんとか免除されたもののベッドまでは許してくれず・・・結局一緒に寝る羽目に

まあ寝付けなかったけどね

「ああ」

「うん、なんかとてつもなく無反応に近いけど、今それがすごくうれしいわパティ」

ええそりやあもう、なんてったって

朝、人目を憚って食堂まで行ったはずなのに、例の伯爵令嬢と一緒に紫ちゃんちを出たのを見られて

また食堂で大騒ぎ 疾風の如く噂が流れて 陰口Verアップ・・・
・・・ふざけんな！

「ああ……焼きたてクロワッサンの味もしなかった」

「味覚障害なら病院行ってきなさい」

「そのくらい滅入ってるっていつてるの」

隣のティエンランにいたっては聞いているのかいないのか

……ていうかちょっと青ざめてる？

「あんた気分でも悪いの？」

ビクウツ

……え、何その反応

「……何か用か」

「や、用っていつか……なんであんた視線そらしてんの？」

「別に」

別にじゃないでしょその反応

顔を覗き込むと左を向き、左を向くと右を向く………だからなんなんだっての!!!!

「……六花、あんた何かしたんじゃないの？」

「覚えがありません、それに何かやってたらコイツだって黙ってないでしょ?」

と視線をやると……ティエンランは思いっきりあからさまにこちらから目をそらしました

「……………」
「……ちょ、あんだ、なんで何もいわないわけ」
「いや、別に……………」

別にじゃないってその反応は！

というか

「ちょっと！ホント私あんに何したの!？」

「べ、別についていてるだろ!!!？」

思わず立ち上がった怒鳴り合う二人を止めたのは

「おっほん!」

咳払いと、教師からの鋭い視線

こうして昨日よりはマシだが決して良くはない始まり方で、手錠生
活二日目が始まった

流石に一日目は往生際悪くあがいていた二人も、二日目には諦めていた
今日と明日さえ我慢すればこの悪夢も終わるのだ。と互いに言い聞かせて

さて人間諦めると思わぬ一步を踏み出すもので

「あ、悪いんだけどその棚の上から二段目の・・・それ、緑の表紙の本とって！」

「・・・これが」

「そうそう、ありがとー」

ちなみにこれ、急に仲良くなったわけではなく

六花の方は

『よく考えれば図体デカイ男手があると助かるんだよね。踏み台いらす？』

シエイドはシエイドで

『剣の練習ができないのはアレだが、コイツ隣にいと宿題ははかどるな。必要な資料全部揃えてくれるから』

と、両者ともに相手を効率よく利用する方法を思いついたようでお互いギヴ&テイク、ということを利用してつつされつつの関係に落ち着いたようだ

ずいぶん後ろ向きだが、それでも進歩したと・・・言えなくもない
だがもちろん、イイコト(?)だけではないわけで

「・・・・・・・・・暇人が多いわね」

次の授業がある演習場へ向かう途中の六花とシェイドの数歩隣に落ちているのは、なんの変哲もない金属製のバケツ（付属品：カエル十数匹）

ちなみに中身だけ変えた悪戯、本日三回目（午前中）

魔女がカエルくらいで驚くかってーの！！！！
と心の中で叫んでさっさとその場から離れる。カエルは放っておけば野に帰るだろうし無視だ無視

「・・・・・・・・どうして」

「空からカエルが、とかいわないでよね。気が抜けるから」

「お前絶対俺のこと馬鹿にしてるだろ！？こんなあからさまな嫌がらせ普通気づくー！」

「あんた普通じゃないもの、私の辞書の中で」

ちなみに六花の辞書の中でシェイドは”世間知らずで空気の読めない、口が悪いくせにヘタレなムカつく天才男”

と記載されている。9割方はアタリだ

ついでにシェイドの中で六花の位置づけは”超がつくほど短気で本
バカ、腹のうちは黒いし冷静さはない怪力魔女”
これもほぼ9割近くアタリ

お互いに人間鑑定眼だけは一人前とっついていい……欠点発見能力だけ取っついていえば、だが

「嫌がらせってわかってるなら聞かないですよ」

まー多分8割くらいはアンタのせいだろうけどね。今朝寮の郵便受け見たら無記名の悪口レターで溢れかえってたから残り2割は……まあ日頃陰で何かいってる連中が便乗、ってところか

慣れてるからどーでもいいけどね、はっ！

「そういうこと言ってるわけじゃない」

「じゃーなんなのよ、そんなことより急がなきゃ授業に遅れるわよ」

「そんなことって」

「そんなことよ、心配しなくてもこれはアンタにじゃなくて十中八九、私宛だから

あっちだってアンタに当てるようなことはしないでしょ。だから問題なし！」

言い捨ててシエイドを半ば引きずるように六花が早足で歩きだす。授業開始まであと5分を切っていた

そればかりが頭に巡って、ただ前だけ向いていた。だから気付かなかった

柳眉をあげた、シェイドに

「授業といつても、出られないものに出てどうするんだよ」
「私皆勤かかっているの、休むわけにはいかないでしょ」

見学でも一応出席は出席だしね

ちなみに私達が今いる演習場は学園の西側にある草地に作られた演習場その1

辺りは魔術で強化した壁が念入りに、何重にも張り巡らされてる
・・・んだけど2、3枚目の壁くらいまではたいていどこかが崩れてる

魔女科や獣人科の演習は・・・まあ失敗すると色々おおごとになるから

手錠でがつちり繋がれた私達は、当然実習の授業は見学
見学席なんてものはないから、一枚目の・・・もう腰より下の高さ
しかない元壁に腰かけて

ちなみに今やっているのは魔女対剣士で『はちまき取り』
5人グループで大将を一人決めて、その人が付けてる鉢巻を奪われ
たら負け

ちなみにこれは魔女なら剣士を、剣士なら魔女を相手にした場合に

どうやって戦うか。の演習

接近・スピード勝負なら断然剣士が有利だけど、遠距離戦なら結果もはれる魔女が有利

お互いの苦手分野を得意とする相手だから、実践練習にはもってこいってわけだ

「……教科書通りなら結界を張って物理的攻撃を遮断
魔術で遠方から相手を狙って遠距離戦に持ち込む、ってとこね」

完全なる独り言、のつもりだったけど意外なところから返事があつた

「それならこちらは短期決戦、誰か一人捕まえて脅せばいい」

声の元 横でつまらなそうに演習を見ているティエンランは、顔と同じくつまらなそうな声で返してきた

そんなの改めてやらなくて分かってる、ってこと？

だからちよつと反論してみたくなつた

「脅したって殺せないのはわかってるから、意味ないんじゃない？」

「演習ならな、現実なら違うだろ」

「相手が味方を見捨てない限りはね、じゃあ捕まえる前に結界を張られたらどうする？」

考え込むかと思つたら、答えはすぐに返ってきた

「魔女の物理遮断結界の欠点は、後方の守りが薄いことだ
持久戦に持ち込んで疲弊し、力が薄くなつたところを狙えば普通の

剣でも破れるだろ

術式発動までのタイムラグを狙えば十分背後には回れる」

少し目を見開いて、けれど間を置かずに六花も返す

「でも大将以外の四人が並んで続けざまに攻撃してきたら？」

略式魔術っていつてね、威力は弱くなるけど詠唱なしでも発動できる力もあるのよ。魔弾っていつてね、炎や氷なんかの塊を発射するの

それを銃みたいに連射されたら流石に避けられないんじゃない？」

そういつとシェイドの注意は完全に六花に向き直り、

「でもそれならお前達はいつまでたつてもこちらに近づけないだろ。

それじゃあなかなか勝負はつかない

威力が弱いなら対魔術用の盾で防ぎつつ逃げれば持ちこたえられる。

あとはじっくり、持久戦に持ち込めばこちらが有利だ

それに平原で勝負するとは限らない、森なんかの視界が悪い場合なら魔術は使いにくいだろ

対象が絞れないのに、下手に障害物が多いところで魔術を使えば危険だ」

「確かに結界と魔術の連用、しかも長期になると負担が大きいかから魔女が不利ね

障害物のあるフィールドでもあなたの言うとおり

でもこつちだつて馬鹿正直にあんた達と同じ土台で勝負はしないわよ？」

シェイドが困惑し、眉をひそめたので六花は軽い優越感を得て、ピント

人差指で天を指した

「魔女にあつて剣士には無いものその一、三次元の移動つまり空よ平原だろうが森だろうが、手が届かない位置にいればそっちは攻撃できないでしょ？」

その間の上から攻撃しちやえば終わり」

「森は飛ぶには不便だろ」

「だったら森の上から攻撃すればいいじゃない」

今度はシェイドが小馬鹿にしたように笑う

「だったらこっちが有利になるだろ。上空からの方が遮蔽物が多い

木陰に潜んでいれば、いずれ降りてこざるは負えない

どうしても敵に近づかなければならないなら、なおさらな」

「残念でした」

だから六花はその2倍、憎たらしいほどいい笑顔を浮かべて

「魔女には使い魔がいるのよ

どこにいてもおかしくはないような小動物や虫、族によっては草花も使える魔女もいる

偵察させれば見えなくてもそっちの居場所は十分にわかるの

座標がわかれば後は魔術でドカン」

「……………」

「どーしたー、もう降参？」

ニヤリと笑う六花に、シェイドは眉間の皺を遙かに深くしてそれから笑い返した

「いや、はなから自分の場所がバレるとわかってるなら逆にそれを利用すればいい

場所がわかれば、といつても見知った場所とは違って初めての場所なら座標は分かっても魔術はけしかけられないだろう

細かな状況がわからなければ、下手をすれば手足となる使い魔を失うだけだ

だったら囷をたてて、魔術を発動させたところで次の魔術を発動させるまでの間に銃で狙い撃てばいい

囷を囲むように四方に布陣していれば、どこかからは見えるだろ。

最新式のライフルなら地上からでも十分狙えるはずだ」

「……………だったら下方に向けて物理結界を敷くわね」

「対結界用の特殊な弾を使えば？」

「その時は」

「……………見学者のお二人、そういうお話は講義のときにしてもらいたいものですね」

ん？

……………

……………

なんだかいつの間にか、みんなの視線がこちらに

担当のライナ先生　　魔女科のすらっとした中年の先生で、主に実技担当。軍隊バリのキビキビした先生で、怒ると背景に落雷が映るほど怖い　　が腰に手を当てて
・・・怒ってるのと笑ってるのと嬉しいのが入り混じった、複雑な顔で見下ろしていらっしやいました

「二人の考察は良くできています、テストなら高得点は間違いなしね」

「あはははは・・・ありがとうございます」
「どうも」

でも今は実技訓練中ですから私語は慎み、見学に集中するように！

最後に軽い　　いつもに比べれば格段に　　雷を落として、演習が再開された

「・・・・・・・・アンタ達、実は仲いいんじゃないの？噂どおり」

パーティの呟きに、否定の言葉が重なった

雑草魂エクスプロージョン 1 (後書き)

色々爆發編。ちょっとだけ進展した、かな？

授業のあと、六花は割と機嫌が良かった

いつもは戦術討論になってもたいてい数回で終わり 下手し
たらわざと発言させてもらえない時さえあったのだ・・・..
なにせ知識がある上に弁が立つものだから、誰相手でも言い負かさ
れるので

だから久しぶりに思う存分討論出来たのは気分が良かった

が

残念ながら彼女の上機嫌が長く続くことはない

意気揚々と（今日はチームでの練習の日なので）演習場に向かって
いた時のこと

「白峰さん」

もう、その声だけで頭は逃げる体制に入っていた
がしかし手錠で繋がれたもう一人が止まってしまったためにそれは
叶わない

ゆっくりと、出来れば聞き間違いであってほしいと願いつつ

振り返り

頭を抱えたくなるのを必死にこらえた

一筋もこぼさずに後ろでキュツと詰められた緑の髪

吊り目気味の黄色い目は真っ直ぐ六花を見つめ、立ち姿は自信に溢れて堂々とした印象を受ける

ウイスタリア・フィ・クローヴァー

貴族の証であるミドルネームを持つ、魔女科では珍しい彼女は真面目実直、完璧主義な魔女科の首席

「……………話す時くらいそれ、どうにかならないのか」

「出来たらとづくにしてるだろ」

不機嫌そうに眉をしかめて指を突き付けられたシェイドはもっともな答えを返したが……………無視

彼女は重度の剣士科嫌いとして有名だった

「あーあの、コイツはまあ……………空気だとも思っ

興味ないことにはとことん興味ない奴だから、別に何聞いても口外はしないだろうし

……………そもそも口外できるほど友達もいなさそうだし」

「オイ！」

怒鳴ったものの、多分私の考えは当たってるはず

だってまだ二日目とはいえ、私が出会ったこいつの友達って灰くんだけだし

クラスメイトとして事務的、というか軽い挨拶くらいはしてる人いたけど友達って感じじゃなかった

ほんとにただのクラスメイト、みたいな（まあそれも数人だったけど）

……ってコイツの考察なんかしてる場合じゃなかったわもうはつきりいつてしまえば私は……クローヴァーさんは苦手だ

でも別に嫌いとかじゃなくて、そう、いうなればアレだ。食べれるけど進んで食べたくはない野菜みたいな

そしてクローヴァーさんの方は私のことが嫌いだ

別にこれは被害者意識過剰とかそういうのじゃない。これだけは絶対に言いきれぬ

なぜなら

「……………随分と仲がよさそうなことだ、噂は本当のようだな」

……………来た

「まあ別に他人の交友関係にとやかくいうつもりはないが」

じゃあ言うな！……って言いたいけど言ったが最後、話が長引くだからここはひたすら忍耐あるのみ

「あまり私達魔女科に迷惑をかけるような行動は控えてくれ。貴方は貴方個人であると同時に魔女科という団体の一員なのだから

貴方一人の行動が私達全体の評価に関わることだって……
(以下略)

……勝手に勘違いしといて人に説教かましてんじゃ

……いやいやいやいや、落ち着いて、落ち着いて私

今日の前にあるのはカボチャ、しゃべる緑のカボチャ
集まれ私の理性！

「……貴方が軽い女だと勘違いされるのは貴方の自業自得だが、私達他の魔女まで勘違いされては困る」

「いや、これは学科混合戦の練習の一環で、チームワークを養うためのものであつて決して趣味とかそんなんじゃないんだけど」

……とはいえ、ここだけは、ここだけは！訂正させてもらうけどね

誰が軽い女だ誰が、うちは代々身持ちが堅いんだから

ホントはもっと言ってやりたいけど、言いだしたらキリないし

「ほう、練習……しかし他のチームや、ましてや貴方のチームの他の誰もそんなことはしていないじゃないか」

「いや、それは私達が要練習と判断されただけで」

「ならばそれは貴方のせいだろうな。練習が足りないならもっと練習しておけばよかつたのだ

それを、そんな強硬手段に出なければならなくなるまで放置しておいた貴方が悪い

……剣士科など称賛するのも腹立たしいが、彼は優秀なのだから

う？おおかた、また貴方が失敗して足でも引つ張っているんだろうが」

・・・・・・・・・・・・・・・・落ち着け自分

「ただでさえ貴方の爆発は剣士科が魔女科を馬鹿にするいいネタになっっているんだ

貴方の能力で見返せ、とまでは期待できないがせめてフェアくらいには持ち込んでくれ

そのくらいなら出来るだろう」

言いたいことはそれだけだ

「・・・・・・・・・・」忠告どうも

よし終わった！良く頑張った私の理性！

「クラス代表として当然のことをしたまてだ。たとえそれが嫌いな人間であっても、私には貴方に関わる義務がある」

・・・・・・・・・・はつきり言ってくれる分、他の奴らより正々堂々と褒めるべき？

カツカツという規則正しい足音が遠ざかるまで見送って

「あー・・・・・・・・ごめんね、付き合わせて。クローヴァーさんかなり剣士科嫌いで、急に合同授業とか入ったからイラついてるんだと思うのよ」

あはは、と笑って振り仰ぐと

見たことないくらい、堅い顔したアイツがいた

あからさまに嫌悪を込めた目に、初めは俺が嫌われているんだろう
と思った

剣士科が魔女科を嫌うように、魔女科もまた剣士科を嫌っているか
らな

・・・・・・・・・・とあってたんだが

「あまり私達魔女科に迷惑をかけるような行動は控えてくれ。貴方は貴方個人であると同時に魔女科という団体の一員なのだから貴方一人の行動が私達全体の評価に関わることだって・・・・・・・・・・
(以下略)」

・・・・・・・・・・どうもそれだけじゃなさそうだな
まあだからって俺が口を出す問題でもないが

「・・・・・・・・・・貴方が軽い女だと勘違いされるのは貴方の自業自得だが、私達他の魔女まで勘違いされては困る」

といつて突然現れた魔女は、俺を睨みつけてきた

ちよつと待て、まさか俺はコイツとただれた関係だとか思われてるのか！？

だが俺が何かを言うよりも白峰が口を開く方が早かった

「いや、これは学科混合戦の練習の一環で、チームワークを養うためのものであつて決して趣味とかそんなんじゃないんだけど」

そりゃあそうだろ

俺も不本意ながら一応パートナーの相手がこんな趣味だったら嫌だぞ

「ほう、練習・・・しかし他のチームや、ましてや貴方のチームの他の誰もそんなことはしていないじゃないか」

・・・他のチームの代表まであんな突拍子もない人でたまるか

「いや、それは私達が要練習と判断されただけで」

「ならばそれは貴方のせいだろうな。練習が足りないならもつと練習しておけばよかったのだ

それを、そんな強硬手段に出なければならなくなるまで放置しておいた貴方が悪い」

言っていることはもつともらしいが・・・言い過ぎじゃないか？

我知らずシェイドは眉をひそめた

いや、それ以上におかしい・・・何が？

況が

この状

確かに要練習だろう、出来ていないし

でもそれは

「……剣士科など称賛するのも腹立たしいが、彼は優秀なのだろう？ おおかた、また貴方が失敗して足でも引っ張っているんだろ
うが」

俺も同じだろう？

魔術の失敗はコイツに責任がある、でも息が合わないのはコイツだけが悪いわけじゃない

俺も悪い

コイツだけ一方的に責められるのはおかしい

そこまで考えて、固まった

そうだ、俺も悪かったんだ

そして俺はそれをわかってた

わかってて、知らないふりをした

コイツが気に入らなかつたとか、気が合わないとか、いいわけして

……馬鹿だな、俺も

これじゃあ灰にバカって言われても言い返せない

気に入らないからって全部相手が悪いことにしてたなんて、子供みたいだ

自分では、もっと大人になつたつもりだったのに

「あー・・・ごめんね、付き合わせて。クローヴァーさんかなり剣士科嫌いで、急に合同授業とか入ったからイラついてるんだと思うのよ」

耳に入るのは軽い笑い声・・・驚いた

浮かぶ言葉はたった一つだ

どうしてだ？

「だからあなたのこと睨んだりしてたけどあんまり気にしない方が・・・どうしてだ？」

少しだけ驚きはらんだ声で、シェイドが言う

「どうして、って・・・何が？」

「さっきあの魔女が言って」

それだけで、なんとなく言いたいことはわかった

「あああれね、うん、クローヴァーさんの言うことももつともだよ
ねえ

私滅多に魔術成功できないし、アンタの足何か引っ張るか！なんて
エラソーにいつたくせに

結局引つ張つちやつてるしさあ。あはは、意地張つちやつて言えなかつたけど、ホントごめん、」
「そうじゃない」

二度目の謝罪は強い声に遮られた

思わず目を見開く六花に、シェイドは気まずいのか、少し眉を下げて

「そうじゃなくて、さっきあの魔女が言ったこと、辛くないのか？」

一瞬、意味が分からなかった

他の人に言われたらすぐわかつたんだろうけど、なにせ相手はテイエンラン

お互い口を開けば憎まれ口……だったはずなんだけど
なんか今のって 気を遣われてる？

「いや、そりゃあグサつときだけど。ホントのことだし」

「でも辛くないわけじゃないんだろ、なのになんで 笑うんだ」

「なんでって」

辛い時に、いつでも辛い顔するわけじゃないでしょ

「？」

言つて、それからすぐ我に返つた

「そ、それにさあさっきのは別にそんな辛い顔するほど辛くないし！クローヴァーさんはホントのこといってるだけだから、むしろそれで被害者面するのはお門違いってどうか」

ティエンランはどうしたのか、怒ったような
悲しいような
それにどこか悲

妙な顔をして、何かを言おうとした

その前に、続ける

「それに別にそんなの慣れてるから気にしないし、私！」

何かを言おうとしたまま、口を半開きにしてるティエンランは・・・
・・・こんな時になんだけど、ちよつと抜けてるように見えて面白
かった

「どうしてだ？」

「・・・またどうして？ですか

好きだねその問い

「どうしてそこまで、慣れなければいけないくらい言われてまで耐
えてるんだ？」

全然、気なんか合わないし、好きでもないくせに
なんでこんなに、コイツは核心をついてくるんだらう

「それは」

でも、この質問だけは

「絶対叶えたい、夢があるから」

笑って答えられるよ

「小さいころからの憧れなの、だから絶対、諦めたくない

だからよ」

って………何言ってるんだろ、私

コイツのことだから、どうせ夢より現実見るよとか返すに

「そうか」

決まってると思ったんだけど………

また私の考えを裏切ってくれましたコイツは

返ってきたのは肯定の言葉、それに

碧の　私の大好きなあの海と同じ、碧の目をゆるやかに細めて　柔らかく

とても穏やかな、その表情の名は

「………うん」

それに一瞬、ホントに一瞬だけ……見惚れてしまったのは
一生の不覚だ

雑草魂エクスポージョン 2 (後書き)

に、20話目にしてやっと打ち解けてきた・・・まあまだ一歩前進、
くらいですが

あと普段笑わない人の笑顔の破壊力は半端ないと思います(笑)

そうか

柔らかい声音　それにすごく、すごく綺麗な　碧の

「つてえええええつ!!!」

跳ね起きた瞬間、そこがここ数日で見なれた紫ちゃんちの寝室だと確認する

あ、なんだ夢か・・・

つて！なんであんな夢見てるの私！

いやいやいやいやだつてだつてだつて・・・・・・ビックリしたから

いつも仏頂面とか怒った顔とかすかした顔とかしか見たこと無かったから

うん、珍しかったから、だから印象残っちゃったんだろう

そう考えると一気に熱やら動悸やらがおさまっていった

落ち着いて、窓の外を見るとまだ少し薄暗い

・・・んー、まだ少し寝れるかな？

二度寝、二度寝

ともう一度横になろうとした時

目が合った

「・・・・・・・・・・んあ」

焦点の合っていないティエンランと・・・・寝ぼけてる？

「え、ええっと・・・・・・・・起こした？」

んだらうね、この状況的に

「あ、あははは、ごめんねちょっと夢見が悪くて「リア」

は？何言ってるのこイツ

と思った瞬間視界が反転した。視線は壁から一気に天井へ抱きかかえるように回されたのは、筋肉がついてしつかりとした

男の子の腕。見えないけどどうも布団の下では技かけるみたい
に足も絡められている様子

・・・・・・・・・・・・・・・・ちよつと待って

混乱する頭で首を左に回すと・・・・心地良さそうに寝息を立てるテ
イエンランの顔が

鼻先が触れそうなほど近くに

「ギヤ

！！！！放せバカアアア！！！！」

三日目 最終日の始まりは絶叫と打撃音から

「あー……なんでシェイドくん、朝からそんなボロボロなわけ？」

「この凶悪犯に殴られたせいだ」

「なっ！よく言うわよ！もとはといえばアンタが悪いんでしょ！？」

人に抱きついておいて何を偉そうに！

頭の中に浮かんだ文句を並べてやろうかと思ったら、私が言うよりテイエンランが口を開く方が先だった

「勝手に人のせいにするな！だいたいお前こそなんなんだ！？昨日といい今日といい、寝起きにしかけてきやがって！」

「はあ！？今日は殴ったけど昨日のことなんか知らないわよ！」

「ふざけるな！人にステップオーバー・トゥホールドやクルック・ヘッドシザーズ、スコープピオンスロックにベアハッグ、極めつけにはステップ・オーバー・トゥ・ホールド・ウィズ・フェイスロックまでかけてきたくせに！」

おかげで俺は昨日一日全身が痛くて仕方がなかったんだぞ！

……え、なにそれ

疑問に答えたのはゆずりだった

「あーらま、見事なプロレス技のオンパレード・・・・・・・・・・は
つはあ、どつりで昨日シエイドくんビクついてたわけだ
どーうせ寝起きにこの子に技かけまくられた、つてとこでしょ？」

え？

視線を移すとティエンランがその通りと大きく頷いたところだった

「・・・・・・・・・・へ？」

「アンタ昔つからたまに寝ぼけると人にプロレス技かけてたのよ？
誰に仕込まれたのかは知らないけど、まー足技手技腰技まで

・・・・・・・・・・ 打撃系ならともかく、寝技ばかり」

・・・・・・・・・・ その含みのある視線は何なのよ

「六花つてば大人しい顔してv」

「誤解を招くような発言はやめい!!!!」

と、そんなこんなでついに最終日

今日さえ乗り切ればこの手錠からは解放される・・・・・・・・・・ ンだけど

一応当初の建前というか目的の、コンビネーションは・・・・・・・・・・

・どうなんだろう

まあ確かにティエンランのことは多少わかったけど、それがいったい戦闘に何の役に立つのか？ってこともあるわけで

最悪の場合また手錠！？なんて思っていた矢先に

事件は起きた

その日は朝から伯爵令嬢の襲撃もなく、クローヴァーさんからの嫌味攻撃もなく、珍しく嫌がらせも軽め（嫌がらせレターに物落ちてくる、行く先々の陰口くらいで）で、割と平和な一日だった
朝に言い争いこそしたけど、まあティエンランとも会話少なく喧嘩もせずに

このまま平穩に終わってくれないかな、なんて

期待した私がバカでした

ええ愚かでしたとも！ただでさえ普段から絡まれやすくして平穩には遠かったのに

……いや、でもまあちょっと遠い？くらいだったか

とにかく普段がそれなのに、こないかにもネタにして下さいな恰好で、その上タチの悪い噂まで流されて、しかもいかにも敵の多そうなティエンランが隣にいて

何も無いはずがなかったのよ

「おい魔女、この間はよくもやってくれたな」

出やがりました、あの時の本を粗末にしようとした最低剣士科野郎共

まあ飽きもせずありきたりなセリフを吐くものだ

しかもそれに追従するように

「貴方また図書館で暴れたんですの？公共施設をなんだと
思っているのかしら

設立に力をつくしたわたくし達に失礼だと思いませんか？」

ダブルアタックか。やりやがりましたよコイツら、手え組みやがった
ティエンランと伯爵令嬢が最悪の組み合わせだと思ってたけど・・・
・・・下には下がいた

ごめんよティエンラン、あんた全然マシだったわ

空気読めないし間が悪いし無神経なところもあるけど
コイツ
ラみたいになチ悪くない

図書館で暴れた、うん確かにその通り、弁解のしようもない
けどねえ！

私は本はもちろん本棚にだって傷一つ付けてないし、背もたれにし
たこともないし、貴重な文献を傷つけようとしたこともない！
だいたいわたくし達がつてなに、わたくし達がつて！

あれを設立したのは久我家を筆頭とする各世界の王様達で、確かに

のか

「もつばれたから、堂々と恩恵に与るつっていうことか？」

「……………」

どういうこと、なんて聞くほど馬鹿じゃない

もう魔女科では何度も何度も言われたことだし、予想の範囲内ってやつね

にしても今回やっぱ伯爵令嬢いるからティエンランは無視っばい？
まーどうでもいいけどね、はっ！

「だんまりなんて、良い身分だな。いつから俺達のことを無視できるほど偉くなっただよ」

無視っていうのは上の人間がやることだぜ

「勘違いするなよ、お前はただ久我家とちよつとしたつながらがあるっただけだ。お前自身にはなんの価値もないんだからな
俺達はわざわざそれを忠告しに来てやったんだ」

……………ちよつと誰かこの思い上がり野郎共殴る許可をください

なんなの？なんなのこのいかにも俺が上だぜ、って態度は

アホらしい

面倒だけどこれ以上関わるのも嫌だから引き返すか……………なんかコイツいると、ティエンランの方も空気悪いし
そう思い、背を向けた六花に投げかけられたのは

「だいたいおかしいと思ったんですわよ、わたくし」

落ちこぼれの貴方が、筆記は学年一位なんて

足が止まった

そんなつもりはなかったのに

「どうした？」

ティエンランにそう聞かれて、別にと答えてそのまま行く
そうしたかったのに

答えることが出来なかった

「いいですわよねえ、公爵家と微細ながらも繋がりのある方は
わたくし達がどんなに努力したって届かないものが簡単に手に入る
んですから」

もう何度だって聞いたことだし、無視してそのまま行けばいい
慣れてる、私はもう慣れた

慣れた、慣れた、慣れた！だからどーってことない！

「卑怯者」

小さな小さな声は、剣士科からでも伯爵令嬢達からでもなく隠れるように、埋もれるようにいた魔女から

聞こえるはずのないそれが、なんでかハッキリ聞こえた

「まったく、何でそんな真似をしてまで魔女科になんかいたいんだかわたくしだったら恥ずかしくて、大きな顔して歩けませんわよ」
「何考えてんだか、さっさと自分の分てももの見極めて諦めればいいのに」

また哄笑

これ以上こんなとこにいたってストレスたまるだけだ

「さっさと行こう、遅くなると学食混むし」

テイエンランが何か言った気がするけど無視だ。悪いけど文句は後で聞くから今は動いて

背に向けて投げかけられる言葉を無視して踵を返す

振り返った先　　遠巻きにしていた野次馬の中に見慣れた顔

ウイスタリア・フィ・クローヴァー

筆記は二位で、実技は一位、文句なしの実力者で優等生

落ちこぼれの私とは正反対の人

剣士科嫌いで、誰よりも魔女科であることに誇りを持っている彼女の顔が

後ろの連中に賛同してるみたいに、見えて

頭をふった

これじゃあ被害者意識過剰なヤツみたいじゃない

嫌になる

そのまま野次馬をつつきつて

「ふざけるな！」

行こうとしたら怒鳴られた

ティエンランに

全員が呆けたような顔になったが、残念ながら六花には見えなかった。無関心主義なシェイドが何か言うとは思わなかったのと、何で自分

に向って怒鳴ったのか理解できず
口を半開きにしたまま、青筋浮かべたシェイドから目が離せなかつたからだ

「な、なんだシェイドいきなり！」

一番先に我に返ったのはカーディナル・ロウ・ローシェンナだったその声で六花もつられて我に返る

「なんなのよいきなり！文句だったら後でちゃんと聞くから」

今は行こう、そう言う前にまた怒鳴られた

「後じゃ遅い！今言わせる！」

「なっ！何でよ、いいじゃない別に！アンタに迷惑かけたのは謝るけど」

続く言葉は鋭い碧に射ぬかれ、途切れた

「はあ？何言ってるんだお前は！そういうことを言ってるんじゃない！」

それから後ろで「人の話を聞け」とか「シェイド様！？」とか言ってる連中を睨みつけ

……見るだけでもちよっと怖かった

固まったあいつらに、さらに指を突き付けて

「あんなこと言わせといて何で黙ってるんだ！いつも俺に言ってる

みたいに怒鳴りつけてやればいいだろ！」

「はあ！？何であんたにそんなこと言われなきゃならないのよ！別にあんたが言われてるんじゃないからいいでしょ！？それにあーいうタイプは一々相手してたら余計に増長してくるのよ！無視するのが一番！慣れてるからそのくらい平気だし！」

「嘘つけ！」

さっきから何なのコイツは！なんで私が嘔吐き呼ばわりされなきゃ

「慣れてなんか、平気なんかじゃないくせに意地張るな！」

「っ！」

咄嗟に、違っつて言い返せなかったのは

「普段の嫌がらせにしたってそうだ！お前全然平気じゃないだろ！慣れてるだあ平気だあ言ってるわりにあんな顔しやがって！中途半端なんだよ！」

コイツの言ってることが当たってるからだ

平気じゃない、平気なわけがない

練習しても練習してもなかなか上手く出来なくて、ならせめて勉強くらいはっつてそう思ったのに

理事長の家と知り合いだから鼻屑されてる

っつて

そんなことしてないっつて言っても、落ちこぼれの私のいうことは誰

も信じてくれなくて

みんなが私は鼻屑されてる　カンニングしてるなんて言いだして

否定しても何にもならないなら、我慢するしかない。勉強し続けて、一番とり続けて、もつと練習して実技も出来るようになって

認めてもらえるまで、我慢するしかない

落ちこぼれの私は人の何倍も努力しないと駄目だから

だから　　でも

「っあんたに何がわかるのよ！」

私の中で確実に何かが焼きキレた

人に言わせれば、それは堪忍袋と言う奴らしい

「私だつてあんなムカつく連中四つに畳んで埋めたいけど、そんなことしたって何も変わらないんだもん！」

口で違うっていつても誰も信じてくれないしっ・・・！何言っただって噂は消えないし、鬱陶しい言いがかりつけられるし！でもこれで逃げたら私負けたみたいで悔しいじゃない！

だったら平気な顔してるしかないでしょ！でも辛くないわけじゃないじゃない！」

支離滅裂だ

でも一度キレた理性を戻せるほど、私の冷静さは残っていなかった

「辛いのがずっと我慢してられるわけじゃない！なのに中途半端

ってなによ中途半端って！

悪かったわねえ！今度からはアンタがお気に留めないようにちゃーんと平気な顔して「だったら我慢することないだろ！」

言われた言葉の意味が分からなかった

……いや違う、頭で理解できなかったんだ

だってこんなこと、よりもよって

「辛いんだろ！腹立つんだろ！だったらなあ」

アンタがそんなこと言ってくるなんて、思わないじゃない

「我慢なんかするな！畳んでやれ！俺が許す！」

雑草魂エクスプロージョン 3 (後書き)

あとがきは活動報告にて

思いがけないシェイドの発言 何せ普段は他人事に路傍の石以下の興味しか抱かない男だ。だからこそ彼の目の前で六花に絡んだわけだが 一様にポカンと口を開けて

「な、何を言ってるんですのシェイド様！」

「おい！なに勝手に許可出してるんだお前！」

などなど、口々に叫んでいたが当の本人たちには全く届いていなかった

「な………」

何言ってるのアンタ、その一言すら言えなかった
だって、だってだってだって

「なんで」

なんでよりもよって、紫ちゃんでもくう兄でもゆずりでもなく
イツが

「なんでだと！？そんなこともわからないのかお前、バカか！？」

って、はあ！？

「だーれが馬鹿よ誰が！」

「お前だ！」

この野郎殴っていい？殴るべきよね！？

「確かにお前は魔女のくせに魔術らしい魔術は駄目過ぎて目も当てられないが」

ふざけんなコンチクシヨ

「その分他の奴らの何倍も努力してるだろ！！！」

握りしめた拳が緩んだ。鏡で見なくてもわかるくらい目を見開いて

「だいたい本当にカンニングしてたなら教授の質問にあれほどの確に答えられるわけがない！」

まともな頭持つてるやつなら普通は気付く！二日一緒にいただけの俺でも気付いたんだ、他の魔女科の連中が気付いていないはずがないだろう！？

それでも、そういうことを言っつてことは、そいつらは気付いていながらお前の努力を無視しているということだ！」

私は何も言えなかった

頭がついていかなかったのと、怒りたいのと嬉しいのがごっちゃになっ

どうしていいかわからなかった

「確かに結果はまだでていない。でも、だからこそ、腐らずに努力し続けられるっていうのは並大抵の覚悟じゃできないことなんだ！」

だって、いつもだって、さっきだってムカつくことばっかり言うのに

「それにお前が身につけた知識は才能でもなんでもない、お前自身が努力で勝ち取ったものだ！お前はそれを誇っていい！それだけの価値があるものだ！」

空気読めないし最悪的に間が悪いくせに

「その誇りを、努力を、くだらない嫉妬ぐらいであの馬鹿共は侮辱した！」

そのことをお前は怒っていいんだ！」

なんでこんな時に、私が一番

「何を気後れしているのか知らないが、お前がお前自身にそれを許せないというなら俺が許す！」

怒れ！お前にはあいつらを畳んでいいだけの権利がある！！！」

いっちばん欲しい言葉をくれるかなあ、この男は

ずっと、ずっと奥底から

湧水のように 溢れ出てくるモノは

怒りじゃない

「……………あ」

それを言葉で紡ごうと、口を開いた時

「お前らしい加減俺達の話を聞け!!!」

「シエイド様あ！わたくしの方を見てくださいな！」

……………あ、すっかり忘れてたわ

意せずしてティエンランと同時に横を向くと、青筋浮かべた自己中坊っちゃん伯爵令嬢

「さつきから聞いていれば偉そうに！よくもバカだかなんだか好き勝手いつてくれたなシエイド！それに魔女！」

「知るか。お前らの下らない話を聞くより、俺が言いたいことを言う方が優先だ」

冷静さを取り戻したのか、いつものムカつく調子でティエンランが言う

……………そうそう、あんたいつもこんな感じだったじゃん

いつものティエンランが戻って、私もちよっと落ち着いた

というかいつもの感じに戻ってきた。そもそもアイツあーいうこと

言えるタイプじゃないのにさ
あんなこというもんだから調子狂っちゃったじゃん

「それに俺は好き勝手いったわけじゃない、当然のことをいったままでだ」

傲慢にも聞こえる言い様も、正論なら反発のしようがない
うぐつと喉を詰まらせたような声を上げるカーディナルに代わって、
今度は伯爵令嬢が身を乗り出すように

「な、なぜそんな落ちこぼれ庇うんですのシェイド様！ま、まさか
その魔女に一服盛られたとか」

や、人聞き悪すぎでしょそれ
毒なら盛るかもしれないけど、我がまま令嬢のいうようなもんコイツに盛るわけない

とつかさつというの効かなさそうだね、コイツ
我が強そうだし

自分がやり玉に挙がったわりに、いやに落ち着いて六花は分析していた

と、リアナの発言で再びつつつとところを見つけたのか、カーディナルが優越感を前面に押し出して
………ただし少しひきつった笑みで

「は、は、お前まさかホントにその魔女と出来てるのか？第二世界の名門、ローシェンナ家の親戚ともあるうお前が！あまり趣味が悪いと、ティエンランの家の名がさらに堕ちることになるぞ！

ああそれとも、その魔女が久我家と親戚筋だからか？まあそれなら

納得もできるが、あまりにあからさまだと浅ましさが目立つぞ、情けない

まあそうでもしないとお前が上にいくなんてのは無理なんだろうが」

「馬鹿通り越して愚かなんじゃないのアンタ」

冷たく切り捨てるような声にカーディナルは一瞬固まり、視線をシエイドから左にずらした

しかし言い放った相手は彼が復活するまで待つ、なんていう良心は持ち合わせておらず

「なんでも自分の定規で測って決めつけるしかできないなんて器の小さい男ね

というか一通りでしか物事みられないなんて視野狭すぎ。親に手え引いてもらわないとすぐ転ぶわよ。赤ちゃんみたいに。能なしもここに極まれり、って宣伝して歩くつもり？」

痛烈な皮肉がカーディナルの脳を殴打した

それでも 名門 のプライドから平然としようとして失敗した顔で、声の主を睨みつける

声の主 六花は飄々としたものだったが

「な、な、お、お前、お前、俺を誰だと」

顔に反して動揺丸出しの声に、微塵の遠慮もせずに吹き出しながら

「ローシエンナ家のお坊ちやま」

あからさまな揶揄に首から順にてっぺんまで朱に染まり、しかし怒声を口にする前に

「赤ん坊の方がコイツよりは利口だろ。少なくとも自分で歩こうとするからな」

またも毒矢がカーディナルにヒットした

「あーアンタもたまには空気読んで物言うのね」

「……………お前って、俺に対して本当に容赦ないな」

「容赦してほしい？」

口角をあげて見上げると、

「冗談だろ」

うーわームカつく！鼻で笑うの三番目に似合うわアンタ
紫ちゃんとかう兄が堂に入ってるけどね

「お、おい！お、お、お前ら俺に向って何を偉そうに！

勘違いするなよ！お前は久我家と親戚っただけで、お前には何の価値もない、俺と同じ立場じゃないんだ！それが」

いつもなら聞き流したんだけどなあ……………なんか今日は調子がおかしいわ

多分ティエンランがあんならしくもないこと言ったから、うん、そうに決まってる。というかそういうことにおこつておこつて！

「あんだなんかと同格にされるなんて、死んでもゴメンだわ」

それに同じことさっきから二回言ってる、痴呆症でも始まったんじゃないの？

「なにをつ！」

「確かに、な」

視線を左にやると、ティエンランがこちらを見下して　ちよっと、
口角を上げた気がするのは

気のせいかな？

「少なくとも、俺やコイツはお前と違って集団で家名を使わなきゃ喧嘩も売れない腰ぬけとは違う

お前と同じ土台に落とされるなんて侮辱もいいところだ」

カーディナルの顔が朱から赤に、そして爆発した

「ふざけるな！魔女もだが、お前も何様のつもりだ！父上が後ろ盾にならなきゃ、お前なんて」

言いかけて、カーディナルは口角を上げた

歪んだ優越感が端から零れ、悪辣な笑みが深まる

「……………そうだ、お前俺が妬ましいんじゃないか？そうだろうなあ、お前にはもう誇れるだけの「寝言は寝て言え」

遮ったティエンランの声は冷え切っていた

でもそんなの、コイツの眼よりは随分マシだった。見た後で後悔したくらいだ

無

表すならこの一言に尽きる

これなら、いつもの不機嫌面の方がまだマシだと思った

アレは 感情 だから

でも今は何も無い 人形みたいな、無

それから既視感

なんで？・・・そういえば、前にもこんなこと

並の上くらいはあるんじゃないかと自負している脳がはじき出したのは、一昨日の図書館

そつだあの時、こんな顔を見た気がする

無関心装って聞き流してた自分が情けない。というよりも、こんな・・・忘れられないような目を忘れていた私は、自分で思ってるよりも相当バカなんじゃないだろうか

「・・・ティエンラン？」

無理矢理絞り出した声は、自分でも驚くくらい小さかった
でもティエンランには聞こえたみたいで、無機質な目だけが動いて・・・視線が合った

初めは、怖いと思った

でもその言葉がしっくりこない
よくわからない感情に眉をひそめた時には、もういつものアイツに
戻っていた

「練習相手にもならないお前を、なんで俺が妬まなくちゃいけない
んだ。馬鹿馬鹿しい」

睨みつけるように、小馬鹿にするように言い捨てた
いつもの、あのムカつくティエンランと同じように

「なっ！どういうことだ！」

お約束的に驚くカーディナルにティエンランはニヤリとも、鼻でも
笑いもしないで

「ついに言語も理解できなくなったのか？お前が俺の相手にもなら
ないくらい弱いといってるんだ」

当たり前のことを当たり前にいうように、淡々と言うものだから

絶句した

私じゃなくて、周りの連中が

人数に対して異常な静寂
しかしそれは長くは続かなかった

「お、俺がっローシエンナ侯爵家の俺が、お、お、お、お前に劣っ
ているだと！よくも、よくもそんなこと！」

全身を怒りで震わせ、しかし周知の事実であるために強く否定することも出来ない

ただし、たとえば自己中坊っちゃん、たとえば伯爵令嬢のように粘着質・・・柔らかく？いえばしつこいタイプは追い詰められると迷惑な悪あがきをするもので

怒りと高すぎるプライドで煮えたぎっている目が、六花を捉え

瞬間、六花的に言わせれば『しょーもないけど自分的には名案を思いついた悪役』の顔が『目の毒だから見たくない、っていうか顔向けしないで、視力が下がる！』な笑みに変わった

マズイ

私の第六感が言ってる、っていうかそんな不確かなものに頼らなくても嫌でもわかる

このままじゃあぜえええええつたいに間違いなく面倒なことになるっ

思うより早く戦略的撤退の姿勢に入る、けど隣の最強に空気の読めない男が動かない！

あんたには危機退避センサーもついてないわけ！？それとも敵前逃亡は考えないタイプ！？

なんて頭の中でいってたって、どうにかなるわけもなく

「…………お前は、口で言っても理解できなさそうだな
だったら俺が直々に格の違いを教えてやった方がいいだろう」

ほらキタ、面倒なことになりそうな前振り！

「お前らと俺達、2対2で模擬戦をするぞ」

お前らって誰のこと？なんてボケたりはしない
無駄だし、この場で好意的にツッコミ入れてくれる奴はいないだろ
うし

………って現実逃避してる場合じゃない。こんな、いかにも企んでます的な面倒な申し出誰が

「いいぞ、いつだ」

受けるかって思ったのは私だけみたいね……

「面倒だから早く済ませろ」

「面倒だったら受けなきゃいいじゃないの！」

私の正論はかんつつつべきに無視された

「この期に及んで偉そうに！明日だ！明日剣士科の第三演習室で待
つていてやる！」

「いいだろう、そっちはお前と誰だ」

良くない、ちつとも良くない

なのに私が何か言う前にティエンランが勝手に話を進めていきやがる

「お前達に合わせてやる………おい、お前、いいな」

視線の先には私を売りやがった……いやいや、情報漏らした、あの子

よく見れば見覚えがある。魔女科の中でも剣士寄り
要するに第二世界出身の子だ

面倒なことに、剣士と魔女の対立だけじゃなく魔女と魔女でも派閥があつて対立したりしてる

……で、第二世界、剣士科よりの貴族派閥魔女に私はものつすごく嫌われてるから

「ええ」

そりゃあもう臨戦態勢バツチりな感じで睨まれましたとも

マズイことに私以外はみんなやる気まんまんなんだから、ストツパーがいない

唯一のストツパーと言つていい私は口が挟めない

「これで負けても魔女がいたからだ、なんて惨めな言い訳は許されないぞ！」

「自分で自分の首を絞めるなんて、器用な奴だな」

テイエンランが皮肉を叩いたすぐ後に、私はやつと口を挟めた

……固まつてた伯爵令嬢がやつと解凍されて、『シェイド様に怪我をさせるつもりですの!?!』なんてローシェンナにかかつていったからだ

「ちよつとアンタ！何勝手に決めてんのよ!?!」

「なにが」

「何がじゃない！アンタだけならともかく、私まで巻き込まないで

よ！」

そりゃあもう挟めなかった分、力いっぱい、言ってやったけど

鼻で笑う一歩手前の顔で、物理的にも精神的にも上から

「自信無いのか？」

………なつて言つて来やがったもんだから

分かつてる。ただの挑発だつて

こんな空気読めない灰くん相手じゃヘタレな男の思うとおりになるなんて冗談じゃない

でも

実は私相当に負けず嫌いで、ついでに目の前の連中みたいなタイプは大嫌いで

戦略的撤退はするけど敵前逃亡はしないんだよね

普段ならこんな面倒事、何言われたつて絶対流す

今さら一つ二つ陰口増えたつて変わらないし、こんなことしてるより図書館で本読む方が有意義だから

でも

ティエンランの笑みが深まる

視線をスライドさせると、伯爵令嬢がローシエンナに文句言いつつ

明らかに私の悪口、しかも九分九厘捏造話を言い立てる
もう内容は言わずもがな、というか言っても仕方ないから省くけど
考えた

テイエンランの思い通りに面倒事に巻き込まれるか、アイツらに後
ろ指さされて面倒事を避けるか

予想外に、天秤は前者に大きく傾いた

「……………冗談でしょ」

全部の思考を数秒で終わらせて、私は不敵に笑って見せた
半分フリだけ。言った今だってこんな面倒事ゴメンだと思ってる
し……………半分だけ

やっぱり今日は変だ、私

でもなんか　嫌じゃない

「話は決まったな。帰る」
「え」

いや、ちょ、まだ時間とか決めてないんじゃない……………って面倒
なわりにのってるなー私
そんなのんびりしたことを考えながら、踵を返し

「あつくそ！逃げるなシエイド！明日、講義が全部終わってからだ！逃げようなんて思っなよ！

！」

今度は誰もお前の代わりになっしてくれないんだからな

え？

思わず立ち止まって振り返る

けど

「な、ちょー！？」

同じように　でも一瞬だけ止まったティエンランは私の手を掴んで、引きずるように、その場から離れた

どついう意味、さっきの

聞こうとして視線をあげて

固まった

無じゃない、さっきみたいに無じゃないけど

じっと前を見据えるアイツは、どこか

悲しそう？怒っ

てる？辛い？憎い？　悔しい？

全部当てはまって、全部当てはまらない

ただ触れちゃいけない

物理的にじゃなくて、触れちゃいけない
うな気がして

全部壊れてしまいそ

合せるように、逃げるように足を速めた

それ以外どうしようもなかった
何も言えなかった、何も出来なかった

行き場のないものをぶつけるみたいに、痛いくらい握られた手を
離すことも

雑草魂エクスポージョン 4 (後書き)

見えているはずなのに見えないことって色々あると思います

とりあえず共同戦線 1

「……………あんだ熱でもあったの？」

無表情固定標準装備の友人が、珍しく眼を見開く様に六花は苦笑した

「ないない……そんなに変？」

「変」

キツパリ言い切ったパーティはぐるっと私とは逆方向を睨みつけた
……さつきからこっそこっそこっそこっそこっそこっチ見てた連
中が途端に黙りこむ

わかりやすすぎるわ、ホント

というか聞かれたくないなら余所で言えばいいのに、アホらしい

無視してそのまま、外に通じる廊下に出る

人通りが少ない方を選んだから、さつきみたいにぶしつけに見られることはなかった……まあ、さつきに比べれば

「まあ、それは自分でも思うわ。らしくないって」

「らしくなさすぎる。あんだ今まで大抵の嫌味は流してたじゃない。特に久我関連のことは、くだらないし取るに足らないってそれがいきなり勝負。どういう風の吹きまわし？」

「どういうっていか……まあ勝負に関しては8割、いや9割はシェイドが勝手に決めたのよ

で、ちよっとその時調子がおかしくて、挑発にのって私も勝負することになっちゃったってわけ」

途端にパティの眉が跳ね上がり、一段低い声で呟く

「シエイド？………あんたいつからあの空気読めない朴念仁男名前呼びするようになったの」

「いや、ツッコミ入れるのそこ？」

「そこ以外にどこに注目するってーのよ！」

背中に強い衝撃。見なくてもわかるけど、一応振り返ると予想通り………どっから聞きつけて来たのか、ニタリと笑うゆずりが背中に貼りついてた

子泣きジジイじゃあるまいし

「……六花、あんたこんな若くてピチピチの乙女捕まえてジジイとはなによ〜ジジイとは！」

罰として呼び捨てになった過程を余すことなく詳細に吐け！

うん、無茶苦茶理論もいいところだよねゆずり！

「というか乙女は吐けなんて言わないと思うよゆずり」

「そもそも乙女じゃないでしょう、アンタは」

六花とパティの言い分を右から左に聞き流し、立ち往生していた廊下から脇の植え込みに2人を引っ張り込む。いわゆる『不良座り』で顔つき合わせて座り込み。

基礎教養部（14歳までの一般教養を受ける機関）の行儀教官が見れば、眉をしかめ雷を落としかねない

が、そんなもの気にするような可愛げのある彼女達ではないことは、皆の知るところという奴だ

「さーて、ここなら耳をダンボにしたデバガメ達にも聞こえないしvさあ！」

なにがさあ！よ、何が

………って、言ってもどうせ無駄なんだろうなー

一応パティに視線をやって助けを求めてみたけど、予想通りスルー
うん、あんたってそういう奴よね

「別に、苗字嫌いだから名前の方がいいっていわれただけ」

「だけ？」

「だけ」

「えー………つままない」

いやつままないって言われたって、それだけなものはそれだけだし

「ごう、もうちよつとさあ……ネタになるようななんかはないの
！？ピンクい空気流れるようなアレとかソレとか！……！」

「ない。ゆずりは恋愛に夢見過ぎ」

なんで名前一つでそこまで妄想できるのよ………恐るべし、（自称）乙女回路

「というかピンクい空気ってなに、ピンクって！私とあの超朴念仁
の間にんな甘ったるい空気は似合わないわ」

私とシェイドがピンクい空気………想像………
したらなんかムズムズしてきた！

なにこのえも言われぬムズムズ感！っーか寒い！寒すぎる！

「……っっていうか何想像してんの私！想像するまでもないでしょんなもん！」

でもゆずりは『枯れてる！あんたの乙女としての回路はどっかいかれてんじやないの！？』なんて言うし

パーティは無視………アンタほんつとに要領いいわよね

っっていうか誰か私の味方はいないのか！

と思つてたら、頭上から賛同が降ってきた………かーなり無意識嫌味入つてたけどね

「それは俺も同感だな」

ここまでで止められない、間の悪い男の知り合いは一人しかいない

「コイツが誰かとそんな雰囲気になっている様なんて気色が悪くて想像できない」

肩越しに見上げると3日間嫌というほど見続けた仏頂面が立っていた………っっていうか

「想像できる相手がいたことの方が驚きだな」

やっぱり

………この超朴念仁、槍玉に上がってるのが自分だつてまったく気づいてないわ

それともまさか自分が、とか思ってるのだろうか。こいつの情操教育どうなつてたのよ

「むしろ私は、あんたが話の内容キツチリ掴めてたことの方が驚きだわ」

見下ろすシェイドがムツとしたように眉を寄せる

「どついう意味だ」

「そのまま。甘ったるい、とかピンクとかいう言葉で意味がわかるとは思わなかったのよ

あんたって信じられないくらいに空気読めないから」

「誰が」

「あんたってさつきから言ってるでしょ？絶望的なくらいに読めないじゃないあんた！

でなきゃ回避できた面倒事もあったのに！あんたのせいでここ三日トラブル率がうなぎ登りなのよ！？」

「それは普段の行いが悪いからだろ。俺のせいじゃない。責任転嫁なんかされても迷惑だ」

「それはこつちのセリフよ！アンタが余計なことさえ言わなきゃあ、あの我俣伯爵令嬢に突つかかられることが……まあ3割は減った！！！」

「あんまりかわらないだろそれ！？それくらい」

「それくらい！？あの我俣ぶりっ子に関して3割は致命的なのよ！ち・め・い・て・き！！！」

あんな歩く公害女しかも話を聞かない我俣権力もちミックスとの関わり要素なんて、0・1リンク（％）でだって減らしたいのよ！」

流石に否定できなかつたからかノンストップの応酬が一瞬止まり、その間隙をするどく突いたものが一人

「はいはいお二人さんそこまで。痴話喧嘩」「じゃない！」「」は後

でゆっくりねっとりやってもらおうとして
ちよーっとゆずりさんの話聞いてくれるかなー？」

珍しくも苦笑を交えてゆずりは二人を制し、それから表情をガラリ
と　いつものいたずらなものに変えて

「シェイドくんはーこの乙女の密談になんの御用かしら？」

乙女の密談ってなによ、乙女のって

茂みで不良座りで顔つき合わせる乙女の密談でどんなよ！

というかあからさまにこっち見てんじゃないわよ、ゆずり！

「おとめ？」

眉をよせて首を傾け疑問顔・・・・・・・・・・ってちよっと待て、あ
んた何を

「どこに乙女がいる」

三方向から一斉に雑草投げつけた
だれかー石持ってきて石！

このボケは一回殴らないと治らないわ

「ゆずりー、あんたまだこの男がピンクい空気出せると思ってる？」
「前言撤回、無理だわぁ。っていつかここまで朴念仁で空気読めないのは致命的！」
顔はAランクだけど性格はCに格下げねー。総合評価変えるべき？
残念」
「はっ」

鼻で笑わせりやシェイドより様になってるわよ、パティ

「……な、なんだお前ら。俺が何した」

「女の子に対して言っちゃいけないこと言ったのよ」

「おんなのこ……」

「……あなたこの期に及んで次は何言うつつもり？」

六花の声と

「規格外だろ」

シェイドの失言がピッタリ重なった

ただ女の子三人組にはバツチリ聞こえていたが

「でさあ、話戻すけど何の用なわけー？」

剣士科のロングコートをバタバタはたいていたシェイドが「あ」と顔を上げる

ついでに上げた拍子に頭に乗った草と土がこぼれた

「お前、もう講義は」

「終わったけど、剣士科はまだあと一つあるでしょ？」

「剣技論だ、俺は免除されている。最後の段取りを確認しようと思っ
つてな」

「あーそついうこと、了解。ごめん、デザートはまた今度ね」

立ち上がると長いスカートをはたいて、気まずいのかさっさと背を
向けたシェイドを追う

ひらりと手を振る六花に、ゆずりは笑って、パティはいつものよう
に手を振り

「……………前言撤回、真面目なところに

+10点!」

「……………バドス」

「どーゆー意味？」

「古語で『あのボケ』」

「……………あんたをそこまで怒らせたシェイドくん、
幸あれと願うことにするわ」

肩をすくめて、ゆずりは神王への祈りの型を切った 形だけ

マールン学園生徒会室は、理事長室の次にいい場所にある
美術館を巨大化させたような校舎の最上階のうち、二番目に日当たりのいい場所がそうだ

「顔がいつもの三割増しで凶悪になってるわよ、紅」

ついでに眺めも良好だ

長身の紅の二倍はあるガラス窓にもたれる彼は、声の主に眉間を更に深めてみせた

表面上は女神の如く微笑み、ゆるく結わえて肩に流した真紅の髪を耳にかけ直す

自然に紅が紫を抱き寄せた 背後の桜と篁は無視で

「止めないのか、相手はあのローシェンナの弟だ。俺が出ればすぐだろう」

「貴方が止めようとしたら、あのカーディナルお坊ちやまが死ぬでしょうね」

当然だといわんばかりに腰の剣を叩いた

「兄弟そろってお前と六花に手を出したんだ、覚悟の上だろう
出来ていなくても殺してやるが」

くつと口角を上げる様は冷酷無慈悲な男そのものだ

そんなもの気にするくらいなら、睦言など囁きはしないが
鼻先が触れるほど、吐息が混じるほど近くで

「あの二人だけじゃないでしょう？殺気はなかったけれど、不機嫌
そうに見ていたじゃない

シエイド・ラ・テイエンラン君を」

「……………アイツは、盲点だった。陰悪だ
つたくせにこの三日で名前呼びになっていたぞ」

「あら、それは上々。私の計画が上手くいったということでしょう
？」

「はっ」

不機嫌そうに口をへの字に曲げる紅に、紫は笑みを深めた

「でも貴方にしては多目に見ている方じゃない？今までならすぐに
虫退治してたのに」

双眸が陰った

ただならぬ気配を感じ、紫も柳眉を上げる

「テイエンランには……………色々ある」

「……………それは、彼が抱える厄介なもののこと？」

紅はふつと表情を緩めて頭を振った

「いや、直接はない。ただ気になっていただけだ」

そのまま顔を近づけた紅は……………結局、思う通りにはやれな

かった

目を丸く見開いた紫が、笑いだしたからだ
笑みをこぼしたわけではなく、愉快そうな、吹き出しそうな顔で

「は、はははは！まさか貴方が男に興味を持つ日が来るなんて！家族とお気に入り以外無視だったのに！」

体を離して、腰を折る勢いだ

珍しすぎる生徒会長の大笑いにも、見て見ぬふり中だった桜と篁まで驚いた様に視線をやる

「な、な、なかなかいい傾向じゃない？貴方が自分から『お気に入』候補を見つけるなんて」

「……………だからって、なんでそこまで大笑いするっ！」

これまた珍しく、声を荒げる紅にまだ腹部を抑えながらも何とか答えた

「嬉しさが笑いになって表れたのよ。気を悪くしたなら謝るわ」

「……………俺は言葉は信じない。行動がすべてだ」

口角をあげ、今度こそ紅は紫に唇を寄せた

ちなみにすでに桜と篁は見て見ぬふり体制に入っていた

「……………うざい、うざいわ視線がうざい！」
「否定はしない」

言いつつも歩みは止めずに、二人はまっすぐに剣士科の群れ（六花曰く）を突き抜ける

まーまだ魔女科みたく陰口叩かれただけかもしれませんがね
女の園の嫌がらせは男の3倍は陰険だし

軽く流し見て、六花は左隣 三日も一緒にいたせいか自然にこの位置になった のシェイドをちらりと見上げた

……………もう、大丈夫、かな

昨日の、無機質な目を思い出して思わず拳を握る

それから強く握られた手の感触を思い出して、顔が熱くなる

い、いやあれには別に深い意味とかないし！
っていうか今はんなこと考えてる場合じゃないし！

とか考えてる間に、もう演習場は目の前
……………まー気が早いことに、十分前に来たのに敵さん
んは取り巻き込みで全員集合

ぶっ飛ばしたいくらいニヤついた笑みで　お決まりの

「よく逃げ出さなかったな、それだけは褒めたやる」

セリフはきそーとか思ったらほんとに言ったわコイツ

「あほか」っていうシェイドのセリフは多分私にしか聞こえなかっただろうけど

「ご託はいらん、さっさと始める。すぐにケリをつける」

「早く終わらせてよね、私読みたい本があるから」

三日間で磨かれたのは、はたして皮肉のタイミングだけか

それとも？

とりあえず共同戦線 1 (後書き)

おちこぼれと天才の反撃編、開始です

とりあえず共同戦線 2

大きな月が空に浮かんでいた

それが外に出なくとも見られるくらい高く長い窓は、常は金糸で刺繍が入った深緑のカーテンで覆われている
今日は邸宅の主の意向で開かれていたが

そしてその肝心の主は

「それからエビとホタテのシーフードサラダ、牛肉のカルパッチョ、デザートはイチゴソースはあとでね？可愛いピンク色が出せたからハート型にしてみたの」

髪と目の色と同じ紫に赤を混ぜたエプロンを着用し、百人中野生の勘が鋭い一人を除いては落とせるだろう魅惑の笑みを浮かべて給仕をしていた

「うわー美味しそう！紫ちゃんの手料理久し振りだなあ〜ってそうじゃなくて！」

いいつつ、それでもスープ用スプーンは携えたまま

「いきなりなんなの紫ちゃん！長期休暇以外は」

「ここには呼ばない約束よね、大事な用事じゃない限り」

エプロンを脱ぎ、普段着の紫が六花の正面に座る。もう一席ある椅子の主はまだ来ていない

学園東部に広がる森 通称 紅蓮の魔女の森

学園設立以前、魔女狩りの時代に紅蓮の魔女と呼ばれたアクラ・クリムソンが死した地といわれる森だ

敵の血で真紅に染まった彼女の肢体と森は、さながら紅蓮の大火のようだったとか

そんないわくありまくりの地のさらに奥 夜な夜な大戦時に不遇の死を遂げた者達の魂がうろついている、とかいわれる地のだ真ん中

開けた場所に建っている邸宅が、六花の現在地だ

何代か前の理事長が逢引用に建てた古めかしい館は、今は紫の婚約者要するに次期騎士王、ひいては理事長にもなる紅の居住地となっている

とすれば芋蔓式に紫や六花も入り浸ることはもはや必定、というやつだった

もつとも六花が出入りしていたのは専門教養部（魔女科など）に入るまでだったが

その理由をわきまえている紫や紅も、有事や長期休暇で学園が無人の時以外は六花を呼ばなかった

今日までは

訝しげに眉を上げる六花に対し、紫はしてやったり、といった笑みを浮かべて。さらりと

「シェイド君と仲良くやったそうじゃない？」

ぶはっ！

空腹を訴える腹をごまかすために含んだ水を、盛大に嘔き出した。
六花はナプキンで乱暴に口元をぬぐい

「やったって……文字変換が怖いよ紫ちゃん」

やるのヤはもちろん、物騒なアレだ

「手錠の効果はあったみたいで嬉しいわ。で」

「発案者でチームのリーダーである私には詳細を事細かに聞く権利があると思うのだけれど？」

「ってことですよ、どうせ」

返事の代わりに笑みを深め、テーブルに片肘をついた

「聡い子は好きよ？」

「要するにとっとと吐けつてことですか？」

「剣士科って都合の悪いことは流れないようになってるのよだから当事者に聞くのが一番正確で、確実」

「大変合理的なご意見ですねー」

棒読みの六花に向けて、紫は手を頬にあてたまま首を傾けた
……これ以上はぐらかしても意味ない、か

諦めてひとつため息をこぼし、くぅ兄早くこーいとちよっただけ恨みもこもった念を送って

つい数刻前のことを話し出した

演習場に入ると、自称見届け人兼審判の取り巻き&お嬢組は脇の見学スペースに寄っていった

なんか伯爵令嬢とかだけじゃなくて、貴族よりの魔女派閥までいたのは多分気のせいじゃない

……仲間ダラダラ連れてこなきゃ見学も出来ないわけ、連中は

「外野が気になるのか？」

気にかけて　　くれるような男、なんて万が一つにも思ってたなかったけどね

だからって仮にもパートナーを鼻で笑うって

空気読めないにもほどがあるわ、ほんと

「ワラワラ鬱陶しい、消えろ。って思ってただけよ。手も出せない有象無象なんか気にするもんですか」

でもまあ、そう言う奴だつて割り切るとそんなに腹も立たなくなつた

うん、ちよつと大人になつたわ、私

「確かに、短気な六花ちゃんにしては大成長」

話の腰を折るのが好きなのは知ってるけどね紫ちゃん
まだ本題にも入ってないし、早くご飯食べたいからツツコミはまた
後で

「でも、なんで割り切る気になったの？」

「……………どうしてピンポイントを突くのがうまいんだ
ろうなあ、紫ちゃんは

「別に、大した理由は」

「大したことない理由でいいから、聞かせて？」

ちよつとばかりし大人になっただけじゃ、紫ちゃんの追撃はかわせま
せん

うん、わかってたよそんなこと！

「私さあ」

視線を落としかけた。でも思い直して前を向く
目線をそらすと、ホントのことからも逸らしてるみたいで嫌だ

「シェイドが嫌いだったのは、図書館で色々あったり、腹立つこと
言われたってのもあるんだけど」

紫ちゃんは、なんとなくわかってるみたいだった
そついう顔してる。でも何も言わない

私が言うのを待っている

「……………アイツが、天才っていわれてるっていうのも、あったんだ」

初めてゆずりからアイツの名前を聞いた時、桜さんから聞いた時意識してからは自然に耳にも入ったアイツの名前の前にある言葉

天才

その言葉が嫌いだった

「アイツにも言われちゃったんだけどね、私、落ちこぼれていわれたり」

言葉に詰まる。この先を言っているのか分からない

だって言ったらきつと

そつと

温かいものが指先に触れた。紫ちゃんの手だ

大丈夫　　そう言ってくれてる

だったら大丈夫だ

「紫ちゃんの家とのこと、無いこと無いこといわれるの、平気なつもりだったの」

紫ちゃんは、駄目なことは駄目っていつてくれるから

だから大丈夫

言っても、大丈夫

「でもホントは全然ダメだった。私のせいじゃないのに、なんでそんなこといわれなきゃいけないのってずっと思ってた……」

でも紫ちゃんのせいでも、誰のせいでもないっていうのも分かってた八つ当たりするのはお門違いだし、私がそんなこといわれなくらいもっともっと頑張ればって」

でも頑張っても駄目で

むしろもっと酷くなって

魔術が駄目なところをみんなが悪く言う
いくら勉強で一番をとっても、どれだけやっても悪く言われて

認めてもらえなくて

「どっかでね、卑屈になってたんだ
頑張ろうって思いながら、頑張っても何にもならないのに何を頑張ればいいのかって

どうせ私は落ちこぼれたから。だから頑張っても、何言われても仕方ない、諦めろって」

震えかける声を抑えて、カラリと笑う

「落ちこぼれてって言われる度怒ってたのにね、いつのまにか自分で自分のこと落ちこぼれて決めつけてたの」

馬鹿だよねえ

紫ちゃんは何も言わない

それが今はとてもとても、優しいことのように思えた

「紫ちゃんとか、くう兄とか、ゆずりも桜さんもパーティも、カナリア先生達もちゃんと見てくれたのに」

ううん、だからこそかもしれない

認めてくれる人がいるから、だからみんなもいつかって期待して

期待した分駄目で

それでも期待することはやめられなくて繰り返して繰り返すたびに小さな諦めが溜まっていった

みんなが認めてくれてた私を、私が自分で認められなかった

「で、勝手に天才ってやつに嫌なイメージ持ってたの
人並みの努力しかないでも、頑張ってる私以上に簡単にこなしちゃう嫌な奴だつて

そんな奴に私の気持ちなんかわかるかーって」

くだらない嫉妬と、くだらない八つ当たりだ
これじゃああの剣士科達のこと悪く言えないよ

苦笑して、あえて明るい声を作る

「しかもさー、シェイドつてばもう私のイメージする嫌な天才野郎そのまま現実にもってきたみたいなのだったから。余計にそれが増長しちゃって

勝手に勘違いして、アンタに何がわかるのよーって勝手に拗ねて

アイツに反発することばかり考えて、力合わせようなんて考えもしなかったの」

嫌いだ、気が合わないっていいわけばかりして

アイツの凄いところを、自分の悪いところを見ようとししないで、ずっと知らないふりしてた

「ほんつとに、バカだよねえ。これじゃシェイドにバカって言われても反論できないわ」

ほんとに

「でも」

引っ張られるように、握られた手

柔らかくはなかった、むしろ硬くてがさついたその手を握って

気づいた

「アイツの手は、すっごく硬かったの」

何度も何度も振らなきゃ出来ないタコ、血が出て固まって、治る前

にまた血が出て消えなかった傷痕

それはとてもとても、頑張っている人の手だった

剣士の知り合いがいるからわかる。ずっと剣をふるってきた人を見てたからわかる

普通にやってるだけじゃあんな手にはならない

学生の、しかもまだ2年の生徒じゃ

人よりずっとずっと頑張らなきゃ、無茶しなきゃならない

「天才っていわれるだけの才能も、あるんだと思う

でもその才能は人よりずっとずっと頑張って開いたものだと思ったんだ

アイツは天才なのかもしれない。でも確実に、努力で一番になった秀才でもあるの

そうだって、やっとわかったの」

声の震えはもう消えていた

そして代わりに心からの笑みを

「その努力は、天才だからとかそんな言葉一つで片づけちゃ駄目なんだってことも

それはちゃんと見て、認められなきゃいけないことだってことも」

分かったその時に、自分の中で溜まっていたものも晴れた気がしたんだ

それに

『その分他の奴らの何倍も努力してるだろ!!!』

『それにお前が身につけた知識は才能でもなんでもない、お前自身が努力で勝ち取ったものだ！お前はそれを誇っていい！それだけの価値があるものだ！』

アイツは、何よりも欲しかった言葉をくれたから

バカだなんだっていいながらも、私のことを認めてくれたから

「そこまでわかって、それを無視するような大馬鹿にはなりたくなかったの」

それに

憑き物が落ちたような笑みに少しだけ苦笑を混ぜて

「で、よく観察してみれば、アイツってば憎まれ口しか叩けない不器用くんで

そのうえ空気読めない朴念仁で偉そうだから4割増しくらいムカついて見える要領悪い奴だから

って思ったらなんか勝手に割り切れた、以上、おしまい！」

最後は早口で

言つ六花自身も憎まれ口を叩いているのは、照れ隠し

・・・とわかっているのは紫だけだが

「そう」

紫が言ったのはそれだけだった
ちよつどその時

「
待たせた」

「紅」

「くう兄！」

見るからに寝起きといっただらしない風体の紅に、六花と紫は視線を交わして笑みを零した

「いいタイミングね紅、これから六花ちゃんに話を聞こうと思つたの」

もちろん貴方も聞くわよね？

回答は無言の着席だ

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・聴衆2倍ですか」

「話す気も上がるでしょう?」

むしろ下がりました

とは口が裂けても言えない、イイ笑顔

もはや観念するしかないようだ

この二人相手じゃ、大人になっても勝てる気がしない・・・
もはや悟りに近い心境で、六花は一つため息をついた

とりあえず共同戦線 2 (後書き)

見えないふりすることもあれば、見えてるつもりになっていることもある

とりあえず共同戦線 3

無言の圧力と有言の圧力とその他諸々で私はあらいざらいしゃべらされた

紫ちゃんとかう兄と最強タッグに迫られて吐かないわけがない
自白剤も魔術も必要なし、美形ドアップは慣れてるつもりだったけどダブルはキツイ

……まあ、細かいことは察してもらってことで

ルールは簡単だった。2対2の時間無制限一本勝負

私と相手の魔女が首にかけたネックレス（ご丁寧にあっちが用意してた）を奪ったら試合終了

ネックレスは男でも取りやすいように、服の外に出しておくこと

それだけだ

……つまり裏を返せば、それさえ守れば
何でもありってことで

伯爵令嬢が見張ってるから、いざって時に外野の取り巻き剣士達
手え出してこないだろうし
そこだけは安心だけだ

「うっわー、もう勝った気満々じゃないあの笑顔」

シエイドが鼻で笑ってみせる

私の独り言に返事したわけじゃなくて、単にアッチをバカにして、なんだろうけど

でもって相手のローシェンナと人の情報売っぱらってくれた魔女さんは、こっちがこんなこと言ってるとは露知らず

二人とも杖も剣も構えちゃって・・・臨戦態勢ばっちり、いつでもかかってこいって感じ？

ふっと息を吐いて、上を見上げた

授業で使うものとは違う、完全個別用の演習場の天井は、もちろん空より低い

それでもざっと見て30テス（約30メートル）はありそうだけど

縦横の幅はそれより一回り広くらいか

・・・・・・・・よく借りられたわよね、演習場いつもいっぱいなのに

ちなみにゆずりに聞いた話だと、上級生に家柄で圧力掛けて譲らせたらしい

こんなくだらないことに使うより、その上級生さんに使われた方が有益だっただろうに

どこの誰だかは知らないけどね

「おい、そつちは準備いいのか？」

審判の言葉に軽くうなづく

見覚えのある取り巻きの他に、見慣れない　しかも友好的な視線を向けてくる　男子がいたから誰かと思ったら、シェイドの友達らしい

驚いたわ。もちろんこいつに、まともそうな友達がいることにね　なんでも明らかに取り巻き審判なんて不公平だから、付き合ってくれたとか

……ほんとにシェイドの友達なのかしらねー、名も知らぬいい人

と、それは今は置いておいて
視線を審判くんから外して、前に向き直る

前衛で構えたシェイドとローシェンナの間は20テスくらい
後ろからでもわかるくらい、お互いに殺気がほとばしっている

空気が冷たい　　こういう緊張感は、けっこう好きだわ

微かに笑みがこぼれた

それと同時に

「始め！」

大音声が冷気を割った

走り出したのは、シエイドの方が五歩分早かった
対してローシエンナは五歩分遅れて走り、シエイドまでもう3テス
つてところで

「やれ！」

命令形で叫び、いきなり横に飛んだ

ほぼ同時に 六花と同じく一歩も動かなかった魔女が咳く

『狩りしもの 狩りしもの いづれ 焔纏いて 屠れ 狩られし
ものを！』

瞬間、生まれたのは炎の塊

獣の姿をしたそれは、左右と正面からまっすぐにシエイドへと向かい

しかし彼の剣先に届くより前に、霧散した

「な!?!」

驚嘆

しかしかまわず進むシエイドを目にし、急いで次を

「鎮座しませ 氷塊の塔 守れ 主が身を！」

進むシェイドを遮るように、天井に届くかと思われる氷の壁が起こる
しかしそれも完全に姿を現す前にかき消える

ただ今度は、その原因を悟ることができたが

「くそっ！」

吐き捨ててカーディナルが横合いからシェイドに突っ込む

攻撃は軽く流されたが、足もとに水の矢が刺さり、結局シェイドは
背後に下がるはめになった

2本、3本

飛び退ってそれらを避け、4本目を避けることには、もうカーディ
ナル達との間は15テスほど開いていた

「どっついうことだ!？」

しかし退いたシェイドより、カーディナルの方が狼狽した声を上げる

「相殺術よ」

答えたのはパートナーたる魔女ではなく、六花だった

「へえ……考えたわね」

感心したような紫の声に、若干得意げに、ただ口では「別に」と言
つて料理を口に運んだ

「だって成功するかどうかわからない魔術使うのって、確実性ないし
……でもこれなら私向きだから、下手になんかするよりはう
まくいくかなーって」

「自分の得意分野をうまく使うのは利口な作戦よ」

微笑み、紫は双眸を細めた

相殺術

詠唱術に対抗すべく生まれた魔術だ

相手の魔術にそれ以上の魔力をぶつけ、かき消す術

言ってしまうえばそれだけだが、簡単なものではない

魔力をぶつけるのは、敵よりも量があればそう難しいことではない
が、魔力がいかにほどかを瞬時に悟るだけの『眼力』は問われ、この
眼力もある程度手慣れなければ備わらない

次に詠唱だ

相殺術では、相手の詠唱をそっくりそのまま逆から詠わなければな
らない

が、詠唱を聞き終わってそれから逆を考えたのでは、防御系ならともかく攻撃系魔術なら遅すぎる

詠唱が始まると同時に魔術を推測するか、もしくは終って刹那の間に逆に読み替えるか

前者は人の倍以上もの魔術の知識を要し、後者は恐ろしく回転する頭を要す

また詠唱を聞き取れなかった場合には出現した魔術で判断せねばならず、みんなが簡単

とはとても出来ないものだった

だから教わっても、ある程度年期を重ねなければ誰も使わない

だが熟練の魔女になってくると、相殺術を使うより魔術で対抗する方が楽なので、滅多に使う者はいない

しかし六花は、この条件をすべてクリアしていた

同学年に嫌われている六花は、魔術の演習相手を他で探すしかない（パティは面倒がって付き合わない）

で、同学年以外で六花が頼れるといえば

叶桜、ただし本人魔科学系のため友人の魔術学専攻者

ちなみに全員無駄に手練で、ついでに無自覚愉快犯が多いため容赦一切なし

カナリア先生、ほわほわ系おばあさん先生

だが若い頃は世界連合軍魔女部隊教官だったりして、微笑みながらハイレベル魔術連発するお方

そして久我紫、最年少紅月レベル魔女で曲者猛者をまとめる生徒会長様

容赦なんて言葉は辞書から削除した女

ツワモノ達と生まれ持つての根性のおかげで、経験値は同世代では飛びぬけている

もちろん眼力だってなかなかのもの

ちなみにこれを言うと本人は

そりゃね、そりゃあね、眼力くらい備わつとかないと死ぬもの、間違いない！

どうでもいい魔術よけて破壊力抜群に当たったら意味ないじゃない！

おかげで本能と危機察知能力と一緒に無駄に磨かれたわ

と、言つて遠い眼をするのだが。まあそれはおいておいて

詠唱の知識はむさぼるように読む本のおかげで当然豊富、ついでに頭の回転も悪くない

それを前述の特訓で磨いて磨いて磨きまくった結果 2年生にして相殺術を使えるようになったというわけだ

ましてや今回、相手の魔女は2年

手は抜かれているとはいえ、魔女科きつての猛者を相手にしている六花にしてみればはつきり言つてやりやすい

もちろん、まだ使える魔術が限られている、ということもあるのだが

「……にしても、ぜひみたかったわねえ。ローシエンナ家次男坊の取り乱すさまを」

紫が意地の悪すぎる笑みを浮かべたところで、話は勝負に戻った

「まさか！落ちこぼれのアンタにあんな高度な術が」

「じゃ、あんたが魔術失敗したの？」

この切り返しに魔女は何事か言おうとしたが、結局黙りこくってしまった

代わりに六花を非難したのは、

「おい六花！お前魔術全部まかせろっていったたる！？」

危うく矢で足を串刺しにされるところだったシェイドだ

責めるようにいえば、当然六花も応じて噛みつく

「消すのは当たると危ないやつっていったでしょ！人の話ちゃんと聞いときなさいよ！」

「あれだつて当たると危ないだろうが！」

「実技じゃ首席で優秀なんでしょアンタ！あのくらい軽くよけなさいさいよ！私でもよけられるわよ、あれは！」

「魔女のくせに身体能力化物並のお前と一緒にするな」
「なにを!？」

しかし言い争いはそう長くは続かない

微かに気配を感じ取って、六花が叫ぶ

『飛翔せよ 数多の鳥 討て 己が翼で ！』

『でさばつがのおてつりとのたまあよせつよしひ!』

今度は魔術が発動されることすらなかった

落ちこぼれと、見下した

家を使って、卑怯なことでもしなければ自分たちと同じ土台にすら立てない弱者と決め付けた

その六花に、自分の魔術をことごとく破られているという事実には呆然とする

その間があれば十分だった

「おい魔女!」

どんな状況でも偉そうな態度を崩さないのは、感心するべきか否かしかし態度と行動と結果はまるで結びつかず

ローシエンナが疾走するシェイドに追いつくより、彼が魔女に辿り着く方が先だった

が

紙一重遅かった

シェイドの指先がとらえたのは舞い上がる黒いローブだけ
それもほんの一瞬のことで、その間に魔女は常人が手の届かないと
ころまで箒で飛び上がっていた

「任せて！」

叫ぶと同時に、ローブについていた飾りに力を込める
すると球形だったそれは瞬きの間に、箒へと姿を変えた

魔女は箒も杖も常はアクセサリーに変えて持ち運んでいるのだ
……でなきゃ身の丈もあるもの二つ抱えて生活なんか出
来ないし

とは六花の言

「悪いけど、コレなら負けないわよ！」

箒に跨った瞬間、急角度で魔女に向かって飛ぶ
弾丸のような、とたとえられる早さだった

ぐんぐん間を詰めて、もう2テスもないかという処で

違和感

感じた瞬間に、目標がいきなり姿を消した
箒を引いて天井近くでなんとか踏みとどまる

「!？」

見下ろすと、六花より20テスは下で魔女がこちらを見上げていた

目が合う

そして

『 発現 』

「なっ!？」

部屋の四方の隅に、光が現れ

立っていられないほどの重圧がかかった

「仕込み!？」

叫んだ時にはもう、10テスほど叩き落とされていた
普通ならここで地面まで一直線

だったが

「きゃあっ!」

がくんと、高みの見物を決め込んでいた魔女がのけぞった

重圧の中、驚くべき力で箒を動かし、間を詰めた六花にロープをひっぱられたのだ

100キロの本棚をもともしない、怪力で

「腐ってんのは頭だけにしときなさいよこのバカ女!!!」

ぐつと腕を振りかぶると、魔女は箒から引きはがされて3テスほども吹っ飛ばされた

咄嗟に魔術で衝撃を緩和したために、大事はなかったが

なかったが

「.....は?」

「な、なんて魔女だアイツは!」

地上に残された男二人は、あまりの 荒業に思わず手を止めた

一方六花は地面まで2テスというところで重圧が収まったため、なんとか体制を戻すことができた
そのまま箒を戻して無事着地する

しかし30テス近くの距離を重圧で押され続けたせいでかなり力を消耗したらしく、がくりと膝をついてしまったが

「なつなにするのよ！危ないじゃない！」

「はあ！？危ないのはそつちでしょ！？しかも仕込みなんか使って！！！！」

ただし言われたら言い返す気力はバツチリ残っていたが

「なによ、仕込み使っちゃ駄目なんてルールはないじゃない！」

「あつたりまえでしょ！仕込みは時間かかるんだから勝負の間にやるなんて誰も思わないじゃない！」

つーかあんた達が明日、なんて猶予つけたのはそのためか！

仕込み魔術

魔石に魔力と術式を取り込み、短い詠唱で発動させる魔術だ
準備に時間がかかるため、普通の模擬戦などでは使用しない。とい
うか出来ない

のだが

「場所までご丁寧に用意したわけだわ！真剣勝負に罷しかけるなんてどーいう神経！？」

「くやしかったらあんた達だってやればよかったのよ！場所は昼休みには伝えただから！」

魔術もへつたくれもなしに怪力だけのされ、呆然としていた魔女だが、気を取り直したのか勝ち誇ったような笑みを向ける

できるわけではないが、という意味合いを込めて

「小細工しかけて有利な舞台にしとかなきゃ勝負もできないような腰抜けと一緒にしないでくれる？」

しかし六花は、その笑みを一撃で斬り捨てる

「あの取り巻き連中はともかく、みんながみんなあなた達みたいな根性無しだなんて思わないでくれる

あなた達と一緒にされたんじゃないじゃあ不愉快だから！」

はっと鼻で笑って、それからドギツイ視線を動かないシェイドに飛ばす

それであまりの出来事 究極の荒業で固まっていたシェイドが解凍された

「っ！」

5秒の間をおいてカーディナルが反応、したが鈍い

間は開くばかり

腰が抜けて動けない魔女は、固まったまま動けなかった

口以外は

『 発現 』

瞬間、駆けるシェイドの足が 立ち上がった六花の体が

止まった

「見極めが甘いのよ！」

明らかな嘲笑がおこり、動きの鈍かったカーディナルが笑みを浮かべて向き直る

「こつちにも仕込み!？」

視線を落とすと六花とシェイドの足もとが青白い光を放っていた
地中に魔石を埋め込んでいたのだ

「甘いんだよお前は！」

指三本分低い位置からシェイドを見上げ、カーディナルは口角を上げた
悠々と横をすり抜け、余裕の笑みで六花を見下ろし、そのまま手を首元に伸ばして

「触るな変態！！！」

振り上げた六花の頭が見事に顎に当たったのけぞり、そのまま背中から派手にすっころんだ

「くくっ」

噛み殺した笑みは、シェイドの友人からだけではなく取り巻きの間からも

「つつるさいぞお前達！」

さっと首まで顔を赤くして叫ぶ

それでもおさまらない怒りをぶつける先は一つだった

赤みの引かない顔を屈辱に震わせ、唾を飛ばして怒鳴り散らす

「せっかく慈悲をかけてやろうと思ったのに！お前達魔女はまた痛い目をみないとわからないようだな！

ローシエンナ家の人間に恥をかかせて！ただで済むと思うなよ！」

腕を振り上げる　剥き身の剣を持って、素手の六花に

「おい！」

シエイドが焦った声をあげ、審判の友人も剣に手をかけ走り出す
だが間に合うはずもなく

それは振り下ろされた

六花の頭部ギリギリまで

刀身を受け止めたのは、純白の金属
表面に細かく文字と紋が刻まれ、頭には紫がかった赤い石、銀色が
かった飾りがしゃらりと音をたてる

間一髪、杖を出現させて真っ向から受け止めたのだ

全員が驚愕で目を見開き、口をぽかんと開けた

六花とシエイド以外は

「魔女が魔術だけだと思ってえ！」

眉を吊り上げ、力任せに押して剣を弾く
カーディナルが一步よろめく

右手でぐるりと杖を回し、つかみ直して一瞬構え

「なめんじゃないわよこのポケナス野郎!!!」

ごおんと、鈍い音が響き

次に傍観者達が見たのは、頭に大きなこぶを作り・・・仰向けで倒れるカーディナルの姿だった

とりあえず共同戦線 3 (後書き)

六花⇨力技 シェイド⇨技巧 スピードは両名ともわりとあります。(六花は筭使用の場合だけ)
魔女だからって魔術しかつかわないわけじゃないんです(笑)少数派ですけど

とりあえず共同戦線 4

「ぶはっ！」

公爵家令嬢とは思えない見事な吹き出しっぷり
せつかく有効活用してる美貌が台無しだよ紫ちゃん

「あ、あはははははははははは！さ、さ、さ、さ、流石は六花ちゃん！そう
来たか！」

まさか杖でぶっ飛ばすとはね！

体をひくひく痙攣させての大笑い

「ちょ、そこまで笑うこと！？こっちも必死だったんだからね！あ
のボケ剣士素手相手に剣向けてきたんだよ！？」

そうだね、という感じのことを笑い声九割で
つていうかもうほとんど笑い声なんだけど紫ちゃん！

視線を移すと 必死で笑い堪えてるんだけどなんかピクピク
して台無しだよくう兄

心づかいとか顔とか顔とか顔とかいろいろと

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・もう！そんなだったら続き話さない

からね!」

「あは、ははは、ごめんごめん。ほら、紅のデザートあげるから許して?」

「……………」

「睨むな睨むな、貴方には私の分をあげるから」

「え、じゃあ紫ちゃんのは?」

「まだ余分に5つあるからいいのよ」

「……………」

ホントに好きだよね、遠まわしなの

くずれるカーディナルを完全に無視し、六花は杖を足もとの地面に突き立てる

瞬間

青白い光が一気に地面から溢れ、一層明るさを増してから消え去った動きを堰きとめていたものが切れて、再びふらりと膝をつく

「なんで！」

魔女の驚愕は長くは続かなかった

はっとして踵を返す、が
自由になったシェイドの方が、
遙かに早かった

咄嗟に詠唱いらずの魔術を放つが、紙一重、否
最小限で回避して真っ直ぐにペンダントに手を伸ばす

が、髪の毛一筋分よけた間で

「!?!」

咄嗟に投げつけられた砂を片手でかばい、一瞬たたらを踏む
その間に魔女はネックレスをシャツの中に押し込み、なおも逃げよ
うと踵を返す

「反則じゃない！」

六花は眉を吊り上げた

さすがに女子のそこはシェイドでは手が出せない
代わりに六花が走り出し、審判が反則を叫ぶ

その直前

魔女が体を半分返した瞬間

「甘い」

鈍い銀が閃き、音もなくシャツの胸元が斬れた

これには被害者の魔女だけでなく、六花含めた全員が目を剥いた
そんな周囲の驚きなどがまうことなく

剣先に沿って何かが煌めき、ちょうど垂直に上がったところで切っ
先から離れて宙に舞う

剣を鞘におさめると同時に、それはシェイドの掌に落ちた

「茶番は終わりだ」

気だるげにいい、審判の友人に向かって投げる
小さなそれを難なく掴み、数少ない彼の友人は破顔して

「容赦ないなあ、お前」

呆然とする聴衆にも見えるように、それを
魔女の胸元にあっ
たはずのネックレスを掲げた

「本当に、好きだね、荒業」

「いや、別に好きなわけじゃないけど」

でもアレが、魔術を破るには（私的に）一番いいやり方だったのよ、
うん

勝負の舞台指定してくる時点で、何かやるだろうってのはわかってた
……伊達にあの性悪共相手にしてきてないしね

で、仕掛けるなら剣士科手間いらすの魔女担当
2年生なら仕掛けられる魔術も限られてくる
例えばあの空中
の魔術、そして足止め用の魔術

空中魔術は飛ばなければ問題ない。足止め用の魔術なら外すのは簡
単だ

「仕掛けられた魔石の核を見極めて、固いアレを破壊出来るだけの力があればね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・どうせ私は怪力ですよ！」

誉めてるのに

内心で紫は笑む。広域に足止めの魔石を仕込むと、それに分散して魔力を送り続けなければならず、かなりの負担になる
それでは他の魔術を放つことが出来ない

だから魔石を大量に仕込む時は一つだけ、核となる魔石を仕込むのだ
その一つに魔力だけを送っていれば、平等に後の魔石に分散される

だから足止め魔術を消すにはその核を破壊すればいい
ただし地中に埋まったそれを見つけるには、かなりの『眼力』が必要だ

だがそれを六花は持っている

きつと・・・

不貞腐れて、紅に頭をぐしゃぐしゃにされている六花をちらりと見上げ

あの魔女を追って空に上がった時に、見極めたのね
空に仕込みがあったのも気づいてたでしょうし

試合前に、空を見上げた時に

……こそりと魔術で覗いて見ていたのは、本人だけの秘密だ

「にしても、六花ちゃんも手加減しないと思ったけど、シェイド君もなかなかね

女の子の服斬るなんて、微塵も容赦ないじゃない」

「いや、アレは単に何にも考えてないだけだと思うけど……」

思えばあの手錠週間（一週もなかったけど）、毎朝苦心して着替えてたのにアイツ全く気にしてなかったし

どこまでも朴念仁ね、ホント

流石にそこまで来ると感服……は、しないな。余計に呆れるだけだわ

「でも良かったわね」

「え、そりゃあまあ連中の鼻っ柱折れたし」

言つと紫ちゃんは笑って

「そうじゃなくて」

一瞬くう兄に眼をやり、真っ直ぐに私を見て

「楽しそうな顔してるから」

私は眼を見開いた。以外、っていうか私、そんな顔してた？
.....まあ、でも

蘇るのは勝ち誇った連中をぶん投げたりぶん殴ったりしたこと
それに一瞬とはいえ 見ほれてしまったアイツの剣

「わりとね」

認めてやるのはまだちょっと悔しいから、誤魔化したけど

「そう」

目の前で笑う紫ちゃんには、ばれてるんだろうな きつと

同時刻 食堂にて

「聞いたよシェイド、おめでとう」

トレー5枚分の料理を持った灰は、席について早々切り出した
夕食時特有の喧騒で、周囲の耳がこちらに向いていないことを確か
め、答える

「……………地獄耳、どこから聞いた」

カーディナルが事実を吹聴するはずがない
言うとしても脚色して俺達がせい手を使ったか紙一重で負けたか、
そういうはずだ

そして事実そうなら……………コイツが珍しく珍しくニコヤカナ
顔してるはずがない

『天才が聞いてあきれね。ハンデがあつたとはいえあの程度に叩
き潰せないなんて
もついい加減失望するのにも飽きてきたよ、そろそろ感心させてく
れない？』

くらはいは言う、間違いなく言う

コイツはそういう奴だ！

「リーアン・フィン・アズーロ、君のとっつっても稀で貴重な友人
が噂流してたから」

なかなかやるね、彼も。ローシェンナが事実隠蔽する前に手を打っ
てみたいだよ？

そのために審判役も買って出たんだろうね

・・・・・・・・・・・・・・・・なんだって俺の周りは、そういう奴ばかりなんだ

思わず突っ伏しそうになったが、真下にあるのがスープだと思いだして顔を上げる

そしてみごとに、ニタリと笑う灰と目が合った

「どうなることかと思ったけど、仲良くやれそうじゃない、白峰さん」と

次いで声をひそめて

「どういう風の吹きまわし？他人のことなんて興味なかったのに・・・・・・・・・・庇ったんだってね。しかもカーディナル・ロウ・ローシエンナから」

どこか棘がある声は、全てを知っている者たる所以だ
眇められた青灰色の眼を真っ直ぐに受け止めて、一瞬瞼を閉じた

転がるバケツに、カエル 悪意ある故意の産物
狙われているわけでもない俺でも辟易するそれを、当の本人は

そんなことよ

その一言で斬って捨てた

行く先々で囁かれる言葉も、生徒だけじゃなく教師からの嫌がらせも何でもないことのように、口癖のように慣れたと行って無視する

それだけ見れば豪胆な女、それで済んだ

でも

『ただでさえ貴方の爆発は剣士科が魔女科を馬鹿にするいいネタになっっているんだ

貴方の能力で見返せ、とまでは期待できないがせめてフェアくらいには持ち込んでくれ

そのくらいなら出来るだろう』

あの魔女に言われた瞬間、確かによぎったのは

堪える顔だ

辛いものを押し込めて押し込めて、堪えようとしている顔

人が見逃してしまうような一瞬でそれを 平然 で塗りつぶし、笑う

笑って、仕方ないと諦めて

無意識に自分を卑下するその行為が、見知った奴のモノに重なった

そしてあの時　カーディナル達が絡んできた時、アイツに振りかけられる悪意の数々に

それ以上に、自分には過剰につつかかってくるくせにあからさまなそれを無視する魔女の

白峰六花の態度に

腹が立って

気がついたら声を上げていた

「別に、ただ気が向いただけだ」

だがそれでは納得いかなかったらしい。重ねて

「それだけじゃ、君の態度が柔らかくなった理由には不十分」

思わず目を見開いた

確かに・・・・・・・・・・アイツの、六花に対する態度は変わった、が

「・・・・・・・・・・そんなに、いうほどだったか？」

「そりゃあもう、前は気に入らないオーラが充満してたのに、一気に無くなってた

驚いたよ。しかもたった一日で

なにかあったんじゃないの、昨日の、夜とかに」

別に、そういうつもりだった

でもその前によみがえったのは、緩やかに笑んだ紫がかった赤い瞳

あの晩、カーディナル達と別れ、久我会長の家での最後の夜

「で、どーせ連中のことだから場所決定権を握ったのをいいことに、色々仕込むに決まってるわだから！そこを利用してあんの余裕こいた顔を（以下略）」

「……………そういえばいつもの10倍は口悪かったな、コイツ思った、口には出さなかったが。なんとなく……………言ったら最期のよような気がした　ちよっとした進歩

「だから後は……………って、聞いている？」

「いや」

言った瞬間拳が飛んだ

防ごうとしたがまだ手錠につながっていたから……………痛い

「なにを」

「あんたがほぼ勝手に買った喧嘩でしょ！？ちゃんと聞きなさいよね！」

さっきから黙りっぱなしだし

呟くような声だったが、容易に拾うことが出来た

「……………そうか？」

言うと六花は一瞬止まって、なぜかいきなり慌てだした

「や、その、別に何か言っただけじゃなくて！聞かれたくない事の十や二十誰にでもあるしってあーっそうじゃなくて！」

「……………大丈夫か？お前。頭がおかしいっつ！？」

即座に拳が飛び出し、それを紙一重　今度はギリギリの意味で避ける

アレは危なかったな。アイツのあの怪力なら、当たったら骨が折れるどころじゃ済まないだろう

「……………いつそ一回生まれ変わってくればよかったのに」
「おい」

それが友人(?)の言葉かお前

非難がましい視線をむけると、何倍も鋭い目つきと胡散臭い笑みが

帰ってきた

・・・・・・・・・・怖いぞ、灰

「一度脳みそ入れ替えてこないと、そのアリエナイ朴念仁ぶりは治らないでしょ？」

「別に、そんなことを言われる理由は」

「あつたの」

いい？

肉をつついていたナイフをピツと立て、出来の悪い生徒に言い含めるように、ゆっくりと

「彼女、白峰さんは、君に気を使ってたんだよ」

思いつきもしなかった

「・・・・・・・・・・思いつきもしなかったって顔だね」

いつもながら、読心術でも持っているのだろうかコイツは

灰は何か言いかけたが「仕方ない、我慢だ僕。相手はこいつ、このバカだし」とかなんとか失礼なことを呟いて

「君の言う挙動不審っぷりで、気付かない方がどうかしてる

カーディナル・ロウ・ローシェンナと会った時に彼女がいたなら、十中八九間違いない

分かってると思うけど、シェイドはアイツと会うと・・・・変になるからね

だから気を使つて、お前があんまり落ちないように、色々しゃべつてくれてたんだよ、きつと」

「ああ」

珍しく納得したような声に、灰は軽く目を見開いた
どんなに噛み砕いて講釈してやつても、さっぱり理解できないのが
シエイドの常なのだ

それがどうやら今回は違つらしく、どこか　すっきりしたような
顔をしている

「いや、ちょ「ちよつとつて何?」「」

気のせいか、お前の使つてるナイフが近付いているような・・・

「何」

「・・・・・・・・気のせいじゃなかった！」

コイツ目がマジだ、というかやる気か?やる気なのかお前!

思わず腰に手をやつて、愛刀が部屋だということを思い出す

くっ!夕食とはいえ、得物を置いてくるとは・・・・・・・・迂闊だったな

「シエイドが迂闊なんていつものことでしょ?」

「人の心を読むな!デリカシーのない奴め」

「君からデリカシーについて云々言われる筋合いはないよ
それより悪あがきはやめて、さっさと吐きな、喰つよ?」

奴の眼は本気だった。瞳孔開きかけてたぞ
シェイド、後日談

「……………別に、お前の好みそうなことじゃないから
な」

言ったが、灰は全く気にとめてもないようで、苦手な笑顔で早く
と促す

これ以上焦らすと文字通り頭から喰われそうなので、とっとと話す
ことにしよう

「……………そうね、そうよね、あんたが相当の朴念仁だもん
ね、気付くわけなかったわ」

私としたことが

……………って、このセリどこかで聞いたような？

わかった、わかった話を進めればいいんだろっ！だから刃物を
こっちに向けるな、灰！

「……………なんだか知らないが、失礼だなお前」

「そのセリフ、熨斗つけてアンタに叩き返すわ！

……………ってどうかそれより作戦！明日のこと相談しなきゃ！せつ
かく勉強時間と睡眠削ってるんだから真面目にしないと張り飛ばす
わよー！」

コイツに張り飛ばされたら洒落にならない

さっきの挙動不審は置いておいて、言うとおりの決めた方がいいだろう
方に一つもあり得ないが、カーディナルに負けたとあってはティエ
ンラン家の名折れだ

「……………それ以前に、兄さんと灰に殺される
いや兄さんは半殺しくらいだろうか

思わず遠い眼をした俺にキツイ視線をぶつけ、ベッド（軽く二人寝
られる）に広げた本……………の隣をバシバシ叩いた

「集・中！

……………たく、確かにあんたは余裕だろうけどねえ、なにせ」

またか、と思った

別に慣れていることだが、言われて気分良くはならない

むしろ嫌っている言葉

なのに、望んでもいないのについてくる言葉

それが出てくると思った

思っていたけど

「あんたはあの坊ちゃんの何十、何百倍も頑張……つてるんだからそり
やあ自信も実力もあるんだらうけど、あーいうのには正攻法が通じ
ないんだから、徹底的にやるにはこっちもしっかり作戦を

・・・テイエンラン？」

訝しげな声に、答えることが出来なかった

天才

この言葉が嫌いだった。この言葉で創られていく、偽物の自分が嫌だった

俺には天から与え得られた才能なんかない
今の力は俺が自分で得たもの

誇れるものだ

だから俺は天才じゃない
あの人や・・・兄さんみたいな天才じゃない

なのに周囲は俺を『天才』にしようとする
必死でやり遂げて『天才だから』で終わらせ、たまに失敗すると
『天才なのに』と嘲笑する

それが嫌だった

『俺』を見ようとせず、ただ『天才』のシェイド・ラ・テイエンラ
ンを見る周囲が鬱陶しかった

「・・・どうしたの？」

コイツも、同じだと思った。俺を天才としか見ないと

でもどこかで期待もしていた

「なんで」

天才と落ちこぼれ 創られている形は、正反対でも どこか似ているコイツならと

少しだけ

「何で、俺が………頑張ってる、なんて」

ああ、と頷き

アイツはなんでもないように、ただ

「手」

手でわかるよ

「剣士の知り合いは多いから、手を握ればどれだけ剣を振ってきたのか
マメで、タコで、傷跡で、その人がどれだけ努力しているか……
わかる、なんて偉そうなことは言えないけど
でもあのローシェンナとあんたじゃ比べるだけ、アンタに失礼だったのは分かる」

あんたのは、人の何倍も頑張ってる奴の手だよ」

険を放っていた、紫がかつた赤い目が、緩んだ
柔らかく弧を描き、綻ぶような笑みを浮かべて

「だからあなたは、アイツよりも強いって思ったの、それだけ」

それだけ

コイツにとってはそれだけ、なんだろう
なんでもないことなんだろう

でも

「 顔、ゆるんでるよ」

からかいを混ぜて、灰が微笑んだ

「でも、良かったね」

「まあな」

「あ、元に戻った………つまらないな、しまりのない顔笑
つてやるうと思ったのに」

「お前、たまには大人しくしていようとは思わないのか」

「僕はいつでも大人しい、無害な男だよ？」

………無害な男は人に刃物は向けないだろう、絶対に
灰が再び肉にナイフを向けたので、話はそこで終わった

「……そういえば、名前のことは聞かれなかったな
呼び方を変えれば、絶対に突っ込まれると思ったが

いや、もちろん突っ込まれないのに良いことはない

それに

聞かれたら、余計なことまで話してしまいそうだしな

「シエイド」

「は？」

どこかが緩みきって、溢れそうになるのを誤魔化すために咄嗟に出
てきたのが、名前だった

「テイエンランと呼ばれるのは、あまり好きじゃない。だからシエ
イドでいい」

だが出まかせを言っているわけでもないのです、そのまま続けた
六花は片眉を吊り上げ、不審そうだったが

「……ま、いつか」

なにか折り合いをつけたらしく

「じゃああなたも、いい加減私のこと、魔女はやめてよね

ちゃん和白峰六花っていう名前があるんだから
「知ってる」

いうと思いきり驚かれ 流石に名前くらい覚えるだろう、失礼な

次いで

「……………じゃ、なんで人のこと魔女だなんだって言った
のよ」

「魔女だろう」

「いやそうだけど、別に魔女を否定してるわけじゃなくて……
まあ、一般的にあんた達、っていうか普通科と違って嫌味で魔女っ
て呼ぶじゃない」

その呼ばれ方は嫌いなもの

「別に」

「あんたがそうじゃないのは、もう知ってる」

でも一応これからパートナーとしてやってくわけだし、明日も力合
わせなきゃいけないのに、魔女はないでしょう魔女は

お互いちゃんと名前があるんだから」

正論だ。しかしそれなら何故

「……………呼んでいいといえば、そう呼んだぞ？」

現に他の先輩方は、ちゃんと名前で呼んでいるだろう

「……………はい？」

「自己紹介の時だ。お前には別に何も言われなかったから、何と呼

んでいいか分からなかったんだ」

沈黙

十秒ほど押し黙って、それから六花が言ったことには

「あなたは、真面目なのか馬鹿なのかわからないわ」

初めは呆れたように

次いで苦笑、そのまま

柔らかく笑んだ

それが妙に目について離れなかった

それだけだ

それでも何故かそのことだけは誰にもいいたくなかった

ただ、それだけのことだ

とりあえず共同戦線 4 (後書き)

ちよつと長いですがきりのいいところがなかったの；

25話もかけやがっ・・・かかりましたが、パートナーとして前進した2人。ちなみに次回はこんかいチラ出したシェイドの友人登場

【番外編】白妙は春の風に舞う（前書き）

今より少し先の時間軸です。ヴァレンタイン&ホワイトデー番外編
読み飛ばしてもなんら問題ありません

【番外編】白妙は春の風に舞う

「……………何だこれ」

「予想はしてたけど、やっぱり知らないのねアンタ」

呆れる、という段階をもうはや通り越してお決まり的にイベント事には関心0、むしろ何それおいしいの？なシェイドに六花は事務的に説明した

「今日は白の日、別名：愛の告白返しの日

赤の日、別名：愛の告白の日の対になってるイベントで、赤の日に赤い花を贈って愛を伝えた人に白いリボンを贈れば告白を受けた、青のリボンを贈ればお断りします、っていうことになるの
たいいてい渡すのは男子の方からね、最近は女子も渡してるみたいだ
けど

元は波乱万丈乗り越えて結婚した初代騎士王と魔王王の話、って説
が有力

ちなみに青のリボンは赤の対称色ってことで、お断りの意味になる
らしいわ」

「白のリボンは？」

「赤い花を贈って愛を伝えた騎士王に、ひと月後の終戦日、魔王
王が白のリボンを贈って答えたってというのがもと

リボンっていうのは魔王の間で結構大切なものだったのよ

昔は、魔王は成人してから夫以外の男性の前では絶対にリボンをと
らなかったの

髪は魔力の源、リボンはそれを制御する役割を持つ、とても大切なものだって言われてたから
だから魔女として命の次に大事な魔力をの源を開放する。それだけ心を許してるってことで愛の告白になるわけ

まあ流石に今ではそんなことないけどね。魔力の源っていうのも半分ガセだし」

肩をすくめると納得したようにシェイドは頷き、それから

「じゃあこの騒ぎはなんだ」

「藍さん企画白の日イベント、別名バカ騒ぎ」

シェイドに負けず劣らず興味なさそうに六花が言った直後

歓声が上がった

「おーお前ら、ちゃんと遊んでっか？」

こういう場合勉強してるか？って聞くのが普通じゃないのだろうか

まあ今さら藍さんにそこら辺の一般常識を求めても終わりだと思うけど・・・

なにせ昔は六花が勉強しているときに限って乱入してきて、紫達と一緒にあっちへこっちへ連れまわされたのだ

そんな感じだったので、彼が騎士王だと知ったのはマルーン学園に入ってからだった

まあそれまでは学園の基礎教養部（一般の学校と同じ機関）ではなく、故郷の第四世界にいたのだから無理もないといえはないのだが
まあそれはともかく、野外に設置された舞台に立った藍が、意気揚々と今回の バカ騒ぎ の内容について説明した

「ホントは赤の日にイベントしたかったんだがな、テストっつー面倒なものがあったから今日になった

ルールは簡単だ。全員白いリボンか赤い花配られたら？それに数字か古代文字がついた札があるはずだ

リボン持ってる奴は、同じ文字が書かれた札のついた花。花もってる奴はリボンを探せ

ついでに言っとくが、リボンも花も人が持つてるとは限らねえ。学園のどっかに隠してるやつもある

つっても隠した範囲は専門教養部（魔女科などの学科のこと）区域だけだな

対のリボンと花見つけた奴は本部まで持って来い

照合の後、本物なら景品をやる。札取り換えたり術で変えたりしても無駄だぜ

対が見つかるまではゼツテ取れないように術を施してるからな

以上だ。ついでに景品は長期休暇の間の課題全部免除とか、有名料理店のディナー券なんかもある

今日白いリボンもらった野郎共は気合いれるよ、初デートに花添えてやる

青いリボンもらった野郎共、この世の春を迎えてる連中を見返してやれ

嬢ちゃん達はオーダーメイドで服作ってやるのとかもあるからな、着飾って野郎共を骨抜きにしてやれ

他にも有名パティシエ特製スイーツ食べ放題券とかもあるぞ

まあとにかく、こつちで良いもん取りそろえてやってるからな、せいぜい頑張れ

外れの景品もあるけどな」

ニヤリと笑う藍さんに背筋が寒くなったのは……………多分気のせいじゃない

確か去年の外れ景品には、魔科学部実験お手伝い券とかがあったはず

ちなみにそれが当たった人は……………思い出すのも恐ろしい

とにかくそんな感じで最高潮に盛り上がってきた中

「制限時間は三時間だ。きばれや若人！」

高らかな宣誓

同時に全員が一斉に騒ぎ出した

まずは近場で持っている人間がいなか確認するためだ
聞き終わった者、もしくは近くに対のアイテムがなかった者はそれ
を探すべく駆け足になっている

そうこうするうちに全員がバラバラと移動をはじめ

「あ、やつほー灰くん」

「ああ、ゆずりさん」

円滑な友人関係を進めている2人は互いに軽く挨拶をし、

「六花・シエイド見なかった？」

同時にそう言い、それから

「……逃げたわね」

「確実にね」

舌打ちした

そんなお互いの親友達の予想通り、開始直後に2人は逃走していた

何故って？

一つはこの手のイベントに興味がないから（景品はちょっと魅力的
だったが）

それから確実に親友2人に遊ばれるからだ

もっといえは六花は読みたい本があったのと、シェイドは疲れて昼寝がしたかったから

そういうわけで、学ゲーで鍛えたコンビネーションでさっさと行方をくらし、サボタージュに成功したというわけだ

人気がない適度に日当たりのいい樹を選び、その下で心地つくとか々勝手にやりたいことを始める

ごろりとシェイドが転がったその隣で六花は本を広げ、ほっと溜息をついた

ここは滅多に人が来ない（紅のお墨付きだ）ので、ゆっくり出来そうだ

なにせ赤の日からこっち、ずっとからかわれ続けてるくに読書も出来なかったから

その原因を横目に眺めて　それがすやすや寝息を立てているのを認めて、呟く

「……………赤の日のことくらい、知っときなさいよね、アンタは」

ひと月前のことだ

いつものように中庭で昼食を取るべく、他のメンバーを待っていると……………両手に赤い花をどっさり抱えたシェイドがやってきた

『あんだ……埋まつてるわよ』

『好きで持つてるんじゃない、さっきリアナ（伯爵令嬢）に押し付けられたんだ』

花なんかもらっても邪魔なだけなのに、と愚痴るシェイドが思いついたように

『お前いらないか、これ』

と差し出してきた。まあ寮の部屋に飾るのもいいし、なんなら花好きのカナリア先生に分けるのもいいだろう

桜さんの研究室に飾っても喜ばれるかもしれない

なんてことを思って、特に深く考えず受け取った

その時

『あ　　！！！！』

異口同音に叫んだのは、今まさに到着したばかりの灰とゆずりそしてその驚愕が含みのあるもの変わった時、やっと六花は自分の失態に気づいた

赤の花という時点で気付くべきだった。その日が赤の日だと

そういうわけで全く、意味のわかっていないシェイドの分までからかわれ、六花はこの一月神経をすり減らしていた。なんとボケかますシェイドを張り倒してやりたかったことか。

とはいえシェイドにしてみれば厄介払いと親切心からの申し出であったのだから、ここで責めるのもどうかと思い、結局ストレスの行き場がみつからないまま一か月

……別に嫌じゃなかったしね

と内心で呟いて、いやいやと頭をふる

嫌じゃなかったのは当たり前だ、告白でも何でもなかったのだから

しかしそう考えると少し寂しい気も

って！なに、寂しいってなによ私！？

一人顔を赤くしながら、もう本に没頭しようとして視線を落とした

そのまましばらく読み進めていて、六花は眉を寄せた

邪魔なのだ。髪が

別にそれほど長いわけでもないのだが、今日は風が強い

吹く度視界を邪魔して本が読みにくいのだ

とはいえこんなところでバツサリ切るわけにもいかず、それ以前にせっかく伸ばしているのだから切りたくもないし、と思って首を傾け……それが視界に入った

イベント用に配られた白いリボンだ。六花もシェイドももらったの

は白のリボンだった

まあそれはいいとして、イベント用でも何でもリボンはリボン。正しい使い方をしても問題はないだろう

うん、別に終わってから返せともいわれてないし。いいよね？

自問自答していったん本を置き、慣れた手つきで髪を纏め、リボンで結って……視線を落とした

いつの間にか起きていたのか、寝転がったまま、シェイドが興味深そうに六花の方を見ていた

……まさか何やってるんだ、とは言わな
いわよね？

いくらなんでも髪の毛結うくらいは知ってるだろうし

でももしや、とってしまったのはシェイドが時々六花の予想を超える世間知らずっぷりを披露するからだ

まあ今回は違ったわけだが

「上手いもんだな」

「……そう？」

髪のことだと気づくまでに少し間があったが、シェイドは気にせずしげしげと眺めていた

「別に珍しいものじゃないでしょ？」

「それはそうだが、俺はやるうと思っててもそんなにちゃんと出来ない」

ああそういえばシェイドってちょっと髪長かったわよね

思い出すのは、戦闘ポジション上見慣れてしまった背中
彼の髪は襟足が他より長い

聞いてみたところ、学園に来てからは自分で切っているから、どう
しても後ろは見えないためにうまく切れないとか

灰くんに切ってもらったら、って言うてみたら

………アイツに刃物持たせて後ろに立たれたくない
って真面目な顔で答えられたっけ。まあ否定はしないけどね

ついでに彼は見た目に反してシェイド以上の不器用なので、切っ
てもらっても大変なことになっただろうが

396

「あんたも結うの？髪」

「暑い時は。あと模擬戦の時は邪魔だから」

頷いて、それから本当に気まぐれで

「結ってあげようか？」

そう言った

最初は驚いたものの、じゃあ試しにと身を起こしたシェイドの後ろ

に回って、茶色の髪の毛を掬い

六花は沈黙した。そして訝しがるシェイドに対し

「あ、あのさ、結うのはちゃんと結うから」

「ん？」

「ちょっとだけこの髪いじらせてくれない!？」

いやほんとに、柔らかいわこの髪!

コイツのことだから手入れとか全くやってないだろうのに、この手触り!

相貌を崩した六花に、一瞬妙なものを見るような目を向けたがそれでも特に深く考えず、シェイドは頷いた

初めは三つ編み、今度はそれを二本にしたりもう少し複雑に編みこんだり

それほど長くないので小さいものしかできないが、それでも楽しくなって繰り返す

そんな時暇になったのか、唐突にシェイドが切り出した

「六花」

「ん？」

ご機嫌だった六花は、珍しく口ごもるシェイドに片眉をあげて、手を止めた

「なに？」

「………いや」

微妙な間、それから少しだけ肩越しに振り返り

「今日お前に聞いてから、ずっと考えてたんだけどな」

「うん」

「俺は、一月前のアレはお前に告白したことになるのか？」

初めの1秒は意味を理解できず、もう2秒で脳みそが動き出し、さらに3秒でその意味を理解し、さらに言葉を紡ぐまでに4秒

計10秒の間を越えて

「な、ならないならぬ！あんたはただ単に私に花くれただけ、それ以上になんの意味もないでしょ！？」

告白って言うのはする意志があつて初めて成立するんだから！それ、それ以前に私とあんたで、なんてありえないじゃない！」

一気にまくしたてると、シェイドはしばらく何も言わず

「そうだな」

あっさり認めて、終わった

「……………それはそれでちょっと、どうなのよ
なんだから一人焦ってたみたいで悔しい」

と、ふと目を止めたのは今現在シェイドの髪を結わえているリボン
そよそよと風に揺れている　　白の、リボン

これって……………告白返し、したことになるの？
ひそりと思って、それから急いで頭をふった

いやいや、別に他意はないし。それに今さっき自分で否定したばっかじゃない！

ホントに何考えてんのよ私！

なんだか先ほどから一人焦って、それが恥ずかしくて、早く読書に戻りたかった。

それならさっさと結ってしまえばよかったのだが

それでも何となく、離れがたくて

結わえた髪をもう一度解いた

全力で否定する六花に、どこか不機嫌になっている自分に気づき、シエイドは沈黙した

別にまったくもって彼女の言うとおりだし、告白が成立してもそれはそれで困るのでいいのだが

『わたしとあんたで、なんてありえないじゃない！』

そこまで言わなくてもいいだろ

と思ったのもまた事実で

なんでこんなこと、気にする必要があるんだと思いつつ、急下降し

ていく機嫌を戻すこともできずに

「そうだな」

それだけ言って沈黙した

何となく苛々して、さっさと結ってもらって寝ようかとも思ったが
結われた髪がもう一度解かれて、それを手で梳かれていると……
まだ少し惜しいな、とも思うわけで

「あ」

声と同時に白い、細長い布が宙に舞う

風に飛ばされたのだろう。まあ別にイベントに参加する気はないの
でどうでもいいが

「ごめん、アンタの飛んでいっちゃった。結おうと思ったのに」
「別に」

構わない、そう続けようとして止まった。アレがなかったら結えな
い、というならもう終わりなのだろうか。この時間は
そのまま何も言わず沈黙していると、再び六花が髪を梳き始めた
どうやら止めるつもりはないらしい

だから何も言わず、心地よさに身を委ねて

シェイドはゆっくりと双眸を閉じた

いつもと同じはずの春の風が、どこかいつもより柔らかかった

【番外編】白妙は春の風に舞う（後書き）

なめくじ共には現段階でこれが限界糖度です・・・（力尽き）

それはありふれた出来事ではなかった

手錠事件以来、それなりに前進した六花とシェイドは、喧嘩はするものの会えば挨拶を交わすなり一緒に昼食をとるくらいの仲にはなっていた

なので この日も

ゆずりやパティと一緒にいた六花が、偶然に灰とリーアンと昼食をとっていたシェイドに会って

狙った様に席が開いていたので昼食に同席した

それだけで終わるはず・・・・・・・・・・・・・・・・だった

「六花ー、一応初対面だからそちらのお二人さんに紹介してほしいんだけど」

席に着いた瞬間、キラリと目を光らせたゆずりの視線の先には灰くんと・・・・・・・・この間審判してくれたリーアンくんが

派手さはないけど爽やか系（腹黒）の灰くん、たれ目気味で文句な

しに美形のリーアンくんは思えば、いや改めて思わなくてもゆずりの趣味対象ど真ん中だった

「……まあどうせ、紹介するまでもなく名前（＋生年月日他基本個人情報）は知ってるんだろうけどね

「シェイドの超貴重種な友達で、獣人科の灰くんと剣士科のリーアン・フィン・アズーロくん

いつも思うけどコイツと付き合い長いなんて物凄く寛容な神経してるよね。尊敬するわ」

「全然尊敬してる風じゃないけど、とりあえずありがとね。六花嬢それから俺のことはリイでいいよ」

「長く付き合うコツは腹が立つことがあればその場で仕返しすることそれから救いようのないボケをかましたときには鉄拳制裁を「おい……！」

「ああ、確かに殴らないと気が済まないよね。シェイドのボケってにこやかに言うと、シェイドはどいつもこいつも……と呟いて頭を抱えていた
前から思っただけ、最近は輪をかけてヘタレ臭がしてるわコイツ

「で、こつちが「はいはい！獣士科2年の桃山ゆずりです。ぶっちゃけ美少年美青年大好き何でせひお近づきになりたいわ。仲良くしてくれたらいい情報も流しちゃうわよ」

ゆずり……あなた、ぶっちゃけるにもほどがあるわ

「……こつちは私と同じ魔女科のパーティ・アッシュグレ
」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・パーティ、挨拶は？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・人付き合いは面倒で嫌い。仲良くする気は微塵もない

だから挨拶は不要」

この二人足して二で割れたらいいのに。切実にでもまあ・・・・・・・・

「あはは、流石は白峰さんの友人だね。とつても濃い」

「その言葉、否定はしないけどそっくりそのまま返すよ。灰くん」

「へえ〜どの程度情報網あるの？」

「とりあえず機密事項ストレスくらいまでなら余裕でゲットできるわよ」

「なんなら提携しとかない？仲良くなつとけば使えるわよーアタシ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・面倒くさい」

全然、気にしてないみたいだからいいけど

「・・・・・・・・まあこのくらい凶太くなけりゃあアイツの友達なんてやれないか

「・・・・・・・・・・で、アンタはいつまでその『苦惱』のポーズしてるの？」

スーッと冷めるわよ

正面に腰を下ろし、ズズッと日本茶をすする六花に、厳しい視線が飛ぶ

「誰のせいだと思ってる」

「原因は常識外れのアンタのポケだから、巡り巡ってあんたのせい」
「ふざけるな！・・・お前、灰に影響されてさらに性格悪くなってるんじゃないか？」

「ちよつと待つて。さらにつて何よさらにつて！私の性格が悪いつていいたいわけ！？」

「悪いだろ。短気だしえげつないし」

「いつ、誰が、えげつないことしたつてのよ」

「合同授業の時に、教師やりこめただろうが。あの後あの教師自信なくして禿がひどくなつたらしいぞ」

師は弟子を？参照

目は口ほどに物を言う。最悪だな、という視線を受けて六花の眉尻が跳ね上がった

「あれはあつちの自業自得でしょ！それに、そもそもあんたがわがままお嬢相手に妙なこと言つたのが原因じゃない！」

「俺が何を言つた！」

「一回脳みそ洗つてきなさいこの朴念仁！」

「誰が！」

「アンタよ！」

ぶはっ

・・・ん？

噴き出した方に視線をやつて見れば、若干一名除いた（誰かは察して）全員がこつちを見て笑つてる

しかもあれよ。微笑ましいとかじゃなくてニヤリ

紫ちゃんがよくする、獲物見つけた時みたいなあの笑顔

瞬間

私は直感を信じて立ち上がった。そのまま食器のプレートを持って逃走を・・・

「あ、そうだ。前に頼まれてた本、剣士科の図書館から借りてきたぞ」

いい加減誰かこいつに空気を読む術を教えてやって

一瞬以下の刹那迷って、私はシェイドが差し出した本を受け取るべく、プレートを置いた置いてしまった

・・・・・・・・・・こういう時は自分の活字中毒が恨めしい

「へええ〜いつの間に頼みごとし合う仲になったのよお、六花V」

わざとらしすぎる作り声。いや、実際わざとなんだろうけど視線をやらなくてもニタニタしたゆずりの顔が目に見え

「コイツ以外に頼める人がいなかったから。たまたまよ、たまたま」

落ちつけ私。事実を淡々と話せばいいのよ、淡々と。遊ぶ隙を与えちゃいけないわ

・・・・・・・・・・まあ実際、くう兄に頼むのは無理だしね

「へえ、シェイドもやるなあ。女の子と二人つきりで、もう手は出したの？」

ぶへっ！

私が反論するより、シェイドが嘔き出す方が早かった。というからお茶飛んできたんだけど、汚い

「ちよつと待て！いつからそういう話になっていた！」

さつきからずつとだよ。と多分、シェイド以外の全員が心の中でつこんだと思う

で、そのみんなが認める朴念仁はリイくんを睨みつけて

「っ大体手を出すってどういう」

「具体的にいえば押し倒して男女の仲を深める行為に及んだかって
「そういうことを聞いているんじゃない！」

顔真っ赤にして叫んでも逆効果よー

と、心の中で教えてあげた。今はとてもじゃないけど、コイツに親切にしてやる気が起きない

完全お遊びモードに入った今は、いかに私よりコイツにネタを振らせるを考えるべきよね

「まあシェイドに限ってそんな甲斐性ないだろうけどな」

軽く落とす彼は、もしかしなくても腹黒要素入ってるに違いない

いじられへタレのくせに、そういうのしか友達にいないのねシェイド

や、へタレだからこそ？

「……………リーアン」

「ん？どうしたーシェイド、顔が怖いぞ」

計算か、それとも地か

無駄に爽やかに笑いながら茶をすするリーアンさんに、シェイドがキレた

「お前人で遊ぶのもいい加減にしろ！」

「あ、シェイド一応遊ばれてることに気づいてたんだ。進歩はしてるんだね、人並みに」

「お前も一々失礼だな灰！」

「いまさらだろ？」

「いまさらでしょ？」

「っつ！……！」

15でも20でも30でも、大人びて見えたって、結局子供なのよ。

男は

……………というのは紫ちゃんの言

今まったくそのとおり、キレたシェイドの攻撃を灰くんは華麗にかわし、リーアンくんは器用にいなしっつ

反対に仕掛けてシェイドがよけたり……………と、猫の如くじゃれついている

ちょっとあんだ達、一応ここ食堂なんだけど
つていつても、こんなのコイツらに限らず日常茶飯事らしく

上級生や先生は生暖かく見守ったり迷惑そつな顔するだけで、誰も
特に気にとめてはいない

「なに思考に浸ってんのよ六花。せつかく目の前で見目はイイ男達
がじゃれてんのに」

「私の眼にはヘタレと腹黒と読めない男しか映りません」

「………同感」

いつも通りの返事なんだけど、ゆずりには私たちの発言は気に食わ
なかつたらしく

「あーっもう！だからあんだ達には好きな人出来ないのよ。趣味バ
カコンビ」

「百発百中で玉碎してる奴に言われたくはない」

「告白の時はいつも『顔が好きなんで付き合って下さい！』だもん
ね」

これは実話だ。情報収集の時は恐ろしいほど演技達人なのに、告白
台詞はいつつも

『貴方の見た目、っていうか顔が好みなんで付き合ってください！』

馬鹿正直にもほどがある。まあそついうところは好きだけでも

「いいじゃない、ホントのことなんだし」

そりゃまあ、いつも顔見ただけで告白しに行ってるしね

「なによ〜文句あるわけ？」

あるわそりゃ

「普通は話したり、友達づきあいしていくうちに好きになるもんじやない？」

「甘い」

何が甘いの、何が。もの凄く一般論だと思っただけど

でもゆずりルールではそうじゃないらしく

「感じたら即行動！思ったら即発言！恋しちゃったら即特攻！

これがアタシの三大行動原理よ！様子見なんてして手遅れになったらどうするの！

逃がした魚はでかかった、なんて後悔したくないの！

だからキュピンと感じてイイと思って付き合いたくなったら即告白してるだけ！」

「そこまで開き直られると、逆に清々しいわ」

「・・・・・・理解不能」

なんて、のんきにゆずりの恋愛談議してたのがいけなかった

後方不注意

「あ」

と思った時には天井が見えた

もつと正確にいえば、海の色に似た碧の目と、茶の髪と、

天井が

……頭痛い、コブ出来たかなー

なんて、現実逃避したって現実は変わらない

一瞬の沈黙

後

「さ、さつさとどきなさいよこのバカアアアアア……!!」

「な、なななななななでそんなところにいるんだ！お前は！」

そして六花と、六花の上に馬乗りになっているシェイドを上回るほどの、絶叫

「あらま」

「アハハ、公衆の面前で、なんて大胆だね。シェイド」

「……殺す」

「甲斐性なしって言われて腹立ったのはわかるけどな、もうちよつとムードある場所の方がいいぞ？」

呑気にほざく友人達に文句言ってやろうと、固まってるシェイドに手をかけた瞬間

「白峰六花　　！！！！わ、私の前でシェイド様を襲うなんて！
ったいどういいうつもりですの！！！！」

「私が下にいるこの状況でなおそれをいうか！」

伯爵令嬢乱入

のち、食堂大混乱

え？そんなのいつものことだった？
まあ、これで終わればよかったわね。これで終われば

不幸の女神とやらは、このくらいのトラブルじゃ満足しなかった
ふざけんな！

最悪の邂逅、その名も友の紹介 1 (後書き)

これからキャラが増量します。

最悪の邂逅、その名も友の紹介 2

私がその噂を知ったのは、意外なことに昼限定引きこもりの従兄からだった

数日前の食堂騒ぎの余韻も消えかけ、午後の授業を終えて寮に戻ろうとしていた時

……いきなり口を押さえられて物陰に引きずり込まれた

……って言うと犯罪っぽいけど、これ以上言いようがないから仕方ない

「……くう兄？」

鳩尾に叩き込もうとする直前、覚えのある森の匂いに振りかえると……予想通り、眠そうな眼をしたくう兄が

「そうだ。人目に付きたくないから静かにしている」

他の人が聞けば腹が立つんだろうけど、私を見るくう兄の目は優しいから気にならない

というか昔からこんな調子だ。気にしても仕方ない

そのまま手を取られて付いていくと、人気のない庭みだいなところ

に出た

中途半端に整えられた木々は、上手に周囲からこの場所を隠しているくう兄のお昼寝スポットの一つだってことは、すぐにわかった

紫ちゃんや私以外と接触したからなくくう兄は、学園内にいくつも秘密の隠れ家を持っている

「珍しいね。まだ日が昇ってるのに、外に出てくるなんて」

「聞くに堪えない噂を耳にしてな 真偽を確かめに来た」

そう言つて、いつになく真剣な紅の目がとらえるのは 私

つて

「……………もしかしてもしかなくても私関連？」

「俺はお前と紫のこと以外で動く気はない」

そうだった。そうだったよね、うん

でもちよつと待って。前の私がシェイドをどうこうしてるっていう不愉快極まりない噂は、もうほとんど立ち消えだ

何より古すぎるからありえない

……………つてことは

「またなんか妙な噂立ってるの!？」

「聞くに堪えないといっただろう。その場で話していた奴を締め上げたが、噂の源はわからなかった……」

「だから直接聞きにきた、と」

「ありえないがな。万が一ということもある。お前も年頃だし」

お父さんじゃないんだから、とは言わない。実際にこういう時、父親が何を言うか、六花にはわからない

まあ過保護子煩悩代表・藍を間近で見ているので、予想は出来るが

「で、実際のところどうなんだ」

至極真面目　かつ返答次第ではシェイドの命が危つくなりそうな、凶悪な顔で紅が問う

「ないない。くう兄はいつも練習のときいないから知らないだろうけど、良くて友達レベルだって」

それ以前に、今はまだ恋愛なんて興味ないし

言うとうくう兄は安心したように笑った。おお貴重

ニヤリ以外の笑い方あんまりしないからね。眼福眼福

と、内心で拝んでいたところへ

「そうか。人目を忍んで研究棟で会ってるのだ、二人きりで護身術を教え合っているのだのえらく現実味のある噂だったからもしやと思っ「なんでそれをつ！」

口を押さえたけどもう遅かった

希少価値スマイルは鳴りをひそめ、普段より6割増し凶悪顔になっ

てるよくう兄

.....ぶつちゃけちよつと怖いです

「.....六花」

「う、嘘じゃないよ！ホントに良くて友達レベル！」

「それは分かっている。お前は俺に嘘をつかない

だが、噂自体は真実なんだな？恋人であるという一点を除いて」

あまりの気迫に何も言えなかった。でもくう兄にはそれで十分だった

「.....
上等だ」

「ぎゃー！ちよ、くう兄待って！」

もうこれから人殺しますそんな目でどこ行くんですかお兄さん！

「待てない」

「で、出来るだけ一緒に行動するようになっていう紫ちゃん命令なの！
ほら、コンビ組まなきゃいけないし？紫ちゃん負けるの嫌いだし？
それ以上の理由は微塵もないからお願いだからちよつと待って！」

嘘じゃない。だから出来るだけ宿題とか勉強は一緒にするようにし
てる。ちなみに研究棟に行ってるのは図書館じゃ、噂に火がつくだ
けだからだ

幸いというかなんというか・・・魔科学部の先輩方は剣士科嫌い少
ないし、第一生きのいい実験台になるってことで学習室を貸しても
らえた

魔科学部は魔女科でも滅多に寄り付かないし「人の噂なんて知りま

せん」な引きこもり体質メンバーだから、噂にはならないと思っ
た。それに今日、くう兄から聞くまではうまく行ってた・・・はず
護身術は組み手の練習がしたいって言ってたから、コンビ組んでる
義理で付き合ってただけ

・・・これももちろん、面倒な噂避けるために、
隠れてやってた

紫ちゃん達も協力してくれてたし、問題はなかったはず

なのに

「どづいつこと？」

「知るか」

その後、なんとか『組手の相手を変える』ってことを条件にくう兄
は抑え込めた
ちなみに変わる相手っていうのはくう兄か篁さん

・・・どづちにしたって、ご愁傷様だわ。

シェイド

なんて、アイツのこと憐れんでる場合じゃなくて

「どう思う？この状況」

「んー・・・紫さんの情報統制は完璧でしょ？だったら十中八九情報ソースはアンタかシエイドくんの知り合いね

それも、口固いあんた達が二人でいることをばらすような」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「言つとくけどアタシじゃないからね」

おいしい情報は一人で抱えて楽しむに限るもん

「うん。納得」

次の日、食堂でゆずりと甘味をつつきながらとりあえず情報収集。

噂、つまり情報なら情報屋に聞くに限る。芸はないけど確実だしね

「・・・・・・・・まあ代償に、食堂のスベシャル花苺サンデーデラックスを奢らされてるわけですが

「んでパティもありえないでしょ。アタシあの子がアンタ以外と話してるの見たことないし

紫さん桜さんは論外。魔科学部はそう言うコトいうタイプじゃないし

てかその前に、紫さんのお膝元じゃ不可能だしね」

「じゃあ残るはシエイド関連？」

「もしくは、偶然見られてたか。この方が可能性は高いと思うけど？常識的に」

「私はともかく、シエイドは毎回召喚魔術で他所から来てたんだよ？」

建物に入るところ見られるわけがない」

添えられていたサクラランボに食らいつき、もごもご口を動かして。
ゆずりは眉尻をよせた

「ナンデまたそこまで」

身内に約1名、ばれるとマズイのがいるんです
とは言えない

まあ理由はそれだけじゃないけど

「学ゲーの修業兼ねてるから」

さり気なくいったつもりだけど、センサーにでもひっかかったのか、
ゆずりの目の色が変わる

「……なにに、秘密特訓とかやってるわけ？」

「まあね」

「いったいどんな「ちなみに知った場合紫ちゃんにより直々に口止
めが「やっぱいいわ」

好奇心の塊みたいなゆずりすら退かせるなんて……流石という
べき？」

「何考えてるのか知らないけど、アタシは危ない橋は渡っても、地
雷原には突入しないタイプなの」

「アンタは他人突入させてからその後付いていくタイプだもんね」

「力技で特攻するあんたにだけは言われたくないわ」

睨みあい、お互いにデザートにかぶりついて

「でもシエイドって……アイツにばれる様な友達いるの？」

「あんたも人のこといえるホドいないじゃん」

「石投げれば顔見知りになぶつかるアンタと比べないでよ」

「にしたってさあ……アンタの友達っつーか知り合いつて、人の道外れた感じの多いし」

うぐっ！それを言われると

「つか濃い、変人」

……出来るだけ直視しないようにしていた事実を

「って、私の交友関係はいいの！今は！

そうじゃなくて、アイツの友達なんて片手で足りるくらいしかいないし、っていうか灰くんとリイクんしか知らないし」

「んー、ちよい待ち」

言って取り出したのはかなり分厚い手帳　自称ゆずりデータベ
ス、他称イイ男図鑑

面食いゆずりが認めた学園中の　下は幼稚舎から上は教師まで

ありとあらゆる『イイ男』の基本情報、個人情報保護法にひっかかるだろっアレやらソレまで何でも入った……私から見れば暗黒

ブツクだ

「んんー、一応先輩には何人か知り合いいるみたいだけど、特別仲良いのは二人だけみたいね

ま、あの性格じゃあ上級生は気に入らないでしょ」

「でもなーあの二人が情報流して、得することなんて・・・」

「ない」

「よねえ・・・」

ぬるくなったコーヒーをかき混ぜる

考え事する時は苦いものの方がいい。冷静になれる

黒茶の水面を見つめて、昨日のことを思い出す

あの後は大変だった

伯爵令嬢にまた口にするもおぞましい妄想の産物で罵られ、またあの暗黒手錠週間の如く白い目に晒され、唯一の癒しタイム図書館ですらひそひそごちゃごちゃうだうだうだうだうだ（エンドレス）

.....

「・・・六花さん、何か、目がヤバイんですけど」

「絞めオトス」

「うっわ！殴るでもシバクでもなく得意技持ってくるあたりに本気感じるわ」

当たり前。誰がどんなつもりか知らないけど、人の至福の時間邪魔

しやがった代償はキツチリ
.....ん？

暴走する感情とは別のところで、冷静に事態を考え直していた頭に
何かがひっかかった

「.....ねえ、ゆずり」
「ん？」

「ちよつと教えてもらいたいことがあるんだけど」

食堂オリジナルトピカルアクアジュースで手を打たない？

ゆずりと別れ、そのまま足を中庭の池のところに向ける。ゆずり情
報によれば、彼の出没率が一番高いのはココらしい

案の定

「その物申したそんな顔、ひよっとしてばれてる？」

悪びれもなく、目にかかる髪をかきあげて笑ったのは

「ひよっとしなくても、ばれたのよ。リイクン」

「だろうね」

悪びれない、軽い調子

「……初めからバレるのわかってたわけ？」

「んーちよっと違うなあ」

口角を上げる様は、シェイドとも、灰くんとも違って嫌味や黒さは感じられない

ただ

「俺はね、嬉しいんだよ。バレて」

深い

「悟られないように掌の上で踊らせるのが、悪巧みってものじゃないの？」

皮肉は笑いで返された

「ははっ確かに！でも今回は力試しのが目的だったからさ

まあついでに画策も成功すれば一石二鳥、ってのもあったけど」

「試したのは……私か」

「そのとーり、いやぁ予想以上に俺まで辿り着くの早かったよね

なんで？」

ここまで開き直られると、問い詰める気力もうせるわ。全く

「……リーアン・フィン・アズーロ

ローシェンナ侯爵派のアズーロ子爵の次男坊で妾腹」

「はつきり言うね」

「齒に衣着せた物言いは趣味じゃないの」

「そういう子の方が、俺は好きだよ」

「……まーこの人も自分のことよくわかってらっしやる。必殺の微笑が出るタイミングの、巧みなこと

心の中で皮肉って、続けた

「私は平々凡々庶民育ちだけどね、親戚がアレだから上流階級様の勢力図くらいは知ってるのよ」

「なるほど。でもそれだけじゃ答えになってない」

「妾腹出の息子が下克上してやるうと思っつて、とりあえず実行に邪魔な血統主義のローシェンナ侯爵がこれ以上力持たないようにローズマダー伯爵との橋渡しの要であるシエイドと我俣令嬢の仲ぶつ潰してやるうと思っつて当て馬に私選んで外堀固めて逃げ場なくそうと
した」

「……妾腹でも優秀なら跡継げるかもよ？」

「魔女・獣人大嫌いって看板しよっつてるあのボケ息子持った父親が柔軟な頭持っつてるとは思えないわ」

「ははっすっごい言いよう！」

どこがツボにはまったのかはわからないけど、とりあえずひとしき

り馬鹿笑いして

「当たり前当たり前、大当たり。すっごいな、この短時間で俺の親までつきとめたの？」

「は？まさか。ゆずりと違って人のプライバシーにつっこむ趣味なの

半分は想像……ただし事実と現実味と照らし合わせた、ね」

「想像？」

「うん。だって私とシェイド仲良くさせる利点なんて、シェイドとあの我侭お嬢の婚約潰すくらいしかないし
私たちの周りの人間で、そうやって得する人ってリイクンしかいないのよね

性格的にはありえないかなーとも思ったけど、会って数回程度で本性なんてわかるわけないし」

リイクンは金褐色の相貌を愉快気に細め、藍色がかった髪を引っ張る

「生まれはこの髪？」

「茶髪黒髪赤髪標準の純粹第二世界の人間に、その色はありえないから。多分魔女の血入ってるよね？」

「……お約束的昼ドラ展開すぎるとは思ったけど、一応確かめようと思って

かまかけようとしたら、何でかそっちからベラベラ喋りだしたというわけ」

「……あれ？」

このとぼけた顔は素か演技か

演技なら大したもんよね。紫ちゃんレベル。でも素だとも思えない
一番面倒なタイプだわ……。アイツの友達、こんなのばかりなわけ？

「まあどのみちアタリだからいいか

うん、流石は魔女科筆記は二年連続ほぼ満点首席の白峰六花ちゃん
「嫌味つたらしいところも移るのかしらね、友達って」

リイクんは何も返さず、ただ笑って

「友達じゃない

俺とシェイドは『同志』だよ」

答えた

「……随分と、ご機嫌斜めね」

笑みを浮かべて言う女に、紅は珍しくきつい視線を送った
笑っていないさされただけだったが

「当たり前だ……何故六花に男と組手などやらせた」
「相手がいなかったから」

返答は単純かつ、明快だった

「篁はあの通りで、桜は体術に不向き。めぼしい友人は敵にとられて
いるし、私が教え「それも駄目だ」……貴方、怒るでしょう
？」

で、肝心の貴方は一度もまともに練習に参加しないし
こう言われてしまえば、言い返すことはできない。紅は鋭い双眸を
さらに細めて、口をへの字に曲げた

他人から見れば凶悪極まりない顔だが……付き合いの長い紫に言
わせれば、拗ねているその顔が可愛らしくて

今度は心の底からニコリと笑い

で、直接的な原因、リーアン・フィン・アズーロはというと

「・・・同志？」

その言葉が、いまいちしっくりこない

なんというか・・・昨日の彼とシェイドの態度は、同志って
いう秘密めいたというか熱い関係とは程遠い

本当に普通の・・・いじりいじられてる友達って感じだったから
いや若干シェイドは子供扱いされてる風ではあったけど

432

「そう、無償で助け合う『友人』なんて甘い関係じゃない
お互いに利用して利用される、同志」

「・・・何でそんなこと、私に言うわけ？」

「なんで？」

「質問返しは好きじゃない」

って言ったって、答える気はないんだろーな
私が答えるまで

「どんな事情があるのかは知らないけど、人にむやみに話していい
事情じゃないでしょ？」

特にそっちが、下克上なんて狙ってるなら」

「でも事情を知っておかないと困るだろ？」

「何だよ。第二世界のお貴族様達の権力抗争に、第四世界の一般庶民の私がどう関わるっていうの？」

なんかさつきから・・・的を得ないっていうか、遊ばれてる感じがする

全部を言わないで、出し惜しみしてる感じ？

「君は一般庶民のつもりかもしれないけど、俺たちにとってはおーいに意味がある存在なんだよ？」

「遠回しな言い方は嫌いな。はっきりして」

睨みつけると、わざとらしく怖い怖いと肩をすくめる

・・・・・・・・・・・・・・・・はい、アレです。私ってあんまり気は長くないのね？

というより短気なの。超がつく

「・・・・・・・・・・・・・・・・さっ

さと吐かないと、最終兵器呼ぶわよ」

「君も持ってたまわった言い方してるけど」

「じゃあ直接的にいつてあげる

ドス持った兄さんに八分殺しにされなくなかったら、とつと吐け」

沈黙

苦笑を交えて口を開いたのは、リーアンが先だった

「斬殺も嫌だけど、それより前に君にボコボコにされるのも嫌だなあ
二目とみられぬ顔になりそうだし」

「心配しなくても綺麗に治してくれる人紹介してあげる
相場の100倍払えば、ちゃんとしてくれるわよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・予想以上に人脈は広い。嬉しい誤算だな」
からりと笑って

「まあもう手遅れだしな。お望みどおり、全部吐くさ」

脅されているとは思えない、非常に好意的な笑みで彼は答えた

ああ聞かなきゃよかった！と六花が絶叫のち後悔するのは、ほんの
数分後である

「これを燃やしていただけませんか」

最近後輩というか教え子っぽいものになったシェイドに紫が会った
のは、紅をはめて少し経ってからであった

ちなみに彼は別の用事で珍しく、珍しく外に出ている

「未開封の手紙のようにみえるけど」

「一通見れば後は十分なので。無駄なものを置いておく広さはないし、邪魔なのでお願いします」

後輩　しかも最近少しばかり好意的な　の珍しいお願いに、応える気はある

が、紫は自分の好奇心を優先した

「別にわざわざ私に頼まなくても、ゴミ箱に捨てれば済む話ではないの？」

言うと口をへの字に曲げて

「……………近場に見つかる厄介な連中がいるので」

それだけで、差出人には見当がついた

束になった手紙は封筒からして三種類に大別される

おそらく分類は彼の婚約者であるリアナ・デイ・ローズマダー、その実家であるローズマダー家

そして現在シェイドの後见人でり叔父、そして自分の親せき筋でもあるカーディナル侯爵

私なら読まずに即この世から抹消するわね

そう判断付けて、紫は手紙の束から一通とりあげ

「見ても？」

「……かまいません。どうせ予想はついているでしょうが」「どうして？」

「……六花や周りの連中から噂は聞いていますそれに俺より貴方の方が連中と手紙のやりとりは多いでしょう」

「顔を見たくないなら、手紙しか通信手段がないもの

にしても貴方ってこういうときは鋭いのね。どうして普段そんなに朴念仁なのかしら」

シエイドが噛み付くより先に、紫は妖艶に微笑んでそれを黙らせ、薔薇模様の便箋を

驚くべき速さで一読した後、一瞬にして灰も残さず燃やした

「……シエイド君」

「な、なんですか？」

裏返りそうな声を必死に抑え返すと、背後に黒いもやと地獄にいたるだろう化け物背負って表面上優雅に微笑む学園最強の力と権力をもつ上級生は

「その不愉快な物体、今すぐこの世から塵も残さず抹消するから出て出なさい」

有無を言わせぬ声で、繊細な指先を優雅な所作で、そして電光石火の速さでシエイドの眼前に突き出した

最近ヘタレだ何だといわれ続けている彼は、常人なら漏らしたであろう悲鳴を気合で飲み込み、最近磨かれつつある素早さで、軍隊顔負けのきびきびした動作を持って、差し出した

ちなみにその後彼は

「私の六花ちゃんに対してどういう言い草してやがるのかしらね、このボケ共は

全員一度地獄見させたほうがいいかしら？それとも社会的に抹殺してやるべき？真綿でじわじわ絞め殺すほうが楽しいかしらねえ」

以下延々と、全く笑っていない眼差しで小さい子には聞かせられな
いおっそろしい内容を聞かされ続け

灰が思わず、素直に心配してしまったほどに神経すり減らしたとか
・・・・・・・・・・・・・・・・合掌

「シェイドが貴族の出身だっていうのは知ってる？」

「ええ。ミドルネームがつくのは貴族だけでしょ」

というかそんなところから始まるわけ、この噂流した理由

「まあそう嫌な顔しないで。で、まあ君も体験してると思うけど、貴族の間じゃ権力抗争なんて日常茶飯事

今の騎士王は若いし強い、その上後ろ盾も凄いから表面だってはな
いけどな

でも敵勢力はいる。その親玉がカーディナル侯爵で、あのお嬢様は
その侯爵家の取り巻きの一人、ローズマダー伯爵家の娘
爵位は伯爵だけど、人脈もあるし権力はかなりある方かな

で、まあそういう繋がりでお約束なのが」

「ちよつと待て」

「なにーまだ本題入ってないのに」

「入ってないも何も、その説明はさっき私がたてた予想そのままじ
やない

んなもん飛ばしていいからさっさと見え」

言葉が荒れてる？そんなもんもうどうでもいいわ

「君の予想をさらに詳しく説明してるだけだよ

いいじゃん、ちゃんと頭入れておかないと将来困るしさ」

・・・・・・・・・・・・・・・・それだけで理解してしまった、自分の
脳みそが忌まわしい

全部聞いても知らない知らない、何言ってるの？って言いたい。も
の凄く言いたい

けど言えるならこんな面倒事に巻き込まれてないよねそもそも！
くっそ！

「私理事長家と親戚っていったって、何の権限もない一般庶民よ！？
平和的普遍的な日常を望んでいるんだから厄介なことには巻き込む
な！！！」

冗談じゃない冗談じゃない！私は陰謀渦巻く腹黒狸の巣窟、権力社
会と関わるなんてごめんよ！
私が関わりたいのは本とか歴史とか遺跡とかそういう静かでかつ無
害な世界だけ！

「まだ本題言っていないのに」

なんてわざとらしい。すつとぼけた顔しやがってこの野郎

「言わなくても前振りと状況だけで十分わかるわ！
どーせその侯爵が伯爵と手え組む証に甥っ子のシェイドとわがまま
お嬢くっつけようとしてるけど、アンタにはそれが邪魔でぶっ潰し
たいから私とアイツくっつけようって腹でしょ！？」

「だーいせーかーい。惜しかったよねえ予想、あて馬じゃないんだ」
「あて馬のがいくらかマシだ！」
「俺にはあの伯爵令嬢より君のが数万倍マシなの」

思いがけず静かな声に、文句を押さえて口を閉じた

「……でもくつついたからって、アイツがあのお嬢のいいなりになるとは思えないけど」

勢いを殺して冷静に返すと、わかっていると頷いて

「別にいいなりになるなんて思ってない。でも困るんだよ
俺は家に乗っ取ったらカーディナル家の下でいる気はないのに、あんまり権力持たれちゃ抜けにくいだろ？」

「今もうカーディナルとあのお嬢の家は組んでも同然じゃない。
今さらでしょ」

「………しまった

にんまりと、こんな時でも嫌な笑い方になっていないのが逆に憎らしい

「一般庶民はそんな事情、普通知らないよな。特に魔女だって言うならなおさら

剣士の内紛なんて、興味ないんじゃない？」

今さらあがいても無駄だよ、白峰六花さん

俺はもう知ってるから」

一歩退く

「………どうしよう

かまかけてるだけかもしれない、と思う

でも冷静な部分は彼が嘘を付いていないと言っている

だからって、簡単に話せることじゃない

これだけは絶対に

『絶対に、誰にも、言うては駄目よ』

絶対に 駄目 だつて

「だから別に、それに関しては何も言わなくていいよ
俺も別に言いふらすつもりはないし」

へ？

思いがけない言葉に呆気にとられていると、リイくんは笑って

「女の子いじめるような真似したくないし、それに君が久我会長や
その従兄殿に、ただの親類以上に可愛がられてる。アキレス腱って
のは知られてるところではもう知られてるしね

それに俺も、こんな若い身空で死にたくないし」

「……そう」

言葉に込められた本気に、ひとまずは安心する

少なくとも今すぐいいふらしたり、下手に私を利用することはないだろう

「そうなんです

それに俺だって、そういう理由だけで君とアイツの噂を流したわけじゃないし」

なに？

訝しげに見つめた先に浮かぶのは、意外にも純粋な笑み

「質問に答えよう。それから訂正。君の仮定はあと一つだけ間違ってる

俺が潰したいのはカーディナルとローズマダーが組むことじゃなくて、ローシエンナがカーディナルに取り込まれることだ」

「シエイドが？」

「そう、まあ……今はそんなに有名じゃないけどね、アイツの家は貴族の中でも古い方で、それなりに力があるんだよ

まあカーディナルから抜きたい俺の協力者が、カーディナル側につくと困るっていうのもあるけど」

肩をすくめて

今度は意味ありげに笑い

「でも別にそれなら、君じゃなくてもいい」

「……………や、いいもなにも私別に望んでないし

ってちょっと待って!?!なら何で私!他の子とでっちあげちゃえばいいでしょ!?

わざわざ、自分で言うのもあれだけど鬼門持ってこなくなっただって!」

「まあ確かに、君巻き込むと面倒なことになりそうだけどさあ

シエイドには君がいいから」

は?

と思わずいいかけて、飲み込んだ

「どういう、意味?」

「んーなんというか、アイツ色々複雑だろ?聞してる?」

「詳しくは何も。でもまあ……複雑そうなのはわかるわ」

頷いて、少しだけ真面目な顔をする

真剣そうに見える。演技ならたいしたものだけど……

「前はなー何て言うか、自分の道以外どうでもいい。面倒な他人と関わらない

一匹狼っていうと、アイツには格好良すぎるけど。まあ灰や俺以外にはだいたいそんな感じでさ

別に組むだけなら、それでいいけど。俺アイツのことは友達としても気に入ってるんだ」

「……………さっきは同志って言ってなかったっけ?」

六花が返すと、リーアンはくすりと笑って

「同志兼友達、ただし比率は7:3くらいだね
まあそれはともかく。そんなアイツが、なんでか君にはつつかかっていくんだよなあ

巻き込まれやすくして面倒事も多いのに」

ちよつとその発言は失礼極まりないわよ・・・

私が巻き込まれるんじゃないわ、他人が勝手に巻き込んでいくのよ！

「・・・別にそれは、紫ちゃん命令で組まされたからで
「いいや」

きつぱりと、今まで柔らかく話し続けてきたリーくんは、そこだけ力強く言う

「それならアイツは、一定の距離とりつつそれなりにやるさ

対人スキルは欠如してる空気読めない奴だけど、外交が下手なわけじゃない。スイツチ切り替わるからね

命令ならなおさら割り切る

なのに、アイツは君を、よりもよって『カーディナル』から庇った。これは、前のアイツを知ってる俺たちにとっては大事件だ」

何か・・・おかしい

リーくんというシェイドと、私が知ってるシェイドが噛み合わない

まあ確かに、初対面じゃあ絡まれてる人放っておくような奴だし、
空気読めないし
でもリイクんの話みたいなの『冷たい』奴ではなかった……と、
思ってたぶん

「……別に、納得する必要はないよ。ただ俺はそう思ってるだ
けの話だし
でもその俺の話の中では、君と関わることでアイツが確かに何か変
わったってこと

好みの方向にな。だからアイツの友人としては、どうせ無理矢理く
つつけてやるなら君がいい」

だから

「とりあえず外堀埋めてー、意識させてー、あとどっかに閉じ込め
てもしたら間違いで出来上がっちゃうわかないかなーなんて「ちよつと
待て　　！！！！！」

途中まで一方的でも割といい話だったのに、最後で台無し
色々台無し！っていうか出来上がるってなに！？私らは料理かなん
かか！！！！

「えー簡単に言えば男と女の営み？今はちよつと早くても2、3年
すればさあ、ね？」

「ね？じゃない！」

「手え出しただけでも十分だろうけど、ついでに出来るもん出来た
らもつといいな

責任とって結婚させられるし?」

恐ろしい……!!

爽やかに、無駄にキラキラオーラ出しながら何言ってるのこの人!

「……アイツの周りって、あんたみたいなのはっかりなわけ?」

「シェイドは普段ツンツンしてるくせに、いったん遊ばれモードになるといい弄られキャラになるから

先天的にDS引き寄せる体質なんだろ。きっと」

迷惑極まりないなそれ!というか嫌過ぎる、そんな体質

「とまあ、そういう目論見があって噂流したわけ

んでついでに、お相手としての最終選考も兼ねて。アイツちょっと真っ直ぐすぎるところもあるから、頭切れる人が傍にいた方が俺にとっては都合いいんだよね」

良かったあ、印象通り悪知恵も頭も切れる子で」

「勝手に選考するな!応募した覚えなんてない!」

「他薦」

「誰だよ!」

「俺v」

「ふざけんな!」

思わず振りかぶった拳は、紙一重で避けられた
ちよつと無駄に優雅に避けられたのは余計にムカツク!

「危なっ……ふざけてないよー俺、超真面目

だからアイツ好きになっただらすぐ報告してね。最短ルートでくつつけられるよう力いっぱい応援するから」

「そんな未来はない!」

「そんな未来に向けて舵とりするのが俺の仕事なの
自分のためなら俺なんでもやるからねー、覚悟しておいて?」

あはははははは

爽やかに、高笑いしつつ立ち去る彼の背中に向けて

「出来るかあああああ!!!!!!」

叩きつけるように、六花は絶叫した

447

ああ遠く離れたお父さんお母さん、ついでにおじいちゃん

初恋もまだなのに、勝手に結婚作戦が進行しています
ってどうか何この状況。アイツと会ってからほんっとつにろく
なこと無いわ!

いやでも諦めてたまるか!何としてもあがいてやる
何でも思い通りに進行すると思うなよチクショウ!!!!!!

日が暮れる。ほの暗く、ただ黄昏の色だけが差し込む部屋で
灯りをつけることもなく、紫は佇んでいた

一人掛けの椅子に腰掛ける様は、どこかの豪邸の女主人だと言つて
も納得できる

不意にすつと、右手を差し出して

「……………連中が、六花に目をつけたわ」

咳くと同時に、右手が淡い光を放った

途端に先ほどシェイドの前で燃やしつくした封筒の束が、そのまま
の姿でそこに在る

背後に放り投げると、薄闇に溶け込むように在った紅が掴み取り、
不愉快気に舌打ちした

「……………リーアン・フィン・アズーロの方はどうする」

「今のところ動くつもりはないようだけれど……………厄介ね

アズーロ家はとうとでもなるけど、彼はそうもいかないもの。あそ
こは治外法権だから

せっかく今まで隠し通してきたのに……余計なことを

今までにない、苛立ちを露わにした声

気の弱い人間なら震え上がっただろうが、その場にいたのは紅だけだった

彼は調子を崩すことなく

「アイツは巻き込むつもりのようなのだ……いつそ消すか？」

「却下。過剰に反応すれば、余計に連中は六花に興味を持つわ

今はまだ学生の噂話に出ただけだから、軽く調べはしても、シエイドくんに釘刺す程度でしょう。下手に動かない方が無難だわ

……まあ、侯爵がいくら調べてもそう簡単には掴ませないけれど

これまで私たちは、100年以上も隠し通してきたんだから」

肘掛についた手で、軽く髪をいじる

落ち着かない時の紫の癖だ

「なら」

するりとたくましい腕が背後からのびて、紫の首を絡め取った

ゆっくりと、自分の髪を梳く指の心地よさに目を細める

「もし万が一、六花とティエンランと恋人にでもなればどうする気だ確かに容易ではないだろうが、万が一ということもある」

お前はあの二人を、関わらせたいようだが
ひそりと耳元でささやく声に、初めて笑みを浮かべて返す

「睦言を囁くのと文句を言うの、両方とも同じ方法なんて無粋ね」

「俺は紳士になどなる気はない」

「期待もしていないし望んでもいないわ

……そうね、確かに仲良くなれば面白いとは思ってる。実際に関わらせてもいるし」

でもそれは

「彼といるようになってから、少し変わったもの。六花ちゃん」

別にどうこうなって欲しいとは思わない。でも変化をもたらす人間が、近くににいるのは彼女にとっていいことだ

……悔しいことに、私達では出来なかったことを三日でやってのけちゃったしね

「でもまあ、そうね。もし恋人にでもなれば、その時は二人揃ってなんとかするわよ

六花ちゃんのこととは別に、彼のことは結構気に入ってるの」

「お前は好きだからな、原石が」

ややため息交じりの声に、思わず笑い声が零れる

「だって磨けば磨くほど楽しいことになるのよ？」

そんな面白いもの、私が放っておくと思っ？」

帰ってきたのは、柔らかな声と否定の言葉

それに満足してまわされた腕に頭を預ける。そっと目を閉じて
柔らかに、笑んだ

嗚呼 願わくは

未だ己の光を知らぬ彼らに 幸多
からんことを

いつか誰かが放った祈りの言葉に、我知らず想いを重ねた

特訓の間の、束の間の休息

カナリア先生から譲り受けたアイスティーに、紫ちゃん特製フルー
ツゼリー

癒される………たとえ一緒にいるメンバー
が鎌持った人とか新種異形生物作ってる人とか愉快主義最高権力者
とか居眠り三昧オンリー紫ちゃんな人とかでも

なんかこう言っていると、朴念仁で空気読めないシェイドが普通に見
えるから不思議だわ

453

ちなみにそのシェイドはとなりでぶっ潰れている。さっきまでくう兄
と組手+剣やつてたらしいんだけど……
ここまで潰れたコイツは初めて見たわ

いや、なぜかいつも以上にやる気満々だったっていうのもあるけど・
・

回想

『紹介が遅くなってごめんなさいね。これは剣士科7年の久我紅

私と六花ちゃんこれから特別特訓になるから、剣術とか組手は彼とやっつて』

『……………半端は嫌いだ。殺す気でやるからそのつもりで来い』

うん、目がマジでしたかう兄

髪も目も真紅で、紫ちゃん曰く血の色みたいな容姿だから一部では悪魔といわれているとかなんとか

その上見た目は半端なく美形だしね。ただでさえ鋭い目が細くなったら、私でも一歩退く

……………なんだけど

かう兄に対峙したシェイドは初め驚いた様子で、それから

今まで見たことがないくらいキラキラした笑顔で、青春まっ

さかりスポーツ少年ばりに明朗快活爽やかに

『はい！！！』と頷いたのだ

回想終了

あれは本気でビックリしたわ。頬紅潮させてあんな爽やかスポーツ青年みたく答えるアイツなんて、初めて見たし

ちなみにそのことを話したら、ゆずりは「なんで記録とってきてくれなかったの！」と叫び、灰くんは「爽やかシェイド……………気持

「ち悪」と顔歪めて言い切った

まあとにかく。なぜだかえらく張り切ってたのはいいんだけど……
ちらりと視線を横にやると

「……………うぐ」

今はもう完全にヘタレてるシェイドが。ああヘタレのヘタレじゃない
くて、机ベツタリ状態の方ね

「シェイドー早く食べないとゼリーぬるくなるわよ」

「……………食べる」

手を伸ばす。あともうちよつとでゼリー

ちよつと遠ざけてみる

「おい」

いや、お約束だし？

「お前は灰か！」

「いいじゃない、起きられたんだから」

ぶつくさ呟きながらも、今度こそシェイドは起き上ってゼリーにが
つついた

……………っていつてもガツガツした感じがあんまりしないのは、
お坊ちゃん育ちだからかな？

これいつと怒るだらうけど

なんて考えていると、ふとシェイドの視線が六花のスプーンに集まっていることに気づく

「なに？」

「お前の、味違うのか？」

言われて見れば、確かに。私のはスグリだけどシェイドのは木莓見ればそれぞれ違ってる・・・相変わらず自分の趣味だけは細かいなあ、紫ちゃん
・・・はともかく、まだシェイドの目は私のゼリーから離れない

「・・・・・・・・ちよつと食べる？」

言った途端、目が輝いた。以外に食い意地張ってるの、コイツ？ともあれ、シェイドの方も食べさせてもらつのを交換条件に、器を差し出すと

「一口で良い」

と言って私の手首をつかみ、なにすんのいきなりという間もなく

「ん、うまい」

食いつきました。私のスプーンに、私が現在進行形で使ってるスプーンに！

「なっ！」

驚く私

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

静かに刀を抜くくう兄、って怖い！目が怖いよくう兄！

「紅、紅、生徒会室で流血沙汰は困るよ？」

笑いながら言われても説得力皆無だよ紫ちゃん！

しかし空気の読めない男の凶行（後で話を聞いたゆずり曰く）は止まらない

殺る気満々なくう兄に気づいていないのか、わざとなのか　まあ
確実に前者だけど　私の口元にスプーン突き出していうことには

「ん、お前の分だ」

食べるってこと？食べるって言いたいのアンタは！？

しかもそれ今さっきまでアンタ使ってたスプーンじゃないのそれ！？

取り乱して口もきけない私もよそに、そいつはやっとな周囲が異常な
雰囲気なのに気付いたらしい

一通り見まわして、首をかしげて言ったことには

「何かしましたか、俺？」

あほかあああああああ！

・・・・・・・・・・って叫ばなかった私を、誰か褒めて

っていやそれよりもどうするこの修羅場

桜さんと肇さんはほのぼの見守り態勢だし、紫ちゃんのはなから期待何かできないし、シェイドなんて論外だし

……なんとかできるの私だけじゃん

でも私には刀構えるくう兄を止めるなんて危険な真似、する気ないし

かといってこのまま流血修羅場突入は勘弁してほしいし

などと考えていた私の所へ来たのは幸運の女神

「邪魔するぜえ生徒会！」

でした。見た目は

短めに切り揃えられた髪は眩い金色で、目は海よりも深い青色
すらりと背が高く、シンプルで白い天使科の制服と編上げブーツが
よく似合ってる

どっちかっていうと格好いいお姉さん系美人

「どこに置けばいい？腕痛いからさっさと行ってくれ」

………なんだけどその口調、全部台無しですよ。名も
知らぬお姉さん

「あはは、駄目だよー。扉は蹴破るものじゃないんだから」
「そういつなら自分で書類持ちやがれ！つかお前の荷物だろうがこれ！」

おかもち抱えるみたく、お姉さんの両手には書類の束が乗っている相当の重さだろうに、細腕のその人は平然と構えていた。脱いだら凄いか？

「えーだつて別に僕来る必要ないしー」

その名も知らぬお姉さんの背後からひよこりと顔を出したのは、私もよく知ってる人だった

ぱつとみ可愛らしいオトコノコなその人、スマルトさんは20歳とは思えない無邪気な笑みを浮かべて

「それに、何だかお取り込み中みたいだし？こっちも」

「あ？」

一瞬にしてこっちの状況を的確に表現してくださいました

「別に私は取り込んでいないわよ、スマルト。仕事ならかまわないわ」

ちよつとは取り込んでください紫ちゃん
つていうか仕事やる暇あるならとめてよ・・・！

「んー紫くんの分もあるんだけどさあ。紅くん担当の分もあるんだよねえ

出来ればそのお取り込み、中断してほしいんだけどな」

へらりと笑うその顔が神様に見えた。そのくらい必死だったのよ
くう兄は苛立たしげに舌打ちして、でも今だに全然まったく状況理
解してないシェイドの顔を見て

何かを諦めたように、深いふかーいたため息をついた

それが終了の合図だった

この時ばかりはこの超絶朴念仁にも感謝したい

「・・・なんなんだ？」

「あなたは気にしなくてもいいわよ。あとゼリーは自分で取るから」

すっと薄紅のそれを掬って口に含むと、甘酸っぱい味が広がる

ああ、おいしい・・・

『じゃー後は任せたよルー』

『ざけんな仕事しやがれ昼行燈が』

とかバツクで聞こえるけど、気にしない

一気に終息へ向かった事態に安堵しつつ、今度は自分のゼリーに匙を

「会長！あれほど勝手に動かないようにと言っただろう！何を
している...」

突き刺した瞬間、部屋の温度が軽く10度は下がった
しかも三方向から冷気が出てるよ

向かう先は、今現在扉を壊さんばかりの勢いで開いた、剣士科の人
発信源は一つは紫ちゃん、もう一つはシェイド、そして

「……………今すぐこの場から消え失せる。目障りだ」

絶対零度の眼差しを向けて、半端ない殺気をかます、くう兄

「ふん！授業には顔を出さなくせに、生徒会室には入り浸るのか
良い御身分だな！久我紅副会長！」

なんだかわからないけど、敵対心剥き出しな剣士科の人
隣でぼそりと呟いたシェイドによれば、前に喧嘩ふっかけてきた口
ーシェンナの兄らしい

……………カオスですか

生徒会室がカオス化する、ほんの数分前。廊下にて

「つーか珍しいな。あんたが仕事するなんて」

両の手を書類でいっぱいにし、ヒールを鳴らして歩くのは天使科5年生 ルイス・カメラリア・X・（名字は秘密）生徒会の下に位置する『執行部』の一員だ

スレンダーな体のため、タイトスカートさえはいていなければ、男と間違える者もいるだろう

その瞬間に腰に携えた二丁拳銃が火を噴くだろうが

「というか、僕の場合は会いたい人がいるだけ」

その二丁拳銃の日常的被害者にして、ルイスことルーの上司・執行部会長のスマルト・G・バーガンディはやる気がみじんも感じられない、間のびした声で返した

それからへらへらとした笑みを浮かべて

「今ならちよーどあの噂の二人組が来てるし」

「どこ情報だよ、それ」

「なに〜知りたいの？ルー」

ルイスは答えない。聞いたところで、スマルトは答えないから自分より頭二つは小さい上級生を見下ろし、眉尻を上げた

「つーかなんでもいいけど、ちったあ荷物持てよ！女にばっか持たせんな！」

「え〜だってルーの方が絶対力あるし。適材適所でしょ」

とてもじゃないが、20歳の男には見えない若い仕草で首を傾けるスマルトに、軽く殺意が湧いた

がしかし、両手がふさがっているためいつものように銃をとることが出来ない

「……………これ置いたら、覚えてやがれ」

「僕興味ないことはすぐ忘れるんだよね〜」

あはははははは

汚れも模様もない真っ白なコートを揺らし、くるりと遊ぶようにまわる彼の背中へ

ルイスは迷いもなく蹴りを放った

「……………にしても珍しいよな。あんたが噂に興味持つなんて」

「だってさーあの紫くと紅くんの秘蔵っ子だよ？ルーは興味でない？」

蹴られた拍子に打った額をさすりつつ、スマルトは眼を三日月に細めた

「僕は興味津津〜」

だからーウォルくんが交渉行くなって張り切ってた仕事もらってきた

の

「ほーそーかい・・・って」

今なんつったテメエ

「だーから、ウォルくんが紫くんに出会ったためにとっておいた生徒会用の仕事、僕がもらってきたの
彼いなかったし、チャーンズと思っただけ？」

悪びれもせず、どころか罪悪感など微塵も感じていない笑みを浮かべて

「だから帰ってきたら怒るだろうねえ。ルーも一緒に怒られようね？」

今度こそ、ルイスは書類をかなぐり捨ててホルスターに手を伸ばした
愛用の銃が乱射されるまで、0コンマ3秒ほどであった

かくして不幸にも、学園内で最も行きたくない場所トップ3が一角
生徒会と執行部が同時に存在する空間、が出来上がってしまった
だったのであった

生徒会と執行部 1 (後書き)

とりあえずキャラ出しちまおつぜの章第二段

例えば友達とお菓子つまみながらおしゃべりしたり、愚痴言いながら一緒に宿題したり、好きな人の話で盛り上がったり

つてのが、一般的なお休みの過ごし方だと思うわけで
あ、最後はお泊まり会の夜?・・・ま、いいわ

えーとにかく、平穏な昼下がりにっていうのは決してツンドラ地帯みたい
に極寒だったり、暗黒渦巻くカオスな光景ではありえないわけで
むしろそんな非常識的な風景は、現実のものではないと割り切って
スルーしても誰も責めないよね、っていうか責めてくれるなど私は
主張したい!

・・・・・・なーんて

乾いた笑みがこぼれる

「この状況でなーにいつてんの私」

アハハハハハ

えーっとこんにちは皆様、本日はお日柄もよく・・・って誰に話して
てるの私

・・・ま、いいや

ええお日柄は非常にいいんです。そりゃあもう理想の昼下がりの日差し！

中庭で本でも読んだら気持ちいいだろうなーなんて思うような素敵なお天気！

なんですけどね

そんな日に、なんで、よりにもよって

「消え失せる」

「形だけの副会長が何を偉そ「耳障りだ、黙れ、邪魔だ、去ね」

「おい！せめて最後まで「これ以上喋るな、紫、六花を連れて別室に行っている。ティエンラン、篁、桜、血に汚れたくなければ下がっている。邪魔だ」

血生臭い予感漂いまくりなんですか？

しかもここ学校、それも生徒会室！

あつれー生徒会室って生徒の模範になるような生徒がいるんじゃないかってつけ？

ってこれは今更か。なんたってボス紫ちゃんだし

・・・・・・・・・・じゃなくて！すつとぼけたこと言ってる場合じゃない！

見たとこ止め役がない以上、私まで現実逃避の旅に出てる暇はない

正直、面倒だけどね！

「ちよーつと待ったくう兄！」

刀に手をかけたくう兄がなんだ、と振り返る

ホントに血が繋がってるのか疑わしいほど顔のよろしい従兄は、機嫌が悪いと迫力3割増しだ

「や、何がなんだかわからないけど、一応ここ生徒会室！学校内！だから刃傷沙汰は控えよう、ね？」

くう兄がお願い、に弱いのはよく知ってる

昔よくねだつて遊びに連れて行ってもらったのだ

つて今はそれは置いておいて

まあ確かに部屋が汚れるな、とかいいつも抜きかけだった刀が納められる

あーよかった、んでまあ後は間違いなく原因だろうローシエンナ（兄）にどっかに行ってもらって・・・

「ふん、お前の知り合いにも常識のある奴はいるようだな」

人がせつかく収めたつてのにこの坊ちゃんは！

はっと鼻で笑う様は、初対面の私が見ても腹が立つ

というか殴りたい、っていうか空気読め？あんた死にかけだったんだからね？

ってほらまたそんなこと言うからくう兄刀抜いてるじゃん！

「くう兄くう気持は十二分に分かるし正直私もこの手の奴は畳んで捨てたいんだけどっ！」

今は、いやこの場ではやめて！

羽交い絞めに・・・出来たらいいけど、頭一つ半は違う背丈じゃ無理で

とにかく止めようと背中からしがみつく

と、途端にピタリとくう兄の動きが止まった

ん？あれ、機嫌直った？いやでもまた刀抜いてるし・・・

とか思っていた矢先、紫ちゃんの呆れた声が

「紅、嬉しいのは分かるけどやせ我慢はやめなさい」

んん？

何のこと、と振り返ると、たまたま目のあつたシェイドがバカ！と口パクでいう

途端にいつもの癖、というか一気に頭に血が昇る

「アンタにバカって言われる筋合いないわよ！」

「・・・残念ながら、今回だけはその筋合いがあるのよ六花ちゃん」

まあ面白がってた私にも、原因はあるけどね

と、紫ちゃんが立ちあがってついつとこちらに近づいた

ローシェンナ（兄）が何か言ってたみたいけど、そこら辺は軽く無視で

そして私からはよく見えないくう兄の顔を吟味するように見、それから視線を落として私が抱きついているところを見、そして私を見て

「六花ちゃん……そろそろ話してあげないと、紅のあばらが折れるわ」

白峰六花、100キロの本棚を悠々持ち上げ、大の男3人を引きずるだけの怪力の持ち主

当然の如く、その抱きつきもとい絞め技は 半端ではない

慌てていて、力加減を忘れていたなら なおさら

「ギャーくう兄死なないで！」

私この年で前科つきたくないっ！

「あら、紅が訴えなければ問題ないわよ。この程度ならすぐ直るだろっし」

「そっという問題ですか！」

珍しいシェイドのツッコミは完全にスルーでした
・・・すねないでよ

「それで、執行部会長副会長がお揃いで、何か御用？」

騒ぎが収まり、全員が一息ついたテーブルでニコリと微笑みながら
紫ちゃんが切り出す

ただし会長さんスマルトの方だけみて

一瞬殺気立った副会長・ローシエンナ兄に冷や汗が流れたんだけど

「ボクはお仕事、ウォルくんは知らない。何しに来たの？」

いけしゃあしゃあと聞く会長さんを見て、ああそういう役回りなんだ、と納得

「・・・しっかしまあ、そうそうたる顔ぶれよねえ」

誰か卒倒してもおかしくないわよ

「・・・まあな」

そう、あの他人に無関心シェイドが納得するくらい、ありえない顔ぶれだ

執行部 学園の秩序を守ることを第一とする、生徒による自警組織
ま、要するに規律違反者や問題児とつ捕まえてお仕置きするのが仕事な組織だ

ちなみに私は連中に準・要注意人物としてバツチリ目えつけられます

主な原因の伯爵令嬢は何も言われてないのにね！まあこれだけでもどんな組織かってーのはわかるでしょう

で、まあどちらかというとカリスマ性重視な生徒会長と違って、厳格真面目、ついでにいえば御家柄の高い人が代表になるだけあって、一応上司にあたるはずの生徒会との仲はすこぶる悪い
……まあそれは生徒会がトンデモ企画おっ立てて授業潰してる、つてのもあるんだけど

とにかく代々顔を合わせればそれは下っ端だろうが空気が凍る生徒会と執行部

その学園二大巨頭のトップとナンバー2が顔合わせるとくれば

「……………カオスだわ」

とはいっても、悪い空気放しまくってるのは、くう兄とローシェンナ兄だけだけどね

いや、だけ、っていうには空気悪すぎるっていつか、まさに一触即発！って感じだけでも

ちらりと視線をやる

それぞれの代表を挟んで、お互い視線で射殺そうとしてるみたいなくう兄とローシェンナ兄

・・・の、間で

「やくこの紅茶なかなかだねえ紫くん。どこのもの？」

「第2世界のウイングランドよ。ちょっとこの間“お仕事”に行つた時に買ってきたの」

とてもじゃないが、敵対組織のボス同志には見えない会長二人

えーちなみに注釈

紫ちゃんは、たまーに藍さんとかおばあさんの瑪瑙さんに頼まれて、お仕事というなの荒行をかましているそうです

ちなみに聞いた話じゃあこの時の『お仕事』では山一つぶつ飛ばしたらしいです、紫ちゃん

・・・や、うん、ホント何やってんだろう紫ちゃん

まあ聞いたが最期だから知りたくもないけどね！

「なんていつか・・・のんびりしてるよね、会長さんの方は」

「そりゃそうだ、うちの昼行燈に久我紫と戦う度胸なんざねえよ」

ぱつと振り向くと、立ったまま紅茶飲んでる美人さん

……せつかくの綺麗なお顔が歪んでらっしゃいますが

「あの」

「なにかっつーと面倒面倒面倒倒いいやがって！こっちの気もしれってんだよっ！だいたいあの馬鹿が代表になってから、すっかり執行部はふぬけたって先輩連中から言われてっ！っーかなんでその苦情があたしんとこ来るんだよ！！！」

……え、ん？今もしかして愚痴られてんの私？

っっていうか苦労してるんだなあこの人

スマルトさん、というか会長さんとは話したことないけど……あの紫ちゃんが面白って“大絶賛”するくらいだから、子供っぽい顔して諸々あるんだろうなあ……

……なんかそんなのばっかじゃない？うちの学園

「今さらだろ」

「美人さん、読心術でも使えるんですか？」

「全部声出てんだよ、あんだ」

うっそ、うわーマズイな。暫くやってないうちに、腹芸できなくなっただけ？

「心配しなくても、お前の性格の悪さはそう簡単には治らないぞ」

「よーっし今ここにアンタをボコることが決定したから、覚悟しなさいシェイド」

「断る」

「残念、意見なんか聞いてないのよ！さっさと面貸しなさいっ！！」

ひよいつとゼリー（2個目）をつまみながら逃げるシェイド
あなた・・・伯爵令嬢やファンが見たら泣くぞ

まあ泣いてくれた方が、日頃常々嫌がらせを受けてる身としては嬉しいんだけどね！

「アハハハ、元気だねえ紅くんの従妹ちゃん」

「・・・・・・・・・どっから湧いて出やがった」

「失礼だね、ルー。僕はフツに紫くんの隣からルーの隣に来ただけだよ」

笑うと更に幼くなる顔に満面の笑みを浮かべ、ひと際空気が悪い方に顎をしゃくる

・・・見れば紫ちゃんの腰にくう兄が手をまわし、それにローシェンナ兄が噛みついていて

まあ一言でいえば

「修羅場？」

「三角関係、っていうにはウォルくんが一方的すぎて笑えるけどね」

さらりととんでもないことを言って、会長さんは私にニッコリ笑顔
を向けて

「始めまして、僕はスマルト・G・バーガンディ。天使科の7年だよ

名字って他人行儀だから名前でよんでね〜」

「へ、あ、白峰六花、魔女科2年です！で、こっちが」

「へいど「ちゃんと食べてからいいなさい！」シエイド・ラ・ティ
エンラン、剣士科の2年です

あ、おい！俺のだ、盗るなよ！」

「アンタがちゃんと自己紹介しないからでしょ！？」

「アハハ、仲良しだなあ〜。ねえ、ルー？あ、この子はルーって
いてね」

勝手に自己紹介を始めた会長さんの口をふさぎ、美人さんは口角を
上げて

「ルイス・カメリア・X、この昼行燈と同じく天使科の5年。んで、
執行部実行部隊だ

規律違反する馬鹿にや言い訳無用で鉛玉くれてやるから、覚悟しと
け」

その手に構えるゴツイ銃が怖いよ美人さん

一瞬動きを止めた私とシエイドに、まったく動じていないスマルト
さんはまたもニッコリ

「ルーは短気だから、悪戯する時は見つからないように気をつけて
ね？

アハハ、見つからなかったら悪戯も悪戯じゃなくなるからね〜」

「仮にも執行部の代表が、規律違反推奨してんじゃねえよこの駄目
会長！」

ルイスの蹴りが飛ぶ。ついでに銃声が響いたのは、普段の癖だ

ここしばらくの特訓で危機回避能力をすっかり身につけた六花とシ

エイドは、離れて完全傍観体制に入っていた桜と篁のところまで非難する

「……なんていうか」

何しに来たの、あの人達

「ふぁーは（さあな）」

六花は無言で、ゼリーに喰いつくシェイドの頭をはたいた

「……つか、結局何しにいったんだよ、アンタ」

ひと悶着終えて、結局後日仕切り直しということで生徒会室を後にした執行部

八つ当たりともいえるウォルナットの小言を聞き終え、ルイスは懲りた風もなく菓子をつまむスマルトを睨むが、当の本人は素知らぬ顔で

「だーから、言ったじゃない、ルー。紫くんのお気に入り見たの〜」

カラフルなチョコレートを一つつまみあげ、口に含む
ルイスは舌打ち一つし、苛立たしげに机をたたいた

「なんでわざわざ見に行ったのか、って聞いてんだよ！」

わかってんだろ、アンタなら！

苦々しげに眉根を寄せるルイスに対し、あくまでスマルトはのんびりした調子で

「それは〜ルーの買被り過ぎ〜。あ、チョコレート食べる？」

「いらねえよ！んなことより、あんたはもつと前に出張れ！これだから前の連中にウダウダと！」

「僕にウォルくんのマネしろって〜？やだよ、命がいくつあっても足りないじゃない」

「そういうことじゃ・・・は？命？」

そうそう、頷き、それからやつとチョコレートに向けていた視線をルイスにやって

「ところでルー、今日はちゃんとお花ちゃんとシェイドくんの顔覚えてきた？」

「あ？まあ、白峰六花は前から準・注意人物で覚えてるし

シェイド・ラ・ティエンランも有名だからな、覚えてっけど・・・」

「じゃあいいや、忘れないでね。紫くんの“お気に入り”だから」

疑問符を浮かべるルイスに、スマルトはまたニコリと笑って、それから思い出したように

「あ、そうそう。悪いけどさあ、その失敗作捨ててきてくれない？」

視線の先には紙の山　　ちょうど、ルイスが生徒会に運んだものと同じくらいの量が

訝しげに一枚ぬきとり、ざっと眺めてルイスは目を見張った

「ちょ、おい会長！これ生徒会に持っていくはずの書類じゃ」

「だーかーらー失敗作なの、それ。失敗してたの捨てていったらそんなになっちゃって

非力な僕じゃーゴミ箱まで持ってけないからヨロシク」

「はあっ！？おい、ふざけ」あ、だーいじょうぶ。ルーはいい子だから大丈夫だったよ」

「んなこと聞いてんじゃ・・・」

眉根を寄せ、再びルイスは書類に視線を落とし　　片眉をはね上げた

「・・・こーりや確かに失敗作だな」

「でしょ？」

「つとに、最近の部員は弛んでんじゃねえの？書類もまともにつくれねえなんて、よっ！」

しごかねえとな、なんて部員が聞けば震えあがりそうなことを呟きながらルイスが部屋を後にする

何だかんだ言いつつ、きつちり紙束も持って行ったルイスの背中に笑みをくれ

「ホントにルーはいい子だねえ

そう思わない？紫くん」

『確かに、執行部員にしては出来た子じゃない』

机の上に散らかされたチョコレートと共に無造作に置かれた石が、ぼうつと光を放つ

通信石だ

「でしょーボクのお気に入りに、いいでしょーいい子でしょーあげないからね」

『貴方のお気に入りを盗ろうなんて、命知らずはいないんじゃない？』

「そーかなあ、君に嫌がらせにかかるおバカさんがいるくらいだから、いるかもしれないよ？」

へにやりと笑って、先ほどまで生徒会宛の不備書類が積まれてあった場所に視線をやり

「ほんとにねえ、みんな面倒なこと好きだよねえ」

『貴方の様な、面倒くさがりばかりだと私も楽なのだけどね』

「頑張つて人に迷惑かける、なんて。世の中上手く出来てないものだよねえ」

クスリという笑みを残して、通信は途切れた

「まーボクはせいぜい頑張らないで行くさ」

何か色々間違つたことを呟きつつ、スマルトは縦縞模様のカップを2つ引きよせ、茶を注ぐ

ちよつど彼の“お気に入り”が文句を携えて、帰って来たところだ
った

生徒会と執行部 2 (後書き)

キャラ増量編は終わりです。ごっちゃごっちゃしてますが話が動き出せばそれぞれもっと濃く出来るかと・・・

次回からちょっと話が動きます。テスト編です

テストはマッハでやってくる 1

理事長からしてチャラチャラしているマルーン学園だが、一応『学校』という以上、必要最低限の生徒達には歓迎されない行事もあるわけだ

現年2回のテストの一発目 階級試験を1週間後に控え、大なり小なりピリピリしている学園内で、おそらく一・二を争うほどの陰鬱オーラを放つ少女が、ここに一人

「…………お前、いい加減にその陰鬱な顔をやめろ」

飯がまずくなる

と相変わらずの無神経発言にフォークが一本飛ぶ慣れた調子でゆるくかわし、シェイドは目の前で暗雲背負った様子で淡々とピラフをつまむ六花に視線を戻して

「テストと言ったって階級試験は実技だけだろう。成績は前年度のものが考慮されるから、お前は全然問題ないだろうが」

ほぼ満点叩きだす奴が、今さら何を気にするんだよ

訝しげ　若干嫉妬交じりの皮肉に、六花はくらくい赤紫の瞳をピラフから上げて

「・・・ふ、そりゃあね、あんたは実技だけならいいだろうけどね」

1オクターブは低い声で漏れる乾いた笑いに、思わず身を引いてからシェイドは何かに思い至ったようで

「・・・・・・・・・・ああ、お前の実技、酷いもんな」

「ホントのことだけどあんたに憐れみこめた目線で言われると心底腹が立つわ！」

殴らせる！

あ、こらお前スープが零れるだろうが！

かまうか！

かまえ！

知るか！

知つとけ！

周囲の視線も気にせず、掴みあい秒読み態勢に入った2人を止めたのは、あからさま過ぎる含みを含んだ声

「はいはいそこのバカップル、いちゃつくのは結構だけど場所は選びなさい」

「まあしょうがないよ。付き合い初めはお互いのことしか見えない、
っていうしね？」

「まー俺としては2人が仲良くしてくれると嬉しいけどな。とって
も」

「……………ふん」

「いつまでもそのネタで引っ張るな！！！！」

現れた友人達に2人揃って噛みつく

が、見事にユニゾンした発言がさらに友人達を増長することを2人
はまだわかっていない

案の定、ノリの良すぎるゆずり、灰、リイーアンの3人組がそれは
もう腹立たしいほどにやついた笑みを浮かべて視線を交わし

486

「あらまー仲が宜しいこと、アタシ達お邪魔虫みたいねミナサン」

「ごめんねシエイド、君に嫌がらせするのは大好きだけど今回はや
めておくよ。馬に蹴られたくないし」

「俺達のことには気にせず、2人でべたつくなり痴話喧嘩なりご自由
に」

にんまり笑って移動しようとする友人達に、六花の頭がビキリと音
を立てる

「だーかーらっ！それをやめろっつってんでしょーがこの陰険トリ
オ！」

「まっ！この明朗快活、太陽のようなゆずりさんを捕まえて陰険と
は失礼な

ていうか、勉強オタクと鍛練オタクに言われたくないしい」

「誰が勉強オタクよ！」「鍛練に励んで何が悪い！」

そしてまた含み笑い

「……………いい加減、食べればいいのに」

唯一パーティのみが正論を述べ、スープを啜った

「…たく…なんか最近、あの3人が合い過ぎじゃない？」

主に私とシェイドの件で　嫌な気があったもんよね、ホント

六花は一人ぶつくさ言いながら、寮へ足を向けた

普段なら授業が終われば図書館に直行するところだが、この時期の図書館は息ひとつつきにも気を使わなければならない張りつめた空気が流れているので、流石の六花も行く気にはなれなかった

なにかと厄介事を引き寄せるたち、という自覚はあるのだ。一応

「なにかにつけて仲が良いだのなんだの、誤解されるようなことば
っかりいって！」

「というか私とシェイドのないことないこと、たまにあること知れ渡
ってる原因って、あの3人のような・・・
いや、まあ若干一名は明らかに原因なんだけど！」

ちなみにその若干一名には噂どころか、既成事実を言う強硬手段を
もって噂を真実に変える気満々なのだが・・・・・・考えたくもな
いことなので、今は忘れておく。というか忘れない

なんといっても今はそれどころではないのだから

ちらりと手元に視線を落とせば、抱えた本の上の封筒が嫌でも目に
入る

六花の運命の日付（試験日）が書かれた、封筒が

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・よりもよって最終日」

しかも最終組、審査員の疲労がたまって一番審査がキツイ時間って・
・
ただでさえ過去の所業（試験会場爆破、審査員のツラを吹っ飛ばす、
貴重な家具を破壊などなど）で目えつけられてるっていうのに！

過去3回（初回は魔女科の入学前試験）の試験官達の白い目が蘇り、

ずきりと腹部が痛んだ

らしくない、らしくなさすぎるわーホント

予想外にこたえていたらしい事に今さら気づき、苦笑する

「自信がないなら受けなければいい」

はっと足を止めて振り向くと、不機嫌そうな琥珀の目と目が合う

思わず眉が寄っちゃったけど、相手も似たような顔だから気にしないだろう

「・・・別に自信がないわけじゃないわよ、クローヴァーさん」

「だとしたら自信過剰だな。2学年で未だ新月レベルの学生達は貴方以外全員実技室にこもっているというのに、貴方は予約すらしていない」

いちいちエックしたんかい・・・放つといってくればいいのに、なんでこう絡むかなあこの人は！

「自信がなく試験を見送るというならともかく、試験は受ける。というのに一番落第の可能性が高い貴女が練習もしないとは・・・魔女科の名前にさらに泥を塗ることだけはやめてもらいたいな」

「・・・そのセリフ、いい加減聞き飽きたわ」

言うとかローヴァーさんはさらに目を眇めて

「だったら言わせないでくれ。私も小言のような事を何度も言いたくない

貴女がいい加減真面目にやるか、やめてくれればいいだけのことだ」

「簡単に言ってくれるわね」

「簡単なことだ。今よりも練習するか、辞めると言うだけだろう」

人の事情も知らないで好き勝手言いやが・・・いやいや、気にしたら負け。負けよ、私

確かに事情を知らなければ、練習してないように見えてもしょうがないわけだし　だからって腹立たないわけじゃないけどね。

そんな出来た人間じゃないからね私！

「御期待に添えなくて申し訳ないけど、私は辞めないから。あと練習はしてます、別に実習室でしか出来ないわけじゃないでしょう？」

・・・それと、私のことが嫌いなら放っておいてくれない？私の方から貴方に関わる気は全くないから、貴方さえ関わらなきゃ、私たちお互い苛々することもなく精神的に平和に暮らせると思うんだけど」

少なくとも、私は確実に！

しばしの沈黙、そして睨みあい

動いたのは私が先だった

こんなところで無駄に時間を潰す暇も、苦手な人間と長く居続けるマゾな趣味もない

一応礼儀上一言言って踵を返す・・・返そうとした

「実習室以外とは、貴女が会長と2人でしている事のことか？」

「・・・調べたの？」

調べなければわかるはずがない。あの紫ちゃんが必要以上に　本
当に、なんでだろうと思うくらい過剰に　裏工作して隠している

のだ

「どうしてそこまで」

そこまでして嫌いな人間に関わるわけ？・・・いや、ちょっと待った
何かずれてる気がする。私の認識と、彼女の認識が

「・・・どうして」

どうしてはこっちのセリフ、言うよりクローヴァーさんが口を開く
方が早かった

「どうして貴女のような者が、会長と」

今までにない苦々しげな視線、本人も気づいたのかすぐにいつもの
固い顔に戻ってさっさとどこかに言ってしまったけど、シェイドじ
やあるまいし私が見逃すはずはなく

・・・まさか

「紫ちゃんシンパかい！」

思わず叫ぶ。たまたま通りかかった人がぎょっとした気もするけど、
今はどうでもいい

というか今さらそんな視線慣れた

っていうか、もしかしてもしかしなくとも私が必要以上に（他の新
月レベルの子と比べて明らかに！）ネチネチ言われてたのって、紫
ちゃんと親戚だからか！

性格はともかく、実力は超高級折り紙付きでおまけに美人な紫ちゃん
は学科問わずファンが多い
その中には神格化、まではいかないけど崇拜に近いところまでいつち
やってる人たちもいる。で、その人たちにしてみれば、憧れの紫様
の親戚が落ちこぼれなんて許せない！っていう勝手な理論で絡んで
くる奴らがいたわね、確かに

いや、そのこと自体は別に驚かないけど・・・まさか、あのクロ
ヴァーさんまでがねえ

まあ

「わかったからって、どうにかなるわけじゃないけど」

むしろそういうタイプは、私かたとえレベル上げたって何かしら荒
を探してつかかってくる分、普通より面倒くさい

在り得る未来を想像して、がくりと肩を落とした

「試験らしいな」

「はい？」

間の抜けた返事になったのは、あまりにも唐突だったからだ
シェイドが一瞬呆けた瞬間、右手から剣が弾きとんだ

「剣のない剣士など笑いの種にしかないぞ」

いいつつも紅の剣は鞘に収まったままで、手にはない
最近組手の他に剣の稽古もつけてくれるようになったものの、紅
が剣を使うことはなかった

・・・なのに何故か、勝てないんだよな

内心で首をかしげつつ、シェイドは剣を拾いあげてささやかに反抗
を試みた

「いきなり試験のことを言うから」

「別におかしくもないだろうが。この時期に」

「いえ、貴方が言ったことが」

おかしいんです、というより前にシェイドの頬を紅の足先が掠めた
反射で身を引き、下段から腹部に向けて剣を叩き込む　素手だ
から、などと加減すれば動けなくなるのはシェイドの方なので、す
でに遠慮はない

「お前は今『伯爵』レベルだったか」
「はいっ……っ！」

微塵の容赦もない紅の拳が肩を打った。返すように蹴りを繰り返したが、軽くよけられる

「次でレベルが上がれば『侯爵』か。ふん、レベルを爵位に例えるのはいかにも『剣士科』といったところか」

隠しもしない皮肉の色を感じて、片眉を上げた

と同時に紅の膝がシェイドの腹　しかも鳩尾に叩き込まれ、シェイドは6回目の膝をついた

「……あなたも、剣士科なのに」

その言い方では、まるで剣士科を嫌っているようだ

「そうだ、俺は剣士だ。だがここにはくだらない人間が多すぎる

剣士は嫌いではないが、くだらない人間の集団は好かん」

冷たく言い捨てて、立ち上がりざまに繰り返されたシェイドの蹴りを捕まえ、引き倒す

「それ以上の理由はない
前も起き上がる時に腹に蹴りだっただろう。わかりやす過ぎる、パターンを変える」

いった瞬間、ちょうどシェイドの顔のすぐ横に強烈なかかと落とし必死に首を背けたおかげか頬から血が出る程度だったが、あれは明らかに顔面ド真中を狙ってたぞ……！

というのが被害者・シェイドの見解

むっとして足首をつかみ、引いて体勢を崩そうとしたがあっけなく振りはらわれる

決して軟弱なわけではないが、シェイドより紅の方が力は強かったようだ

「力技に出たいなら力をつけてからにしろ」

昼寝が趣味、というより日常の活動の割が睡眠の男はそうとは思えぬ引き締まった体軀を翻した

今日はもう終わり、と暗に告げているのだ

痛む体を起こし、頭を振る

と、いつもならわき目も振らずに帰る男が珍しく立ち止まり、振り返った

襟足の長い赤髪を鬱陶しげによけ、紅はただ一言

「お前、今回の試験は受けるな」

「はい？」

と

「元気ないわね、六花ちゃん」

ちよつと休憩しましょうか。と言つやいなやすぐにどこからか茶と菓子が現れた

紫が魔術でこついうことをするのは日常茶飯事なので、六花は特に驚きもせずに差し出された茶に口をつけた

うーむ相変わらず美味しい。普通はお嬢様って料理出来ないものなんだけどなあ……

あらゆる点で無敵の生徒会長様には今のところ欠点が見当たらない

「そう？……あー試験が近いから、そう見えるのかも」

「ああ、そういえばもうすぐだものね」

既に最高位の紅月レベルにある紫には試験は課されない
その代わりに年単位で貢献度や業務査定があるが、今回の試験では
蚊帳の外だ

なんとなく言葉が見つからず、沈黙が流れる

「六花ちゃん」

沈黙を破ったのは紫の方だった。いつもの落ち着いた調子で

「アレを、今度の試験に受かる程度にまで仕上げなさい」

「・・・は？」

またしても、問題という名の爆弾をよこした

テストはマツハでやってくる 1 (後書き)

テスト編。序章です

テスト編はこの話と、間にワンクッションおいてもう一つが一応繋がってます

テストはマツハでやってくる 2

「……………ちょっと、昨日の今日でなーんで一気に暗さ二倍になつてんのよ」

耐えきれない、と声を上げたのは自身を太陽！とのたまつたゆずりその隣で、向かい合わせにおもーい空気を漂わせながら六花とシェイドが黙々と丼を食む

……………あちゃーこりやまたなーんかあつたわね、試験関連で

勘は悪くない、どころかかなり良いという自負はある
ふむ、と一息ついて腕を組み

「灰くん、私は六花ね」

おもむろに言うと、それだけで灰くんは全部を理解してニコリと笑い

「じゃあ僕はシェイドを吐かせるよ」

ぐっと親指を立てる

全部言わなくても通じるっていいわーホント

そうと決まれば即座に行動、がアタシのポリシー

くらーい顔してもさもさ食ってる六花の腕を取り、立ち上がらせる
(コイツほどじゃないけど、アタシも腕力はあるのよねー)

「六花」ちよつと花摘みにいかない？」

「・・・今あなたの口から最高に似合わない単語が出たんだけど
ついに奇特的な恋人が出来て頭の中が春ボケになっちゃったの？」

「暗いくせに口だけは腹立つほど達者よね。トイレ行くわよって言
ってんの！」

「別に今、行きたくないんじゃーちよつと言ってくるからーパティ
とリーーエンくん、終わったら先帰っててねん」

じゃー！と手を上げて駆け出せば、視界の端にぐったりしたシェイド
くんをひきずる灰くんが

人畜無害な顔してわりとワイルド、と彼女のいい男データの隅にこ
っそり付け加えた

「・・・トイレじゃなかったわけ？」

引きずられる先は、明らかに目的地とは違う方向
幼馴染に胡乱気な視線を向けると、相変わらず演技か本性かわから
ない笑顔できっぱりと

「気が変わった？裏庭行くわよ裏庭！」

「授業！」

「アంతないでしょ？」

「ゆずりはあるじゃない」

「んなもんさぼりよ、さぼ」ゆずり!」・・・いいのゝ次は師弟合同授業だけど、うちの師匠今いないから」

ああそうだった

ゆずりのいる獣士科は魔女科や剣士科みたいにレベルがない代わりに、先輩後輩の師弟制度がある

そうやって下をつけることで一層責任感なんかを養うのが目的らしい

低学年から一番危険が伴うのが獣士科だからね。怪我人も多いし

「お師匠さん特別演習だっけ?」

「そう、ひと月は帰ってこないってさ」

おかげでこっちは楽なもんよ、優秀な師匠万歳よね」

笑いながらゆずりはいい具合に影をつくる木の下に腰かけた

昔からこつという場所取りの嗅覚はいいのだ

私もならって隣に腰かける。と、ゆずりはぐりんと首を回して

「で、今度は何があったわけ?お姉さんに吐いちゃいなさいよ」

「脇こづかないでくれる?」

「話をそらさな」い、って言ってもこの時期あんたが落ち込むつつたら試験のことくらいか」

・・・流石に鋭い

昔から無駄に勘がいいもんだから、隠し事なんて出来た試しがない

ただ紫ちゃんとの約束の手前、言っているのか迷ったけど・・・

まあ、肝心なこと言わなきゃいつか

「……紫ちゃんに、今度の試験で受かかっていわれたのよ」
「あらまあそりゃ連敗続きのアンタにゃ酷なコト」
「はつきり言うわね」

まあゆずりらしいって言えばらしいけどね
歯に衣着せない物言いもここまでズパツといわれると逆に気になら
ない

……まあ、何度か絡まれたこともあるけど

そしてだいたい私も巻き込まれて、被害被るのよねえ……
トラブルメーカーしかいないのかしら、私の周りには！（最大の例：
紫ちゃん）

「んーで、試験に関しては小心者のアンタは、プレッシャーで潰れ
かけと」

「小心者は余計！これでも度胸あるってよく言われるんだから！」
「や、これでも何もまんまありそうだし」

あっそう！

ぶーたれるとゆずりは大げさに肩をすくめて

「そういうことじゃなくてさあ、アンタってテストの前になるとす
つごく神経質になるでしょ？」

まあアタシだってテスト前は落ち着けないけどさ、アンタの場合ち

よつと異常なのよね」

「異常……」

「そ、普段は気にしないようなちよつとした失敗とかで、人生最大の失恋したみたいにごん底落ち込むし
あと周りの反応とかにもさ、正直ちよつと自意識過剰なくらい過敏になつてるわよ？」

魔女科の連中がテストの話するたびに、こっそりビクッてしてるの気が付いてる？」

気がつきませんでしたとも、ええ

思いきり顔に出ていたのか、ゆずりはやっぱ気づいてなかったか・
・と呟き

「まーそうなる気持ちもわかるけどさ」

「……さつき言った通り、ゆずりには隠し事出来たためしがない
だからまあ、私が見たい魔女科でどういう状況にいるのかも全部話している

最近はそのようなことないけど、専門教養部に入ったばかりの頃は休み
時間にわざわざ魔女科にまで遊びに来てくれていた
何だかんだで、面倒見はいいんだよね、ゆずりって

ある意味、獣士科はぴったりなのかもしれない

「どつしてもね」

そんなゆずりだから、何でも言えるのだ

「この時期、思い出しちゃうのよ……覚えてるでしょ、入舎の儀式の「ト」」

「ああ……アンタの記念すべき連続爆破記録の一件目ね」

入舎の儀式っていうのは専門教養部に入ってからすぐにある試験のこと
魔女科ならここで初めて魔術が使えるのだ

これはまあ失敗する人がほとんどの、いわゆる通過儀礼みたいなものだから『失敗』自体は恥ずかしいことじゃない

でも……まあ失敗にもレベルってものがあるわけで

普通ならくすりと笑える可愛い失敗で終わるところ、私はまさかの大爆発

結果、試験会場を半壊させてしまった

「あの時はこんなこと前代未聞だ！って言われて……その時はそれで済んだんだけど」

一度だけなら、ここまで気にしない……いや出鼻くじけたのは痛かったけども

一度だけなら、現状は今よりマシだっただろう。だが一度では終わらなかった

高度な魔術になるにつれて成功する回数は減り、試験官の目も変わっていった

やる気もなく頬杖をつく人、酷い時では見る価値なしと出て行かれたこともある

「・・・一度、本気で大学処分になりかけたし」

「でもそれは、理事長が・・・って、そこで出たんだっけ。

『あの話』」

才能なし、被害が少ないうちに辞めさせるべき、と理事長に訴えられたことがあった

あの時は1年だったから、まだ様子見すべきって理事長・・・というか藍さんが断ったけど

その時訴えた先生が、どこから聞きつけたのか私が理事長の家と親戚だって聞きつけ、何度目かの爆発騒ぎの時に、みんなの目の前で漏らしてしまったのだ

『まったく・・・理事長と親戚筋でなければ、とつくに退学処分になっているところですよ』

あの瞬間の、一気に冷え込んだ教室の空気は今でも忘れられない

『あのクソ教師もどうかしてんのよ！

別にアンタじゃなくなたって、理事長は退学させたりしないっつーのに。他の学科の、もっとタチ悪い問題児だってあの人、見捨てたことないじゃない！』

ゆずりはそう言ってくれたけど、周りがみんなそう言ってくれるかっていえば、そんなわけがない

まあそこから知っての通り諸々あったんだけど・・・今はそれはよ
くて

「どうしても思い出しちゃうのよ、その時のこと」

あきれ果てた白い目、あれに見られるって思うだけで何も手に付か
なくなる

「それプラス紫さんからの受かれ命令か・・・ま、そりゃ暗くも
なるわ」

「だよな。やっぱり世間の目ってきになるものだし」

「そうか？俺は気にしないが」

「そりゃアンタは鋼の神経の持ち主だもん。ある意味怖いもの知ら
ず・・・」

って

なんでいるのよシェイドと灰くん！しかもなんか会話入ってきてる
し！

「ちよつと〴〵女の子の秘密話に入ってくるなんてルール違反よ！
シェイドくんはわかるとして」
「どういう意味だ」
灰くんまで、らし
くないじゃない」

ゆずりの視線を受けて、灰くんは軽く微笑んで

「うん、シェイドが楽に吐いたから、重大そうな六花ちゃんの方手
伝いに行こうと思って」

楽に吐いたって……

「……なんだよ」

「いや、尻に敷かれてるなって」

完全に手綱を握られてるわね、シエイド

「ほっとけ！」

呆れて視線をやれば、むくれてそっぽを向いてしまった
……なんか最近幼児退化してきてない、アンタ？

「にしても、何考えてるんだろうね？君たちの先輩方は
シエイドも似たようなこと言われたんだよ」

「「え？」」

思わず顔を見合わせる。だってまさか、シエイドが実技試験で落ち
込むなんて思わないし

すると察したのか、灰くんは軽く笑って首を振り

「似たような、って言われても内容は逆なんだよ？

シエイドは先輩に今回は試験を受けるなって言われたんだって」

「は？なんで」

「……それがわかれば悩むか」

悩んでたんだ。とは言わなかった

私はシエイドと違って空気読めるしね！

「・・・にしたって、試験受けるなつても妙な話よねえ」

首をかしげるゆずりに、灰くんも頷いて

「白峰さんみたいに受かれ、っていわれるならわかるけどね」

そうよね〜・・・って灰くん、いったいどこから聞いてたの？

「さあ？」

「・・・笑つても誤魔化されないからね」

「うん、やっぱり白峰さんはシエイドより手ごわいな」

・・・ああ、アイツはいつもこの調子で誤魔化されてるのね
本当に、なんてヘタレ野郎なの

「・・・なにか憐れまれている気がするんだが」

「気のせいじゃないわよ。あんたのそのヘタレ加減を憐れんてるの」

「なんだ「はい、そこまで。その件はまた今度言つてやって、白峰さん。それより今は試験のことでしょ？」

電光石火の速さでシエイドの口をふさいだのは、もちろん灰くんだ

・・・鼻と口、両方ふさぐと苦しいよ？

「そーよ、アンタ達がはじめキノコみたいになつてた理由はわかつたけど、そつから先はアンタ達にしかどうしようもないんだから」

う、ごもつとも

そうこうしてるところに、試験の日は近づいてくるし……ああああ、あ、もう！

「まあ、六花は自分でなんとかするしかないわけだけど……シエイドくんは？」

試験受けないの？次受かったら侯爵レベルでしょ？」

頭を抱える六花の肩をなだめるように叩き、ゆずりがシエイドに視線をやる

シエイドはシエイドで微かに首を振って、珍しく深刻気に息をつく

「……どういうつもりなんだろうな、あの人は」

「もうこうなったら直接聞いちゃえば？」

アタシそのクレナイさんは会ったことないからわかんないけど、教えてくれるような人なわけ、六花？」

「ええ……」

くう兄、くう兄ねえ……私ならともかくシエイドとなると……

「……機嫌がよくて気が向いて眠くなかったら教えてくれるんじゃない？」

くう兄つてある意味紫ちゃん以上に読めないからなあ……どうだろう

シエイドのことは嫌いじゃないみたいだから、それだけは救いだけど

「……アンタの親戚つて、ろくなのいないわよね」

「ろくでもない友人代表がそういうこと言わないように！」

って、この時は冗談で言ってたんだけど・・・私たちは忘れていたひねくれてる癖に、いやに馬鹿正直な奴が一人いたことを

「なぜ俺は試験を受けてはいけないんですか？教えてください」

・・・その馬鹿、いやいやシェイドがよりにもよってお昼寝中のくう兄に特攻して、機嫌最悪の寝起き一番にこんなことほざくっていう暴挙にでたのを知るのもう少し後のことで

私は私で、ゆずり達と別れた後、ちよつとした“出会い”を果たしたところだった

練習しようと思ったものの、結局集中できなくて庭に散歩に出たマールン学園は何人も庭師がいて、その人たちによって庭はいつも綺麗に整えられている

その庭にも色々あって、庭師さんごとにわりと好き勝手に整えてい

るらしい

私が一番好きなのは、ザフィニアっていう白い花がある庭。はなびらは大振りだけど、派手じゃなくて可愛らしい雰囲気の花だ

「・・・いい匂い」

そつと顔を寄せると、甘い香りが微かに鼻腔をかすめる

久しぶりに落ち着いた気持ちになっていて、ちよつと浮かれていたせいか後ろに誰かいたのにも気づかなかつた

「そつねえ、とてもいい香り」

のんびりとした口調は人をイラつかせるものじゃなくて、逆に落ち着いた雰囲気を漂わせている

髪は白髪、というより上品なグレーで、長い髪をゆつたりと結わえたおばあさんだ

年はわからないけど、教授を出来る年齢は超えていると思う動きはのんびりしたわりに、しっかりしているけど

「きつと大事に育てられているのねえ・・・花も人と一緒にねえ愛情をたくさん注いでもらつたら、とても綺麗になるのよ」

「そつなんですか」

ええ、とおばあさんにはつこり笑つ

こついうこと言つのは失礼かもしれないけど、なんか可愛らしい笑顔だ

若い頃は美人だったんだろうなーなんて思っていると、じっと見られてることに気付く

・・・なんかしたかな？私

「あの、なにか？」

「ええちよつとね」

おばあさんは優雅な所作で口元に手を当て、軽く首を傾けて

「悩んでいるでしょう、お譲ちゃん」

さつきより何故か輝きを増した笑顔で、言った

テストはマツハでやってくる 2 (後書き)

悩む六花。

一気にぱつと解決するのもあれば、長い時間かけてちよつとずつ上
向いてくるのもあります

六花のは色々根が深いので・・・もうちょっと悩んでもらいます
ええ意地悪じゃないですよ！でも主人公は苦労してなんぼかな(殴

テストはマツハでやってくる 3

薔薇色の水面に、乳白色の円を描くようにミルクが注がれる
六花は本来ストレート派なのだが、おばあさん曰くこの紅茶はミルクを入れてこそらしい

・・・うん。試験も近いってのに、なにやってるんだらう私

出会って5秒でドンピシャリ悩んでるのを当てられて、呆けてる間になぜか一緒にお茶をすることになってしまった。しかも庭園のど真ん中で

断ろうとしても、ご迷惑だった・・・？と（ご年配の方に対してあれだが）子犬のような顔で言われてしまえば、もう断れるわけがない

「ミルクティーじゃあ薄くなっちゃうの、ミルク多目がいいのよ細かいんだけど、味は全然違うわ。今度よかったら飲み比べてみてね？」

しかもほわほわと笑うおばあさんと一緒にいると、いつのまにか絆されていていつもなら聞き流すうんちくにまで耳を傾けてしまうでも確かに、ストレートの時よりなんか香りがいいような・・・

私の表情が緩んだのを見ておばあさんはいつそう笑みを深めたが、私は紅茶に夢中で気付かなかった

「これは第二世界でとれる紅茶でね、レディ・マリアっていうのよふふ、なんでも土地の領主さまが婚約者のお名前を付けたんですって。その後奥様になったマリア嬢も愛飲されているらしいわあ」
「はあ・・・よほど愛してらっしゃったんですね」

その領主さまだつて名前を付けるために紅茶をつくつたわけじゃないだろうけど、土地の名前をつけるのが普通のところに奥さんの名前をつけるなんて、よっぽど愛してなきやできない
なんたつてそれで名前を売っていくわけだからね

「ええ、ご主人が亡くなるまでそれは仲睦まじいご夫婦だつたそうよ・・・ここだけの話なんだけどね、奥様も奥様でご自分の馬にご主人の愛称をつけて可愛がつっていたんですって」

似た者同士ねえ、とおばあさんが笑う

確かに・・・それはもうラブラブ夫婦だつたんだろうなあ。周りの人は大変だつただろう、精神的に
まあ馬つて、ちょっと微妙な気もするけど。うん

「はい、出来上がり。ちょっと熱いからゆっくり飲んでね」

細かい花模様のカップをとり、一口含む

「・・・おいしい」

「ね？」

濃厚だけどあんまり後を引かない感じは好みだ

周りの花の香りと相まって肩の力が抜けていく・・・落ち着くなあ

こんなに落ち着いたの久しぶりかも

・・・学ゲー決まってからこっち、慌ただしかったからなあ

「ふふ、良かった。やっぱり女の子はそうでなくちゃね」

いきなりの発言に首をかしげると、おばあさんは人差し指で眉間をちよいちよいとつついて

「こっ、皺が寄ってたわよ」

え

慌てて手鏡を取り出すが、出してからおばあさんが過去形で言ったのを思い出す

「たまにはね、怖い顔をするのもいいけれど、やっぱりやんわりした顔が一番よ。ずーっと怖い顔していると肩こっちゃうもの」

昔の私の教え子にもね、ずーっとここに皺寄せてた子がいたのせっかく笑うと可愛いのに、いつつもぎゅーってね」

教え子ってことはこの人も教師なんだろうか

その割に全然見ない先生だけど・・・

ころころと笑うおばあさんを上目にみつつ、私はもう一口紅茶を啜った

この雰囲気は、すごく馴染みがあるんだけどなあ・・・

ほんわかーというかまったりーというか・・・
うーんと唸っていると、おばあさんはゆったりと微笑んで

「それで、何をお悩みだったの？よかつたら話してみて、たまには
こんなおばあちゃんの知恵も役に立つのよ」

唐突に切り出された。しかも口調は柔らかだし強制もしてないのに、
何故か逆らえない雰囲気がある

あれだわ。ニーツコリ笑った紫ちゃんの迫力と似てる感じの

あっちは黒紫でこっちはほんわか白オーラだけど

「えーっと、悩みってどうか」

その迫力に押されるように、私は件の試験のことを話した
もちろん学ゲーのことは伏せたままで

「・・・まあそういうわけで、ちょっとプレッシャーに負け
てるんです」

「なるほどねえ。でもそうよね、学生さんにとって試験って一番怖
いものねえ」

おまけに今回は紫ちゃんから絶対受かかって厳命出されてるから・・・
・余計に怖い

背後に黒オーラを背負いつつ微笑む紫ちゃんを想像して、頭を抱える
おばあさんはあらあらと少し困ったように眉尻を下げたが、少し首
を傾げてからパンと手を叩いた

軽く叩いたように見えたがわりと大きな音がして、思わず肩が揺れる

「はい悪い方に考えるのはここでおしまいね

それじゃあちよこつと見方を変えて、いい方に考えてみましょうか」

子供の工作を指示する先生のような気軽さで、おばあさんはリズムカルに手を叩く

何事かと思っただが、おばあさん自身首をかしげて考え事をしているようなので、これは考え中の合図なのか

いきなりの展開に呆気にとられているうちに手拍子が終わったシンキングタイムは終わったようだ

「ねえ、貴方の先輩さんは貴方のことよく知っているの？」

迷いなく頷いた。事によったら私より私のこと知ってるよ、紫ちゃんはんは

「……………絶対あの人読心術とか身につけてるね

と、おばあさんは小首をかしげて

「じゃあ変ねえ」

「？」

「貴方のことをよく知ってるなら、圧力をかけるようなこと言わないんじゃないかしらあ」

「……………確かに。紫ちゃんは私が試験のプレッシャーに弱いのを知ってる

だからいつもは受かれ、どこるか頑張れとも言わない・・・なのに今回は、言った

どうして？特に意味もなく？

それはない。相手はあの紫

ちゃんだ

なら

「貴方にそういうことで、その人はどうなるのかしら」

・・・紫ちゃんが何かするには、三通りの理由がある

一つはお気に入りのため、もう一つは自分のため、そしてその両方

今回は全ての可能性があるから、これはとりあえず置いてお

こう

じゃあ・・・もしあの発言に裏がないとするなら、紫ちゃんは私に

アレを使って試験に受かってほしいことになる

受かったら何がある？

アレが完成する？ 別にわざわざ試験に持ち込まなくたって完

成できるはずだからそれはない

ということは・・・試験で成功するって言うことに意味があるの？

「・・・試験じゃなきゃいけない理由って、なに？」

私に受かってほしい？いや、それなら別にアレにこだわる必要がない
確かに普通に魔術使うよりも成功率は高いけど、それでもまだ未完
成なことに変わりはないし

じゃあ紫ちゃんは私が受かったら何か得をする？ そりゃあ学
ゲーでの戦力ちよこつとアップには貢献できるけど・・・それって
試験なきやいけない理由にはならないよね

「うふふ、行き詰ってるわねえ・・・その先輩さん、そんな
に難解な考え方する子なの？」

「難解というか 予測不能というか、視野が広すぎてどこ見て
るのかわからない人です」

とりあえず紫ちゃんの思考を一言で説明するが難しい、っていうの
だけは確かだ

その難解迷路に挑戦するのは楽じゃない。うんうん唸って首をか
しげていると、おばあさんは指をあごに添えて

「私はその先輩さんのことはよく知らないんだけど・・・どうし
て試験じゃなきやいけないのかは、心当たりがあるわあ」

いち意見として聞いてもらえるかしら

少し考えて、頷いた。1人でもやもやしててもしょうがない
ここは人生の先輩の考えを聞いてみるのもいいかもしれない

おばあさんはカップをそつと下ろし、何事かを思い出すように目を
閉じた

微かに、空気が張り詰める

「・・・お嬢さんは、軍で魔女に求められる役割はなにか御

存じ？」

「えっと

守備と、治癒？」

昔読んだ本を思い返して、答える

おばあさんはうつすら目を見開いて、出来の悪い生徒が珍しく正解した時のようにニッコリと笑った

「そうよ。剣士は攻撃、獣人と獣士は攻撃と偵察には特化しているけれど、一度に広範囲を守られる力を持つのは魔女だけ
そして傷を癒せるのもね」

本来なら治癒能力は魔女より天使の方が高い

でも 天界、第三世界は人の世界とは必要最低限しか交流を持たないし、連合軍（第一世界の軍）に入ることも絶対にならない
だから治癒の魔術、癒術を扱える魔女は重宝されているのだ

軍自体は別にどこかと戦争してるわけじゃなくて治安維持が主な仕事
事なんだけど、異種族間の抗争とかもあるから癒術は絶対に必要だ
それに大群に攻撃された時に、盾みたいに個人じゃなくて広範囲を守る
結界術も

「大変なプレッシャーよ。自分の力次第で大きな被害が起こり、匙加減を間違えただけで治すべき人の命を奪ってしまうのだから
・・・学校ではいい成績を出している子が、実践では全然使えないなんてこともよくあるのよ」

この人、昔軍属だったのかな？

軍の教官から学園の教師になる人も多いから

でもそんなこと聞ける雰囲気ではないし、聞く必要はないんだろう

・・・いま大事なのは、そんなことじゃない

じっとおばあさんを見つめると、ふっと唇が柔らかく弧を描いた

「賢い子ねえ。私が全てを言う前に、何を言わんとしているのか探ろうとしている

・・・大丈夫、そういう子はちゃんとモノになるのよ」

そこで、張り詰めていた空気が一気に緩んだ

「だからねえ、その先輩さんはどんなプレッシャーの中でも成功できるように、練習として試験を使おうとしたんじゃないかしら・・・
って思ったのよ」

当たってるかはわからないけどねえ

と、おばあさんは笑うけれど。私の中ではその考えはとてもしっくりきた

学ゲーは全校生徒が、それどころか各機関のお偉いさんも注目する学園最重要のイベントだ

これで活躍して、卒業後良い待遇で政府や軍に迎えられた先輩達も
少くない

その分相当のプレッシャーもかかってくる。ゆずり情報によれば、
毎年何人がノイローゼで倒れるらしいし

そんな中で、ただの試験で緊張している私がつまくやれるかって言
われたら・・・絶対無理だ

普段上手く出来てる人が出来ないところで、普段出来ない私が出るわけがない……って思っちゃって、パニックになるだろう。ストレスで胃に穴の二つや三つ開けてもおかしくないな

だからちよつと試験で予行演習しときなさい　　あああ、すごく言いそう

生徒の悪夢・試験を踏み台にするとかまさに紫ちゃんの思考だし！
紫ちゃん以外にそんなこと言える人いないわ、絶対

それなら受かりなさい発言にも納得。そういう理由ならあの人は一番効果的な方法で相手にプレッシャーを与えるだろう
わざわざアレを使って受かかって言ったことにも説明がつく

決まり。それだ！

「……って、理由がわかっててもストレスなのには変わらないんだけどね」

まあさつきよりはちよつとすつきりしたけど
でも理由がわかるうがわからなかるうが受からなきゃいけないのは変わらないし！

再び頭を抱えて唸ると、おばあさんがころころと笑い声をあげた
……なんでも私の悩む姿が恋煩い中の教え子に似ていたらしい。なんのこっちゃ

「ごめんなさいね。ちよつと思出しちゃって……そうだ、お詫びに秘伝のプレッシャー解除法を教えてあげる」

「……秘伝？」

なんかそれだけでちよつと怪しい。だいたいプレッシャー解除法って秘伝にするようなもの？

「ふふ、細かいことは考えなくていいのよ？」

ほら、よく緊張する時はお客さんをカボチャと思いなさい、っていうじゃない？」

「はい。……え、まさかそれが秘伝？」

というとおばあさんは笑って首を振って

「いえいえ違うのよ。それにあれねえ、前から思ってたんだけどちよつと無茶じゃない？」

だって顔だけかぼちゃなんてオバケみたいじゃない。それにカボチャには目もないししゃべったりしないでしょ？想像するのちよつと難しくなあい？」

まあ確かに言われてみれば。人をカボチャに変換するのって、結構想像力があるだろうな

「だからもつと簡単に。そうねえ、たとえば嫌いな人の顔をあてはめてみるのよ

目の前には貴方の大嫌いな人たちが並んでいて、失敗すると鼻で笑ったりばーかばーかって冷やかしたりしてくるの。ね、すつごく腹が立たない？」

……立つ

たとえばあの我儘お譲とかが高笑いしながら人の失敗嘲笑ってるシンを想像すると、もつつつつのすごく腹立たしい

「ね。そんな顔させてやるものか、ほえ面かきやがれ、って思うでしょう？」

そうやって怒るとプレッシャーってどこかにいつちゃうのよ。リラックスーって言い聞かせるよりぶんぶん怒った方が逆に落ち着けるのよねえ。不思議なんだけど、効果あるのよ〜これ」

だからどうしてもダメな時は、だまされたと思って試してみてください

その時ちょうど、最後の授業の終わりを告げる鐘が鳴った
いけない、今日もシェイドと約束あるんだった！

慌てて立ち上がると、おばあさんは手拍子一つでお茶セットを消して見せる

「ひきとめてしまってごめんなさいね。でも楽しかったわあ」

「いえ、こちらこそ・・・紅茶ごちそうさまでした！それから他にも、色々と」

ぺこりと頭を下げ、挨拶もそこそこに走り出す

・・・遅れたら魔科学部の実験台の刑なのだ

ふっと振り返ると、おばあさんは笑ってひらひらと手を振っていた
私はもう一度頭を下げ、振り返らずに足を速めた

「聞いていた通り、可愛い子ねえ……………そう思わない？」

振り返ると、茂みの中から不機嫌そうな顔

何年たっても変わらない教え子に、彼女は微笑ましそくに目を細める

「ふふふ、来週の試験が楽しみだこと

ねえあの子が受かる

かどうか、賭けてみない？茶葉一缶」

「……………不謹慎ですよ、お師匠様」

「長生きするには楽しみが必要なんだけれど……………まあいいわ

どのみち2人とも同じ結果にかけるのじゃあ、勝負にならないものねえ」

軽く笑い声を立て、彼女は老齡とは思えない機敏な動きで教え子に近づき、

「さてそれじゃあ行きましようか……………あまりお待ちせずるのは悪いものねえ」

どうだか。と教え子は内心で呟き、かつての師の後を追った

「……………アンタ、なんで特訓始める前からボロボロなの？」

率直な六花の疑問に、シェイドは答える代わりにむっつりと押し黙った

こうなると灰相手にしか聞き出せないのはわかっているので、六花もそれ以上にもいわず、それぞれの師のもとへ足を向けた

そして

「どうして俺は試験を受けてはいけないんですか！」

開口一番のシェイドの発言に、紅はただでさえ悪い目つきをさらに鋭くゆがめて

「……………しつこい。何故理由を言わねばならん、面倒だ」

「面倒でも言ってもらわないと納得できません！」

しつこい、と紅が軽く仕掛けてシェイドを投げ飛ばすが、これで見えぬようなシェイドではない

……………なにせずでに、寝起きの紅に特攻するという自殺行為をしでかした奴だ

受身をとって素早く起き上がると、仕掛けつつ同じ問いを繰り返す

「どっしりですか！」

「しつこいと言っている。お前のどっしりは聞き飽きた」

紅が微かに殺気をにじませる。思わず及び腰になりそうなのを立て直し、ぐっと足を踏み込む

「それでも、理由もわからず試験を諦めるわけにはいきません！俺はっ」

早く強くならなければいけないのだ

たとえ紅の言葉とはいえ、意味なく無駄足を踏むわけにはいかないだから

「！」

組み手の間、唯一褒められた瞬発力を生かして背後に回り込み

剣を抜いた

ぴたりと、白銀の刃が紅の首筋にあてられる

紅は動きを止めて、振り返ることなく静かに口を開いた

「組み手に剣は使わないだろう」

「・・・実戦にルールはない、と言ったのは貴方です」

剣士の戦いで剣しか使わない、というのは所詮お稽古ことの剣術のルールではない

実戦では剣士だろうが手も足も出る、だから組み手が必要だ・・・
・・・と、シエイドに言ったのは彼だ

「貴方はいつも鍛錬の前に、これは実戦と同じだと言っています。そして組み手に勝てば一つ言うことを聞いてやるともいいました

だから答えてください、どうして俺は試験を受けてはいけ

ないんですか！」

全てを言いきって、シェイドは息をついた

……そして、紅はそれを見逃さない

「な」

呟いた瞬間には、シェイドの視界は反転し、床に打ちつけられていたしかも持っていたはずの剣は紅の手にあり、まっすぐにシェイドの額に突きつけられている

一瞬だった

何が起こったのかもわからない

「俺の背後をとるのはまだ早い」

冷たく切って捨てる……が、直後諦めたように息をついて

「が、まあいいだろう。ようやくお坊ちゃん感覚から抜け出せたよ
うだからな
教えてやる」

すっとな紅が剣を持つのと反対の手を差し出した

なんですか？と首をかしげていると苛立たしげな舌打ちと共に、シェイドの襟元をつかみ上げて起こす
それから、これだからコイツは苦手なんだ……とかなんとか呟いた後、真っ直ぐにシェイドに視線を向けて

「侯爵レベルになると特別プログラムが始まる。そうになると時間ごとりにくい、だから今回は試験を見送れと言ったんだ
期末で侯爵レベルが上がっても成績的には何ら問題もないだろう」

その代り

間をおいて、くっくと口角が上がる
目を眇め、しかし笑っている様は剣士よりむしろ魔王といった方が相応しい容貌で

「空いた時間、俺がお前を鍛える」

それが意味するのはもちろん組み手ではなく 彼の左手が添えられている、剣のことで

「組み手は終わりだ。これからは実戦で使えるように鍛えてやる」

お前に死ぬ気があれば、だがな

どうする、と問う紅色の瞳に、シェイドは一瞬視線を落とし

再び顔を上げた時には、翡翠の瞳は真っ直ぐに紅をとらえて

「よろしくお願いします」

深く深く、首を垂れた

「やっぱり、試験受けないんだ」
「ああ」

シェイドは頷いた後、僅かに顔をしかめた
最近生傷が絶えないみたいだから、どこかまた痛めているんだろう

「・・・痛いなら休んでなさいよ。今日は授業も鍛錬も休みなんですよ?」

おばあさんと話してから早一週間。今日は試験当日で、私はちょうど試験会場で順番を待っているところ

前の人が入ってしばらくするから、もうすぐ最後の 私の番だ

あれからずっと練習は続けて、昨日の最後の練習でも成功できたんだけど・・・直前になると、やっぱり過去の失敗歴が思い出されて
気が重い

って、1人で唸っていたところにシェイドがやってきたのだ

・・・魔女科エリアに堂々と入ってくるあたり、ほんとうに

シェイドらしい

「まあ休みだが……寝るだけなのも暇だからな。様子を見に来た」
「そりやどうも……っていつもなら色々言つとこなんだけ
ど、今は無理」

緊張で頭が真っ白だ。今ならどんな悪口言われても反撃できない自信がある

「どんな自信だよ」

「うー……放つといて」

あ 駄目だ。震えそう、うずくまりたい今すぐに

「……らしくないな」

は？いきなり何！？

「だから今はお願いだからそつと」

「絡んできた相手を半殺しにしたり、精神的に追い詰めたりする腹黒いお前らしくないと言つたんだ
だいたいそんな柔な神経どこに隠し持っていた」

とんでもない言い草だ

というか仮にもこれから試験受けようつていう相方に言う台詞じゃないでしょう！？

腹立ってにらみ上げると、シェイドがはんと鼻で笑いやがる

あー相変わらず嫌味な笑顔がお似合いですこと！っていつか久々にものつすぐく腹立つはあ、んた・・・・・・・・あれ

あれ、なんか普通に反撃できそう。っていつかそうだ、これ・・・・・・・・！

「ねえ！ちよつともう一回さつきみたいに鼻で笑ってみて！」

「は？なんで「いいからさっさとやる！」

噛みつくように叫ぶと、シエイドはちよつと及び腰になりながらももう一度ムカツク笑顔を浮かべてくれやがった

うん、おばあさんの言うとおり

「ものつすぐく腹立って落ち着くわ、ありがとう！」

「いや、だからなんだよ」

「やっぱりアンタって人をムカつかせることに関しては天才的よね」
「！」

「だからさつきからなんだよ！」

「あーもつこつちの話なの！」

「だから」

シエイドが何事か言うより、私が名前を呼ばれる方が早かった

・・・・・・・・いよいよ、だ

「じゃあ、行ってくるから・・・・・・・・ねえ最後にもう一回よろしく。ムカツクから」

「だから、なんなんだよさつきから！」

とか言いつつも、シエイドはちゃんと鼻で笑ってくれた

よし。これで絶対この顔忘れないわよ

すっつと演習場に足を踏み入れる

それだけで空気が変わった。高ぶっていた気分が急速に冷めていくけど、頭が真っ白にはならなかった

……いや、ギリギリだけど

「それでは、始めてください」

一度堅く目をつぶり、さっきのアイツの顔を思い浮かべる

……大丈夫。最近ずっと一緒にいたから、思い出すのは簡単だ

目を開ける

534

目の前にいるのはシェイドだ
あのムカツク笑い顔、絶対
ひしゃげさせてやる

大丈夫、いつもと同じ。喧嘩してる時と同じだから

出来る

一つ、深呼吸

そして私は、力ある言葉を描いた

すっかり通い慣れた建物にシェイドは足を踏み入れた

廊下から部屋まで至るところにガラクタと高価な器具と危険物とか部造作に配置されているそこは、通り抜けるには少しコツがいる

服の裾は押さえろ、足もとを見る、左右を見る、上下を見る、不審物には触るな

その5点さえ守れば生きて出られるから、と念に念を押ししたのは諸々の陰謀からコンビを組むことになった六花だ

彼女は2年だが色々な事情からこの建物によく来るらしい。そしてその度シャツや帽子やローブが駄目になるとか

どんな建物だ。と思っていたが、今では身を持って思い知っている

一口で言うのは難しいが、とりあえず人ではいられなくなるだろうな身体的にも、精神的にも

「・・・失礼します」

極限まで音を立てずに、一つの扉を開く。前に入った時そこらの物を崩してしまって、ピリピリしていた先輩方に一斉に睨まれた

それだけならまだいいが、それぞれ実験物持って迫ってこられた時は俺の人生もこれで終わりかと本気で思ったぞ

アレはかなり恐怖体験だった

そんなわけで、さしものシェイドも半ばびくびくしながら入ったわけだが、幸いにも今日は修羅場デーではなかったようで

すっかり顔なじみになってしまった魔女の一人が、えらく機嫌よさそうに招き入れてくれた
ずるずる長い黒ローブと顔半分を覆う大きなゴーグルをつけた人間が20人ばかりいる様は、初見ではかなり衝撃的だった。が、もう慣れた
慣れとはすばらしい

「あー良く来たわね。まあ寛ぎなさいな」

にこやかに言われて俺の前に差し出されたのは、淡い紫色をした飲み物だ

見た目だけならジュースと言われても納得できただろう。が

「・・・これから特訓なので、危険物は引っ込めてください」

そんな見た目に惑わされてはいけない
何故なら俺がいるのは

「ちっ、聴くなっただわね。シェイド君」

学園内で五指に入る危険区域、魔女科魔科学部研究棟なのだ

から

ちなみにその淡い紫の飲み物、植木鉢に捨てたら一瞬で花が枯れてしまった……て

「いったい何を作ってるんですかアンタ達は」

「あら、活力剤を作ったつもりだったんだけど……活力し過ぎて一気に生命エネルギー無くなっちゃったみたいね

試作品番号への26、試料の分量ちよつと減らした方がいいみたい！」

給仕してくれた先輩が呼びかけると、方々から了解の声が上がってくる。共同作品らしい

出来ればもつと違うところで協力してほしい、危険物製作以外の分野で！

「あーあ、これで失敗26回目なのよねえ。そろそろ実験だ……ゲフゲフ、モニターも見つからなくなってきたし、困ったわあ」

「……俺の方を見られても、やりませんからね」

ちっ、と舌打ちする先輩。はいいのだが、なんで1人じゃないんだ！今少なくとも10人くらいは舌打ちしたぞ！？

「えー剣士科とか獣人科とか体強いから実験台にちようどいいのに！」

「……なかなか捕まりませんかからね」

「獣人科は鋭いし、剣士科は魔女科と敵対してるしねえ

ほんつと迷惑な話。こつちだつて実験台になつてくれたら茶と菓子くらい出すのに」

……剣士も魔女も、お互い嫌い合っている奴らばかりでは

ない。ではないが
この人たちの場合、剣士とか魔女とか関係なく全部『実験台』に見えてるからなんだろうなあ

最近空気を読むすべをちよこつと覚えてきたシェイドは、口に出さずに自分で持ってきた茶を啜った

この場においての給仕は実験の報酬なので、不用意に物を受け取るわけにはいかないのだ

たとえそれが茶の一杯、砂糖の一片であっても

「・・・にしても、最近罫に引つ掛からなくなった割に生傷多くな
いシェイド君？」

「会長とそんなハードな特訓やってんの？あ、六花ちゃんの方だっ
け？」

「六花ちゃん・・・よく罰で桜のところの手伝いに駆り出されてる
あの子ですか」

「アレいいわよね。前にちよつと借りただけどかなり使えるし、
重宝するわー。うち来ないの？」

「来ないんだって」

「進路部の教員脅せばいいんじゃない？あんな覚えの良い助手滅多
にいないしー、最近じゃ魔科学部に進んでくる子もいないしさあ」

「あーいい後輩欲しいわ。やっぱ進路部恐喝し、俺が手合わせして
るのは六花でも会長でもありません」

なんだか空気が危険な方向に向かいそうだったので、こころなし大
きな声で答える

幸いなことにそれほど真剣でもなかったのか、魔女たちは一斉に思
考を戻し

「え、じゃあ桜？」

「まささかー蘇芳でしょ？」

「あ、いえ。紅さんです」

言った瞬間流れた空気を、いったいどう表現すればいいだろうか

「……………あの」

俺何か変なこと言いましたか？

言う前に、近くに座っていた先輩に軽く肩を叩かれる

「ああ……それでボロボロになってるわけか」

「まあしょうがないわね。久我紅が相手じゃあね」

「シエイド君、六花ちゃんと仲良いしね……目えつけられてるわけだ」

「私たちは君の味方だから！駆け落ちする時は言ってくれたら、実験台3、いや6回くらいで手伝ったげるわよ！」

……………いったい何の話だ

「別に駆け落ちの予定はありませんが」

「そりゃ直ぐにはねー。まだ2人とも15、6でしょ？」

「いやそうじゃなくてー！」

だいたい何で俺がアイツと駆け落ちしなくちゃいけないんですか！

え、と言いおき揃って意味ありげに視線を交わして

「特訓をダシに逢引してんじゃないの？」

「交際を認めてもらうために紫様とバトってるって聞いたけど」

「私より弱い野郎に六花ちゃんは渡さないわよーって具合に！ねえ」

「・・・私が聞いたところでは、逆にティエンラン君が久我紅をかけて紫様と勝負しているとか」

「何ですかその根も葉もないいわさはっ！」

ちなみに流したのは他ならぬ彼の友人だったりするのだが、シエイドはまだそのことは知らない

「まあまあ、ホントのホントは特訓しにきてんでしょ？ちゃんとして紫様から聞いてるよ」

隠れ蓑にする代わりに、予算ちょこつと優遇してもらってるし

アハと笑う一同を見、シエイドは頬を引き攣らせて内心で呟く

魔女ってというのはどいつもこいつもこんなんか！

口に出さないのは、流石に命が惜しいからだ

別に空気が読めるようになったわけではなく、ただ前にうっかり口に出した時に半日動けない体になったからである

もし空気が読めるようになっていたらなら、さっきから気分転換にか
らかわれていることにも気がつくだろう

「まあシェイド君からかうのはこれくらいにして」

からかわれてたのか！

がくりと首を垂れると、ケタケタ笑いが至る所から聞こえる

………疲れる

「おー疲れてるねえ。まあ相手が久我紅じゃあね

あの人剣士科のちょー問題児でしょ？入学してから一度も授業出
ないって」

「そのくせ喧嘩三昧で、相手みんなボコボコにされてんでしょ？

肉弾戦は強いみたいだけど、剣ってどーなんだろうね？最下位のDク
ラスだっけ？」

「そうそ、まあ年中どっかで昼寝してるらしいしねえ。剣士科じゃ
昼寝大王って言われてんだっけ？

そこんとこどうなのシェイド君」

……とは言われたものの

「いや、その……」

特訓のことは秘密厳守！と会長に言われてるんだが……これは言
っていいんだろうか

というか仮にも最高学年生、しかも副会長の強さが全く認知されていないのはどうなんだろう

ああでも 思えば桜さんや篁さん、紅さんが練習している姿は見たことがない

久我会長もわかりだが、あの人はレベル的にも学生 どころか魔女の中でも上位レベルなので必要ないのだろう

第一下手に練習相手にされても困るしな。間違いなく死にそうだ

なんてことを考えていると、心を読んだわけでもない……
と思いたいが、読んでないだろう、うん
とにかくいいタイミングで話が久我会長のことにうつった

「でもまーあの紫様のパートナーならそれなりにはやるんでしょうね」

あの、にえらく含みが感じられるか気のせいかな？

「形だけ、って噂も聞いたけど？婚約者でしょ？第一私あの人一度も見たことないし」

いいつつもあまり興味はなさそうだ（そういえば人間に興味ない人が多いっていつてたな……）

「えーでもあの久我一族なら顔はいいんじゃない？」

「いやいや遺伝子の神秘！まさかの……ってことも！」

……面白がつてるなあ

などと他人事のように思っていたら

「楽しむための雑談でしょうが、最も実験が成功したときに比べればさほどでもないけどね」

「あんたら人の心読めるんじゃないでしょうね!？」

さつきからタイミングが良すぎだろうこれは!!!

だが揃ってゴージャルの奥でうつすら笑うだけ

それがかなり恐怖映像で、思わず一歩退く

と、先輩方は慌てて頭を振って

「まつさかあ、心はまだ読めないわよ。自白剤は鋭意開発中だけど飲ませただけで誕生日から振られた回数までゼロる奴」

つけて、しかもそんな風に楽しそうに言うことではないだろう

「でもあれ後遺症で寝ても覚めても48時間ぶっ通して喋り続けるのよね」

「……アレを使われるのはよほどの場合なので、いいのでは？」

「まあ超級犯罪者が魔女科に不利益な奴にしかつかわないもんね」

「……超級犯罪者と魔女科の敵は同列ですか」

「……性格の悪さで選ばれるんじゃないだろうな、魔女は」

言った瞬間、四方から物体ともつかない何かが飛んできた

「えーっと、そういえば何の話してたんだっけ？」

「……………久我紅について、でしょう」

「ああそうそ、結局あの何者だっつー話よね！」

「悪評のみで姿も滅多に見せないしね」

常に返り血被ってて全身真っ赤とか、目から光線出て目があった人間全員石になっちゃうとか、実は強そうな噂流してるけどホントは貧弱とか、実は実は正体は女んだけど婚約者よけのために男装してるとか！

「と、まあ色々あるんだけど真偽のほどは？」

「……………俺に何と答えろと」

だいたい前半が真実なら人間じゃないだろう。後半はどこの誰が垂れ流した妄想だ！

「その様子から見ても外れ、か。つまらない」

「破壊神、怪力女と来て昼寝大王つてもねえ。もっところ、インパクトある奴が欲しかった」

「……………なんですか、その破壊神だかなんだかいうのは」

特訓前から諸々疲れても、 unnecessary 発言をするのがシェイド・ラ・ティエンランという男

「聞きたい？」

聞いてみたい。と言いかけてやめた
なんとなく嫌な予感がしたのだ。ただし空気を讀んだ、というよりは本能的な危機センサーによって

「あらそう」

別にこだわってもいなかったのか、それとも背後でアラームが鳴り響いたからか、話を振った魔女はあっさりと退いた

・・・やっとな静かになった

騒がしいのは 正直、落ち着かない
前の家で話す相手といえば灰くらいだった。学園に来てからもそれは変わらない

リーアンも前は必要以上に話すわけではなかったし・・・

六花達に会ってからは賑わしいのにも慣れてきたが、それでもやはり静かな方が落ち着く

深く椅子にもたれかかり、再び自分で淹れた茶に口をつける

・・・だいたいイツら（特に桃山！）、毎日毎日よくもあれだけ喋れるな

朝から晩まで一緒にいて話題が尽きないのは正直すごいと思うぞ

ああでも、アイツは割と静かなところがあるな

特に本を読んでも

隣で爆発が起きてても気づかないくらいだからな・・・あれは焦った
前々回に魔科学部を借りた時、奴は爆風吹き荒れ火が迫っても本か
ら目を離さなかったからな
しかも抱えて逃げたら逃げたで、

『なに？何かあったの？』

ときた。全くアイツは・・・

「・・・ニヤニヤしちゃってえ、真昼間から夜の妄想かい？青少年」
「通りすがりに何言うんですか」

睨みつけるが、白衣・・・じゃなかった黒衣の魔女はケラケラ笑っ
て研究室に引っ込んだ

全く、油断も隙もない・・・

もう一口紅茶を飲む。ああ、カナリア先生の紅茶はいつも美味し、
い・・・

しまった。と思った時にはもう舌の上で異物が弾けていた
急激に意識が遠のく。気のせいかな？走馬灯らしきものが巡っていく
のは俺の気のせいかな！？

・・・マズイ、もう駄目だ

ぐらりと体が揺れたかと思うと、半身に衝撃が走った
どうやら椅子から落ちたらしい。身体の右半分が痛い、思うよう
に体が動かない

即効性か！くそっ！

『・・・お、どうやら成功らしいね』

『やく最近はこの子も鋭くなってきてたからねえ』

ああ遠くから魔女たちの声が聞こえる・・・さっき通った時に仕込
みやがったな

くそっこんなところで死んでたまるか！だいたい

「死因が魔女の失敗作なんて、嫌すぎる・・・」
「失礼ね！」

憤慨したような叫びに反撃しようとして・・・シェイドの意識は闇
に落ちた

閑話騒題 1 (後書き)

キャラ増える前に掘り下げよう企画。まあ2話で終わりますが(オイ
名前だけではでてきた魔科学部と、謎多き黒い人・篁さんがメインで
す

シェイド

・・・誰だ？

シェイド

聞き覚えが・・・ある気がするが思い出せない
それに体がだるくて、目を開けるのも億劫だ・・・くそ、魔
科学部め。一体何を仕込んだ！

迂闊だった。今まで口八丁手八丁で脅されはしても、小細工をし
かけてくることはなかったんだが・・・それだけ切羽詰まってるのか？
・・・となると、被害は俺だけにとどまらないだろうな

一体これから何人の屍が出来上がるのか、想像するだに恐ろしい

その記念すべき？一人目が自分だということは完全に記憶から抹消
しているが、誰もつつこむ者はいない

と、まだ見ぬ地獄絵図を想像していたシェイドは、すっかり忘れて
いた

先ほどから名前を呼び続けている存在を

「いい加減起きなさい！このバカ！！！」

殺気！

咄嗟に飛び起きると、俺のすぐ横の床が陥没するのはほぼ同時だった

・・・こんな荒っぽい起こし方をする女は、一人しかいない

「・・・り」

・・・あ？

「・・・これでも無理か」

え

いやいやちょっと待て。落ち着け俺

「もう！いったい何飲ませたんですか！先輩方！」

「いやー何というか、ねえ？」

「ね」

「・・・試作品を」

待て待て待て、いや待てない。って誰に言ってるんだ俺は！

いやもうこのさい誰でもいい。とにかく待ってくれ

俺が現状を認識できるまで、時間の進行を止めてくれ

だがいくら願っても、時間が止まるはずがなく

「だからそれが何だっけ聞いてるんです！この根っから剣馬鹿が、殺気全開で殴りにかかって目え覚まさないなんてどんなブツ仕込んだんですか！」

俺は呆然とそれを見た

魔女たちに食ってかかる六花の足元

未だ眠り続ける“俺

”の姿を

アレは“俺”で、俺は“俺”

まずい、理解能力が崩壊した

魔女の黒衣を夜の空とするなら、その人の黒衣は“闇”の色そのものだった

「……………魂の分離。なるほど」

目が隠れるほど長い前髪を揺らし、その人　　篁さんは俺と“俺”を交互に見つめて

「……………魂は我らが領分。死神の領域を侵すとは、いい度胸だ」

180は超えるだろう背丈よりも長い鎌を構えた
つて

『ま、待ってください篁さん!』

「篁さんちよつと待ったあ! まずいです、流石に殺人はまずいですから!」

思わず手を 残念なことに今はイメージだが 伸ばすと、篁・
蘇芳さんはずるずると長いローブごと振りかえり

「……………冗談だ」

『貴方がやると冗談に見えませんか』

黒い大鎌を構えた全身黒衣の死神など堂に入りすぎている
半目で睨むとなぜか目を……………正確には、おそらく目があるだろ
う部分を)逸らされ

「……………あまり見つめるな、照れる」

……………恐ろしく棒読みで言われて
も説得力がありませんが
というか、貴方そういうことを言う人でしたか?

「……………篁さん、悪いものでも食べたのかな」

『六花、俺はそつちじゃない』

「夜半の月、宵の太陽は反対側だ。そのままでは空に喋りかける危

険人物になるぞ

そして我は変なものは食べていない。また死神に人の世の食物は影響しない。よって問題はない」

左様ですか

としか言いようがなく、口を中途半端に開いたままでシェイドは篋を見つめた

顔の半分を覆う黒いフードと黒髪が揺れ、視線をシェイドと六花の間で一往復させて

「……先ほどの発言はちよつとした“お茶目”だ
人間達の間では交流するに当たって必要な対人技術だと聞いていたので、行使してみた」

同意を求めるように視線（目は見えないがおそらくこちらを向いているはず）が向けられる

……目を逸らしたくなつたが、なんとなくこの人の場合、どこを向いても視線から逃げられない気がする

『……まあ、確かに必要ですね。お茶目は』

でも貴方が使うとお茶目になりません

思わず口にしそつになつたところで、殺気混じりの視線が斜め下から飛んできた

……お前、本当に見えてないんだよな？

またも思わず口にしかけたが、らちが明かないと思ひ直す
時間の無駄は悪だ

『・・・そんなことより、俺はどうなってるんですか！説明してください！』

とりあえず話を戻そう。でないときつと進まない

空気の読めないシェイドがまともに見えたのはあの時が初めて、と後に六花は語る

が、後は後として

「・・・・・・・・言っただ通りだ。お前は今肉体と魂が分離している
端的に言えば死んだ人間と同じ状態だ」

・・・・・・・・・・・・・・・・あぁ、魔科学部のことだ。
いつか誰かやると思っていた

思っではいたが

『なぜよりもよって俺を殺すんですか！他の奴にしてください！』
「今さら何言ってるのよ！っていうかアンタ普段は人を性悪性悪言
つくせに自分も中々じゃない！」

『悪いか！』

「開き直ってんじゃないわよ！」

「落ち着け夜半の月、宵の太陽。そもそもお前達、喧嘩する相手が
違うのではないか？」

全くその通りです

・・・ところでその宵の太陽っていうのはもしかしなくても俺のこ
とでしょうか？

「お前以外にだれがいる」

『いえ、わかりません』

「……ん？今、俺声に出したか？出してないよな？出してないはずだ、が……いや、考えるのはやめよう。今さらだ

色々悟って来たシエイド

「篁さん、そういう妙なあだ名つけるのが癖なの。気にするだけ無駄よ」

と六花に忠告されて頷き……脱力した

篁には初めての会話が会話なだけに、どうも苦手意識がある

あの後は特に何を言われたわけでもないが……元々無口だしな、この人

思えば紅さんも無口だ。まあ女性陣はわりと喋るからつり合いはとれてるか？

その喋る女性陣が大問題だったりするのだが、最近色々感化されてきたシエイド脳はそのことを軽くスルーし

『……すみません、余計な事でした』

とりあえず謝っておいた

が、篁は特に怒った様子も感心した様子もなく　要するに相も変わらずいつも通りに

「……謝罪は不要。悪癖なら改善が必要だろうが、お前達のそれは交流の手段

悪いことではない。時と場所を選びさえすれば」

『はい……』

殊勝に頷く後輩に満足げ（だと思われる）に頷いて見せ

「雑談は終了した。本題に戻る

貴様ら、俺を呼んだということは、魂分離は予測の上か」

絶対零度……どころか確実に冷黒い空気を出す篁さんには、流石の魔科学部も軽口を叩く気が起きないらしい
特に茶化すわけでもなく、軽く頭を振って

「予測というか、可能性を除外した結果ね」

「心臓が動いてるから死んではない、でもただ気を失ってるわけでもない」

「もちろん外傷もなし、で毒性はないはず……ならば後は死神の領分で問題があつたのかなーってね」

ああそういえば魔科学部は怪我也多いから、最低限の治癒技術と知識は教え込まれるとか言っていたな

……その分“治せるから”と実験台の扱いは容赦ないが

「……判断力だけは狂っていないようだな」

言葉だけとれば褒められ？ているようだが、篁さんの目（なんとか見えた）は全く笑っていない

それどころか、背後に髑髏型の靄がみえるのですが気のせいデスか？

……隣の六花が俺（本体）にしがみついたので気のせいではない

んだらうな

だがちよつと待て六花、お前の腕力でしがみつかれると俺の身体が恐ろしいことになるだろうが！

あああ、今何か嫌な音がした気がするぞ！？

「うふふくくつついている胸よりなにより背骨を心配するのが“らしい”ですねえシエイド君」

は？ムネ？……………（見る）……………あ？う、いや、ちよつとマテ

いや待つてください、それはいろいろまずくないか！？体勢とか紅さんとか紅さんとかが！

「大丈夫ですよ？紅さんは今会長とらぶらぶくしてますからv」
『いや、それはよかったですですが他にも、まあ一応アイツは婦女子で俺は男なので……………』

……………いつの間に？桜さん』
「ついさっき」

につこり微笑んだ学ゲーチーム唯一の良心（の欠片を持つ人）は、不穏な空気全開で今にも鎌で首狩り祭を始めそうな篁さんに近づき

「篁」

そつと大鎌を構える腕に手をおく

ただそれだけで、篁さんの目が和らいで……………そんな気がする（

「桜」

桜さんが微笑み、篁さんが鎌を持つ手を下げた

2人はそのままお互い見つめ合って、何も言わない

「……………いや、あの、お二方？」

篁さんの不穏な空気が消えたのはいいが、今度は代わりになにかむず痒いというか桃色というか……見ていて恥ずかしい空気が漂っている気がするのですが？

「……………なんなんだ？この花でも飛んでいそうな空気は」

「そこまでわかってて、なんで理由がわからないかな」

「なんのだ？」

「ごめん、聞いた私が馬鹿だったわ」

「言って暑い暑いと六花や魔女達がお互いを手うちわであおぎ出す

……今日は例年より冷え込んでいると思うんだが

「……………わかった」

「ああそういうしているうちに、無言の会話が終了したようだ
いったいあの視線にどういう意味があったんだ？」

「首をかしげる間に篁さんは桜さんに見せていた柔らかな空気を引っ込め、いつもの淡々とした調子で

「宵の太陽は我が預かる。問題はないな」

言っちゃ否や俺の身体を片手で担ぎあげ（力持ちですね・・・）、魂状態の俺の襟首を掴んで連行した

どこへ？

マルーン学園全七学科中最小にして最恐の学科

死神科へ

俺は今、本日二度目の理解能力崩壊を起こしていた
だが仕方のないことだと思う。篁さんに引きずられる中、面倒だとかいう理由で、どういう手段を使ったのか魂のまま気絶させられ、目を覚ましたら学園一の危険区域に放り込まれていたのだ

「ほう・・・死せずして分離した魂か」

暗闇に散らばる赤・赤・赤・・・仄かな、光とも呼べない光が俺の

周りに円を描くように在る

おかしい、今は昼だ。なのになぜ、なぜこの部屋はこんなに暗いんだ！？

「珍しい、が問題だ・・・篁・蘇芳、魔女方より件の薬物を手に入れることは可能か？」

しかも全員黒装束のせいか、女も男も上級生も下級生も同じに見える同じような顔が複数あるのも怖い、同じような顔から高低も性別も違う声が聞こえるのも不気味だ！

「魂は我らが領分。いかな偶然とはいえ、侵されることは罷りならぬ」

そしてなぜ全員そろってカンテラ片手に近づいてくるんだ！？

暗いのが嫌なら灯りをつけろ、いや点けて下さい！中途半端に見える顔やら口やらが怖すぎるぞ！

「あ、ああ、あの・・・篁さん？私、ここにいる意味あるんですか？

無いですよね？ありませんよね、無意味ですよね！？だから私も帰っていいですか！？」

逃げる気か六花あ！俺を置いて行くな！あと独りだけ桜さんの後ろに隠れるなど卑怯だぞ！

「・・・落ち着け、宵の太陽

お前達もだ。コレは“絶対の黎明”からの預かり物。手を出せば黙ってはいないだろう」

絶対の黎明って誰ですか！？いや誰でもいいです、今俺の安全を保障してくれるなら！

「……………会長の気に入りなら」

「興味はあるが」

「無念」

……………一応助かった、のか？

そして絶対のなんたらは久我会長だったのか

しかし謎多き最恐軍団、死を司る不可侵の死神にさえ恐れられるのか……

今さらながら何者だ、会長

「はい、ではお話がついたところで。篁、シェイド君がパニックを乗り越してちよっとキャラ変わっちゃってますから、説明してあげた方がいいのでは？」

この場には不釣り合いな桜さんの明るい声に、篁さん（らしき影）が頷き

「魂は我らが領分。お前の肉体に魂を戻すには、こちらへ連れてくるのが最良だと判断したのだ」

実に端的な説明ありがとうございます。ですがお願いなので連れてくる前に一言言ってください

俺にも覚悟というものがあつたんです！

「宵の太陽、お前の覚悟は関係ない

お前の意思がどうであるかと、我は在るべきものを在るべき処に戻すために、最善の策をとるのみだ」

『………それでも、一応常識というか良識というか』

「……まさかあんたが常識と良識を説く日が来るなんて」

『お前は少々俺に絡んでくるな、六花』

「それだけあり得ない状況ってことよ」

当たり前だ。そうそう魂が抜けだしてたまるか！

……まあいい、今はそれより

『……それで、その最善をとるためにここに来たということは、戻れるんですね？俺は』

「ああ………」

ずるりと黒衣が翻る音がした

カンテラが俺の方に掲げられ、見事な細工がほどこされたそれと、持ち主　　篁さんがはつきりと目に映る

普段より近いせいか、長い前髪の間こうがすけて見える

黒の間こうに在ったのは、深い夜のような青色の目

暗がりに慣れた俺の目が、それをはつきりと捉えた

「無理だ」

笑っていた

誰が？

「お前が蘇ることは可能。だが戻ることは不可能」

篁さんが

「ひとたび肉体より離れし魂は、元の肉体には戻れぬ」

「それは世界の理に反する」

「それは人にも、魔女にも、天使にも、獣にも、我らにも、許されぬ」

「何人にも許されぬ」

声が響く 重なる

女のものの、男のものの、低いもの、高いもの、一つの様で多くの声が

「……だが“元の”肉体でなければ戻ることは可能」

そのために、夜半の月を連れて来たのだ

最後は囁くように、シェイドにのみ聞こえるような、そんな声で

なにを言っているんだ？

問う前に、返る

「悩むことではない。魂の無い夜半の月の身体に、お前の魂をいれるだけ」

我にはそれが可能だ

カンテラが揺れた

跳ねた光が“それ”を照らした

死神の象徴、生を狩る刃

魂と闇を断ち切る大鎌を

見慣れていたはずのその武器が、酷く恐ろしく思え、寒いものが背に走る

同時に当然のように残酷な事を言うその人が、別人のように思えて

『なぜ』

一歩引き 背に控える六花の方へ一歩寄る

彼女はこちらの会話が聞こえていないのか、微かに首をかしげ・・・
真っ直ぐにこちらを見ている

篋の青い目が一瞬そちらを捉え・・・急激に距離を詰められる
薄い唇が耳に寄せられた

魂でしかないシェイドには吐息の香りも、肌のぬくもりも感じられない

黒衣が視界を遮る、最後に残った聴覚は確実に彼の言葉を捉えた

「新月の魔女と伯爵レベルの剣士、どちらがより有用か、わかるだ

ろっつ？」

それにこれは

「お前のためだ」

黒衣が離れた

振りかえった時にはすでに、黒の死神が大鎌を振り上げていて

お前のためか

嘲笑う

炎の中で、男が

お前のために、そいつは

嗤っていた

『やめろ!』

手を伸ばす　　愛刀を求めてのことだったが、魂の状態で剣と
れるわけがない
だが思う前に、掌に慣れ親しんだ感覚

何故と思うより早く、シェイドは六花と篁の間に身を躍らせていた
黒い鋼が肉薄し、金属音が響く。シェイドの意識は闇に沈んだ

夢を見た

シェイドは何もない　　人も、家も、植物さえもない地に立って、
空を見上げていた

シェイド、否、シェイドではない“彼”は酷く沈んでいるのに、空
は憎々しいほど青く、美しく
その青に映える、白　　鳥だろうか　　たった一つの白が、今
まさに彼から遠ざかって行く

光を帯びて白銀に輝く翼は美しく、知らぬ間に頬が濡れていた

それは儂く、美しく、そして悲しい夢だった

目を覚ました時に飛び込んできたのは、見慣れた自室の天井だった
毛布を跳ねのけ、己の掌を見て・・・安堵する

良かった、これは“俺”だ

六花じゃない

「・・・・・・・・・・・・・・・・気が付いたか？」

はっとして視線を横に滑らせれば、シェイドの寝ていたベッドのすぐ側に篋がいた

常と変らぬ低い声に、若干警戒心を募らせて頷く
それを感じたのか、それとも元よりそういう話し方なのか。篁が少しだけ距離を詰め、

「……………どこまで覚えている？」

警戒心が一気に高まる

それは一体どういうことだ

問うより、篁が口を開く方が早かった

「夜半の月が酷く慌てて俺を呼びに来た

どうやらお前は、魔科学部に一服盛られたようだが……………」

「え」

違和感。思わずぼかんとして見上げると、篁は首をかしげ

「どうした？やはり覚えていないのか？

お前は気を失い、あわや実験台というところで夜半の月に助けられたようだ

実験台逃がすまじと追い立てられたようだぞ。お前をかついだまま半狂乱の態で死神科に駆けこんできた」

なんだそれ

シェイドの混乱にさらに追い打ちをかけるように、部屋の戸が開く顔をのぞかせたのは件の六花だった

「あ、起きた。よかったーくう兄に無茶いった甲斐があったわね」

何事も 殺されかけたことすら 無かったかのように六花は平然と筆と言葉を交わし、シエイドに小さな瓶を放り投げた

「それは魔科学部の先輩から。実験台欲しさに暴走しちゃったみたいだけど、紫ちゃんに絞られて反省はしたみたい

・・・まあ、あの人たち切羽詰まると手段選ばないけど、悪い人たちじゃないから

嫌わないで、つても無茶だろうけど、出来ればあんまり悪く思わないでね」

まあ、今回の追いかけてこでは私もちよつと嫌いになりかけたけど

と遠い目でどこかを見つめて・・・はたと我に返って

「あ、そうそうそれでその瓶ね。なんかあんたに飲ませた薬って、夢を自在に操る薬だったらしくて・・・まったく、なんでそんなの作ったんだか

あ、それでアンタに結構えげつない夢みるよう仕組んじゃったらしいから、一応その薬飲んでから寝てって

解毒剤ね。そっちは桜さんと魔科学部の部長さんが作ったから、まづ間違いなく安全

紫ちゃんもしつかり見張ってたしね。あ、紫ちゃんが今回はこちらの監督不行き届きだった。申し訳ない

後でくう兄にご飯か何か預けるから、それ食べてしつかり休むようにって」

それじゃあ、見つかるはずだから

と、六花は来た時のようにさっさと去ってしまう

シェイドは起きがけで鈍い頭をフル回転させ、この奇妙な 取り
残されたような状況の答えを導き出した

ずばり

「……………夢、か？」

いやちょっと待て。それにしても現実味が……あだが、そう考
えると篁さんのお茶目発言や鬼畜発言も納得がいく

それに、いくら魔科学部でも肉体と魂を分離させる……など、
突拍子が過ぎるだろう

それよりは全ては奴らが見せた悪夢だった、の方が逆に現実的だ

「どうした。顔色が悪いぞ、宵の太陽

……………夜半の月が帰って寂し
いのか？」

「それは断じて違います！」

速答すると篁さんは微かに口角を上げて

「……………冗談だ」

覚えのある光景に、せり上げた言葉を飲み込む

黙りこんだ俺を不思議に思ったのか、篁さんが再び首をかしげた

俺は少し迷い、結局口を開いた

放ったのは飲み込んだ言葉ではないが

「聞きたいのですが……死なずに、魂と身体が分離する、なんてことはあるんですか？」

「ある」

突然の質問に疑問も返さず、篁さんはいつもの低い声であっさりと返した

「……主に死の危機に直面した人間の、精神的な要因で起こる肉体は無事でも、自分は死んだと思いこんだせいで魂が半分抜け出てしまうのだ

……もつともよほど思い込みが強いか、本当に死ぬ直前まで肉体が破損しない限り起こらないが
後は魔術などで精神に干渉された際、”死”を強くイメージさせられるか……」

「その場合、元に戻るんですか？それとも一度魂が身体から離れたら……」

急いで言葉を重ねる俺に、篁さんは訝しげ（だと思われる）な視線を向け

「……突然に何を思ったのかは知らぬ。が、これはあくまで仮死状態であって真に死んだわけではない
自らの肉体に戻ることは可能だ」

その先は、尋ねるまでもなく語ってくれた

「生への執着を促せばいい。食欲でも性欲でも物欲でもなんでも構わない

ただ魂では出来ないことをしたいと、強烈に、願わせればいい」

質問は終わりか？

頷くと、ならば早く休めと半ば無理やりベッドに押し込まれたそれから思い出したように口に解毒剤を突っ込まれる

・・・骨ばった細い手は、意外と力が強かった
無理やりこじ開けられたせいか、えらく顎が痛い

横になりつつ、恨みがましい視線を送ると

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あまり見つめるな、
照れる」

覚えのありすぎるセリフに脱力し、もう全て忘れて休もうと毛布を
引き寄せ・・・目を見張った

夜着から除く腕に、誰かにしがみつかれた様な赤い痕が残っていた
しかもくつきり残る掌は自分よりも小さい、そう、ちょうど六花く
らいの大きさで・・・

目眩がした

そして次の瞬間にはもう夢でも現実でもいい、とにかく忘れようと

決心し

今度はゆっくりと、シェイドは意識を心地よい闇に沈めた

さあ、どこまでが夢なのか

答えは死の神のみぞ知る

閑話騒題 2 (後書き)

意外と(面倒な方向に)お茶目さんな篁氏
冗談は一番通じるけども彼の冗談は一番通じない(笑)

魔女名 1

誰か

私は願う

変わりゆく世界を求めて、かつての世界を想って

どうかお願い、誰でもいいの

それでも私は願ってしまふ

叶わないと知りつつ、それでも諦めることはできなくて

言葉にできない願いを抱いて、私は“今”の世界を生きる

お願いだから、忘れないで

忘れないで、本当の

魔女科寮 早朝、白峰六花自室にて

部屋の主である六花は、白い封筒を前に腕を組んだまま黙り込んでいた

ちなみにこの体勢に入って、小一時間ほど経過している

「……………どうしよう」

どうしようもこうしようもない。ようはこの封筒をさっさと開ければいいだけの話なんだけど……………それが出来たら、苦労はしない

ああだいたいなんで受かってても落ちてても同じ薄さなのよ
せめて大丈夫なら長い文句つけて分厚い封筒、ダメならあっさり風味の薄い封筒って差をつけてくれたら、わざわざ開けてデデンと結果を伝える言葉にシヨックを受けることも

……………いや、そうならならなかったで、今度は郵便受けが開けられなくなるだけね

封筒に手を伸ばし、引っ込め 繰り返すこと十数回目

「……………臆病者」

自嘲し、結局未開封のままの封筒をポケットにしまいこむ

とりあえず、ご飯行こう

気分転換心機一転！お腹いっぱいになって落ち着けば意外とあっさ

りあけられるかもしれない、し……うん、そう思っておこう
ため息一つ残し、部屋を後にした

食堂についたものの、朝早かったせいが見知った顔はいない

パーティもゆずりもまだか……まああの2人、朝は遅いしね

ゆずりは幻獣の世話があるし、パーティは低血圧とか言ってる朝はギリギリまで寝ている

紫ちゃんは自宅だし、桜さんは……また研究室で夜明かしだろうから今日は一人かな

自分の交友関係の狭さにたまに悲しくなるけど、今さら他の人たちと友達ごっこしようなんて気も起らない

多分卒業までこのままなんだろうな……うん、まあ、慣れたけどね！

適当にサラダとパンを注文して席に着く

今は人もまばらなせいとか好きな席に悠々と座れて嬉しい

いつもなら殺気むき出しで、それこそ椅子取りゲーム終盤戦より過激だ

ちょっと早起きしたらこんなに違うのね……次からちょっと早起きしてみようかな

キツネ色に焼けたトーストを頬張りつつ、六花は珍しく閑散とした様子の食堂に物珍しげに視線を走らせ

見つけてしまった

咄嗟に視線をそらしたのは、日頃の危機回避訓練の賜物だが、敵の色恋に関する視力もさるもの。クソ忌々しいことにこっちの姿を認めて、来なくてもいいのに近づいてきやがった

・・・ああいつもながら悪い意味で予想を裏切らない集団（伯爵令嬢+取り巻き）ね！

「あああら白峰さん、1人でお食事？数少ない貴重なお友達はどうなさったのかしら？

あら失礼、お友達じゃなくて落ちこぼれ仲間だったわね」

朝っぱらからよくもまあ大声でギャンギャン喚けるもんね鬱陶しいうるさい邪魔正直ウゼエ（以下略）
とは思っけど

いい加減慣れてきたから、考えなくても対策はいくつも浮かぶ
空気読めない男みたいにはツツサリ斬るっていうのも一つの手だ。
でも朝っぱらから体力は使いたくないから、とりあえず無難にやりすぎす“無視”に決めた

朝食はもとから少ない派だから、さっさと食べてさっさと帰る
面倒な相手に真面目にとりあつたって、馬鹿になるだけだものね

ちやつちやとサラダを片づけて果物に移る
我儘お嬢の方もしばらくはわめてたけど、私が完全にスルーしてたら諦めて踵を返した

このお嬢、プライドは高いけどその分無視されるのに慣れてないみたいね

張り合いがないとわかると捨て台詞吐いて帰っていく

落ちこぼれってワンパターンな捨て台詞もいい加減聞き飽きてきたし・・・最近ちょっと自信というか、まあ、いちいちぐっさり来ることもない

だから楽だ

・・・・・・ちよーど、斜め後ろか呪ってやる！って目で見てる女よりはね

振りかえらなくてもわかる

前にシエイドとぶん殴った剣士科の・・・えーっと、ローヘンナだからローシエンナと組んでた魔女

三日月レベルが新月レベルの、しかも落ちこぼれに負けるなんて恥だって後ろ指さされ、友達も離れていったからって私を逆恨みしているらしい

苦手なくせに呪術の本まで開いてた・・・っていうのはパティ情報

今のとこそその形跡はないけど、こういうのは一番タチが悪い

我儘お嬢やクローヴァーさん達は面倒だけど、直接仕掛けてくる分わかりやすい（在る意味潔い？いやあのお嬢は微妙だけど・・・）

でもこの魔女はたとえば名前を出さずに、本人の目の前で悪口を言うタイプだ

だから面倒くさい。下手に反論すれば言いがかりいゝ最低えゝ酷いゝなんてピーピー仲間とさえずりやが（略）

・・・ええありますとも。覚えがありますとも！

昔はいちいち突っかかっては言いがかり付けられて、夜な夜な枕を
引き裂いたわ！

けど今回あつちは1人。じゃあ敵が少なくて楽かっていうとそうじ
ゃない

むしろ人数が少なすぎて考えもの。そこそこ人数が居れば気持ち
に余裕が生まれるし、勝手に人のこと悪しざまに言っていれば気持ち
も晴れる

でも1人じゃ心の中で恨みを募らせるしかない

しかも相手は今輪から弾かれてるから、その分の怒りもこっちに回る
ため込んでるうちならいいけど、爆発したら何するかわからないか
らね・・・あー面倒くさい

『朝から怨念背負ってるね』

爽やかな朝の挨拶に隠して、ひっそり愉快そうな声が降ってくる
視線を上げると灰くんが爽やかな朝の風をしょって目の前に立って
いた

いい？と視線で聞かれたので頷く

「早いね、白峰さん」

「灰くんこそ。朴念仁と計算狸は？」

ちなみに計算狸はリーアンくん（朴念仁は言うまでもない）
人の迷惑まる無視の計算高い腹黒狸、略して計算狸

・・・うん、まあ我ながら微妙だと思うけど
これ以外だとまる狸とか迷惑狸しか思いつかなくて。それよりはましだと思ふのよね！

「僕はいつも2人とは別だよ。授業が遅い時は一緒だけど」

「あ、そっか。獣人科って個別で授業時間違うんだっけ？」

「うん。まさか夜行性の連中に、昼日中授業しろとはいえないでしょ？」

いいつつ山盛りのお肉にドスツとフォークを刺す

・・・あ、朝っぱらから濃い食事ね灰くん

「でも灰くんは夜行性じゃないよね？いつも会うのは昼だし」

「僕はどちらでも大丈夫だからね。色々試しに選択してるんだ

・・・ああそういうえば、白峰さんに僕がなんの獣かって言っただけなっただけ？」

軽く首をかしげ、笑む

悪戯っぽい笑みはともすれば魅力的だが、六花は背筋に寒いものを感じた

「言っていないわね」

これが初対面の相手なら速攻で席を立つが、相手はそれなりに慣れた灰

それに今さら“腹黒”相手に戦くほど、六花は弱くもない

「聞かないの？」

「灰くんが言えば聞くし、言わないならわざわざ聞く気はないわね

別に知ったからって何が変わるわけでもないし」

さらりといなしてジューズに口をつけ、おや、と前を見る
何事か返しがあると思っただのだ。が、

わざわざ知りたい？って挑発までしてきて・・・なんでびっくりして
るんだろ

青い目を大きく見開くさまはどこか間が抜けて見え、いつもの隙の
ない笑顔はなりを潜めている

「灰くん、爽やか青年のマスクはがれてるよ」

「ご心配なく、これでも長いんだよ？芸歴」

芸歴とききましたか。まあでも演技も芸術、ね

「・・・そんな突飛な返しした覚えはないんだけど」

言うと灰くんは慌てて首、と一緒にサラダと肉をブツ刺したフォー
クまで振って

「いや、白峰さんがどうかじゃなくて・・・うん、驚いた」

最後のパンの欠片を飲み込み、首を傾げると灰は 好意的な意味
で、目を細めて

「レイヴィスさんと同じことを言うから」

レイヴィス？ 古語、魔女の言葉でいうならライブズ、『空』
かな？

誰かはわからないけど、親しい人なんだろう

灰くんがこんな風に笑うのは、知ってる中ではシェイドくらいだから

「ちょっと懐かしい人思い出しちゃって、驚いただけだよ。ごめんね？」

「・・・で、背後霊も行ったところで本題なんだけど」

あ、やっぱり今までの会話前フリね

おかしいと思ったのよねえ、直球でつつこんでこないから

「言わなくてもわかりますー・・・結果はね、うん、まだ見てないの」

正確には見られない、けどそこらへん灰くんなら正しく意味を拾ってくれるから楽だわ

「・・・あの朴念仁ならまだ届いてないのか？なんてボケかましただらうし」

「ああ別にそんなに気になってたわけじゃないから、気にしないで？」

「・・・そんなフォロー入るほど、情けない顔してるのか。私

そう思うとポケットの中の薄っぺらい紙切れが急に重たく感じられる見たくない。でも見なきゃいけない

「白峰さんって色々悟ってくれるから楽だけど・・・損な性格してるっていわれない？」

「・・・今のところは」

ない、はずだ

「じゃあこれから言われるね。損な性格してるよ
言葉通りにとっておけばいいのに、無駄に裏まで読むから」

性分なんですよー、これが。それに

「だからって、あの朴念仁みたいにはなりたくないわ」

「うん。あれは極論。というかシェイドみたいなのが2人もいたら
迷惑だよ」

はっきりいきったねー灰くん。まあ同感だけど

「でも・・・どのみち授業が終われば久我会長に強制開封させられ
るんだし

ふんぎりつかないなら、それまで置いておくのも手だと思っよ？」

「まあ、ね」

でもこんな調子で今日一日講義に集中できるのか・・・いや、落ち
てたらそれはそれで、集中できないんだけどね

ため息一つ

「ま、なんにしても今は置いておくわ。そういう気分じゃないし」

せめて朝食のあとくらいすっきりした気分でいたい

「それじゃあまた。会えたら昼休みにね」

「頑張つて」

色んな意味の込められたその言葉に、なんとか笑って頷く
多分笑えてないだろうけど、そこはまあ灰くんだからいいよね

ともあれ食事のおかげでちょっと気力が上がった私は、さっきよりは足取りも軽く魔女科の講義塔へ向けて歩き出した

私はこの日・・・といつても“事”が終わった後に、決心した
たとえどんな内容であろうと、誰からのものであるようと 手
紙は来たら即効開封するってね！

異変に気付いたのは、昼休み前の最後の授業を終えた時だった

魔女といえども体力は必要！がモットーの先生だったもんだから、
その日は日差しも強いのに演習場をぐるぐる走らされて散々だった
ちなみに魔女とはいえ、流石にローブにスカートでは運動も何もな
いから、実地演習じゃないただの運動の時は運動着を着る

つまり衣服が無防備になるわけで

「・・・・・・・・・・嫌な予感がする」

でしょうね、とクールに頷いてくれたのはもちろんパティ

でも誰が たとえ苦手なクローヴァーさんであっても、この状況を
見れば否とは言わないだろう

なんたつて一度閉めたらばつちり施錠、泥棒さんには天誅御免、有
限会社発明御殿特性南京錠が開いているのだ

ちなみに発明御殿は魔科学部からの就職率50%を超える在る意味
大人の魔科学部です

いやそれはどうでもいいけど。とにかく確かに閉めたはずの鍵が開
いてるってことは、つまりどっかの馬鹿があげやがったってことで

「開けた瞬間カエルバーンにアイス一つ」

「・・・ローブが切り裂かれている、にキー一つ賭けるわ」

悲しいことにどちらもありうる。それでも選んだのだ

中身が空っていう可能性もある。もちろん消えた荷物はお約束のゴ
ミ捨て場だ

暇人はこれだから！

内心で吐き捨てて思いきりよくロッカーを開いた

が

あら、予想外の展開

「ちっ、カエルじゃなかったか」

「ローブも何もないようね」

ぱっと見た感じ荒らされてはないし、無くなったものもない

・・・まあ私の鞆、入学の時に紫ちゃんが念入りの紋様書き込んでくれた特別製だから中身はまず大丈夫だろう
とすると後は服・・・・・・・・・・・・・・・・アレちよつと待って

服はいたって正常。特に何も無い
杖も箆もちゃんどある。でもいつもはないけど、今日だけ特別にあつたはずのポケットの忌々しい薄い紙が・・・・・・・・・・・・・・・・

考えるより先に、手が動いていた

ズゴッ

ガンッ

ドゴンッ

ちなみに最初の音は私が自分のロッカーを（うっかり）殴り倒した音
二番目はこっそりこっそちを盗み見てほくそ笑んでいた馬鹿をロッカーに（つい）叩きつけた音

最後はその馬鹿の顔面横に拳を（勢いで）殴りつけた音

で

「今すぐキリキリはつきりと知ってる事全部吐きなさいわかってるわよねただの脅しじゃないわよ私はやるというたらアンタの顔面陥没しようが鼻血と鼻汁とよだれにまみれて二目と見られぬ顔になるうがこれっぽっちも良心は痛まないんだから！」

ノンプレス。我ながら良い肺活量だと思っわ！

ちなみに後ろではパティが真顔（つまりいつも通り）で呪具を構えていた

流石パティ、タイミングっていうものをしっかりわかってくれてるわ

私たちの本気を感じたのか、笑っていた魔女は悲鳴と嗚咽の混じった声で意味のわからないことを洩らし、軽く襟元を締めあげて脇腹くすぐりの刑を執行したら、たっぷり泣き笑いしたあと

「だ、誰かがっ、ら、ラブレターかなんかだろっから張り出してやるからって、わ、わたしこれ、この手紙で見て、ロッカーのところにいたら、お、面白いもの、見られるって！ひいひいごめんなさい二度と笑ったりしませんっ」

「当たり前でしょうが！」

手を離すと腰が抜けたのか座り込んだみただけど、そんなもん気にしていられない！

っっていうか

テスト結果とラブレターを間違えんじやないわよ大馬鹿があ！！！！

魔女名 1 (後書き)

実質的にテスト編の続きになります。どこまでいっても災難に見舞われる六花です

魔女名 2

私は必死に走りながら、ちらりと中庭の時計に視線をやる
体育が終わったばかりですぐ走ったせいか息は荒い。でも頭はいつ
にない勢いでフル回転していた

あの魔女とメモはパーティに預けた

あれだけ証拠があれば然るべきに出せば犯人はあぶり出せる

問題は私のテスト結果！

メモには中庭・・・食堂に行く時の回廊沿いにある掲示板に張り出すと書いていた

今の時間は昼休み開始1分経過！マズイ、ちよつと気のきいた先生の講義ならとづくに終わって食堂に第一陣が到着してる頃じゃない！どっかの馬鹿がいつ張り出したかわからないけど、昼前の講義とつてない連中には確実に見られ、あああああもう！なんで本人より先に赤の他人が結果知ってるなんて最悪じゃないのよ！

とにかくこれ以上晒し物になる前に回収しなくちゃ！

ああでも嫌がらせて張り出したって事は結果は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・考えるな！考えると気力が萎える！

考えている間に掲示板に到着

最悪の予想通りに、昼食に行くところだっただろっ学生が群がっている

ああもうそんな掲示板なんて無視して食事に行ってくれればいいのに！
人間の三大欲求の一つが悲鳴上げてんのよ！？野次馬根性なんてドブに捨てて食べなさいよご飯を！

「どいて！！！」

叫んだ瞬間人垣がぱつと二つに割れた
その間を突っ切り、息も絶え絶えに掲示板を見上げて……
……絶句した
確かにそこには手紙が張り出されていた

何故か送り主のところに私の名前が書かれた

何故か淡いピンク色で花模様の便せんの

何故か私の頭じゃひねり出せないような寒々しい文句が綴られた

何故か宛先がシェイドになった

ラブレターが

私はこのあり得ない現実を抹殺すべく指に力を込め

「こんなクソ寒い手紙誰が書くかああああ！！！」

叫び、問題のそれを握りつぶした
ちよつと掲示板を削っちゃった感があるけど気のせいだね。気の
せいにしておこう

ちなみにこの時ちよつと救いだつたのは、私の叫びに賛同して野次
馬の何人かが賛同してくれたからだ

ですよね

流石に恋する乙女が秋の夜長に書いた恋文だとしても、あれはあり
えませんよね？

まあこれに尾ひれむなびれついた噂が流れるのは防ぎようがないだ
ろうけど

この言葉にするのも寒々しいブツを私が書いたと思われただけ、
マシだとしよう

「あ、ほらやつぱり。僕の言った通りでしょールー
六花ちゃんはある本の書かないよ」

間延びした声に振り返ると、いつだったか会ったちよつちやい執行部
会長スマルトさんと、金髪物騒美人のルイスさんがいた
全身白衣の天使科は死神科ほどじゃないにしても、他の科との交流
が少ないからかなり目立っている

あれ、でも確か天使は生臭がだめだとかで食堂は別のはずじゃあ・

「こつちで騒ぎが起こってるって聞いたから来たんだよ。つたくと

この馬鹿だあ？余計な仕事増やしやがって！」

心底忌々しそうに毒づき、拳銃を手で弄ぶルイスさんに周囲の人垣が3歩ほど退いた

「一応聞いておくが、テメエじゃねえよな？」

もちろん私のもてる最大限の表現力を駆使して否定させてもらったルイスさんも形式的な質問だったようで、あっさり退いてくれる

「ん〜でもこれ微妙だよねえ、まあ酷い悪戯だけど執行部の出番があるかっていわれたらねえ」

僕らも暇じゃないし〜とはスマルトさん

まあ私としても、このくらいで大騒ぎするつもりはない

これなら手錠事件の時に立てられた噂の方がよっぽど悪質だしむやみに騒ぎたてると噂が広がるだけだしね

言つとスマルトさんは柔和な笑顔でじゃあお仕事はなしで！と軽く片づけてくれた

こっちとしてもそっちの方がありがたい（ルイスさんはストレス発散できなくて不満そうだったけど）

それに

この手の事は執行部より、魔女の方が有利なのだ

私は野次馬の何人かを捕まえて話を聞いた後、食堂に足を向けた
まだ肝心の試験結果が取り返せてないけど、野次馬の中に目撃者は
いなかった

最初の発見者が出てからほとんどこの場を動いていないそうだから、
目撃者がいるとすれば食堂！

四角の長テーブルの間をうろろろし、食事が終わりそうな人に目を
つける

早い時間から詰めていけば、だいたいの犯行時刻がわかるだろう。
なんかもう気分は探偵ね

と、ちょうどいいことに見知った顔を見つけた

「リーアンくん！」

叫んで、後悔した。隣に覚えていたくなかった見覚えのある顔がいる
確か前につつかかかってきた剣士科の奴ね、カーデンだがカーディン
だかいうお坊ちゃま（正確にはカーディナルです）

そっいえばリーアンくんの家ってコイツのこと仲良いんだっけ。
付き合いが合って面倒くさいとかいってたような。ああ、やなとこ
に声かけちゃった、でも今さらなかったことには出来ないしあーど
うしようかな面倒くさい。よし無視しよう！（結論まで0・1秒
間）

声に反応して2人 リーアンくんだけでいいのに、お坊ちゃま
と一緒に が振りむく
お坊ちゃまを視界から排除してリーアンくんに近づく。お坊ちゃま
の顔が苦々しげに歪み、リーアンくんが笑顔を見せ

なぜか次の瞬間、そろって視線を彷徨させた

え？なに？なによ

はっ！

「まさか！アンタ達あの手紙が私のもんだと思ってるんじゃない」

「なんだいきなり！」

「え、なに。なんのこと？」

・・・なさそうね

坊ちゃまはともかく目ざといリーアンくんが知らないなら大丈夫だ
ろう

「いや、ちょっとタチの悪い悪戯がね。ところで・・・」

ぱつと振りかえると馬鹿坊ちゃまがびくりと肩を振り寄せた

前にぶつとばしたのが効いたみたいで、ここ最近は絡んでくること
もなかった。それはそれで鬱陶しいモノが減って嬉しいんだけど

「さっきからちらちら何なのよ」

眉をひそめる

関わりたくもない奴だけど、意味ありげに見られるのはもっと嫌

軽く睨むと馬鹿坊ちゃまは眉を吊り上げて何かを怒鳴ろつと大きく口を開き

・・・結局閉じた

だからなんだってのよ！

「なに、言いたいことがあるならばつきりいつて」

こっちは早く情報を集めたい、焦ってるのだ。甘ちゃん馬鹿ぼつちやまに手間取って場合じゃないのよ！

馬鹿坊ちゃまはなぜかリーアンくん視線を向け、顎をしゃくって何かを促す

でもリーアンくんは笑顔を固めたまま無視した

ずいっと馬鹿坊ちゃまに詰め寄る

問い詰めるならこっちのほうが決まってるもの

「普段は鬱陶しいくらいに絡んでくる奴が何よ気持ち悪い！こんな時だけだんまりしてないでさっさと吐け！！！！」

「うわっ！やめる！お、俺に近づくな！」

「こっちだって好きであんたに近づいてんじゃないわよ！」

「いやだから、ああ何でわからないんだ！やっぱり落ちこぼれだな！魔女！」

はあああ？このくそ忙しい時に喧嘩売ってんのかあんたは！

ちょうどいいわ。ストレス発散にその喧嘩買ってやらあ！と言いかけた矢先、目の前に黒いものがかかり、視界が遮られる

「……その辺にしておけ夜半よわの月」

黒い何か……おそらくロープから顔を出し振りかえると、いつも通り（つまり無表情、というか顔が見えない）の篁さんが

ロープを外しているのに顔が見にくいのは、背中半ばまである黒髪
のせいだ

……正直ロープで隠れてないと死神通り越して幽霊っぽいから怖
さ三割増しだけど、この人に関しては今さらよね

「目立っている。日々の糧を得る場で騒ぐのは良くない。慎むべき
だ」

淡々とした声で紡がれる言葉はもっともで、素直に頷くべきなんだ
ろうけど納得はいかない

そんな不満が顔に出てたのか、篁さんは夜色の青い目ですっと見下
るして

「……気にするな夜半の月。そこな剣士科達は文化的意識
の違いから身の置き場が無いだけだ」

「はい？」

言われて視線を元に戻すと、馬鹿坊ちやまは突然現れた篁さんに顔
を青くし、さらに私に視線をやってかららしくもなく顔を赤くして
いて

「コイツが足なんか出してるから！」

言われて、気付く。そういえば私まだ着替えてないから運動着だっ

け（シャツにショートパンツ）

あー忘れてた。そうだよこのお坊ちゃん育ちめ

第二世界、つまり剣士科の世界って貞操観念とか価値観が古風なせいか、女の人は基本的に足を出さないんだった

流石に今はそんなことないけど、昔はスカートが足首より短かったらひんまぐ褻褻ものだったらしい

だから今でも普通科（第二世界の貴族多い）の制服なんかは、スカートがふくらはぎの半分くらいの長さまでである

庶民でもひざ丈より上になったらはしたない、って言われるらしいからねえ

今の私みたいなふとも晒してたらはしたない、どこのの騒ぎじゃないんだろうな・・・ふとも半分までしかないミニスカ見慣れるこっちとしては、信じられないことだけど

にしてもくだらない。そんなことでうだうだ引きとめられてたわけ！？

後から思えば、同じお坊ちゃん育ちなシェイドに会ってから何度も遭遇したカルチャーショックから、これからは気をつけようくらい思ってて退くべきだったわね

でも丁度この時私は頭に血が上っていて、ついでにかなり焦っていてようするに、他人のコトなんて考えてる余裕がなかったわけ

つい

「ふとももくらいで赤くなるなんて………剣士科って、案外初心？っていうか子供ね」

そんなことで私の貴重な時間をつぶしたとかふざけんじゃないわよ！
なんて、嫌味半分で笑ってやったらどうもオトコノコの矜持とやらを傷つけてしまったらしく

「う、う、うるさいいいいいいい！」

馬鹿坊ちやま、ああそうだカーディナルだっけ。カーディナルなんたらローシエンナ

で、そのカーディナル馬鹿坊ちやまは叫びながら食堂から逃走し（
なんか光る液状物体と一緒に散らしながら）

「………六花ちゃん、それはちょっと傷つくんだけど」

笑うべきか怒るべきか、それとも落ち込むべきか
影を背負って、実に微妙な笑顔のリーアンくん

そして

「………言葉は時に薬、時に凶器。使い処をわかって
いるな、夜半の月」

何故かうっすら笑う篁さん

前言撤回。やっぱり怖さ6割増しだ！

結局食堂ではまともに情報収集もできず、さくさく着替えて次の目的地へ向かう

探知系の魔術が使えればいいんだけど、残念ながらまだその“形”は覚えてないからやめておく
中途半端な魔術ほど怖いものはないからね

だとすれば後頼れるのは・・・

「ゆずり」

イイ男データを集める時以上に真剣な背中が振りかえる
いやアレは真剣っていつか行きすぎた熱意って感じだけど・・・

「探索系の魔獣、貸してもらえない？」

手土産に差し出した魚の干物詰め合わせに、まだら色の獅子が鳴いた

マルーン学園北部には草原と岩肌の目立つ荒れ地が広がっていて、
その中に点々と在るのが獣士科の獣舎だ
獣士科はその名の通り獣を従える者達を意味する

が、獣と一口に言ってもただの獣ではない

獣の納める世界 第六世界で暮らす魔生物

他世界の獣と違い、人と意思を交わし、強力な力、時には魔力を持つ獣を使う

一般に獣士が従えるのは魔獣

魔力、もしくはそれに相当する力を持つ獣で、才ある者ほど多くを従えられる

形は獣に限らず、魚に似た魔生物もいるが、実用性の面から水中のみでしか使えない魚属の魔生物を持つ獣士は少ない

また、特別な契約によって獣士に従うのは獣人

そのため獣人科と獣士科は合わせて考えられることが多い。人と交わり、人と獣両方の姿を持つ獣人と獣士は互いを尊重して互いを“主従”ではなく“盟友”と呼ぶ

獣士は獣人の力を借りる権利を得る代償に、人の性に押さえられた獣の性を解放し、力の源となる“血”を提供する
魔獣と違い、互いに1人としてしか契約できない

そして魔獣の中でも始祖、神獣の血を色濃く受け継ぐ獣 王獣

王獣は人と交わることをよしとせず、そのため第六世界の王の座も獣人王に譲っているが、未だその権威は健在。そのため獣士と契約を結ぶことはないが、時に気まぐれに契約を結ぶものもいると聞か
が、現在王獣と契約した獣士は存在しない

話は変わるが、獣士は時に召喚士とも呼ばれる

これは離れた場所にあっても魔獣・獣人を呼び出すことが出来るからで、魔術に似た力ではあるが根本的なものは異なる

そのため獣士と獣人は時に世界さえも異なる場に在る場合があるが、
獣士科は

“ 獣士と魔獣は一心同体！みんな仲良くラブ&ピース ”

という真面目なんだかふざけてるんだかな Motto を掲げているため、学園北部の獣舎で日々魔獣と共に絶賛共同生活中だ

で、六花が訪れたのはそんな獣士と魔獣の愛の巣（あながち間違っていない）の一つ、親友・桃山ゆずりと彼女の愛獣達の獣舎だ

「久しぶり、赤夜^{せきや}。これあげるから、ちょっと中はいつでもいい？」

獣舎では獣士と同じく魔獣にも声をかけるのがエチケット

魔獣はプライドが高いし、獣士にも自分の魔獣を親友！とか相棒！とか呼んで人間以上に可愛がってる獣バカが多いから、その人たちの前で魔獣をそこの動物扱いしようものなら、全獣士科を敵に回すはめになるのよね・・・

赤夜・・・真つ黒のたてがみに赤と黒のまだら色の身体を持つ獅子はゆずりが一番最初に従えた魔獣で、私もよく知ってる獣だからあつさり許可は下りた

木造の獣舎の中は藁が散らばっていて、いくらかローブについたけど気にしない

赤夜をブラッシングしていたゆずりに並ぶと、うとうととしていた赤夜は金色の目を此方へ向けて

『 久しいな御友人。昔は二日と開けずに通っていたものを』

低い声は微かに笑みを含んでいて、親友と同じく付き合いの長い魔獣の気安さに思わず笑った

「ごめんなさい。ちょっと最近忙しくて」

「ふっふっふ〜六花ってば最近旦那が出来たもんだから、浮かれて「嘘だからね赤夜！」

慌てて否定するけど、人間並みに人間っぽい思考の赤夜はうっそり笑って

『否定する必要はないぞ御友人。伴侶を得るのは大切なことだ。や子は一人では得られぬ』

・・・果たしてこの発言、どこまでが冗談なのか
赤夜は主に似て、いやむしろゆずりが赤夜に似てたちの悪い冗談が好きなのよね

ついでに

『・・・して御友人、我が主に悪い虫はついてはおらぬか？
私は滅多にここから出られぬ故、獣士科内ならばともかく他の虫共は中々はらえぬのだ』

超がつくほどの主馬鹿。というより父性愛かな
ゆずりが赤夜と契約した時はまだ6、7歳だったから、主人っていうより自分の子供みたいな感覚で相手してたから

「ご心配なく。相変わらず告白 玉砕ばかりで男っ気はないから」
うむ。主には悪いが、伴侶候補が出ようとも私が認めぬ限り、相

手には消えてもらっしかなかるうな
御友人、今後も定期報告をよろしく頼むぞ」

年頃の娘を持つ父親まんまの台詞に苦笑する
昔から、ゆずりのことに關しては細かいなあ赤夜は。前なんてちょつと犬触つて帰っただけで

『主よ覚えのない匂いがするが、何処の雄に移り香がするほどに接近を許したのか!』

つて吠えまくつて大変だったもんね・・・にしても

「相変わらず、ゆずり以外は名前で呼ばないね。赤夜は」

私はずっと『御友人』だし、ゆずりの家族も父君・母君としか呼ばない。名前で呼ぶのは主のゆずりだけだけど、それも特別な時にしか呼ばないらしい

『私たちにとって“名”は特別。故に気安く呼ぶものではないし、呼ぶことも許さぬ

御友人は主が許したので構わぬが、他のものが赤夜よ呼ぼうものなら腕の一本は覚悟してもらわねばならぬわ』

さらーっと言ったけど、結構怖いね赤夜

まあ魔獣達は主に従う代わりに名前を差し出す、ってくらいだから重要な意味があるんだろう

私たち魔女も、本名とは別に契約や魔術を使う時に使う魔女名・・・
“力ある名”があるしね

『気になるならば御友人が魔女名を持ち、力ある名がそちらに移れ

ば名を呼ぼう

だがそれまでは、御友人だ」

赤夜が軽く笑い、生温かい風にひげがそよぐ

………で、思い出した

「そつよこんなこと、いや赤夜との会話がどうこうじゃなくて！のんびりしてる場合じゃないの！ゆずり！」

「御褒美が魚だけじゃねえ」「リーアンくん提供、普通科イケメン男子プロフィール」のつた！」

ふっ、どうせそんなことだろうと思って用意しておいてよかったわ！前に普通科（金持ち科）はガード堅くてデータ集まりにくいとかぼやいてたからね

私が密かにガッツポーズを決めてる間に、決断したら即行動派のゆずりが魔獣を呼び出す

「探査系なら赤夜でもいいんだけど、目立つから……白砂！」
（トク）

ゆずりの声に合わせて現れたのは、手のひらサイズのコウモリっぽい魔獣

なんで“ぽい”かっていうと、コウモリにしては毛がふさふさだから。ついでに色も黒じゃなくて、白をベースにところどころ淡い砂色の毛が混じっている

「この子は目は悪いけど耳と鼻は良いから探索にはオススメで、あんたのことだから用意してるんでしょ？捜し物の手掛かり。匂い覚えさせるからちよっと貸して」

言われて、例の薄ピンクの便せんを差し出すとゆずりはぶはつと吐き出してから、白砂にそれを差し出す
ちびっこコウモリは可愛らしい仕草でその匂いを嗅いだ後、耳をピクピク動かしてゆずりの手から飛び立った

「さっすがあたしの魔獣！優秀、優秀！んじゃ行くわよ六花！」

「わかった・・・ってあんたも来るわけ！？」

「こんな面白そうなこと見逃すわけないでしょ！このゆずりさんが！というわけでどんな状況なのかキリキリ吐きなさい！」

『主・御友人、気をつけて行くように』

赤夜の声に見送られ、私とゆずりは獣士科のエリアを超えて、中央の校舎が立ち並ぶ学科棟エリアへ向かう

その中で白砂が向かったのは中央の共通棟から見て東側、
紅蓮の魔女の森 に近い棟・・・ん？

「ねえ六花、この方向って」

「・・・もしかしてもしかしなくても、魔女科の方ね」

まあ第一容疑者は魔女だからそれはいい。それはいいんだけど、何が問題かって白砂ちゃんに向かってるのは魔女科の棟の2階、それもこのまま真っ直ぐ飛ぶとしたら、さっき私が着替えに戻ったロッカールームで・・・

「・・・犯人は現場に戻る？」

まさにそのロッカールームの前で、褒めてと言わんばかりに羽をばたつかせながら白砂ちゃんが飛びまわる

ゆずりが追いつくと彼女の肩にとまってこーこーと可愛らしく

アピール

ってことはやっぱりここなわけで

嫌な予感に眉を寄せて、戸を開く

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」

我ながら間の抜けた声だと思うけど、予想外な光景があったんだからしょうがない

ロッカールームには私と同じ2年の魔女たちがほぼ勢ぞろいしていた黒いローブが円を描くように蠢いていて、その中心で青い顔をしているのは、呪詛まがいな視線を送っていた件の魔女

その隣で面倒くさそうにそっぽを向いているのがパティ。探査用の道具・羅針盤を持つてるから、頼んだようにあのメモと預けた魔女を使って犯人を探してくれていたんだろう

それだけならいい。流れからして犯人は青くなってる魔女なんだろうし、ありがとうパティ、持つべきものは友達ね的なお決まり文句を言えば終わりだ

問題は

その魔女の正面、対峙するように 周囲の魔女達を引き連れるように一歩前に出、冷徹な目で彼女を見下ろすその人

ウイスタリア・フィ・クローヴァー

「……どーなってんのよこれ」

背後でゆずりが眩く

私も全く同じ気持ちだった

魔女名 2 (後書き)

だんだん面倒なことになっていく事態。基本的に六花はこんな感じ
です

好転ならぬ悪転必至(笑)

魔女名 3

状況を整理しよう

私はテスト結果を盗み、自作ラブレターをあたかも私が書いたように公開しやがった犯人を探していた

件のラブレターの匂いから犯人が魔女科のロッカールームにいることが発覚

そのロッカールームでは第一容疑者が2年の魔女、ほとんど全員に囲まれていた

リーダーとパーティが輪を乱してるけど、この多勢に無勢

「1対大勢の環状リンチ状態つまりはイジメ！」

さて、私のとれる行動は3つ

選択？見なかったことにして扉を閉める

選択？他人の都合より自分、問答無用で容疑者を拉致る

選択？とりあえずボケてみる

「……………臨時魔女集会でも新手的遊びでも何でも邪魔する気はないから、5分その子貸してくれない？」

気持ち的には？を選びたいけど、？を選ぶしかないこの状況っこんなのはっかねホント！

容疑者の腕をひつつかんでさっさと片つけて、何にもなかった事に
してさっさと返す！これしかない
ちなみに？は初めから論外！

でも私の計画がうまく言ったのは容疑者に近づくまで

いきなりの乱入者に9割9分の魔女たちはぼかんとしたただけだ
けど、残り1分のうち一人、クローヴァーさんは流石無駄に、余計な
ことに、冷静だった

ずっと私と彼女の間割って入る

っていつても本人は邪魔をしているつもりはなく、単に私の前に出
てきただけなんだろうけど・・・

まあなんにしたって邪魔だけどね！

「そついうわけにはいかない。君個人の事情より、私たち魔女科の
事情を優先させてもらう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・それはまた一体どういう事情で？」

相変わらず魔女科命・・・・・・・・ここまで一貫してると逆に清々しいけど、
根本にあるのが紫ちゃん万歳精神だと思つて清いつて良いいも
のか・・・

そんな私の複雑な胸中など露知らず、クローヴァーさんはずっと双
眸をすがめて容疑者を見下ろし

「決まっている・・・・・・・・このルディ・フェン・コルク嬢が他人
のロツカーを漁り、あまつさえ神聖な 月輪の調 を盗むなど、魔
女の恥だ」

えーちなみにこのちよつと、いやかなり恥ずかしいお名前のブツは
魔女のトップ、月輪委員会からの文書のことです

大抵処分の勧告とか、レベル試験の結果報告とかで送られてくる・

「………ってことはちよつと待って、もしやクローヴァ
ーさんの持ってらっしゃりやがるその手紙って！」

「………たとえ内容が取るに足りないものでも、な」

やっぱり！しかも一番結果知られなくなかった人から決定的な一言
もらって！

ここまで悪いか私の人生！

「め、めまいがしてきた」

「しっかり六花く傷は浅いぞ」

ゆずりに支えられてなんとか体勢を立て直したものの、精神的ダメ
ージは計り知れない

やばい、やばいわ。ここ3日は本読めないくらいぐさつときた、ぐ
さつと

「………というかクローヴァーさんはどうしてロッカー漁ら
れたこと知ってるの？」

私言っていないし、パーティが進んで言うはずは……

「羅針盤使ってたから見つかった」

ないけど、付きまとわれたら面倒くさくなつて言っちゃうよね、パーティは！

うんでも悪くない、パーティは悪くないよ。憎むべきは元凶だからね！

「なんか笑顔が黒いし怖いわよ、六花」

黒くもなるわよコンチクショー！

えーちなみに羅針盤っていうのは大昔方向を示すのに使ってた道具で、パーティの一族はそれを改造して探し物専用に使ってるらしいです。なんか最近すっかり解説役になっちゃったな・・・ええ現実逃避ですよ。現実逃避してなにか悪いですか！？

でも御優秀な魔女科の首席さんは、私の現実逃避を許さなかった

「・・・まあ、試験前のあなたの態度を見ればこの結果も納得だが」
いつも通り、つまり非好意的な目と声で一気に現実に戻してきたかと思えば、さらに冷淡な目で容疑者ことルディ・フェン・コルクを見下ろし

「その白峰さんに負けた挙句、魔女科学生とも思えない方法で復讐するあなたはもつと無様だな」

睨まれた方はびくりと肩を震わせ、俯いたまま声もだせないようだ。まあこの多勢に無勢状態で虚勢を張れる根性があるなら、こんなせこい手で私に復讐なんかしないだろうけどね

・・・それよりも

私って手紙を盗まれて、くそ寒い偽造恋文公開されて、試験結果をばらされるっていう360度どこからみても被害者なはずなんだけど

「まあ、あの人に負けたらやけになる気持ちもわかるけど」

とか

「また試験に落ちたりしなきゃ、手紙なんて盗まれることはなかったのに」

どう好意的に解釈しても、被害者への発言じゃないわよね。これはいやまあ、今さらこの人たちに同情されても気持ち悪いだけだけど

でも、やっぱり・・・きついなあ

ちょっとだけ、期待してたから

今回は大丈夫なんじゃないかって夢に近付けるんじゃないかって

「その分他の奴らの何倍も努力してるだろ!!!」

あいつが言ってくれたように

「それにお前が身につけた知識は才能でもなんでもない、お前自身が努力で勝ち取ったものだ！お前はそれを誇っていい！それだけの価値があるものだ！」

今までの私の全部、意味があつたんだって、無駄じゃなかったんだって
胸を張って、言えると思つたのになあ

ああ、どうしよう。こんな慣れてるはずなのに、今はちょっときついかも

「六花」

右手がひかれた。もう行こう、ってゆずりが目で言っている口に出しては何も言わなかったけど、足は勝手に外に向かう

止める人はいない。それはそうだ、この場に私は必要ない

必要なのは彼女が魔女の名を汚したという事実の殻、中身の私は、私の事情は必要ない

ダツテ 皆 ソンナコト ドウデモイインダカラ

視界がぼやけた。それを知られたくなくて咄嗟に俯く

これ以上なにも聞きたくなくて、無意識のうちに手を耳に回す

これがいけなかった

ドゴッ

「ぎゃっ」

「あ」

ちなみに本来ならドゴツの前に「え!？」というゆずりの声が入ってただけ、私の耳には届かなかった
聞こえていたら今、必死でこらえた涙を、ドアに頭ぶつけて決壊なんてむなしいことにはなつてなかっただろう

いやそれよりも、なにより前に!

「あんた何してんのよ!？」

「ドアを開けたんだが・・・お前うちどころが悪くて記憶障害になつてないわよ!」

登場早々寒いボケかます奴なんて、私の知り合いでは一人しかいない

「だいたい女子のロッカールームに平然と入って来てんじゃないわよ!」

「え、剣士が魔女科にいることはスルくなわけ?」

「こいつがんなこと気にすると思う?ゆずり」

ないわね

でしょ?

「・・・なんだか馬鹿にされてないか、俺」

珍しく雰囲気を察してシェイドが眉をひそめる。と、同時にちゃっかり外にいた（いたんだ）灰くんが嘖きだした

「あはは、散々だねえシェイド」

せつかく届け物しに来たのに

「?・・・届け物って「剣士が魔女科になんの用だ」

「・・・ああ、そういえば背後で集団イジメの真っ最中だったんだっけ

敵意むき出しのクローヴァーさんに、シェイドはいつもの妙に偉そうな態度で

「別にお前達に用などない。用があるのはコイツだけ・・・おい」

ああ、あんたそんな言い方したらまたあの人に目えつけられ、って、ちよつと

すつと、温かいものが頬に触れた

「あれ」

「お」

「・・・（怒）」

両の頬に手が回され、ぐつと上を向かされる

私と手の主 シェイドの身長差だとほぼ完全に上を向かなきゃいけないから、首がちよつと痛い・・・って

「ちよ、シエイド！」

近いんだけど!?

「六花」

無視か! いや、それよりあんたホント近いつて!

ゆずりも灰くんも! 意味ありげに背中向けてないでコイツ止めて!
それとパティ、この場で呪いはまずいから!?

私も巻き添えくらうでしょ!?(　そこか)

きゃーと背後の魔女達が色めき立ったけど、そんな展開じゃないこ
とは百も承知だ

だってその証拠に、私を見るシエイドは海に近い碧色の目を不満そ
うに眇めている

「…………お前、またか」

だからなんだってーのよ!

頬に回った掌を掴んで引きはがそうと力を込める、でも手が離れる
よりもシエイドが口を開く方が早かった

「お前な、何があつたか知らんがまたらしくないことになってるぞ」

思わず力が緩む、しょうがないと言わんばかりにシエイドがため
息を漏らしたすきに、また冷たい声が飛ぶ

「あなた達、用があるなら余所でやれ。それとも剣士科にはその程
度の気づいかいも「俺たちが場所を譲るほどの用事か?これが」

でも相手を馬鹿にすることにかけては、シェイドも負けてない（コイツの場合、天然だけど）
非難気な魔女達の視線も気にせず、軽く鼻で笑って

「俺は今この場でコイツに話す必要があるんだ。部外者は黙っているそれとも魔女はそろいもそろって、他人の話に首を突っ込みたがるほど野次馬根性旺盛なのか？」

うっわ、きっつー

とかいいつつ顔は笑ってるよ、ゆずりでも笑ってるのは他に灰くんくらいで、言われた魔女達からはそれはもう背を向けててもわかる殺気がビシバシ飛んでくる

もちろんこの空気読まない男はそんなもの歯牙にもかけず、また私に視線を合わせて

「何があつたかは知らんが、また連中がうだうだ言ってくるならいつもの勢いで畳んでやれ」

あんたねえ、そんな簡単に言うけど女社会は色々面倒くさいし

「せつかく三日月レベルになったんだ、ちょっとは自分を認めてやれ」

ながーく恨まれると疲れ

「え？」

待って、今、あなた

「もっかい言って」

「？ちよつとは自分を「その前！」」

幻聴？今のって幻聴なの？シェイドがボケた？

それとも

「せつかく三日月レベルになったんだから・・・？ってお前まさか知らなかったのか？」

そんな現実、知らなかったわよ！

「え、え、でも、結果」

「あ、そうそう。僕らそれを届けに来たんだ
リーアンから聞いたんだけど結果盗まれたんだって？ゴミ捨て場
に捨ててあったよ」

一応確認で中身みちゃったんだ、ごめんね

ってほんと申し訳なさそうに灰くんが謝ってくれたけど、そんなの
正直どうでもいい、っていうか全然気にならなくて

正直信じられない

でもこの二人は絶対、そんな嘘はつかない。ってことは、これは紛
れもない現実で

「……………うわぁ、泣きそうかも」

「すでに泣いてたたる」

目がつるんでたぞ

ああそれを確かめるために私は首が痛い思いをしたわけね。他にやりようもあるでしょうに！

……………うん、でも今日だけは特別に許してあげよう

知らず顔がゆるむ

それを見てシェイドが何故か満足げに頷いて手を外し

「お」ではこの手紙はなんだ！」

……………ああここにもいたよ。空気読まない人が

苛立たしげにクローヴァーさんが封筒を振る

封が開いているそれにははつきりと宛名として私の名前が記載されている

奥の方から嫌な予感が首をもたげさせたけど、それを場違いに明るい声が打ち消してくれた

「なにもそれも、んなの中身入れ替えたら済む事じゃないのよー」

小馬鹿にしたようなゆずりの口調にクローヴァーさんが眉をひそめたが、ゆずりは気にせず振り返り

「んでシエイド君達が見つけたって手紙は、灰くんが確認したなら間違いなんでしょう？」

「もちろん。魔女の皆さんには及ばないけど、僕の“鼻”に間違いはないよ」

獣人だからね

軽い口調で片目をつぶって見せた。あれ、灰くんそんなキャラだったけ？

後で聞いたら道化みたいなフリした方が嫌味っぽいかららしい

「それに、すっかり名前も書いてるしね

ああ流石腹黒！そっちを先に言えばいいのに、あえて後でいうところが灰くんらしい

「……………ならば間違いはないようだな。こちらは偽造か」

「魔女なら偽物つくるなって朝飯前でしょ」

それにほら、こっちは月輪委員会特注便せんって証拠にすかして月の柄が入ってるし」

はっとしたクローヴァーさんは混乱をほぼ隠した冷静な動きで便せんを取り出し……………らしくもなくあからさまに顔を歪めた

「……………なるほど。確かにこちらは偽物のようだ

なぜ獣士科のあなたが月輪委員会の便せんをよく知っているのかは気になるが」

ゆずりはあからさまに視線をそらし、下手くそな口笛まで吹き出す

明らかにふざけた態度だけど、クローヴァーさんは余所の無礼より身内の失態の方を重く見たらしい

「盗難だけでなく偽造とは。君の品性もとことん地に落ちたようだな、コルク嬢」

余所の科に見破られたことも苛立たいんだろう
さつきよりも低い声を件の容疑者に向け、それからいつもの冷静面を私に向けて

「あなたに偽りの事実を述べてしまったようだ。申し訳なかったな、白峰さん

それからようやくとはいえ、私たちと肩を並べることができたようで、私もひと安心だ

これからは皆と同じ三日月レベルとして、魔女科の名に恥じぬよう努めてくれ」

少しだけ、唇の端が上がっている。ああ一応笑っているんだろう
それを見て周囲の空気が変わる

さつきまで責めていただけに、バツが悪いのか視線を彷徨わせるのが2割

悔しそうに唇を噛みしめるのが1割の半分

無関心なのが同じくらい

それから恨めしそうな視線を向けてくるのが1人

うってかわって歓迎ムードでおめでとう、と笑みを浮かべるのが7割

私を受け入れようという空気は、ずっと欲しかったものだった
一目おかれたいなんて望んでいない、ただ同じところに行きたかつ
たはずっと思っていた

思っで、努力して、叶わなくて、落ち込んで、迷っで

やっで叶っで

手に入れた、この空気は

はっきりいっで気色悪いわ

「は
」

あーアホらしい
確かに今さら好意的にされてもな とは思っでたけど、これは予想
以上に気色悪い

それ以上に、可笑的い

笑みを浮かべる私に7割の魔女達は首を傾げ、1人は目を見張り比較的マシな残り3割は啞然とし

それから私の友人たちはやっぱりな、と肩をすくめた

「らしい”顔になって来たぞ”

「・・・朴念仁のあんたも、よくわかって来たじゃない」

私のこと

打算的な私はやめておけ、と叫ぶ
でも理性と本能はやってしまえ、と共に沸いた

「同じ三日月レベル、確かにね。でも

人間的にアンタ達と同レベルに見られるのってものすごく嫌だから、その肩を並べる発言取り消してくれない？」

笑ってやれ。これ以上ない顔で、笑ってやれ。笑ってやった

7割の笑顔が凍ったけど、そんなこと気にしない
でも相手は気にしちゃうんだよね、やっぱり

「……………やっと同じレベルにあがったからといって、あまり

調子にのるべきではないと思うが」

特に発言者、クローヴァーさんは
でも、クローヴァーさん相手だからなんだーってのよ

「調子になんかのつてないわよ。むしろそれは貴方の方でしょ？」

目を眇める様は、前は委縮の対象だった。でも割りきっちゃった今
なら平気

だってこの人は

「いくらあなたが私よりレベルが上だからって、人の手紙を勝手に
盗み見ていいことにはならないでしょ？」

そういう人だ

「あなたはさつき私の手紙を『とるに足らない内容』だって言った。
つまり中身を見たのよね

封筒に宛名が書いてあるんだから、中身を見なくても私宛だってわ
かったはずでしょ？」

それを当然だと思う。そんな奴に、おびえる必要はない
クローヴァーさんが何事か口にしようとしたのを、手で制す

「たとえ他の人が開けたんだとしても、あなたが見たことには変わ
りない

それに偶然見ちゃっただけだとしても、謝罪もせず当然のように
その内容を語るの、品性があることなわけ？」

それから

「さつきからずーっと気になってたんだけど、なんであなた達がこの・・・コルクさんだっけ？を責めるの？」

雰囲気流されちゃったけど、やっぱりこれおかしいよね？

「勘違いしないで」

悔しいけど、またシェイドに助けられちゃったな

・・・本人は気付いてないんだろうけど

何も言わない、動かない、後ろの皆が
くれる皆が、私には最大最強の援軍だ

私の領分を守って

「これは私とこの人の喧嘩なのよ。だってこの人が嫌いなのは私で、被害を受けたのも私だけなんだから
だから・・・」

人の喧嘩に勝手に首突っ込んできてんじゃないわよ！

集団じゃなきゃ喧嘩もできない臆病者はひっこんでなさい！」

あー言っちゃった。うわ、7割の皆様歓迎ムードから一転眉間にし
わ寄せてるよ

まあ想像つくけどね、どうせ

「せっかく歓迎してあげてるのに、あの言い草はなによ・・・とか、
思ってる？」

だろっねー首振ったって無駄。顔に書いてある

「でも残念、せっかくのお誘いだけど……私、あんた達の“歓迎”って性に合わないのよね」

だから要らない

ああこれでやっと

「じゃあ、そういうわけだからコルクさんには手を出さないでね」

諦められる

ほんの少し、夢見た“光景”を

無理だと思いつつも、やっぱりちょっと受け入れられる未来って言うのを想像してたから

ちよっとだけ、偽りでもその輪に入ってみたいっていう思いはあった
でもその未練もこれで終わり

後悔するかなーなんて思ってたけど、気持ちは思いのほかすっきりしてる

ああやっぱり、どのみち私には向いてなかったんだろうな

それでいい、だってそれが私、白峰六花だ

三日月レベルになったからって、それは変えちゃいけない、変わらない

だからこれでいい、ううん

これがいい

不満をためて黙りこむ級友たちに背を向ける

と、座り込んでいたコルクさんがそりゃーもう殺気全開の声で

「……………そんなことで、私が感謝するとも?」

ってあー、そうかさつちに思考行く人ね

肩越しに振り返り

「誤解しないで」

半分故意に、半分無意識に冷たい声をつくる

「私はあるのを助けたんじゃない。ただあなたに借りを返すのに、他の連中に騙されなくなかっただけよ」

覚えてなさい

口角を上げて

「私、親戚のお姉さんに似て執念深いから、この借りは10倍にしてくっちり返してやるわ

……そっちの人たちと違って、公的に、だけどね」

とりあえず先生か学頭あたりに言えば執行部経由で正当な罰がある
だろう

個人的なお礼参りは……ま、その後気が納まらなかったらでいいか

今日はそんな気分じゃないし

今度こそ私は踵を返して、彼女たちに背を向け
代わりに追いついた

「お待たせ」

ずっと待っていてくれた、友人たちに

背を向ける白峰六花は、私たちと決別したというのに嫌に足取りが
軽かった

・・・理解できない

「なんなのよアレ！」

「三日月レベルになれたからって調子にのって！落ちこぼれのくせ
に！」

周囲で不満が爆発したが、ウイスタリア・フィクローヴァーは肯定
する気も否定する気も起らなかった

否、余裕が無かった

彼女は理解できなかった

白峰六花は、確かにずっとこちら側に来たがっていたはずなのだ

だってそうでなければおかしい

いつだって上手く魔術を使う自分達を羨ましげに見ていたではないか

新月から三日月、半月、そして満月へ

皆が誇り高い魔女になるべく、日々努力を積み重ねている

それが魔女科で、彼女はやっとそのレベルに追いついたのに

彼女はこちら側へ来るどころか、自分達を否定して背を向けた

理解できない

ウイスタリアは眉をひそめ、同時に腹立たしさに舌打ちした

否定したのはこの際いい。しかし同じレベルになりたくないとは何
事か

今回はレベルが上がったとはいえ、まだ彼女が遅れていることには
変わらないのに！

密やかではない声が上がったのは、彼女が憤慨するのとはほぼ同時だ
った

「いうわねえ、白峰さんも」

非難するというより、むしろ感心するようなものいいに反射的に眉
が上がった

声の主はそれを見ておかしげに笑いながら

「ごめんごめん、でも見事な啖呵だったからさあ。感心しちゃって悪びれもしない彼女、そして控え目ではあるがそれに賛同をみせる彼女の仲間
その様子に、ウイスタリアは白峰六花に対する評価を修正する必要があった

白峰六花は魔女科の9割以上を敵に回した
その代り、1割の半分以下の評価を上げたのだ

その事実には苛立ち、ウイスタリアは笑うその魔女達から目をそらした

「いつやー見た？あの魔女達の顔、傑作だったわね！」
「自分たちの好意を、白峰さんが受け入れないわけが無いって信じ切ってたみたいだからね」

あはは、どうしたらそこまで思いあがれるんだか

「うーん、さっき散々暴言吐いた私がいうのもなんだけど、容赦ないね。灰くん」

言つと笑顔で、

「赤の他人以下に容赦なんて必要？」

とおっしゃいました。確かにね！

目的地はなかったけど、とりあえずと魔女科を出たあたりでふっと
シェイドが足を止めた
そして何を思ったのかいきなり私の方を振り返り

「おめでとう」

いきなりだったから、その意味を理解するのに何秒かかかってしま
った
そして理解してからは、その意味が運んだ色々な感情に言葉が詰ま
った

ありがとう、って言えばいいんだろうけど、こいつにはそれだけじ
や足りない気がする
でもそれ以上の言葉が思いつかなくて、結局声になったのはたった
一言

「ありがとう」

声にするまでに、幾夜も必要とした一言
でも口に出してしまえば一瞬で、でも実感した喜びはそれだけじゃ
終わらなくて

「あ、シェイドくんぬけがけ！」

珍しくゆずりが（顔は）イイ男に怒って見せて、私の首に後ろから
思いきりしがみついた

「2番手になっちゃったけど、おつめでとー六花！今日は特別に、
ゆずりさんがあんたの好きなお菓子奢ったげるわ！」

「………よかったわね、六花」

「ぼろぼろになりながら特訓した甲斐があつたね（笑）」

浴びせられる言葉に、自然と笑みが浮かんだ

半分泣いてる気もするけど、でも確かにこれは笑顔で

「じゃあゆずりの言葉に甘えて、食堂いこっか！」

「ああそういえば……今日のゼリーは桃だったはず」

「シエイドは好きだね。桃」

「あら、なにその情報初耳！さっそくマル秘帳に書いとかないと！」

「……あほくさ」

だからもう一度、望んでいた言葉をくれた皆に、紫ちゃんに、くう
兄に、カナリア先生に、

私を待っててくれたみんなに、もう一度言っよ

「ありがとう」

おめでとう、と口にすると六花ちゃんは少し顔を赤くして、ありがとうと笑った

こんなに明るく笑うこの子をみるのはいつぶりだろうか

昔は、こんな風に良く笑う子だった

入学してからは暗い表情を見ることが多かったから、余計に今の笑顔が眩しい

つい今しがた、三日月レベルへ進む儀式を終えたばかりだから、余計に眩しく見えるのかしら

紅蓮の森の奥深く、私たちの秘密の隠れ家にいるのは、今は私と六花ちゃんだけ

儀式を終えた後、秘密の話があるといわれて咄嗟に浮かんだのがこだった

もちろん私の力を使えばどこだって“完璧な”内緒話出来るだろうけど、子供のころ、紅も入れて3人でよく内緒の遊びをしていたからかしらね

今でも“秘密”と聞くと浮かぶのはいつもここ

「それで、話ってなあに？」

使い魔のことではないわよね

それは真っ先に、明日にでも選びにうちの実家に来るって約束したから

話しにくいことなのか、六花ちゃんはすこし視線を彷徨わせてでもすぐに、前よりも真っ直ぐになった赤紫の瞳を私に向けて

「紫ちゃんにつけて欲しいの」

なにを、なんて聞かなくてもわかってる

でも言っただけじゃなかった。他の誰でもない、この子の声で言っただけじゃなかった

らしくもなく心臓が暴れた

でもまさか、言ってくれるなんて思わなかったから

「……私の、魔女名」

「いいの？」

咄嗟に聞き返したのは、迷っていたから

もちろんほかならぬ六花ちゃんの魔女名なら、私が考えたい

でも魔女名を考えると言うことは、その魔女の後見人になるということ

秘密ならいい。でもそれが明らかになれば、この子はきつとまたつらい思いをする

ただでさえ、私の家の事で言われもない中傷を受けているのに

あの噂が出た時は、情報源を本気で土に埋めてやろうかと思ったわ
半分実行したけど。もちろんこの子には秘密で

でも私の迷いを打ち消すほど、迷いない、声で、目で、この子は

「もちろん」

頷いた

「・・・ほんとはね、ちょっと迷っただけけど。でも、やっぱり紫
ちゃんしか考えられなくて」

だからお願い

闇夜でも浮かび上がる、この子の心と同じ真っ白な杖が姿を現した
月明かりで銀の装飾が微かに光を散らす

それを支えに、六花ちゃんが迷いない動きで膝をつく

「私にあなたの夜の恩恵をいただけますか？」

それは 力ある名 を望む言葉

闇夜を照らす月の 月を尊ぶ魔女の恩恵を望む言葉

声にも、目にも、迷いはない

ならば私にも迷う理由はない

すつと闇夜に手を伸ばし、名前と同じ紫の結晶をはめ込んだ杖を出
現させる

杖の先を肩に2回、そして六花ちゃんの杖と頭を合わせて

「^{アリエス}黎明 の名において、汝

雲間から月が白銀の光を放つ

この子に与えるなら、この名をと思っていた
でもこの子は受け入れてくれるだろうか

迷う

思いだす

この子の目を、声を

大丈夫

この子なら、六花ちゃんなら

この 運命 に、屈しない

だから、貴方にこの 名 を与えよう

汝 ルティナ に我が白銀の恩恵を受けよう」

六花ちゃんの肩が一瞬揺れた
でも私を見つめる顔に、後悔はなかった

「……………よかったの？」

確かめてしまふのは、私の弱さ

「うん」

そして肯定するのは、この子の強さ

「いいの、だって」

六花ちゃんが外を見つめる
視線を追うと、いつの間にか雲は晴れて

月が在った

何物にも邪魔されることなく、ただ夜を照らしていた

ルティナ

古語においては“月”を意味する言葉

そしてかつては、200年以上前は別の名で呼ばれていた

ルナウス

それは魔女の象徴にして、葬り去られた禁忌の名

魔女名 3 (後書き)

六花の色々は今回でとりあえずひと段落です
次回は”黒い人”が増えます

追加要員募集もとい拉致 1

“ ”

声がした

自分の名 名を呼ぶ声 聞こえるはずのない声

目を開ける

見える、光が、空が、闇が、緑が、川が、大地が、人が、町が
でも

あの人はいない

一番会いたいあの人はいない、見えない、声が聞こえない

だから目を閉じる

光を、空を、闇を、緑を、川を、大地を、人を、町を

あの人のない世界の全てを

拒絶した

「貴女の顔、配色、パーツ、どれをとっても好みドストライクなんです！付き合ってくださいませんか！？」

何のときめきも感慨もなく、それどころかメンドクセエと本気で思える告白場面なんてそうそうないと思う
いやそもそも、相手に馬乗り状態で告白っていう時点でときめきも何もないか

状況が飲み込めないのか、目を白黒させるシェイドの横で六花はフオローもなにも忘れて早々に傍観を決め込んだ

出会って5秒、や、10秒くらいは経ってたかな？
まあどうでもいいわ。どっちにしたって常識には変わらないし

ともかく覚えてる限り歴代最速で告白に踏み切ったゆずりは、こちらの白けた視線もなんのその

「・・・誰だ？」

至極まっとうな相手側（当然の如くイケメン）のツツコミに対しては

「あ、アタシは獣士科2年の桃山ゆずり16歳、第四世界出身で家族構成はおじいちゃんに両親兄弟弟の7人+魔獣達多数の大家族、

趣味はイケメンウォッチングと情報収集と色ボケした親友をいじり倒すことで目下の悩みは師匠がめんどくさい人なのと食堂の限定スペシャルプリンサンデーが手に入りにくいってことです！さ、とりあえずこれだけ知ればもう他人じゃないですよ？で、どうします？付き合います？一緒に青春しちゃいます？付き合いますよ！」

拒否の選択肢がないですよーゆずりさーん

あと最後、選択肢じゃなくて断定系だし・・・ここまで食いつくってことは、かなり好みだったのね。めんどくせえなんでよりによって美形チョイスしやがった

“冷静に”分析する頭の片隅で、お決まりの文句がうずく

なんでこうなった

そもそも、本日の私の予定にゆずりの告白場面に遭遇、なんてなかった

そんなもん入れるより、有意義な時間の過ごし方は一瞬で20通りくらい思いつくほどに、お呼びじゃなかったわ。んな予定！！！！

最悪の出逢いから早二ヶ月

面倒事はけっこう、いやかなり色々あったけど、朴念仁で空気読めない・・・けど嫌なやつではない相方と面倒な友人達ができだし、念願の“三日月”レベルにあがったし、なんだかんだと絶好調だった

今日帰って来た小テストの結果も予想より良かった・・・ま、相変わらず同科の子達には嫌われてるけど
でももういいか、とそう思えるから別にいい。うん、大丈夫、絶好調だ

その上天気は快晴、手には前から読みたかった魔術史の本
うん、空いてたら外のベンチで読書もありかな。今日の講義はもうないし・・・

考えつつ中庭へ続く回廊を進んでいくと、腕に違和感

『キゲン、よい？ あるじ』

するりと腕に絡みついていたのは、ついこの間契約したばかりの“使い魔”アシュ

蛇に似た体に羽を生やした姿は慣れると結構かわいらしい。まだ意思疎通がうまく言っていないから会話はおぼつかないけど・・・いやそれも可愛いかな、うん

蛇っぽいっていつても腕ひと巻きくらいしかない長さだし、小さい羽をぱたつかせて飛び回る姿は小動物に懐かれてるみたいでなんかこう、きゅんとする

・・・って言ったなら男連中はドン引きしやがったけどね！
まあわかってくれたのがゆずりだけっていうのは、ちょっとアレだけど

『あるじ？』

「ん？あ、ごめん何でもないよアシュ」

笑って、アシユの真っ白な鱗を撫でてやる。使い魔との身体的スキャンシップは結構大事だ

まだ意思疎通がうまくいってない時は特に重要で、その辺は人間とも変わらない

ただまあ私の場合・・・交友関係が狭い上にちよつとアレだから、そこらへん上手くできるか心配なんだけどね・・・あーつるつるしてて気持ちいいなあ・・・えへへ

人差指で鱗を撫でながら、思わず顔がゆるむ

正直なところ、使い魔が蛇系って聞いた時はちよつとスキャンシップとかできるか!?!とか思ってたけど、この感触はけっこうくせになりそう。うん

満足いくまでアシユを撫で、気を取り直して意気揚々と中庭へ踏み出す

瞬間

『遠きは近く 近きは遠く 月求める夢追い人 手にせよ満ち月

六花ちゃん、確保v』

足元に魔力を感じた。かなり強い、というか強引なのは術者そつくり。ついでに放つ光も紫がかっている

紫ちゃんが近くにいないってことは使い魔を介した転送術かな

Ⅱ 緊急招集

Ⅱ 面倒事キタコレ

「私の平穩、ここまでかつ!!!」

頭を抱えるのと同様、足元から地面が消えた

ぼすりと尻もちをついたのは、冷たい床ではなく二人掛けのソファだった

柔らかく、深く沈むソファは間違いなく高級品だろう。鑑定眼なんて持ち合わせてないけど、たいていよく沈むソファーⅡ高級品だ

部屋の中央、ティーセットとお菓子が盛られたテーブルを囲うように二人掛けのソファが4つ

私から見て右側には桜さんと篁さん、左は空、そして正面は予想通りというかまあ・・・お呼び出しの張本人が

「呼び出してプチお茶会？」

目の前で優雅に足を組む ああなんで美人は無駄に足も長いんだろう 紫ちゃんに、軽く眉をひそめて見せる

「いい加減慣れたら?」

ソファの端まで寄って限りなく私から　　というか、私の手から
マカロンをつついていているアシュから身を離そうと無駄なあがきをし
ているシェイドに、半目を向ける

「無理だ」

そして即答。ちったあ頑張りなさいよアンタ!

ちなみにこのやり取り、多分もう50回は超えてる
なんたつてこのヘタレ、アシュを使い魔に選んだ日にわくわくをこ
らえきれず、半分自慢で紹介しに行ったら・・・

こつちを見た瞬間、思いっきり顔をひきつらせて逃げやがったんだ
から!

しかも第一声が『気持ちが悪い、近づけるな、こつちに寄るな!』
はないでしょ!アシュはこんなに可愛いのにっ!

「トラウマだかなんだかしらないけど、仮にもコンビ組んでるんだ
から、見るたび悲鳴上げられると迷惑なんだけど?」

眉を寄せるとシェイドはさらに掌一つ分、私達から離れて

「だったらお前も、大量のそれらと一晚過ごしてみろ」

恐怖で泣くぞ!

「え、普通に過ごしたけど?」

それもついこの間のこと

基本的に一つの魔女一族に一つの使い魔一族が代々つくようになってる。たとえば紫ちゃんのところは真珠色の蛇で、パーティはコウモリ、桜さんは・・・まああそこは特別ね、うん

で、我が家の使い魔達はここ何代か魔女がいなかったから、親戚でもある紫ちゃんのところは預けてた

普通は契約した魔女の一族が世話するのがいいんだけど、魔力皆無だと会話も出来ないし、なにより使い魔としての訓練もできないからね

それで三日月レベルになつて直ぐ引き取りにいったんだけど・・・まあ何代も放置状態だったもんだから、意思疎通が大変で

使い魔の契約が生きてたから面倒にはならなかったけど、主人認定してもらったのに何日か寝食ともにしたり・・・うん、大変だったけど怖くはなかったわ

言うと思いつきり不審者を見る目を向けてきやがった、近くに合ったクッションを思いつきり投げてやった

ドゴツとかちよつとクッションにあるまじき音がしたような気がするけど気にしない、うん

「はいはい、じゃれるのはそこまでよお二人さん」

「じゃれてない(です)!!」

叫ぶけど、先輩方は誰も気にせず優雅にカップに口をつけて

「それじゃあ全員そろったところで
そろそろ残り2人のメンバーを決めようかと思うんだけど」

・・・ああ、そういえば2人足りなかったんだっけ
気付かなかった。というかメンバーが1人頭常識人1・5人分は存
在濃すぎて忘れてた

え？酷い？

・・・これからまたトンチキな連中（確定）が増えるかと思
うと喜んでなんかいられるか！

「はいはい六花ちゃん、色々察してくれているようだけれど・・・
今のうちのチームに足りない人材は何だと思う？
シェイドくんも、アシュから逃げるばかりじゃなくて考えてみてち
ようだい」

紫ちゃんの声に意識を現実に戻す
今まで紫ちゃん・くう兄なしで何度か学ゲー模擬戦があった

8対4とかあからさまに不利な状況だったけど、人数だけじゃなく
て・・・

考え、口を開いたのはシェイドとほぼ同時だった

「獣士」

「獣人」

ちなみに獣士が私で、シェイドが獣人
割れた意見に紫ちゃんが面白げに笑って

「理由は？」

「瞬視線をかわし、ゆずる

「一応そのくらいのアイコンタクトは通じるようになってきた・・・
まあ密度濃かったしね、この数カ月

「一瞬遠い目になった私に構わず、シェイドは居住まいを正して

「うちに足りない機動力と敵の探索能力を補うためです」

「お、と思ったのは考えてる事が同じだったから

「先輩方もシェイドの答えには満足したのか、黙って頷いて先を促す

「探索魔術だけでは魔術防護で防がれますし、限界があります。ですが獣人なら五感を使うので確実性は多少おちても、術の穴を埋められる

「それに速攻が必要な場合、獣人の瞬発力・機動力は有用かと。魔術の肉体強化では限界もありますし、なにより基礎能力が違う分、人型種族だけでチームを組むよりも攻撃の幅が広がると思います」

「獣人 魔獣とは違う、半獣半人の種族。魔獣の一部が人間と交わった種だとか、人型になる魔術を使い続けた末にそれが定着したとか・・・色々説はあるけど、未だに謎の多い種族

「基本は第六世界に住んでいて、他世界と交わることは滅多にない。唯一交流があるのが学園と軍くらいかな

「迫害された過去 や、過去つてことにしてるのはお偉方だけだけど があるから、当然の結果だけだね・・・」

獣人は大きく分けて灰くんみたいにはほぼ完璧な人型と（見たことないけど）獣型の姿を自由に変えられるタイプ
童話みたいに獣の姿そのまま（多分）二足歩行してるタイプに分けられる

どちらにしても獣の特性を受け継いでいて、特に人間に比べて五感なんかが発達してることが多い
あとは種族によるけど鳥族なら飛行能力があるし、狼族や虎族なんかだと身体能力が人とは段違い

だから敵の探索なんかでは有利だし、実戦的な事でいえば肉弾戦なら獣人の一般人は人間の軍人レベル……学生レベルじゃ素手なら最強って言うてもいいだろう

うん、確かにスピードある接近戦面子は欲しい
メンバーの半分は接近戦しめてるけど、篁さんは大鎌使いだから素早い行動は難しいし、くう兄は体格良いしシェイドも細身だけど背丈はあるからスピード派ってわけじゃない

にしてもなあ。戦闘系に関しては頭まわるのに……
……なんて同じ対人でも人間関係になるとあんなダメダメなんだ
ろうこイツ　今さら

シェイドの説明に満足したのか、紫ちゃんはにこりと3割増し輝かしい笑顔を浮かべる
ほっと隣でひっそり息をついたのが聞こえたから、頑張って手を伸ばして（遠いのよアンタ！）肩を軽く叩く

お疲れさま

なんて他人事のようにしてたら、いきなり矛先がこっちに向かう

「六花ちゃんも、同じ意見なのかしら？」

頷く、でも問いかけは続いて

「じゃあ獣人じゃなく獣士を選んだ理由は？」

流石、授業と違ってそう簡単には終わらない

試されてる、その事実には緊張する。でも
こつこつこの、嫌
いじゃない

学科の中じゃ、試されることもなかったし

一瞬過去の諸々を思い出しかけて、頭を振る

だめだめ、一度ネガティブ思考にはまりだすとずるずるいつっちゃうし

誤魔化すように紅茶を一口含み、喉を潤す

うん、大丈夫

「通信も出来るから。学ゲー模擬戦だと桜さんの魔術で連絡し合ってたけど、本戦になったら長期戦もあり得るでしょ？」

図書館で調べた過去の学ゲー記録を頭でなぞる

確か最長1週間も戦い続けたグループがあるらしい。その間授業どうしてたんだろう・・・てのは野暮よね

「そうでなくても、他に魔術も使うのに通信魔術を全員分繋ぎっぱ

なしってかなり負担になると思うの

その点、魔獣を使った通信なら負担もないし、なにより魔獣の分人員が増えれば人海戦術も出来て戦略の幅も広がるし」

そうね、と頷きが一つ

良かった、及第点みたい

「2人共、いいところをついてるわ。じゃあ全体として欲しい人材は一致するわけね？よかった」

ほっと肩を落とすと、シェイドが自分の皿に山盛り乗せていたマカロンをひとつ寄こしてきた

ひとつつていうのがまたシェイドらしい、かな・・・アシユに威嚇されてすぐに退くところも

でもせっかくだから、ありがたくもらっておく

ちよっとお行儀は悪いけど一口で放り込んで、喉を潤すのもう一杯

「実はもう目星付けてあったから。ね、ゆずりちゃん」

飲んで、噴いた

そりゃあもう盛大に。ついでに噎せた

『あるじ!?!』

「お前・・・噴くなら食べ物が無い方に噴け」

言うに事欠いてこの男・・・!いやいい、とりあえず今は良いわ

問題は

「ちょっと六花あ、あんたどこで良い男が見てるかわかんないんだから、常に立ち振る舞いには気い使いなさいよ！そんなだから彼氏出来ないのよ？」

入学以来連戦連敗の女に言われたくない、というか

「・・・なにしてんのゆずり」

いつの間に・・・は、この際いい

どうせ自分の魔獣だか紫ちゃんだかの力で隠れてたんだらう

私を驚かすため“だけ”に

この暇人

毒づいて半目を向けるとゆずりは反省など微塵も見せず、相変わらずのけたたましい声で

「なーにもどうも、この状況で察せないあんたじゃないでしょーあ、それとも色ボケして頭鈍っちゃった？」

とか戯言ほざきつつ肩に回してきた手を跳ねのける
もちろんゆずりは気にもせず、逆に後ろから抱きつく形で思いきり体重をかけてきて

「つれないわねえ、親友のあたしが同じチームなら心強いでしょ？」
「今は心と肩が潰れそうよ、“重くて”」

最後に強調してやると、回された腕がビシリと固まる。最近体重気にしてたしねえ……

ちよつとだけすつきり

気が晴れたところで冷静になってみると、ゆずりつて選択は妥当だ
と思う

今から知らない相手がメンバー入りするよりも、見知った人の方が
チームワーク乱れなくていい。幸いゆずりはくう兄と篁さん以外と
は馴染みだ……この2人はそもそもあんまり他人に興味ないしね

「で、ゆずりはいいとして……もう1人は？」

視線をやると、紫ちゃんはニコリと笑って

「それはこれから

拉致ってきてね、3人でv」

は？

追加要員募集もとい拉致 1 (後書き)

言ってることもやってることも犯罪な生徒会長、久我紫(笑)
次回、黒い人を拉致りに行きます

追加要員募集もとい拉致 2

紫ちゃん曰く

『目を付けてる子はいるんだけど、なかなか捕まらなくて困ってるのよ
私達も色々しかけたのだけれど、警戒されてるのか今じゃ近づいた
だけで逃げられちゃってねえ

だから新顔でいけば意外といけるかもしれないと思ってV』

言ってることはもっともらしい。でも

「あのメンツで捕まえられない人相手に、私らだけでどうしると？」
強制お茶会という名の会議から放り出され、私とゆずり、それにシ
エイドは最後の犠牲・・・じゃないメンバー候補を探しに獣人科へ
向かった

もちろん自ら進んで・・・のわけがなく、

『よ、ろ、し、く、ね？3人とも』

しくじったらどうなるかわかってるわよね？

脅されて、だ！

「獣人科5年、黒駒ねえ……うーん、獣人科って死神とか天使と同じくガードかつたくてさあ、情報あんまりないのよねえ」

愛用のペンでこめかみをつつきつつ、ゆずりはイイ男データとはまた違うマル秘帳を取りだす

「特にこの黒駒さんって獣人科内でも交友関係少ないのか、それとも影薄い地味系なのか、他の人の交友関係情報に全然名前ないしさあ」

「……そのガードの固い獣人科の交友関係、いつもながらどうやって調べてんのよアンタは」

よくぞ聞いてくれました！とばかりにストーカーどころか犯罪一手前の、いわく情報収集のための“苦勞”を暑苦しく語るゆずりを適当に流しつつ、私達は獣人科の門の前で足を止めた

獣人科は学園北西の、獣士科と魔女科の間にある

マールン学園は各学科共通の講義室や多目的ホールなんかのある共通棟を中心に、各学科が円状に配置されて、それぞれ森だったり壁だったり……時には結界なんかでそれぞれの領域を区切ってるちなみに北から獣士・獣人・魔女・死神・職員・天使・一般・剣士で……もちろんこの並び、諸々の事情ですったもんだの末決定されたものらしい

だから各学科に出入りするなら専用の門から出入りしなくちゃいけないんだけど……

「獣士科のゆずりはともかく、私達まで入れるかな……」

剣士科はいわずもがな不仲だし、魔女は・・・良くも悪くもない感じ
魔女と獣士との間なら我慢できる、といわれたくらいには評価良い
だろうけど、お互い積極的に関わり合うような仲じゃないし・・・

なんて心配は杞憂だった

こっちの制服を見てあからさまに顔を顰めた熊（熊っぽいじゃなく
本当に熊）の門番さんは、紫ちゃんの手書きメモを見た瞬間怯えた
様子で門を開いてくれた・・・いつもながら、何したんだろ
う紫ちゃん

ともあれ、なんとか中に入れたのはいいけれど

「悪いが、いくら会長の命令でも勝手に動き回られるわけにはいか
んのでな」

結局門番さんが黒駒さんを連れて来るまで、門の近くの切り株テ
ブルで待たされることに

まあ門番のリアル熊さんお手製蜂蜜ミルクもらえたからいいけど

・・・しかし獣型獣人、手がもる熊手なのにティーカップ仕様とは
器用な

なんて妙なところに感心しつつ待つこと5、10、30・・・1時
間以上

「・・・遅い」

最初に口にしたのはシェイド

手持ち無沙汰に剣振りまわしてたけど、ついに飽きたみたい

「だいたい、普通は放送で呼び出して終わりだろう。なんでこんなに時間がかかるんだ」

「・・・えーっと、出かけてるとか？」

一応フォローは入れたけど、本当にそう思ってるわけじゃない
出かけてるなら出かけてるで、そう言えば済む話だから。ってこと
はつまり

居るのに 見つからない。意図的に無視してるか、逃げ回っ
てる可能性があるわけで・・・

どっちにしろ、面倒な事にはなるんだろうなあ。ああもうなんで私
がこんな貧乏くじを・・・っ！

なんて、ネガティブ全開で頭抱えてたから気付かなかった

「六花！」

『あるじ！』

叫びと同時、重いのと軽い塊にぶつかられる感覚

視界が目まぐるしく変わり、地面と平行に 押し付けられた形
になって

ほぼ同時に

目を開けていられないほどの風圧が、来た

っなに!？

ゆずりがにやりと不敵に笑い、懐から石を取りだす。召喚用の“血盟石”だ

赤、そして白と砂色が混じり合った石を宙に投げ

“ 喚^よんだ ”

『 開け 狭間の門 繋げ 血の道 応えよ 盟友 赤
夜！白砂！ 』

獣士の召喚術。学園内でみたのは久しぶりかも！

不覚にもわくわくしてしまった私の目の前で赤と白の光が弾けた。

視界が開けた時にはもうゆずりはまだらの獅子の背に飛び乗っていた
その進行方向と、一匹だけ残った白いコウモリっぽい魔獣 白

砂に、私も察してロープの飾りに手を伸ばす

あんたせめて一言くらいいいなさいよ！ 言わなくてもわか

つちやうけどさあ！

ロープの留め金についている鈍い黄金色の飾りに力を込める。瞬きの間に光の“陣”が広がり、黄金は箒に形を変える

自然と宙に浮く箒の柄に飛び乗り、精神的に置いてきぼりをくらっているシェイドに手を伸ばして

「 私たちも空から行くわよ！ 」

胸倉をひつつかみ、左足を叩きつけて柄を上むきに跳ねあげ、ほぼ垂直方向に箒を急上昇させる。うん、やっぱり立ち乗り気持ちイイ！

掴んだ手の向こうと、下でなんか叫んでた気がしたけど、まあいつか

「お前、そのなんでも力業にでる癖どうにかしろ！」

空中でなんとか箒の後ろにまたがったシェイドが吠える（無理だと叫ぶので立ち乗りはやめた。楽しいのに）

「だったら呆けてないでさっさと動いてよ！なんかもうよくわかんないけど、とにかく黒駒さんとお捕まえないと紫ちゃんに何されるかわかんないでしょ!？」

怒鳴るように言い合うのは怒ってるからじゃなくて、声を張り上げないと聞こえないからだ

件の黒駒氏、かなり移動スピードが速くてさっきから最高速度出しまくってるから、風がうるさくて普通に話しも出来やしない！下をのぞくと獣人科の森エリアに入っちゃったらしく、木々の間からかろうじて赤夜の姿が見える程度の視界しかない

『六花　っ今アンタ達どの辺飛んでる!?!下からだと思えないから

小まめに報告ちょーだいつ！！！！』

ふわふわの白コウモリから聞きなれたゆずりの声が飛ぶ

ちよつとシジュールだけど、今はそんなこと気にしてる場合じゃないか！

「えーつと・・・今ゆずり達の進行方向から見て右後ろ辺り！赤夜後には付いていけてるけどこれ以上は無理！・・・とりあえず、ギリギリのどこまで高度下げよ！」

最後は後ろのシェイドに向けて

初めての箒飛行で最初はギヤーギヤー言ってたけど、流石剣士だけあつて運動神経はいいらしい

体重移動も上手く高度を下げるのに特に支障はなかった。ああ、その運動神経スキルちよつと社会性とか気遣いに回せたらいいのに

「どう！下、見える！？」

「なんとかな！黒駒とかいうのは5テスくらい先を行ってるようだ！」

視界はちよつと良くなったみたいだけど、この位置だと余所見したら木に衝突！なんてこともありうるから私は視線を動かせない

ゆずりとの通信はシェイドに任せて、とりあえず飛ぶことに集中したけどつ

「なんとかしないと、はつきりいって体力勝負じゃ勝ち目ないわよ！」

魔力は足りるけど、箒移動は基本体力勝負

普段ならともかく自己最高速度維持しつつの2人乗りは思ったより

きつい！

『ゆずりさん頭脳労働は苦手なのー、アンタに任す！』

この野郎

いいつつも頭の中はフル回転。面倒だけどやるっきゃない、という
かやらなきやカヤラナキヤ後アトが怖い！

「六花、あの黒駒つてやつ、さつきから直進しかしていない」

息が耳元にかかって、ぞわりと肌が粟立った。シェイドの顎が肩にあたる

ちよつ、あんた！近い近い近いっ！

「俺達を巻きたいなら蛇行するはず、多分相手は直進方向に……
つておいこら離れるな！」

「だつてくすぐった……いや違う！こんな近くで話さなくてももっ
！」

「離れたら叫ばなきやいけないだろ！聞こえたらどうする！相手は
獣人だぞ！」

……ああ、そういうこと。確かにそれなら納得。でもせめて前フ
リくらいしてよね！心臓に悪い！

つてこいつにそんな気遣い期待するだけ無駄か。私は黙って耳をシ
ェイドの方に傾けた

それを了解と取ったのか、シェイドは再び距離を詰めて

「前に灰に聞いた。獣人は人型の時でも獣型の習性が行動に現れや

すいらしい

ならアイツが直進しかしないのはその習性故と考えていいと思う」「なるほど。だったら

「ゆずり、ちよつと速度緩めて距離とつて。出来れば自然に。でもいざつて時飛びだせるくらいの距離は取つといて」

『・・・りよーかいつ！なんかひらめいたわけね六花！』

「一応、ね！けつこう行き当たりばつたりだけど、やらないよかマシでしょう！」

『はいはいんゝ、追加でなんか喚んどく？』

「今はいいわ。嗅覚特化タイプなら気付かれるし・・・その時になつたら合図するから、“緑玉”^{ぐりょくぎよ}によるしく」

ひとまず終わり、と白砂の頭を軽く撫でる。赤夜達と違って白砂はわりと人懐こいから、獣士以外が撫でてもおんまり怒らない

「あとは・・・ねえシェイド」

私は出来るだけ柔らかい声になるように努めた。それから可能な限り優しそーな笑顔になるようにいや、だって、ねえ？

「あなた　　高いとこ、平気よね？」

私なら、絶対やりたくないもん

黒駒は背後の気配が離れていくのを感じた
諦めたのか、引き離したのか、わからないが油断は出来ない。もう
少し引き離すべきだろう

彼はそう判断し、再び地を蹴って

噓せかえるような花の“匂い”がした

直後、耳をつんざく爆音が響いた

軽く眉をしかめ、背後に飛ぶ
左右と前方にはまだいくらか花の匂い
だ餌があるのかもしれない

魔力が残っている。ま

が

日が、陰った

視線をあげる。落ちてくる。

「……………毛玉？」

の、ようなものが 背後に

大きさから推測し、後ろに傾けた体を無理矢理前に倒す

魔力はまだ残っているが、近づかなければどうにかなるほどの“力”ではない

粉塵が巻きあがる

振り返ると、森の緑に混じって明らかに異質な……緑色の毛玉が、赤い8つの目でこちらを見ている

大蜘蛛か

見た目は醜悪だが、思ったより大人しいのか攻撃は仕掛けてこないならば強行突破とつま先に力を入れる

日が、陰った

視線をあげる。落ちてくる。

「ぜったい、あとで、おぼえてる！」

悪態をつく、人間の男が 真上に

反射的に力を込める

一瞬甘い匂いがした後、鈍い煌めきが目に入った

刃物、剣士が

咄嗟に匂いの薄れた右側へ避けて、気付いた

はめられた

「確保 つ！！！！」

地面に引き倒されたのと、威勢の良い人間の女の声が上がったのは
ほぼ同時だった

追加要員募集もとい拉致 2 (後書き)

もはやスカウトというよりハンティング(笑)

一番楽しかったのは筈に乗る六花です。本以外でテンションが上がる六花を書くのは貴重なので

追加要員募集もとい拉致 3

緑玉のおかげでいい感じに見晴らしの良くなった森にゆっくり降下し、安定した地面の感触にふっと息をつく

「で、やった？」

「……言い方がえらく物騒に聞こえるが気のせいかな？」

「幻聴じゃない？桜さんに薬調合してもらえば？」

「遠慮する。余計に悪化しそうだ。それよりもお前……」

溜めの瞬間、私は咄嗟に両手で耳をふさいだ

シェイドが眉を吊り上げて叫んだのは、ほとんど同時だった

「いくら作戦だからってあの高さから落とすか普通！？死ぬかと思っただぞ！」

「死んでないからいいじゃない。それにちゃんと防御結界張ったし！」

「お前の結界が信じられるか！」

「実戦で何度も使ってるでしょ！？いい加減信用しなさいよ！」

それに結果的に、黒駒さん捕まえたし、アンタも生きてるし、いいじゃない」

「そういう問題じゃなくてだな……」

倫理観とか道徳観とかぶつぶついつてるシェイドをスルーし、私はゆずりの方へ足を向ける

こちらを振り向き、獲物（黒駒さん）の背中に乗ってとったどーと

言わんばかりにいい笑顔・・・あんた獣士ってというか狩人とかの方が向いてるんじゃない？

ともあれ、いきあたりばったりだったけど、上手くいって良かった

「・・・そういえば、攻撃系の魔術なんかいつ練習してたんだお前、訓練の時もまだ使ってたろう」

文句を言うのは諦めたのか、それともとりあえず置いておくことにしたのか、気を取り直したシェイドがいかにも驚いた風な目でこちらを見て来た

いやーまあそういう意味で驚いてくれるのは嬉しいけど

「あれ、攻撃魔術じゃないわよ」

「なに？」

「というか魔術じゃない。失敗作。適当に苦手な術に目茶苦茶魔力叩きこんで爆発させただけ」

「ああ、要するにいつもの失敗「わ・ざ・と・だけどね！」

そうわざと。大事なことから二回言うわよ。なんなら3回だっていうけど

とにかく、あれは失敗だ。威嚇になりそうな攻撃魔術は知らないから、代わりにわざと爆発を起こして攻撃に変えた

「・・・まあ、今までの教室爆破記録も無駄じゃなかったってことね

一応私なりに、魔術を失敗する理由は自覚している。だからやろう

と思えばわざと失敗することも出来るし、経験から爆発を調整することも出来る

失敗するのは簡単なのになあ・・・

ともあれ、黒駒さんが直線距離しか進まないって言うのがわかったから、罠にかけるのは簡単だった

進行方向と左右に攻撃を仕掛ければ、当然後ろにしか行きようがないしかも私の場合、必要以上に高濃度の魔力を叩きこんだから、魔術が発動した後も魔力残滓のおかげでいかにも“まだ魔術残ってます”って風に思わせることが出来る。魔女と違って、五感だけで魔力を感知する獣人ならなおさら

そこにさらに背後をゆずりの魔獣・大蜘蛛の緑玉で潰して続いてシエイドを投下

連続攻撃で焦ってる所に、逃げ道を作ってやれば“理性”より“本能”優先の獣人なら、飛びこむ可能性は高い

・・・一か所だけ魔力残滓が早めに無くなるように、魔力量調整するのはちよつと大変だったけどね
魔力コントロールは一番苦手だから、けっこう大雑把になっちゃったけどまあ終わりよければすべてよし。うん

「はいはい、いちやつくのはそこまでよお2人さん

じゃーさっそくこの根暗（推定）くんを紫さんのとこ連行しましよー

ってわけですはお顔拝見・・・」

つつこむ間もなく、ゆずりは黒駒さんの上に跨ったまま無理矢理彼の身体を反転させて

「貴女の顔、配色、パーツ、どれをとっても好みドストライクなんです！付き合ってくださいませんか！？」

告った。いや叫んだ

というところで回想は終わり。いや長かった、うん
じゃなくて

「ゆずり、あなたのスピード告白は慣れてるけどせめて馬乗りはやめなさい。馬乗りは」

至極まっとうなことを言っただけ、あの恋愛脳女聞いちゃ
いねえ

相変わらず腹部に跨ったまま目をキラッキラさせている

と、今にも押し倒さんばかりに身を近づけているゆずりの身体を無理矢理起こし、黒駒さんが半身を上げる

「……………笠さん2号か？」

「いや、むしろくう兄黒Ver?」

上がシェイド、下が私の初見

そんな黒駒さんを一言で言い表すなら・・・黒。とにかく黒、黒以外思いつかない、全身黒づくめの人だった

ボサボサなのか、そういうヘアスタイルなのかよくわからない襟足の長い髪はひと房だけ銀色が混じっているけど、それ以外は交じりつ気のない完全な黒

それは服装も同じで、魔術の紋様が織り込まれた半袖の上着も、その下の七分袖のシャツ、ズボンも全部黒一色だけど耳やら首やらにジャラジャラついてるアクセサリーは例外なく全部銀色で統一されている

にしてもなんというか、こう、全体的にゴシック系というかワルっぽい雰囲気?

5年生つてことは18か19だろうけど、それより年上に見える

そして見た目は、もちろんゆずりが告白するだけあってまごうことなき美形だった

中性的とまではいかないけど、どっちかっていうとカッコいいというより綺麗な感じの人

そんな黒い人、もとい黒駒さんの第一声は

「・・・誰だ?」

ですよーっ！そりゃそうだ。当たり前すぎるけど、なんだろうこの当たり前じゃない状況においてのこの違和感！

でもその当たり前じゃない状況を作った張本人は、あらいイ感じのハスキーヴォイスv、なんてほざいた上

「あ、アタシは獣士科2年の桃山ゆずり16歳、第四世界出身で家族構成はおじいちゃんに両親兄弟弟の7人＋魔獣達多数の大家族、趣味はイケメンウオッチングと情報収集と色ボケした親友をいじり倒すことで目下の悩みは師匠がめんどくさい人なのと食堂の限定スペシャルプリンサンデーが手に入りにくいつてことです！さ、とりあえずこれだけ知ればもう他人じゃないですよ？で、どうします？付き合います？一緒に青春しちゃいます？付き合いましよう！」

意味がわからない

いやゆずり恋愛Verに意味なんか求めても無駄か

なんせ前に、『なぜにそんなにイケメンが好きなのか』と聞いたら

『そこにイケメンがいるからよ！』

と胸張って答えた女だ。あの瞬間、この幼馴染の恋愛脳だけは死ぬまで理解できないと思った

「ああにしてもあなたが黒駒さんなんて！なんてナイスなタイミング！いえこれはもう運命ね運命！運命の出会いなんてベタくさいけど乙女の夢だからセーフよねセーフ！！」

あ、実はアタシ達あなたを学ゲーの勧誘に来たんです！だから恋愛

的口説きついでに仕事の意味であたしに口説かれちゃってください！！！！」

勧誘が二の次になってるのはどうしたものか。紫ちゃんの恐怖すら上回るとは恐るべしゆずりの恋愛熱

ああでももう口を挟むのも面倒くさい。というかマシンガントークのゆずりに割って入るのは、かなり勇気があるか鈍い奴じゃないと・

「お前の私用は後回しにしろ、会長の要件の方が先だろう」

ああはいはい、いましたねー

そういう奴いましたねまさに私の隣に！・・・まあ今回はいい方向で働いたから何も言うまい、うん

「……………お前達は？」

銀色の目がこっちに向けられる

同じ獣でも門番の熊や赤夜達とは違う、いやに静かに風いで

そう、まるで

お前の目は “ ” のようね

「……………あの」

目が、あう

考えるより前に、口を開いた

「前に、どこかで会ったことありませんか…………？」

いつか　しづかな

「……………いや、覚えはな「ちよつと六花！なにその使
い古された口説き文句！恋愛に目覚めたのは大歓迎だけでもうちよ
つと言葉な選びなさいよ！いーい？まずは「ああすみません私のた
だの勘違いだったみたいです、はい終わり、ここまで。で、そうそ
う学ゲーのことだったよね、シエイド！」

面倒な話しはさつさと切る！これがゆずりと付き合つたための鉄則だ
…………話し振つた相手はちよつとミスつた気はするけど他にいない
からしようがない

「あ、ああ。ええと、俺は剣士科のシエイド・ラ・ティエンラン、
彼女は魔女科の白峰六花です

学ゲーでは久我会長のチームに所属していて」

「知っている」

静かな声、なぜかそれ以上口を挟めない響きがある

紫ちゃんや篁さんみたいの有無を言わさない感じじゃなくてもっと・

・・自ら首を立ててはいけないと思わせる、壊しちゃいけない、神聖な静寂

思わず口をつぐんだ私とシェイドから目をそらし、黒駒さんはゆずりに向き直って

「どいてくれ」

「あら失礼、アタシったら」

きやって頬染めて飛び退くゆずり……………え、誰アンタ？

キモツと思わず後ずさり、シェイドが頬をひきつらせた

だがそんな外野との温度差もなんのその

ゆずりは相変わらず目をキラキラさせたまま黒駒さんを見上げ、黒駒さんの方は立ちあがって衣服を払うとゆずりに向き直り

「順序は大切だ。先にお前の話を聞こう

それで 疑問がある。なぜ俺の容姿とお前に付き合つことに関係があるんだ？」

至極真面目に、言った

はい？

今度は別の意味で私達は固まった。思わずゆずりと目を見合わせる

・・・まさか？ いやまだ、まだわかないわよ！？

目と手振りで話し合って、とりあえず黒駒さんの次の発言を待つ

「そもそもなぜ初対面のお前に付き合って、どこかに行かなくてはいけないんだ」

きっかり3秒 制止

した後にはゆずりと素早く身を寄せ合い

「私、こんなベタな発言する人がシェイド以外にいるなんて思わなかったわ」

「・・・いやーゆずりさんとしても、このケースは初めてよマジ予想外、いやクールな見た目のギャップって意味では美味しーいんだけどねー、うん」

「いやアンタの好みはどうでもいいから、私情いらない。というかどうすんのよこれ。アンタの話済まないと用事終わらないじゃない！今日講義が終わったら町にいつて予約してた本取りに行かなきゃいけないのに！」

「あんただってじゅーぶん私情入ってんじゃないのよ

・・・まあともかく、ちよつと予想外だったけどいいわ。このゆずりさんの恋への情熱をなめんじゃないわよ」

「恋へじゃなくてイケメンへ、の間違いでしょ」

無言できっかり3秒睨みあい・・・もうゆずりに丸投げすることにしました

「さっさと振られて話終わらせて」

「口先だけでもいいから友人の恋路を応援できないのかなー」

軽口を叩き、私は一步下がって1人取り残されたシェイドに並び、ゆずりは代わりに3歩前に出て

「言い換えまーす、貴方の顔、配色、パーツどれをとってもアタシの好みにぴったりというかモロタイプで、ストレートに言えば配偶者になるかどうかの品定めの意味でお付き合いして下さい！あ、ついでにペア組んで学ゲーで生意気な連中の鼻っ柱折っちゃいません？アタシ今フリーですし！獣士としても女としても！」

うん……………ドストレートすぎるわ、ゆずり

「……………他世界の女子はみんなあんななのか？」

「いや、ちょっと待ってシェイド！アレは特例！特例だから！」

他世界全ての女子を代表して意義を申し立てるわ

アレが基準でたまるか！

しかしま、この告白で上手くいくわけが無い
ゆずりには悪いけどほんとさっさと振られて、黒駒さんを紫ちゃん
のところへ…………

「なるほど、理解した。そついう事情なら構わない」
「ですよねー…………って」

え？

今度はシェイドと顔を見合わせた。流石の朴念仁も、これは異常とみなしたらしい

・・・つまり、かなり、相当に、おかしな事態というわけで

「正気ですか!?!」

思わずユニゾンして黒駒さんに詰め寄る。その後ろではゆずりがこぶしを高々と掲げ、赤夜がシャレにならない狩りを始める。3秒前な顔で唸っていた。怖!

対して黒駒さんは微塵も表情筋を動かさないまま

「伴侶選びは雌には大切なことだ。雄はそれに協力する義務がある」

淡々と、抑揚のない声と言う

でもいや、なんていうか・・・まあ種の保存優先な獣人的には正しいんだろうけど

なんか違う、なんか違う気が!ああでもなからツッコミ入れればいいのやら

「だがもう一方の申し出は考えさせてもらう」

その学ゲーとやらに協力して、俺になんの利益がある」

今度はシェイドも入れて3人で目を見合わせて

「・・・なんというか、変わった人だな」

「あんたがいうのもなんだけど、その通りよね」

「あんたら2人にいわれるなんて、そーとーよね」

今さら学ゲーの利益なんて聞かれるとは思わなかった
学ゲー参加者は良くも悪くも注目されるし、結果を残せば学生の内
だけじゃなく後々就職の面でも有利になるっていうのは1年生でも
知ってる

目に見える実益で言うなら、優勝チームメンバーや特に優秀だと認
められた人は特別奨学金が認められたり褒章もらえたりするし・・・

と思いつく限り並べてみたけど、黒駒さんの反応は薄い
いやこの人出会ってからこっち眉ひとつ動かさないから元々そんな
なのかもしれないけど

「えーっと・・・あとはまあ、とりあえず権力と良い後ろ盾、
それから確かな情報網は手に入る、かな？」

というか紫ちゃんチーム最大の売りってそれだよな
権力と後ろ盾って意味じゃ学生で紫ちゃん以上の人はいない

「はいはい、後はメンバーだったらアタシと一緒にいられるのも
利点だと思いまーす
やっぱりお付き合いするならお互いのこと知らなきゃだし・・・そ
れに」

ふっと、ゆずりの声が低くなる
いつものつくった声じゃない、赤夜とかという時の

「あなた、けっこー強いですよね」

獣士としての、桃山ゆずりの声だ

「まあアタシも獣士なんでえ、見ればわかるんですよ

んで、アタシ魔獣とはまあまあ契約交わしてるんですけど、獣人はまだなんです

まあ魔獣と違って1対1でしか契約できないから慎重ってのもあるんですけど……ま、ぶっちゃけいうと契約したいってやつと巡り合えなくて」

でも

「ドストライク イケメンってのは別に、アタシの獣士としての勘が“イイ”っていつてるんですよーあなた

だから

わざとらしくリズムをつけ、人差指を頬に当てて小首を傾げて

デートし・ま・しょゝ

うん、よし、もうどうにでもしてちょうだい

そうして私はもう考えることを放棄した

・・・そうできたら良かったんだけどね！

追加要員募集もとい拉致 3 (後書き)

そうは問屋が卸さない

・・・まま続きます！

追加要員募集もとい拉致 4

『デートしましょ』

『恋人査定はこれから付き合う上でするとして、獣士と獣人の契約は学ゲーの手前早く決めないといけないし、とりあえず決める前にデートしてみてお互いを知って相談しましょ』
解説 by ゆずり

うん、略すな。というか略し方おかしいでしょ前フリ完全カッつてどうなの!?

と、つつこむ体力すら惜しい

まあつつこんだけどね。全力で

「アホか！」

と

で、その後ひと悶着というかまあ罵ったり罵ったり過去の秘密暴露合戦とかお互い武器出して威嚇とかした末に

森の中じゃ話しますすまない。学ゲー誘うにしてもなんにしてもとりあえず落ち着こう

ってことでやってきました学生食堂

で、まあ学生らしくお茶でもしつつまったり説得するか・・・と
思っていたのに

目の前には吹っ飛ばされてぐちゃぐちゃになったテーブルとイスの
群れに、勝手に事を大げさにしていく野次馬達、そして

「いい度胸だ！お前ら全員ただで済むと思うなよ！」

ありきたり過ぎて逆に感動すら覚えるセリフを吐きやがる・・・え
えっとだれだっけガーディナー・ロウ・ロジエンダー？とにかくま
あ毎度お馴染みバカ坊ちゃん

そして

「わかった。コイツを殺せばいいんだな」

トンチキなことを素で言いやがる黒駒さん。ああなんてカオス

「・・・・・・・・えーっと、なんでこんなことになってるのかな？」

騒ぎを聞きつけやって来た教師が、非常に困った顔で首をかしげて
いる

むしろそれはこっちが聞きたいです先生

・・・・・・・・遡ること5分前・・・・・・・・

「食堂の新作！アリネ栗のタルトキャラメルソース添え！まだ残ってるって！」

取りにいきましょう黒駒さんv」

食堂について早々、耳ざといゆずりが食堂人気デザートに目を付けたアリネ栗のタルトキャラメルソース添えといえ、一週間前に出てから学園中の話題と胃袋をかつさらっている食堂の超目玉デザートだ。当然競争率は半端なく、私もまだ食べたことがなかった

自然と足早になり、他面子よりも一足先にタルトに辿りつく

「あ、やった。ワンホール残ってる！」

うわあ美味しそう。しかもこれタルト一切れにバニラアイスとチョコまでついて300エルス（＝300円）というお買い得価格！

口が緩むのを押さえきれず、意気揚々とお皿を掴んでタルトに手を

伸ばそうとした瞬間、順番無視して割り込んできた野郎がワンホール丸ごとかつさらっていきやがったよアハハハハハあっ！？

「・・・ちよつと 안타」

割込はこの際見逃してやろう。私ももう16だしね、うん。寛大な心で許してあげなくもないよ、うん

でもね

「人気商品は1人一切れ、友達の分確保もなし！ってのが食堂の掟でしょ！なにさりげなく丸ごと取っていったんのよ！」

食べ物への恨みは別。別も別、特別枠、恩赦も執行猶予もなけりやあ
裁判するまでもなく有・罪・だ！

こちらを気にも留めずにさっさと退散しようとした割り込み男の首
根っこを思いきり掴む

なんか潰れたカエルみたいな声が聞こえた気がするけど気にしない。
天罰、天罰

なんてほくそ笑んでいると、案の定相手は思いきりこちらを振り返り

「いきなりなにするんだ！俺を誰だと・・・あああああっ！」

ゲッ

隠そうとするより前に、思いきり嫌そうな顔をしてしまった
でもそれを悔いるような相手じゃなかったから、まあいいよね

「うるっさい、周りに迷惑でしょ！えつと・・・カーデッテ
ーなんちゃらローシエンナ」

「カーディナル！ロウ！ローシエンナだ！ふざけてるのかこの魔女
ー！」

「いや、これ以上ないくらい真面目だったんだけど。あつといけな
い、つい本音が「貴様　　っ！！！！」やかましいっ！！！！
！！！！」

即座に杖を召喚してフルスイング。うん、我ながらナイスコントロ
ール、ばっちり顎下に決まったわ

にしても人の耳元で怒鳴り散らして！まったく

「貴族つてのは非常識なやつばかりね！」

「そんな細い棒つきれで男1人吹っ飛ばすお前に言われたくはない」
言う割に顔が笑ってるわよ、シエイド
思ったけど、言わないでおく。代わりに軽く袖を引っ張って

「タルトは私が確保しとくから、アンタ戻っついていいわよ？」

というか戻っついて。アンタがいたらあのお坊ちゃん（名前なんだっけ）絶対面倒な

「よくもやったなこの魔女！ああシエイド！やっぱりお前もグルか！よくも俺を殴ってくれたな！」

ほーらーめんどくさい。ああめんどくさい。だいたいやつぱりって何、あんた絶対今考えたでしょ
面倒だから言わないけど

「アンタの考えてることななんとなくわかるけどお、最近面倒くさがりに磨きかかってない？」

「じゃあゆずり、立場変わって。そうしたら前みたいに気合入れてツッコミいれるから」

「やだ（即答）それよりタルトどうしたわけ？まさか一緒に吹っ飛ばしたんじゃないでしょーね！？」

気になるのはそこか。なんて言う奴はいない
黒駒さんは無口だし、シエイドはそもそもタルト>>>>越えられない壁>>>>坊ちゃんだろっし

「大丈夫よ、あの坊ちゃんが自分でタルトなんて持つわけないじゃ

ない。その荷物持ちくんを持たせたの確認してからぶん殴った」
くいつと親指で指差すと件の荷物持ちくんがびくりと肩を震わせる
心配しなくても、何も言つてこなきゃ何もしないのに

まあそれはともかく

「この際シェイドとグルでもなんでもいいから、さっさとタルト寄
越しなさい

こつちに4切れ渡したつて、アンタもまだ4切れ残るんだからいい
でしょ？」

食堂の掟からすれば、破格の提案。これにのらないのは考えなしの
バカか業突く張りか・・・

「いいわけあるか！これは俺のものだ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・バカ坊ちゃん だ・け・だ！

「やっだあーそんな使い古されたセリフ生で初めて聞いちゃったv・
ふざけてんのこのバカ？ランク下げるわよ？」

ゆずり、声がマジ過ぎる・・・けどその脅し文句、意味がわからな
いと効果ないと思うわよ？

いや意味分かってても効果ないか。あれゆずりによるゆずりのための
ランクだし

思わず脇道にそれた思考を戻したのは、ご丁寧に毎度毎度新たな悪
態を思いつくバカ坊ちゃんだ

「な、なんのことは知らないが、陰気臭い暴力魔女や獣臭いバカ女に食わせるものはな「よしてきた二発目ね」「いつそ頭勝ち割ってやった方がコイツのためかもしれないわねえ」

ニツコリ笑って杖を構える

魔女に、いや、女の子に向かって言うてはならないことを言ったわね……？

隣でゆずりも口角を上げて魔獣召喚用の魔具を構えている

よりにもよって獣土の前で獣臭いなんてほざくとは………自
殺願望者としか思えない

ニタリと笑ってゆずりが一步踏み出す

同時に遠巻きに眺めていたヤジ馬達が大股5歩分は下がった

獣土がうっかりオオモノなんて召喚した日には、とぼっちりを受け
るのは目に見えてる。高見の見物は安全圏からやるものだしね

そこまで考えて、私もニヤリと笑ってみせるとバカ坊ちゃんからか
細い悲鳴が上がった

この調子でかるーく脅せばあっさり落ちるだろう

そうしたら改めてタルトと紅茶で遅めのティータイムかなあ。もう
この数時間で1日分の気力使い果たしたし、食べて紫ちゃんに報告
したらさっさと帰ってゆっくり本でも……

なんて思った私が甘かった

希望を打ち砕いたのは、沈黙よりも静かな声

「わかった」

声の主は、もちろん黒駒さんだ

先ほどから沈黙を貫き続けていたはずの人は、なぜかゆずりを手で制して自ら前に出て

「頭を割ればいいんだな」

と、静かに殺気全開でのたまった

え

そのまま自然な動作で右腕にはまったシルバーの三連腕輪と手袋を外す

微かに魔術が解ける気配

ん？

一呼吸の間をおいて、微かに黒い靄のかかった腕を

いや……………ちよつと待
つて！

無造作に振り払った。瞬間

風圧でバカ坊ちゃんの背後に控えたバイキングテーブル式が料理
ごと吹っ飛んだ

いやそれだけならよかった。吹っ飛んだのがテーブルだけならよか
ったのに

なぜかバカ坊ちゃんの顔には、黒駒さんが付けていたはずの黒い手袋

「……………あ」

さして悔いた様子もなく呟いたのは、黒駒さん

トーンからして本当についっかかり吹っ飛んじやっただけなんだろ
う。意外とうっかりさんだ

これが手袋じゃなきゃ、案外可愛いところもあるんだ。アハハ、で
すんだのに　！

「……………決闘だ」

野次馬の、誰かが呟いた

微かだったそれは一瞬のうちに周囲に伝播し、お祭り好きのマルー
ン学園生に火盛大に火をつけやがった！

「決闘だ決闘！剣士と獣人が決闘だぞ！！！」

「……………というわけです」

白い手袋を相手に投げつけるのは、由緒正しき剣士の決闘の申し込み
…………とはよく聞くけども

マールン学園では黒い手袋でもオツケーだったらしい

「ああ、それでこの騒ぎ」

困った顔の教師　　金髪碧眼しかも色白超美形の面からして天使
科だろう　　は納得したように何度も頷いて

「わかった。じゃあ私が立会人をしよう」

はい。トンチキもう1人入りました

「止めて下さい」

「なんで？」

それはこっちが聞きたい

「いや危ないでしょう。特に黒い人、殺すとか言ってますけど！？」

「やる気があるのはいいことだね。お互い切磋琢磨してこそ友情
うんうん、青春だね皆
それじゃあ依存なければこの勝負、天使科教員セラドン・L・ラン
ドシエルが預かるよ

決闘は黒駒くんとカーディナル・ロウ・ローシェンナくんとでいい
のかな？」

セラドン先生は小憎らしいほど爽やかな笑顔を浮かべ、さつさと舞
台を整えていく
お坊ちゃまは不満げな顔をしていたが、先生がニコリと笑みを浮か
べると一つ返事で任せるといふ有様

美形恐るべし

ここまで来ると私は完全に傍観体勢に入っていた
さつき見たところ、坊ちゃんがどんな手使おうが黒駒さんには勝て
ないだろう。流石紫ちゃんが選んだだけあって、かなり変わり者だ
が強い

良くて瞬殺。悪くて八分殺し。

ならもう自業自得で痛い目を見てもらおうのも有だろう
決闘なら私にはなんら影響もな・・・

「決闘は複数人。俺とその獣士、魔女、剣士だ」

これにはさすがにシェイドやゆずりも目を剥いた

「いきなり何ほざいてんですか黒駒さん」

おいこらちょっと。事故とはいえ自分で手袋投げつけたんだから自分で処理しなさいよ！

思わず胸倉つかんで詰め寄ると、黒駒さんは全く顔色も変えずに

「お前達は俺に自分のチーム 群れに入れといった」

銀の “ ” のように静かな銀と、目があう

「ならば力を見せる。俺が入るに足る群れであるか。契約を結ぶに足る獣士であるか。示せ」

ふと双眸が細まる

銀が陰り、次の瞬間にはやんわりと引き離され

「示してみる。“ ” の魔女よ」

私にしか届かないくらいの、小さな声だった

示してみる

あの時とはまるで違う

お前がそれに足る者かどうか 示してみる

“あれ”は酷く傲慢だった。けれど同時に自分にとっても素直だった
そういうところがとても気に入っていた

だから とても

***たかった

ああそつだ “私”は

「じゃあチーム戦の4対4でいいんだね？」

先生の言葉にはっと我に戻る

振り返ると頷く黒駒さんと覚悟してるだのなんだのわめくお坊ちやま

いつもの光景だ。ここは“私の世界”だ

・・・って、あれ？何言ってるの私。というか今の何？白昼夢かな
んか？

疲れてるのかな

まあいいや。今は夢より現実のが重要

「・・・・・・・・・・どっしする？」

さつきから珍しく余計なこととも言わず沈黙を貫くシェイドに声をか
ける

「む？」

と、振り返ったのは何かを頬張る男の顔

「ってアンタちよつと！さっきから静かだと思っただら何ちゃっかりタルト食べてんのよ！」

「金は払っている。ほら、お前の分もとつといたぞ」

「あ、ありがとう。お金は後で・・・じゃなくて！どうするのよ！なんかすつかり決闘やりますって雰囲気になってるけど、私達本番まであんまり力使わないよう紫ちゃんに厳命されてんのよ！」

「そうは言うが・・・あの人の言い分ももつともだ。全てにケリをつけるなら決闘するのが一番じゃないか？

まあ相手がアレでは面倒には違いなが」

アレこと坊ちやまに視線をやると、敵意100%！といった感じにならみ返してくる

こそりとシェイドの様子をうかがうと、アイツはタルトに気が言っているのか鬱陶しげではあるがいつも通りだ

なんとなくほつとして、どうしたものかと思っているとそもそも原因　　といてもいいだろう　　ゆずりが何故かニヤツと笑つてこちらを見ていた

意味がわからず半目を向けると、ゆずりは拳でどんつと胸を叩く任せなさいって意味なんだろうけど・・・え？なにを？

「はい黒駒さんちよつと提案なんですけどー！」

聞く前に、ゆずりはもう行動に移していた

よく通る声で黒駒さんと呼ぶと、いつの間にやら集めていたお坊ちやまの仲間達ににんまりとした・・・いやゝな笑顔を浮かべて

「チーム戦はいいんですけど、実質戦うのは私1人でどうです？」

坊ちやま達が一齐に目を剥き、ついで顔を赤黒く染め上げた

まあ馬鹿にしてると思ったんだろう。確かに2年の女子1人が剣士科、しかも上級生（坊ちやまの仲間ね）含めた4人相手に“戦える”と言いつつ放ったのだ

なめられていると思ってしまうても不思議はない

けれど今にも剣を抜きそうな物騒な視線をものともせず、ゆずりはただ黒駒さんにだけ向かって

「ぶつちやけた話、紫さんチームだとアタシ達が一番弱いんですよだから一番弱いアタシがアレと戦えたら、全体の力量もそれなりつてわかってもらえるでしょう？」

そ・れ・に

「【契約】はアタシと黒駒さんの問題なんだから、余計な要素入るより純粹にアタシの力見てもらった方が参考にはなると思うんですよね？」

だからどうです？とかわい子ぶって小首をかしげるゆずり
それに対して黒駒さんは一瞬だけ目を伏せて

「いいだろう」

頷いた。それを見てゆずりはにっこりと今までで一番邪気のない笑顔を浮かべて

「それじゃあ決まりね！それじゃあま先生、ちやつちやと決闘しちやいましょ

今から訓練場押さえられます？大丈夫？なら行きましょ」

一気に場の主導権を握り、さつさと全てを進行させていく
相変わらず電光石火の行動力。恋愛と獣士の仕事以外でもこんなテキパキ動けたのね 안타

感心したように見ていると、ゆずりがこちらに視線をやって

「？」

声に出さずに口だけ動かして・・・なに？

『こっちは まかせなさい』？
同じように口を動かすと、ゆずりが片目をつぶってまた拳を胸に当てる

先ほどと同じ仕草に、かばってくれたんだと悟ってちよつと感動しいやいつも味方でいてくれたのは知ってるけど・・・愉快な火種には油注いで傍観するのが一番楽しいとか言ってるゆずりがまさかそんな気遣いしてくれるなんて・・・

「じゃ！そういうわけだからあ、アンタはそこでシェイド君といちやいちゃケーキでもつつきあっててねんv
同衾以上でなんか進展あったらまた教えてちょーだーい！」

前言撤回

何言ってくれてんだこの野郎

今まで決闘騒ぎに沸いていた野次馬連中が一斉にこちらに視線をやり、運悪くも並んで同じケーキをつついている私達に好奇の視線をやり始め

うわ、やっぱりあの噂本当だったんだ

いやあショック！シェイド君がまさかあんな普通の子と！
そういえば前に手錠で繋がったまま授業受けてたよな・・・
全く最近の下級生は・・・羨ましいぞこんちくしょう

とかなんとかかんとかエトセトラ

過去の噂まで遡って騒ぎ始めやがった。ああもう

「ちょっとこの泥棒猫！あんた性懲りもなくまたシェイド様と！」

某お嬢の叫び声に、私は完全に現実逃避した
もう、いやだ

「・・・過保護だな」

「なんのことです？」

即座に返した獣士の娘

ゆずりといったか

は、底の見え

ない目で黒駒を見上げる

負けるものと目をそらさず、必死に己に注意を向けようとする様
は　　まるで羽を広げて雛を隠す親鳥のようだ

「それより、アタシが勝ったら契約してくれる・・・ってことでい
いんですよね？」

親でもないのに必死にそうあるとする娘の様子が可笑しくもあり、
黒駒はおとなしくそれにのって頷いた

「ああ」

「うふふ、それじゃあゆずりさん頑張らないとなあ。一生に一度あ
るかどうかの超好みイケメンゲットのチャンス逃すなんて、馬鹿ら
しいし〜」

娘は満足げに笑い、次いで振り返って

「そついうわけなんでえ

全力で叩き潰すから覚悟しといてくれますっ？」

肉食獣の笑みを浮かべた

見るまでもなく、勝敗は明らかだった

追加要員募集もとい拉致 4 (後書き)

何気に同年代では頭一つとびぬけているゆずりです
わりと基本スペックはそこそこ高めなんです、普段がアレな上に
周囲にが頭どころか体ひとつふたつ抜けてるのが多いので、目立た
ないという(笑)

追加要員募集もとい拉致 5

ずっと探していた

あの日、“名前”をもらったあの日からずっと
”をさがしていたんだ

“あ

居たたまれない、とはこういう状況の事なんだろうか
六花は戦利品たるアリネ栗のタルトを咀嚼しつつ、さりげなく食堂
を見回す

「……………予想通り、というかまあね」

わかってたけどね、うん 目立つ

いやまあ目立つだろうとは思ってたけどね
なにせただでさえ目立つ男・シエイドに、明らかに学生食堂にそぐ
わない上につい先ほど食堂を破壊したゴシック系美形・黒駒さん
それに本当についさっき、剣士科4人を完膚なきまでにうちのめし
たゆずり

現在進行形で学園中の話題をさらっている面子がこれだけそろって
いれば、目立つなって方が無理か

思わず遠い目をする六花に、間髪いれずゆずりがつつこむ

「また自分のことを棚に上げてアンタは」

「なにが？派手なアンタ達と違って私は地味カラーで地味に生きてるの。目立つわけないじゃない」

「このことだけど、相方として一言どうぞシェイドくん」

「こつちに振るな・・・あと六花、図書館やらなんやらであれだけ破壊工作しておいて何言ってるんだお前」

失礼な。全部正当防衛よ。存在自体が目立つアンタ達と一緒にしないでちょうだい

まだギャーギャー言ってくる連中を無視して、頼んだ紅茶に手を伸ばす

・・・

・・・ん？

「えっと、あの・・・黒駒さん？飲まないんですか？」

オレンジジュースを前に、黒駒さんが固まっている

もしかして嫌いだったのかな？メニュー見てわからん、とかいつてたからゆずりが適当に頼んだんだけど・・・しかし黒駒さん+ジュースってこれまたシユールな

「あ、ジュースダメならあたしのと交換します？一応オーソドックスな炭酸水だし」

ゆずりがかいがいしく申し出る。まさかこれ狙ってオレンジジュー

ス頼んだんじゃあ……うん、コイツならありうる
でも黒駒さんはゆるく頭を振って

「いや……」

また沈黙。なんだなんだ？

ゆずりと顔を見合わせ、どうしたもんかと首をかしげる。と、

初めて、黒駒さんがまともに表情を動かした。眉尻を上げ、疑問の表情を浮かべて

「……なんだ、この橙色に着色された、糖分臭のする液体
は」

「……
……
……え？」

ゆずりと、それからまたも珍しいことにシェイドとぴったり5秒顔
を見合わせ……椅子ごと体を寄せ合う

「いや……ゆずりさんわりと人生経験豊富な方だけどこれは初
めてだわ！」

「なんていうか浮世離れた雰囲気の人だったけど、これで一気に
常識突き破ったね

まさかシェイドを上回る世間知らず発言が来るとは……！」

「おい、いちいち俺を比較に出すのはやめろ。それに俺はジュース
くらい知ってる」

「そんな当たり前のことで胸張ってる時点で、世間知らずだっ
てんの。この非常識人」

「非常識極まりない腕力のお前に言われたくない」

「一応これにはちゃんとした理由があるんですー。無意味に箱入り
なあんだと一緒にしないでくれる!？」

「無意味とはなんだ無意味とは!それに箱入りって言うな!」

「箱入りがダメなら重箱入りとでもいえはいわけ?それとももつ
と鉄壁な鋼の箱か!超合金製か!？」

「そんなものに入れたら息が出来ないだろうが!」

「え、そういう問題?ってちょーっとお2人さん!痴話喧嘩はそこ
まで!」「痴話げんかじゃない!」

ああはいはいわかったわかった・・・あ、ごつめんなさい黒駒さん
Vえつとそれはですねえ、オレンジって果実の汁に砂糖とかまあ色
々ぶっこんで甘味を足した飲み物です。別に危なくないですよ」

さりげなく側により、ちゃっかり手を握ってグラスを持たせるゆずり
・・・あんだ、なんかそれちょっと、どうなの。っていつかそうや
って無駄にアクティブだからいつも逃げられるんじゃないの?

私の呆れた視線を気にも留めず、ゆずりは黒駒さん相手にささぐい
つとなんてやってる おじさんの飲み会じゃあるまいに

ともあれ戸惑っていた(表情変わってないけど多分)黒駒さんは意
を決したようにジュースを一口含み、止まった

・・・さてどうなる?

ごくりと喉がなる。こんなに他人の反応が気になるのは初めてかも

しれない

って、たかだかジュース飲むだけでこんな緊張する必要あるわけ？

頭の中の冷静な部分のまともな忠告は今回だけ無視することにした。この状況でマトモでいるのは私の精神衛生上大変よろしくないからだ

ああ、なんかここ数カ月、現実逃避スキルだけガンガンレベルアップしてる気が……

緊張の一瞬、そして

「……うまいな」

たった一言。でも今までで一番“気持ち”の入った言葉だったと思う嬉しそうに声を上げるゆずりに同調して思わず笑って　それがらほっと、ため息

なんだろう。なんだかやっと、生きた“黒駒さん”を見た気がするからだろうか

今まで不自然なくらい表情が変わらない、篁さん以上に感情表現に乏しかったからなあ。なんていうか

人形っぽい人、だったから

完璧に美しい、でも何があっても顔を変えない、心もない、空っぽな

もったいないよ

うん、そうもったいない

そう結論付けて、“私”は笑った

だってそんなに綺麗なのに、人形みたいに無表情なんて

笑顔の方が、絶対素敵だよ

そう、だから………だから？

だからなんだって言うの？いやそれよりも、今のって

だれだった？

「・・・六花！」

はっと顔を上げると、ゆずりが眉を寄せて顔を覗き込んでいた
反対隣のシェイドまでも訝しげな顔でこちらを見ている 思っ
ていたより、ぼーっとしてしまっていたらしい

「あ、ごめん。なんでもない、ちょっとぼーっとしちゃっただけだ
から・・・」

軽く笑って、2人の視線を避けるようにタルトをついばんだ

私じゃない“私”の白昼夢

一瞬浮かんだ考えを、頭を振って否定する

ありえない、ううん、そんなことあつてはならない

だってそれは、最悪の

悪夢だ

だから知らないふりをした

ゆずりが黒駒さんにベタバタしてるのに呆れて、シエイドがボケたらつつこんで、いつものように笑って

いつものように、いつもの私のまま

気付かなければ、無かった事にすれば、このままでいられると思っ
たから

とても“しあわせなゆめ”をみました

夢の中の私は幸せそうでした

隣に大好きな人がいて、大切な家族が、仲間がいて、皆が一緒に居

て、笑って

とてもしあわせなしあわせな・・・“わるいゆめ”でした

だってその幸せはここにはないもので

どんなに欲しくても手に入らないもので

ほんとうは“わたし”はそこにはいないのに

ずっとずっとつづくんです

しあわせそうな“こえ”が “かお”が “きおく”が
つづくんです

私がどんなに望んでも届かないのに、涙が枯れるほど泣き続けて喉
が裂け血が流れるまで叫ぶほど恋しいのに

もう二度とそこには戻れないのに

ずっとずっとずっと・・・ 気が狂うほど かなしくな
るほど “永遠”に

幸せで かなしくて 愛しくて おそろしい ゆめが

追加要員募集もとい拉致 5 (後書き)

ひと月ぶりの更新・・・!

どちらかという本編と言つよりおまけ的な話です。

シェイドが霞むほどのド天然黒駒。これからどうメンバーと関わっていくのかお楽しみに(笑)

帰郷

「やあ」

学ゲー・チーム紫ちゃん溜まり場になりつつある生徒会室に、場違いに爽やかな笑顔を浮かべた人間、もとい天使が1人
いつぞやの黒駒さん決闘騒動で大変お世話になった天使科のセラドン先生だ

ゆずりが目の色変えるほどの美形だけど、正直、初対面がああトンチキ発言なので良い印象はない
そんな私の気配を察したのか、珍しく、不在の紫ちゃんに代わりにくう兄が応対に出た

さりげなく私が隠れる位置に立ち、愛想のかけらもない声と顔で出迎える

「何の用だ」

・・・くう兄、学科違つとはいえ先生相手にそれはちょっと

しかし対するは流石“天使”、くう兄の態度にも微笑みを崩さない。
代わりに高そうな紙を使って、蠟封までしてある手紙を差し出し

「はい、果たし状」

またもトンチキなことを言いだした

「あら。貴族のボンボンでも果たし状の様式くらいはわきまえてるのね」

まずつつこむところそこ？そこなの？このご時世に果たし状、とか思ってるのは私だけか！

そしてこの言い方からして、差出人はええっと長いから忘れたけど、とにかく嫌味坊ちゃんかその兄あたりだろう

この前ゆずりがけちよんけちよんにしちゃって笑い物になってたからなあ・・・仕返しか。暇人めにしてもなんで紫ちゃん宛？負けたいの？実はM？

「腐ってもお貴族様ですから。無駄に格式にこだわりのあるんでしょうね。ね、ミミちゃん」

「・・・前から思ってたんですけど、桜さんって結構毒舌ですよね」

流石紫ちゃんが選んだ変じ、いやいや変わりも、えーっと個性的な
集団のお1人
現に今も不思議そうに首を傾げて

「ありりのままを言ってるだけですよ〜?」

相変わらずのまったり笑顔の桜さんから、ゆずりに視線を移して

「あれ・・・無自覚だと思う?」

「ビミヨ〜よねえ。自覚天然?や、自覚した時点で天然じゃないし・
・

なんでかはわかってないけど、自分がきついと思われてるって自覚
してる感じ?わりと空気読む人だし」

そのままひそひそやってると、一通り読み終えたらしい。紫ちゃん
は果たし状を黙って折たたみ、どこから通信石を取り出して繋ぐ

相手は声からして、セラドン先生

お約束の挨拶を交わしてから、紫ちゃんは無駄に愛想よく、無駄に
明るく

「受けて立ちますわ」

そして（向こうは見えないのに）無駄に笑顔で、答えた

これには別に驚かない

『喧嘩を売られたら、二度と歯向かおうなどと考えもしないくらい
徹底的叩き潰すのよ』と常々言っている紫ちゃんだ

問題はその後。ニッコリ笑顔でセラドン先生が帰って行った後のこと

「それじゃあみんな、合宿するわね」

自然に。それこそお茶するわよ、みたいなノリでかるーく言ったせ
いか、初めは理解できなかった

周りの皆・・・というかシェイドとゆずりと黒駒さん、アシュまで
も首をかしげている

「なんで？」

こういう時に聞くのは、私の役割だ

後のメンバーだと話が逸れる確率の方が高いし。黒駒さんは論外だ

対して、今度は紫ちゃんの方が不思議そうに

「なにが？」

「・・・いや、そんなんでわかってないの？ 的な顔をされて
もね？」

「え、その合宿って、果たし状が来たから・・・だよな？」

「そうよ」

そこまでは理解の齟齬はないらしい

「その果たし状、紫ちゃん宛だよな？」

「相手の書き間違いでなければね」

うん。これもOK。え？じゃあホント、なんで？

「紫ちゃんが決闘するのに、なんで皆で合宿する必要あるの？」

そう言うと、紫ちゃんはもう特上の笑顔を浮かべて

「だってこれ、学ゲーの果たし状なんだもの」

「……………学ゲーとか、あつたよね。そういえば」

合宿の準備するからvと生徒会室を追い出されて、やってきたのは
学生食堂

……………正直、このシェイド・ゆずり・黒駒さんってメンバー
では来たくない場所だけど、他に集まれるところが無いから仕方が
無い

「ああ、完全に忘れていたな」

同じく頷くシェイド。ゆずりだけはあきれ顔で

「いやいや。あんたらなんのために特訓してんのよ」

それはそうなんだけどね

途中から学ゲーのためっていつか完璧自分のために特訓してたというか……

模擬戦期間も終わって、試験とか色々あったからすっかり忘れてた

「……何故“かくげえ”とやらと果たし状が関係あるんだ？」

とか思っていたら私より酷い人がここに1名。今更そこからですか
黒駒さん

あ、でも黒駒さんて学ゲー自体知らなかったような……誰も説明してなかったの？

ゆずりに視線をやると、満面の笑みを浮かべて頷かれた。開き直るなああでも黒駒さんがいると、ゆずり完全オトメ恋愛脳モードに入るからなあ……学ゲーの話なんかしないか

紫ちゃん達はしばらく忙しかったし、シェイドはそもそも論外だ

「……適任はお前しかいないだろうな。夜半の月」

「っ！……箕さん、お願いですからいきなり背後に立たないでください」

振り向けばリアル死神とか怖すぎる。というかいつも思うけど、なんで心配ないのこの人？

「死神は生ある者とは違う理で生きる身。違うのは当然だ」

「さつきからナチュラルに人の心読まないでください」

「お茶目だ」

とか言つて笑えば全て収まると思つてるんじゃないだろうかこの人
いや実際収まるけどね。追及すると怖いし

黙つて椅子を寄せると、篁さんはいつの間にか持つてきていた椅子
を置いて、いつの間にか頼んでいた……赤黒い飲み物を口
にした

……実はこの人、わざとやってる？

「……視線が多くなつたような気がする」

「そりゃそーよシェイドくん。この面子でお茶して目立たないわけ
ないってえ」

「他人事みたいに言うけど、目立つ原因の半分はあんただからねゆ
ずり」

イケメンの視線集められるなら、何だつてするわよ！

うん、もうあんたは黙れ

笑顔で毒づきあつと、隣でシェイドが身をよじつたけど、いつもの
ことなのでもう気にしない

「話戻しますね黒駒さん」

声をかけると、篁さんの手元をじつと見ていた黒駒さんが視線を戻す

・・・もしかして飲みたかったのかな。アレ

一瞬血色の飲み物を口にする篁さんと黒駒さんを想像して・・・頭を振った

絵面的に極悪すぎる。執行部に通報されるわ

「で、学ゲーのことなんですけど」

「話の逸らし方があからさまだぞ、六花」

「黙っててシエイド」

学ゲーは8人1グループの団体戦で、普通科以外の各科代表をリーダーとした全6グループの勝ち抜き戦です」

「・・・一度に戦うのか」

「いえ、1チームずつです。一戦ごとに間が空くから・・・」

学ゲー選抜からもうひと月半　　6月も半ばを過ぎて来月から夏

休みだから、本戦開始は休み明け

9月からとして、ひと月一戦でも6カ月・・・2月まで

「今学期いっぱいには、これに振り回されること確定・・・」

嫌過ぎる。なんで手っ取り早く6チームバトルロイヤル式にしてくれなかったのか

「・・・?」

首をかしげる黒駒さんに、なんでもないと頭を振って紅茶を一口含む
何を思っても今更よ今更。ここまで来たら流れのままに突っ走
れない

「対戦相手はランダムに決まるんですけど、ある特定の様式に従えば対戦相手を指定できるんです」

それが今回の“果たし状”だ。剣士の決闘と同じようなもので、断れば臆病者の称号が漏れなく付いてくる
そんな果たし状を、紫ちゃんが受けないわけがない

相手もそれを分かって出したんだろうけど、そのせいでうちは休み明け第一線に強制決定。迷惑な！

「あとゲームは内容は色々ですけど、基本的に敵の大将が守る“玉”を奪うか、全員を戦闘不能にすれば勝利となります。ちなみに殺したり、故意に致命傷を負わせるのもダメです」

黒駒さんはわかっているのかいないのか、相変わらず眉どころか眼球すら動かさない

同じ黒ずくめでも対照的に、篁さんは口角を上げて頷き

「明快だな」

確かにルールらしいルールはこれだけだし、単純だ。でもそれは裏を返せば、それさえ守れば何をしてもいいってこと・・・

「なーんか紫さん得意そうなゲームよねえ」

「得意というより、もはや会長のためにあるようなゲームだな」

もう否定するのも馬鹿らしいくらいその通りよね

紫ちゃん大好きだからなあ。こういう悪知恵と裏技使いまくるゲー

ム・・・

「つまり、全員殺せばいいわけか」

そしてここにも1人いましたね、はい。物騒な方向に得意そうな人が！

「いやいやいや黒駒さん聞いてました？殺しはダメですからね、殺しは」

「戦闘不能とは、殺すことではないのか？」

「違います」

納得したのかしてないのか、黒駒さんは黙って目を伏せ

「ならば瀕死ならいいのか」

「それは………故意だとばねければ」

「段々と絶対の黎明（紫）に似て来たな。夜半の月よ」

しみじみと言う簗さんの声は、右から入って左に抜けた
ついでに頷くシェイドも視界から排除だ

「あーところでえ蘇芳センパイ？その夜半のなんたらってどういう意味ですかあ？」

空気を変えようと思ったのか、単に気になったのか、ゆずりが話の軌道を変えた

黒駒さんがまだ不可解そうな顔をしてたのは気になるけど、後はゆずりや紫ちゃんに任せよう

どうせ被害を被るのは私じゃないし

「あだ名だ。魂の形でもいい。存在そのものだ、闇なき嵐よ」

「ええーつと・・・その“闇なき嵐”ってのがアタシってことですか？」

「ああ。あだ名だ」

「意味は？」

「あだ名だ」

篁さんはそれ以上言うことはない、再びあの気味の悪い赤黒いジューズを啜った

簾のような前髪の間隙から満足げな薄い口元が覗き、実に気味が悪いゆずりは笑顔を張りつかせたまま私の方に顔を寄せ

「この人、素？」

「残念ながら」

ひそりと頷くと、ゆずりは口元をひきつらせて

「・・・アタシ、この人はなんか無理だわ。意味わかんない」

大抵の変人は許容、というか面白いがるゆずりをこの短時間でひかせるとは・・・篁さん、何者

ああでも

「アンタの片思い相手も相当ぶっ飛んだ思考してると思うけど」

「黒駒さんはいいの。イケメンだし。獣としてはまっとうな思考だもん」

メンクイかつ獣馬鹿のゆずりにとっては、余裕で許容範囲ってわけね

「アンタ昔から、獣っぽい人好きよね」

入学してからこっち、ゆずりが告白してきた人は全員知ってるけど、皆どこかしら動物っぽい感じのある人だったし
全員イケメンには違いないけど

「あんたはその手の事、全然興味ないわよねえ。好みのタイプすらないってどうなのよ！女子として！」

あ、ヤバイ変なスイッチいれちゃったかも

「シエイドくんに灰くん、リーアンくんに紅さんエトセトラ！

ジャンル違うイケメンが周りにごろごろいるっていうのに、誰にも興味なさそうだし！」

「いや、今はそれより学ゲーの話を」

慌てて話題を逸らそうとしたけど、まさかの場所から追撃が来た

『あるじ、これ、このみ？』

ロープのフードからひょこりと顔を出し、思わぬ追撃を繰り出したのはアシユ

最近まともに会話が出来るようになってから、何かにつけて話しかけてくれるようになったのは嬉しい。嬉しいんだけど・・・っ！

円らな瞳を向けた先は、よりもよってシエイド

「ほらほらご主人様、可愛い使い魔ちゃんの問題には答えないとv」

ゆずりがにたたに顔で睨したて、アシユは目を瞬かせて私の返事を待ってる

「？」

簗さんと黒駒さんは黙って視線だけこちらに向け、シェイドはフォークを加えたまま、じっと私を見て

いや、あんた、ちょっと待て。さっきまで食べてばっかだったくせに、こんな時だけなんでこっちみて　　っ！

「なんだ。これが欲しかったのか」

は？

ぼかんと口を開けて固まる私を尻目に、シェイドは自分のお皿からケーキを半分、私のお皿に移して

「ほら。美味しいぞ」

呑気に笑うボケシェイドに、これほど感謝したくなっただのは初めてかもしれない

「・・・ありがとう」

「その代り、そっち半分くれ」

指差す先には、私のお皿にのった色とりどりのマカロン

私は黙ってマカロンを全部シェイドのお皿に移し、半分ケーキの乗ったお皿を掲げて

「甘さ控えめなのが、好みなの」

ゆずりに向けて、にやりと笑った

「……………あんだ、ほんととガード堅いわねえ」

つまんなーいとぶーたれつつも、ゆずりはあっさり引いて黒駒さんにひつついていった

ああ恋愛脳モードでよかった

ほっと一息ついて……………今更なことに気づく

異様な見た目のくせに、なんでかこのテーブルだと違和感のない人

篁さん

そういえば、合宿の相談するとかいって追い出されたのに……………なんでここに？

「絶対の黎明から、伝言だ」

……………うん、もう驚かないわよ私

「合宿は夏季休暇から。場所は第二世界、絶対の黎明の実家。以上だ」

にたりと　　多分本人的にはにっこりと　　笑い、篁さんは肉

色のムースをつつついた

かなり柔らかいせいか、ムースはすぐにぐしゃりと……………も
う、見るのやめよう。食欲が失せる

いや、それよりも

「夏季休暇開始って・・・一週間後!？」

「紫さんの実家!?!つまり騎士王のお宅訪問!?!」

ゆずりはのんきに両手を上げたけど、私はそれどころじゃない
突然の合宿宣言。紫ちゃんの家・・・・・・・・嫌な、感じがする

だって、前は

「ごめんね、六花

10年前は

「夜半の月よ」

はっと顔を上げると、簗さんが紗にかかった髪の下からじっとこちらを見て

「絶対の黎明から伝言だ。お前にだけ

大丈夫、と」

無意識に、息が漏れた
流石紫ちゃん。なんでもお見通し、か・・・

『大丈夫』

大丈夫、違うならきつと紫ちゃんはそう言うから

だから 大丈夫

「聞いたよシエイド」

ノックもなしに部屋に現れた灰に文句を言おうとして、やめた
言うだけ無駄なのはわかりきっている

「第二世界で合宿、しかも夏季休暇始まってすぐって・・・」

知ってるの、会長は」

「……まさか」

いくらあの底の知れない人とはいえ、個人の予定までは把握していないだろう

「……きつと、いや多分

「別に強制じゃないし、都合が悪ければ途中参加でもいいんじゃない？」

「ああ」

「なら「灰」

名を呼ぶと、灰は口をつぐみ……夕食で、と言い置いて出て行った

視線を落とす。物のないサイドテーブルの上に置かれた手紙
何の変哲もない招待状

開けられない、手紙

「なぜ、今更……10年も経って」

手紙を取り上げ、剥がれかけた封に手をかけ……やめた
そのまま手紙をトランクに放り込み、適当に荷物で覆って
蓋をした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7894p/>

Musica Elaborate

2011年9月20日12時50分発行